

依る實業會社（當初中國興業會社後の中日實業會社）設立の議あるや、進んで之が計劃に參與して、頗る盡力する所あり成立と共に其取締役推され、支那方面の事を擔當せり、同會社創立前後より氏の努力に係る功績は、大小數ふるに違あらざる中にも彼の有名なる桃沖鐵山と日本との關係を今日の如くならしめしは、主として氏の貢獻に依るものと稱するを得べし。

桃沖鐵山は現在支那に於て發見せられたる諸鐵山中、大冶（湖北省）本溪湖（滿洲）金嶺鎮（山東省）鞍山站（滿洲）と共に五大鐵山と併稱さるゝ大鐵山にして、安徽省太平府繁昌縣管内にあり、即ち蕪湖より上流三十哩荻港と稱する楊子江沿岸の一城鎮を距る南方五哩の地點に位し、鑛種は赤鐵鑛にして、其鑛量は未だ詳ならずれ共、經濟上採掘に適すべきもの最少六千萬噸を下らざるべき見込にして、含有鐵分六十二%に達するの良鑛なり、支那裕繁公司の權利に屬し、其鑛物は中日實業會社が一手買取の契約を結びたる有望の鑛山にして、此鐵鑛利用の必要よりして、同會社の姉妹會社たる東洋製鐵株式

として在勤せり。而して森氏關係事業會社は左の如くにして、以下順次各會社の内容を記述す。

壽星製粉株式會社取締役社長、東洋鹽業株式會社專務取締役、滿洲探炭株式會社取締役社長、東洋炭礦株式會社專務取締役、東亞通商株式會社副社長、興發榮鐵廠出資者、中日銀行監査役、東洋運糧株式會社取締役、斯くの如く氏は多岐なる關係に於て自家の事業を進むると共に、所謂日支經濟提携、日支親善の上に寄與する處頗る多きが其常に云ふ所に依れば「支那問題の解決は決して單純にあらず、要は相互國民の理解にあり、一片口頭の親善論の如きは無用の沙汰にして、衷心より然諾相許し相倚るの關係を作る事今日の急務なり、氏は青年時代より、支那を研究せしものなるが、當時相當の有力者の後援を得たらんには、今日に比し更に成果の見るべき者ありしや疑ふ可からず、即ち自己の孤獨的精力を以てして支那開拓の困難なりし既往に鑑み、今後世の青年子弟にして支那を研究し、開拓せんとする者あらば、出來得る限りの便宜應援を計りて其成功を助けんと欲す」

なきを以て、本店事務所に於ては、藤井元一氏萬事を統督し居れり、

會社（資本金三千萬圓）の實現をも見るに至りし次第は世人熟知の如く、要するに、桃沖鐵山は我國の製鐵事業に重大なる關係を有する者にして、之を我國に連結せしめたる點に於て、氏に負ふ所深かりしなり、然るに氏は昨春、中日實業會社の取締役を辭任し、爾來獨立の事務所を設けて支那に對する一般投資事業に主力を注ぐに至れり、而して其取扱へる諸種の借款中吉林に於ける二百萬圓の森林借款の如きは、最も有名なるもの、一なるが、今後更に成立を期待されたる大借款も尠からず、是等を別として氏の現在關係せる事業を見るに後述すべき諸事業の他尙長江沿岸に於ける幾多の鑛業等荷くも支那の事業と云ふべき事業に對しては其手の及ぶ所極めて廣く且つ極めて深し、

(一) 東京森格事務所  
之上述の如く氏が支那に對する一般投資事業をなすに當りて、萬般の管理をなすべき必要の爲めに設けたる事務所にして本店を東京に支店を上海、北京に置けり而して氏は常に支那内地を旅行し、其關係事業の巡察と新企業の畫策に終始餘念

と其所信甚だ可と云ふべし、氏の趣味は支那内地を旅行して、各種の事業を求め、且未發の富源を開拓して日支人相互の利益を計らんとするにあり、性剛健機略あり、又堅忍不拔にして事業をなすに天資の材なり、年三十七、前途の活躍期して待つべきなり。

(二) 壽星製粉株式會社  
支那に於ける洋式製粉事業の創始は千八百九十六年にして、即ち日清戦後上海に於て現時の増裕麵粉公司成立を告げたる時にあり、爾來二十餘年にして今や一晝夜の生産能力約十萬袋に達し、投下資本合計千百餘萬圓に達し、支那に於ける主要工業の一となれり、而も之を經營するに他の洋式工業に於て、經營能力を疑はれたる支人が相當の成績を示しつゝあるは注目し値すべし、壽星製粉株式會社は森格氏が正四年五月有力なる支那人と相計りて設立したる會社にして、資本金額三十萬圓にして、支那名を「壽星製粉有限公司」と稱し、日本帝國の商法による株式會社なり、本店を支那天津日本租界松島街十號に置き、其工場を天津伊太利租界に設けたるが、其株式は七名の

發起人にて、全部引受け作業の開始後漸次順況にして良好なる成績を挙げ、森氏は其社長として經營畫策を専らにせり、同社の役員左の如し、

取締役社長 森格、常務取締役 楊壽桐、取締役 李穆、監査役 楊味雲、因に決算期は毎年一回五月末なり。

(三) 東洋鹽業株式會社  
支那の鹽田は頗る豊富にして、就中四川省、山東省は其尤たるものなり、我國人にして膠州灣の攻略と共に、山東省内の鹽業に指を染し者數あり、東洋鹽業株式會社は昨年四月一日開業したるものにして初め倉地鐵吉氏外三名が青島守備軍司令部より許可されたる膠州灣内鹽田開設の權利を其手より繼承したるものにして、森氏の旨に出づる所多く營業の目的は、  
一 膠州灣に於ける鹽の製造販賣  
一 鹽田の貸借業  
一 化學工業  
一 仲立管理及運送業  
及び之等に關聯する事業を經營し、又は出資するにあり。  
役員左の如し。  
專務取締役 森格、常務取締役 秋元定恭

同藤田秀雄、取締役倉地鐵吉、同尾崎敬義、同飯田邦彦、監査役春田茂躬、同藤井元一

(三) 滿洲探炭株式會社

同社は支那名にて滿洲探炭有限公司と云ひ奉天省西安縣に於ける西安炭田を主とし、其他數ヶ所の探炭に従事するものにして、東京市に出張所を、本店を奉天、滿鐵附屬地に置き昨年八月に創立せられたるもの、資本金を百萬圓としたるが業務の目的は、

- 一 鑛業
- 一 鑛物製鍊販賣
- 一 骸炭製造販賣
- 一 鑛物販賣

一前各項に關連附帶の業務にして、其西安炭田の有量なる炭田より推察すれば、其前途は良久と云ふべきなり。

同社役員左の如し、

取締役社長森格、取締役上仲尙明、同高木陸郎、同松本源一郎、同安川清三郎、監査役松本健次郎、同飯田邦彦

(四) 東洋炭礦株式會社

東洋炭礦株式會社は、大正六年三月即ち

滿洲探炭よりも以前に創業せらる、有名なる撫順炭礦の隣接地に稼行するものにして、現在產出額三十萬噸に達し、礦量は無盡藏と目せらる、資本金百萬圓にして本店を滿洲撫順、奉天の滿鐵附屬地に東に支店を置き、滿洲探炭と相俟ちて、其將來の活躍は刮目に値すべし。

同社役員左の如し、

取締役社長上仲尙明、專務取締役森格、同高木陸郎、同飯田邦彦、監査役小柴英侍、同高橋錦三郎

(五) 東亞通商株式會社

同社は社長高木陸郎氏の經營畫策の下に目覺ましき發展を遂げ、邦人の爲めに氣を吐きつゝ、あるは既述の如く、森氏又副社長取締役として、經營に參與し居るなり。

(六) 興發榮鐵廠

氏が支那有力者と共に、日支合併にて經營し居れるものにして、從前支那人の經營にて成績思はしからざりしものなるが昨年末氏が其投資者となるに及び、凡てに改良を加へ、爾來良好なる成績を示すに至れり、船舶の修繕を主とし小蒸汽、浮船渠等の製作をなす外、一般の鐵工業

清水貫、支配人法學士三好泉、相談役今井喜八、同島居春洋、同小池長次郎氏等の名士なり。

高砂信託株式會社

所在地 東京市京橋區馬場町  
設立 大正七年四月三十日  
資本金 一百萬圓(拂込二十五萬圓)  
代表者 取締役社長青木鐵太郎

望なる新事業なり、大藏大臣最初の認可を得て、斬新なる株式割賦販賣法を組織し、小額なる資金にて一般事業界に投手せらる、公益約同社獨特の方法は、實に現下の時勢に好適と云ふべし。

機械業を營み、上海に於て將來大に飛躍せんとするものなり。

石川鐵道株式會社

所在地 金澤市萬千日町三十一番地  
設立 大正三年二月二十五日  
資本金 三十五萬圓  
代表者 取締役栗田末松

本社の線路は金澤市に近き野々市驛を起點とし金澤平野を貫通し、鶴來以奥の山間部を開發するの使命し、明治四十五年五月木尾久雄氏の發起にて創立され大正二三年の頃一時不振に陥りしが、栗田末松氏の義侠により苦境を脱し、大正四年六月全線の開通を見る、現任重役は取締役栗田末松、小川徳二郎、堀喜幸、監査役栗田悅次郎、大屋喜三郎、寺田五三郎、八日市屋清太郎の諸氏なり。

日本證券株式會社

所在地 東京市日本橋區南茅場町四十番地  
設立 大正五年十月二十六日  
資本金 一百萬圓  
代表者 取締役社長丸山名政

同社の事業は最も時代の趨勢に適し、且つ社會に其の必要を認識せられたるものにして、我國嚆矢の興味深き將來益々有

日清製油株式會社

所在地 東京市京橋區馬場町一  
設立 明治四十年二月  
資本金 三百萬圓  
代表者 社長松下久治郎

同社は最初資本金六十萬圓にして、日清豆粕製造株式會社と稱し、本店を東京市に置き支店又は工場を大連、橫濱に設置せり、營業の目的は豆油其他植物性油及油粕の製造并に此等の應用及加工工業、商品並に雜穀、肥料類の賣買及委託賣買其他夫等に附隨して必要なる業務を爲す一ヶ年間の生産能力は、總額約豆粕四百萬牧にして橫濱工場は一ヶ月十萬牧以上大連工場は一ヶ月二十萬牧以上なりと云ふ。而して業務益々好況にして、發展擴張に伴ふ必然的結果として、大正七年九月十四日、臨時株主總會に於て、資本金を三百萬圓と一躍増資し、同時に社名を日清製油株式會社と改稱し、又現社長松下久治郎氏の經營せる商店並に工場及工場敷地等を讓受け益々其事業を擴大せり。同社は我が事業界の重鎮大倉系の經營に係るものなるを以て其の基礎の鞏固なる

ことは勿論、大倉商會社と相寄り相助けて業務を爲すを以て、今後の發展も期待するを憚からず。現在重役は社長松下久治郎、取締役大倉象馬、門野重九郎、古澤丈作、監査役男爵大倉喜八郎、淺田德則、顧問高島小金治の諸氏なり。營業成績は極めて良好にして、最近は毎期三割以上の配當を繼續なし、尙多額の積立金及後期繰越金をなす等、如何に事業の盛況なるかは多言を要せざるべし。

日本電氣黒鉛株式會社

所在地 東京市京橋區錦町一  
設立 大正五年四月一日  
資本金 一百萬圓(拂込五十萬圓)  
代表者 社長男爵大倉喜八郎

當社は我國カーボン業の始祖にして、四十年の經驗を有する東京カーボン株式會社の營業及設備を繼承し、別に小名木川畔に四十坪の地を求めて大工場を建築し一般カーボン製品その他、更に人造黒鉛の製造を開始せり、今や同社の製品産額一日十噸、各地電氣冶金、電氣化學工業其他一般電氣企業者の愛用を受け、優秀の成績を收めつゝあり。而して製品種目は

人造黒鉛及其製品、電氣爐用炭素電極、炭素煉瓦、炭素「モルタル」、炭素坩堝「ク」リブ「トル」、電解板及電解棒、「カーボン」ブラツレ、各種「アークカーボン」、電池用炭素電極、鑄掛用炭素棒、炭素術帶(カーボンバックキック)、炭素棒及炭素粉其他炭素製品一式にして、工場は府下千駄谷町に千駄谷工場、府下砂村に小名木川工場あり。

日華製油株式會社

所在地 東京市麹町區八重洲町一ノ一  
營業地 神戸市兵庫區上町七八  
設立 大正六年四月  
資本金 二百萬圓(全額拂込済)  
代表者 取締役社長武市利美

日華製油株式會社は、三菱會社と日本棉花會社との合同事業として資本金二百萬圓(全額拂込済)を以て、大正六年四月創立せられ、本店を東京市麹町區八重洲町に、營業所を神戸市兵庫區上町七八番地に置き工場は既設のもの、外、大正七年に日本油脂若松工場及元支那人經營に係る天津工場を買収し、漸次事業の擴張を行ひたり、而して各工場一日の製造能力は若松工場にては、大豆原料二百噸を

以て大豆油、萬歲撒豆粕を製造し、漢口第一工場にては、桐油精製十噸乃至十五噸、第二工場は大豆板粕二千噸大豆油八千噸、第三工場は原料棉質六十噸、天津工場は落花生板粕二萬五千噸、落花生油一萬斤なるが、右製品中油脂類は三菱商會社を一手販賣店として、日本内地は勿論歐米各地へ輸出し、粕類は神戸營業所及各支店出張所々在地に販賣せり、支店及出張所は左の如し、支店を支那漢口壹碼頭に出張所を支那天津日本租界榮街、門司市東湊町に工場は福岡縣若松市濱町、支那漢口、天津等に在り、尙他に分系會社として、朝鮮木浦に於て朝鮮石油株式會社を創立し、昨年十月(大正七年度)より棉質油工場の設備をなし目下盛んに工事中なりと。現在重役は取締役社長武市利美、専務取締役山岸慶之助、取締役大石廣吉、山田穆、今村權九郎、監査役三宅川百太郎、喜多又藏の諸氏なり。

第一生命保險相互會社

所在地 東京市日本橋區三丁目一  
設立 明治三十五年九月  
資本金 二十萬圓(實收)

(但し相互組織につき資本金なし)  
代表者 取締役社長矢野恒太  
同社は去る、明治三十五年我國に於ける保險家又は保險學者中、當代第一流の大家たる矢野恒太氏が、農商務省保險課長の椅子を去り、理想的保險會社を設立せんとし柳澤伯、原六郎、早川千吉郎、池田謙三、赤星彌之助、森村市左衛門、住友吉右衛門男、石田友吉、大橋新太郎の諸氏を始め、其他名士及富豪の出資を仰ぎて設立せる會社にして、我國相互會社の嚆矢なり。而して過去十六年間に於ける營業成績を見るに、第五年度末即ち四十年を以てテルメル式に依る責任準備金積立方法と、合理的準備金を増加したるが如きは、矢野氏の用意の深きを見ると共に、斯く創立以來幾年をも經ずしてテルメル式を純保險料式に改め得たるものなきは、勿論、創立後二十餘年を経過せるものにて尙大半テルメル式に依るを見れば、同社の營業狀態が如何に良好なるかを推すに足るなり。四十一年五月より保險金支拂後に於ても三ヶ年間利益の配當を爲すこと、保險金支拂に際し未收保險料を追徴

せざる等加入會員に有利なる規定を設け又第七期中には巴里に於て自殺の疑ありたる池田次三郎、第八期の日糖事件にて自殺せる酒匂常明、第十期中には失踪の宣告を受けたる西都丸船長松本政之助の三氏に保險金の支拂を爲したるが如き、當時世の賞賛を博したること、今尙吾人の記憶を去らさず。同社の營業は創始以來順潮にして、年と共に發達し、今や既に資金二十萬圓を全部償却し、尙二十萬圓の基本積立をなし利益は悉く會社の會員全部に、即ち保險契約者に配當せるの時期に達せり、當時世を擧げて鑑みたる矢野氏の理想は愈々茲に實現せらるゝに至れり、又同社は創立以來二百三十餘萬圓の保險金を支拂ひ而も一回の保險金支拂の裁判を受けたること無きが如きは、日本に於ける保險會社中他に比例なきことなり、換言すれば我國生命保險會社の模範と稱するも不可なしと信ず。

同社の資産總額は最近の決算に依れば、九百四十七萬圓にして、之を三年前の四百八十七萬圓に比すれば、實に二倍餘の増加にして、進歩の長足なること驚かざるを得ず、其負債勘定に屬する責任準備金七百十二萬圓は全部銀行預金、保險契約貸付金及有價證券となし何れも豫定利子以上の利廻を以て運用せられつゝ、あれば會員たる保險契約者は永遠に安心し得べし、今其の内容を見るに、預金三百十五萬圓は第百、住友、第一、三十四、山口、村井、北海道拓殖、臺灣、明治、名古屋、新潟等一流銀行の債券に對し一種類十五萬圓を最高とし、普通二三萬圓を限り各社債券に投資して危険を避け居るのみならず、評價を大いに引下げあるを以て之を決算當時に時價に引直せば、凡そ總資産は千二百萬圓に達すべし、又不動産三十六萬二千圓の如きも、買入當時の直段より更に毎期評價を切り下げ、又動産を償却し居れば、之を時價に換算せば多大の剩餘を生せん、斯の如く同社の経路は極めて良好にして、尙且つ最近の發展は實に驚く可き程にて幾多保險會社中他に其の比を見ざる處なり、今後の奮闘一番にて第一流保險會社中に例するや期して待つべきなり。現在重役は社長矢野恒太、取締役大橋新太郎、服部金太郎、日比谷平左衛門、監

查役柿沼谷雄、濱口吉兵衛、支配人石阪泰三の諸氏なり。

日清生命保險株式會社

所在地 東京市麹町區永樂町二ノ十  
設立 明治四十年一月  
資本金 二百萬圓(積立金四百萬圓)  
代表者 專務取締役池田龍一

同社は日露戰役後事業勃興時代に方り、日支五億の蒼生に安心立命を與ふべく時勢の要求に逼られ、明治三十九年十月大隈侯爵、澁澤男等の後援の下に發企せられたるものにして、當時の創立委員は前島密男、故中野武營、牟田口元學、久米良作、森村開作、故來栖壯兵衛、山田英太郎、池田龍一、田中唯一郎等の現代一流の實業家及び早稻田出身の諸名士に依り先づ早稻田大學を地盤とし、且つ營業の基礎として生れたるものなり、同年十月八日設立委員長、常任委員の選出と共に認可申請書を提出し十二月許可を得、翌四十年一月二十八日創立總會を開き、二月十六日營業免許の認可を得、三月一日其の營業を開始せり、同社は創立當初より完備せる組織の上に、早稻田學園の雄大なる地盤を基礎とせるのみならず、

正八年一月更に其資本金を二百萬圓に増額し、以て基礎の鞏固と信用の増大とを圖るに至れり。目下同社の設置せる支社出張所は、大阪、九州、東北、名古屋、中國、朝鮮、臺灣、北海道にして、現重役は專務取締役池田龍一、取締役山田英太郎、同田中唯一郎、同増田義一、同前島彌、同鈴木寅彦、同森盛一郎、監査役上遠野富之助、同金澤種次郎、同杉田峻、支配人原田駒之助の諸氏なり。

博濟生命保險株式會社

所在地 東京市京橋區濱町十八(永代橋通り)  
設立 大正三年四月二十四日  
資本金 五十萬圓  
代表者 取締役社長子爵河野龍藏

同社は我が國最も斬新なる保險業法に準據して、設立したる株式會社にして、拂込資本金の半額を主務官廳に供託せるがゆゑ、完全なる保證力を有し、其基礎極めて鞏固なり、尙會社の組織は株式と相互との長所を採り、株主配當を制限し利益の大部分は被保險者に配當す。且つ保險料は我國保險會社中最も低廉なるを以て契約者に取りては極めて有利なり又保險料の拂込を延滞して失効せんと

する場合は返還金を貸附金に振替へて保險料に充當し、契約を有効ならしむるの便宜あり、其他被保險者が戰爭及び變亂に依り死亡したる場合、契約後五ヶ年を経過せる自殺者に對しても、尙且つ何等の拘束なく保險金の支拂を爲すと云ふ。營業の目的は日本帝國領土の内外を問はず日本國人に對し保險契約を締結するものにして、被保險者の年齢は十四年七ヶ月以上六十年六月以下とす。

同會社は本店を東京市に支部及出張所を左の各所に設置し、本支店相呼應して益々業務の發展に努力せり。

- 東京支部 本社内
- 大阪支部 大阪市東區博勞町二の四一
- 名古屋支部 名古屋市西區傳馬町二の四
- 九州支部 福岡市中島町
- 京都出張所 京都市下京區四條通室町西入る

東北出張所 仙臺市北五番町五四  
北海道出張所 函館區曙町  
然して同社の營業は創設以來、極めて順潮に發達し、且つ重役諸氏は現代知名の大家なるを以て、社會の信用厚く、日淺きにも拘らず、契約總額大正七年十二月

未現在に於て既に二千萬圓以上に達し、正に先進會社を凌駕せんとするの勢力を有せり、殊に今回總會に於て、新に斯界の重鎮を網羅して重役の椅子を増加し、一増陳形を立て直して一大活躍の基礎を定めたれば、同社今後の發展は期待する處あらん。

東京電燈株式會社

所在地 東京市麹町區有樂町三ノ三  
設立 明治十六年二月  
資本金 五十萬圓  
代表者 取締役社長長神戶舉一

同社は矢島作郎氏有志と圖り最初資本金二十萬圓を以て東京電燈會社を設立し、明治十九年七月五日を以て開業せり、翌廿年七月三十萬圓に増資す、十一月日本橋發電局設備成りて送電を開始す同時に宮城内外に點燈の御用を奉ずるの光榮を荷ひ尋で吉原京橋兩發電局設備完成し送電を開始し順次供給範圍を擴張す二十二年七月資本金を倍加し一百万圓とす、二十三年一月日本電燈會社と合併の結果一百万圓となり、創業當時に當り營業成績は急激なる資本の増加伴ふ能はず遂に業務刷新整理を斷行するの必要を生

じ、翌二十四年二月社長矢島氏以下委員等其の職を辭し、柏村信新氏委員長となり、同月臨時株主總會に於て資本金を八十七萬五千圓に減じ、八月更に八十三萬五千六百五十圓に減資せり、二十五年五月品川電燈會社點燈區域一部の買収をなし、委員會頭を廢し專務委員を置き、藤本文策之に膺る、二十六年八月臨時株主總會に於て從來の各發電局を合し、一發電所を設くるに決し、起工費とし一百万圓に増資し、淺草區南元町に其の工を起す二十七年十一月社長病死し、松下一郎右衛門就任す、同月本社を淺草に移す二十八年木村正幹更りて社長となり、同七月二百萬圓に増資し、三十二年九月百五十萬圓を増加し、十二月取締役佐竹作太郎氏社長となり、三十五年八月品川電燈會社を買収し、芝發電所を置く其の間電燈需用年々激増せるを以て、間斷なく淺草發電所を擴張し、又蓄電池等の設備ありしも尙常に供給不足を告ぐるを以て三十六年十二月、更に一萬馬力の火力發電所新設を企畫し、資本金七百萬圓となすの議決あり、三十七年三月南千住に敷地一萬坪を買収し工事に着手せしも、同

年十月同發電所の設計を變更し、發電力五千馬力に縮小し、新に起業費五百萬圓の豫算を以て、山梨縣南北都留郡を貫流せる桂川水力を利用し、水力發電所起工の決議をなせり、三十八年九月深川電燈株式會社と合併し深川發電所を置く、之が爲十五萬圓を増加し、七百十五萬圓の資本となる、同十二月 帝室御財産として本社株式御所有の光榮に浴す、卅九年一月八王子電燈株式會社を買収す、茲に於て電燈供給區域東京市内及附近町村より八王子に至る間を包容するに至る、同年三月千住火力發電所設計再び變更し、五千を六千馬力とす、同時に水力設計も變じ一萬三千五百馬力を二萬二千五百馬力を得んとし、豫算を七百萬圓に増額す、同年八月一躍一千八百萬圓となせり、四十年三月水力電氣事業完成し、多少の供給に餘裕を生ずるに至るも、時代趨勢に鑑み、更に第二水力事業測量設計に着手せり是より先き四十年七月、東京電力株式會社と合併す、同社は資本金六百萬圓にして、内拂込金百五十萬圓なりと茲に於て資本金二千四百萬圓となり、即ち第二水力工事は、此の合併により得たる水利權を基礎としたるものなり、四十二年四月第二水力工事計畫完成せしを以て、株主總會に於て設計及事業費豫算事業費支辨方法の議決し、直に工事に着手せしが水路中間に於て貯水池に適當なる地形を見せしを以て、四十三年六月株主總會の決議を経て設計及豫算を變更し、同時に資本金を五千萬圓に増加し、今や本邦第一の電燈會社にして、各工事は全部完成し、送電に於ては些の遺憾もなきに至れり、今大正七年下半年利益金分配案を示せば、壹百五十九萬六千五百圓、前半期繰越金三百三十一萬五千八百三十六圓、當半期利益金合計四百九十一萬二千三百三十六圓、内十六萬六千圓、準備金三百萬圓、株主配當金(年一割二分)壹百七十一萬六千三百三十六圓、後半期繰越金とす、現重役は取締役社長神戶舉一、常務取締役工學博士中原岩三郎、同越山太刀三郎、同若尾幾造、同根津嘉一郎、同喜八郎、同若尾幾造、同根津嘉一郎、同渡邊勝三郎、同若尾謹之助、同小池國三、同監査役中川良長、同岡崎正也、常務監査役伊東三郎氏の諸氏なり。

を以て神戸の鈴木商店と共同にて長野縣千曲川の水利權に依り、信越電氣株式會社を設立し、益々増加せる電力需要に應じ以て時代の趨勢に伴ふ可く目下工事中なり。

鐘淵紡績株式會社

所在地 東京府南葛飾郡隅田村一六一二  
設立 明治二十年五月  
資本金 一千七百四十二萬七千六百五十圓  
代表者 取締役社長日比谷平左衛門、專務取締役 武藤山治

今や我紡績界の霸王鐘淵紡績會社は、其の始たるや一綿商組合に過ぎざりしが、順次發展し、明治十九年には資本金を十萬圓となし、翌二十五年五月鐘淵となり、茲に資本金百萬圓に達し、爾來時代の進歩に伴ひ、過去二十五年間に驚くべき長足の發展を告げ、目下に於ては資本金一千七百四十二萬七千六百五十圓の大會社にして拂込金一千五百七十八萬六千九百七十圓、諸積立金千六百四十三萬八千九百一十一圓にして之れに諸基金を加ふれば、二千五十餘萬圓に達すなりと、工場總數四十三に及び三萬餘の男女工を使役し前期決算に於て七割の配當をなせし

と云ふ、同社創立の際には、東京第一工場を有せしのみ、二十六年東京第二工場、二十八年六月に兵庫工場を設け、三十二年九月上海紡績を合併し、同工場を兵庫第二工場となし、同時に河崎紡績を買収し住道支店とし、翌年十月柴島紡績を合して中島支店とし、同十二年淡路紡績を買収して洲本工場と稱せり、後三十五年七月九洲紡績と合同して熊本、久留米、三池の三工場を加へ、又中津紡績の工場を收購、十一月には更に博多絹紡績をも合し、事業益々盛大となり大に其の擴張を計れり。

其の後兵庫に試験的に織布工場を起せしが之又年月と共に隆盛に赴き、四十年末に至り日本絹紡績と併合し、次で四十年六月東京に第三工場を興し、瓦斯絲製造を始め、又京都絹綿第一工場を新設し、四十二年三月更に第二工場同五月洲本支店第二工場(以上日本絹紡績より繼承の分)次で七月中津織布工場、十月高砂に綿絲工場を新設す、四十三年五月兵庫九月博多に織布工場を新設し、更に四十四年三月絹紡績を合併し、新に新町、前橋、京都上京及下京、岡山(備考第

二工場)並びに備前、西大寺、和歌山、等各地に工場を有するに至る、而して四十五年五月東京に極薄物綿布の製織工場を試験的開始し、尙兵庫に第四、五の兩工場を起し、瓦斯絲及び瓦斯巾を製造し、洲本第二工場並高砂、中島及び備前の各工場もまた擴張し、大正二年十二月朝日紡績を合併し、大阪支店を増設し後ち更に淀川工場を設置し、染色、漂晒等加工綿布の製造を起し、已に其の一部の操業を開始せり、又廣く支那、南洋等其の需要益々擴張せらるるに至る一大會社となれり、同社の現重役は、取締役會長日比谷平左衛門、專務取締役武藤山治、取締役藤正純、長尾良吉、前山久吉、山口八左右、橋爪拾三郎、福原八郎、望月榮作、監査役平賀敏、野崎廣太、清岡邦之助、安田善三郎、室田義文の諸氏なり。

富士瓦斯紡績株式會社

所在地 東京府南葛飾郡大島町一二六  
設立 明治廿九年三月  
資本金 一千八百萬圓

代表者 取締役社長和田豊治  
同社は明治廿九年三月創立せられたるものにして、其紡績事業を開始するに至り

しは同卅一年下期よりにして當初の資本金は二百萬圓也、初め出張事務所を京橋區堀留町に置し、其後に至り現在の日本橋區箱崎町に移轉せり、而して工場を東海道小山驛に建設し、大いに絹糸、綿糸の製造に努力せり、當時恰も日清戰役後にて各種事業の勃興時代を經過し、正に反動時代に入らんとしたる時に及び、經濟甚だ困難を極め三十三、四年の頃は實に極端なる窮狀に沈めり、此の時に際し、和田豊治氏擧げられ、始めて經營の任に當れり、蓋し富士瓦斯紡績の今日の盛況を見るに至れるは一に和田氏の技術に據ると斷言するも敢て過言に非ず、時は明治三十四年、入社して以來着々内部の整理は完成せられ、事業は次第に進捗して發展の方針に向ひ、三十五年の下期より利益配當をなし得るの域に達せり、同社は創業以來久しく無配當にて、其幾分なりとも利益配當を行ふに至りしは、同期を以て初めとせり。

爾來漸次發展の緒につき、明治三十六年資本金を二百六十萬圓に増加し、小名木川綿布會社を買収し、同時に程土ヶ谷の絹綿紡績會社をも併合して、一層業務の

株式會社芝浦製作所

擴張を圖り、三十九年には資本金を五百萬圓となし、又東京瓦斯紡績を合併して其工場を押し上工場となし、名稱を富士瓦斯紡績株式會社と改め、同四十年更に増資を決定して、八百萬圓となすと共に小山驛に第三工場を新設し、四十二年に至り、程土ヶ谷工場を現在の位置に移して大擴張を行ひ、次で資本金を壹千六百萬圓に倍加し、四十三年小山に第四工場を建設し、越て大正三年、相模水力電氣株式會社を併合して更に壹千八百萬圓に増資せり。

同社現在工場は左の如し、  
小山第一工場 綿糸 静岡縣小山町  
小山第二工場 同 同  
小山第三工場 同 同  
小山第四工場 同 同  
小山第五工場 綿布 同  
程土ヶ谷工場 綿糸及 神奈川縣程ヶ谷町  
川崎第一工場 綿糸 同 川崎町  
川崎第二工場 同(目下建設中) 同  
押上第一工場 同 東京市本所區  
第二工場 同 同  
小名木川工場 綿糸及 東京府下  
現在の總額数は綿糸二十九萬七千八百鐘、

絹糸六萬二千四十鐘、總織機千八百五十餘臺を有せり、別に目下建設工事中に屬する川崎第二工場の五萬三千鐘及小山第五工場の金布織機五百二十七臺あり、尙神奈川縣峯及静岡縣須川、漆田、内山に於て水力電氣二萬キロを發生して、遠く横濱電氣會社及玉川電氣會社其他各社へ供給し、又は地方電燈用に販賣しつゝ、あり、更に目下河内川水力電氣の工事中にて竣工の曉は、京濱方面へ送電供給の大計畫なりと。

今や我國は世界大戰の好影響を受け、事業界の大發展に伴ひ、紡績事業の盛況は又一段の光彩を帯び東洋紡績、大日本紡績などの大會社を出現するに至れり、然れども全國幾多の同業會社中、其の牛耳を握るは同社及び鐘ヶ淵紡績なり、兩々相對峙して斯界の重鎮たり、是等大會社に於ける事業上の盛衰は、會社一箇に關するのみならず、我國の經濟界に大影響を及ぼすの勢力を有せり。

取締役會長 和田 豊治  
常務取締役 高橋 茂澄  
同 持田 巽

取締役 川崎 榮助 同 稻延利兵衛  
同 森村 開作 同 三村 君平  
監査役 藤井 諸照 同 伊東 要藏  
同 湯山 新介 同 相談役 藤村市郎右衛門  
相談役 日比谷平左右衛門の諸氏なり。

株式會社芝浦製作所

所在地 東京市芝區金杉新道町一番地  
設立 明治三十七年六月  
資本金 五百萬圓  
代表者 取締役會長三井守之助

芝浦製作所は三井家の經營になる東洋有数の電氣機械製造工場にして、嘗ては蒸氣機械と電氣機械とを並立せしめて之が製造に従事せしが、遂に時勢の趨向を察して、四十四年五月より營業方針を變更して専ら電氣機械製造業にのみ従事するに至れり、而してその主なる製作品は交流發電機、直流發電機、交流電動機、直流電動機、變壓器、配電盤等にして、尙ほ耐震煙突、水管、汽罐等の製作に従事す。

り資金の缺乏を感じ、遂に同工場を抵當として三井家より資金の融通を受けしが其後の營業亦面白からず、偶三井家整理の事ありて二十六年十一月、遂にその全部を擧げて三井の手に委するに至れり、是に於て三井家その事業を繼承して之を芝浦製作所と改め、其後三井工業部、三井礦山會社等の管理に屬し、電氣、蒸氣及一般機械類の製作に従事せしが、三十二年五月、大田黒重五郎氏入りて之が實權を握るに及び頓に其面目を改め、漸次好況に向へり。

當時三井家に於ては機械製造業の將來有望なるを思ひ、同社の事業を擴張して、更に資本金を一百萬圓とし、株式組織に改む時に明治三十七年なり、爾來社運逐年繁盛を加へ、其の製品も亦舶來品を凌駕するの好成績を擧げ、四十三年には又増資を斷行して之を二百萬圓とし、世界一の電氣工場米國ゼネラル會社と提携し其設計に係る製作品は悉く之を製造販賣するの特權を得、工場施設の改良擴張を行ひ遂に四十四年五月には、一般機械の製造を廢して電氣に主力を傾注するに至れり、蓋し近年我國電氣事業の發達著し

くその需要の増加は殆んど底止するところを知らず、爰に於てか此の大勢に應ぜん爲め、工場大擴張の企畫を立て、大正二年二月一躍資本金を五百萬圓に増加し大正三年第二期擴張工事第一次工事完成し、同四年扇風機工場を創設す、次で同五年隣接地一萬餘坪を購入し、工場並に倉庫を擴張なし、益々將來の發展を期待せり。

古河合名會社

所在地 東京市墨田區八重洲町一ノ一  
設立 大正六年九月  
資本金 二千萬圓  
代表者 社長男爵古河虎之助

現重役は取締役會長三井守之助、常務取締役岸敬二郎、同小林作太郎、取締役ジニー、アール、ギャリ、同團琢磨、同大田黒重五郎、藤瀬政次郎、監査役前田直行、同綾井忠彦、同小野友次郎の諸氏なりとす。

年と共に發展して、銅、銀、石炭等の諸礦山を全國各地に移行し、益々その事業の發達を圖りたりしが、明治三十六年、翁が逝去するや、養嗣子調吉氏家業を繼承して三十八年四月、古河鑛業會社を創立して自ら社長たりしが同年十二月、不幸にして病没するや當主虎之助氏其の跡を襲ひ社業逐年大を致し、四十四年古河合名會社と改稱し、大正六年九月古河銀行を設立し、同年十一月合名會社古河鑛業會社、古河商事株式會社を設けて、舊合名會社の事業を分割管掌せしめ、大正七年四月更に古河鑛業會社の組織を改めて株式會となせり、而して是等諸會社並びに他の投資事業を統轄監理せしむる爲め、別に古河合名會社を設け、現在に至りしなるが、その間には足尾銅山の買収以來愈々鑛業界に大飛躍を試みる緒に着きたる爲め、明治十七年には院内を、同十八年には阿仁及太良を政府より拂ひ下げ、同二十年には不老倉を、二十四年には水澤を、二十八年には大島を買収するに至り、更に二十七年より二十九年に亘りては九州に於て下山田、勝野、鹽頭、目尾の各炭坑を買収し續いては新目尾炭坑を

古河合名會社

三十三年には、久根鑛山をも手に入れし、も三十六年遂に市兵衛翁の薨せられて、前記調吉氏の繼承せられし後、三十九年に日光町清瀧に日光電氣精銅所を創立せり、而も是より先き一年には日光清瀧に大谷川の水を引ききて水力電氣を起し、足尾に電力を供給せしが、其の水力實に雄大なるにより、之を利用して細尾に一大水力電氣發電所を設置せしを以て、其の電力は足尾に送り、尙ほ充分の餘力を以て清瀧に前記の精銅所を起し、現主虎之助氏の時代となりて、四十一年日光電氣精銅所の規模を擴張し、從來經營せし同社本所熔銅所の電氣分銅及銅線製造の事業を同所に移す、又大正二年兵庫縣尼崎に新に煉銅工場を起し、更に大正三年には製線工場をも増設して、銅線をも製造するに至れり。次で大正四年六月福島縣好間炭礦株式會社を買収して、其事業を繼承し昨年九月には岡山縣水島製煉所をも買収するに至り、今や將に同社時業の進展は計り知られざる程なり。殊に同社の大事業たる足尾銅山と日光精銅所とは特筆するに値すべきものありて茲に詳記する事能はざるを以て、單に同家事業沿革の概略とす。

古河鑛業株式會社  
所在地 東京市麹町區八重洲町一ノ一  
設立 明治三十八年四月  
資本金 二千萬圓(拂込済)  
代表者 社長男爵古河虎之助

古河鑛業株式會社は曩に述べし如く大正七年四月の設立に係り、鑛業製煉業及伸銅業其他の餘屬加工業並に化學工業を營み居れるが、資本金二千萬圓にして鑛山部工業部經理部其の事務を分掌し、現に

直接その衝に當れるは、専務取締役の昆田文次郎氏、常務取締役の淺野幸作氏、同山口喜三郎氏、足尾部長の木部一之枝の諸氏なりとす、今同社に於て現に稼行せる鑛山、工場及其一ヶ年の生産額を示せば左の如し。

足尾鑛山	銅	二千五百萬斤
阿仁鑛山	銅	二百三十萬斤
永松鑛山	銅	一百八十萬斤
水澤鑛山	銅	百萬斤
大島鑛山	銅	八十萬斤
久根鑛山	鑛石	十五萬噸
不老倉鑛山	鑛石	千三百萬噸
大島鑛山	銅	百萬斤
太良鑛山	貴鉛	六十萬斤
平安鑛山	鉛	四十萬噸
川井山鑛山	銅	七十萬斤
山手鑛山	精銅	五十萬斤
水島製煉所	銅	五百萬斤
目尾炭坑	精銅	七十五萬貫
潮頭炭坑	銅	五百萬斤
第二目尾炭坑	石炭	七十萬噸

古河商事株式會社

所在地 東京市麹町區八重洲町一ノ一  
設立 大正六年十一月  
資本金 一千萬圓(拂込済)  
代表者 社長男爵古河虎之助

大正六年十一月の設立にかゝり、鑛物、金屬、金屬加工品、雜貨等の物品の販賣並に之に關聯する業務を營むを以て目的とす、資本金一千萬圓、東京、大阪、門司、上海に支店を置き、名古屋、博多、漢口、香港、天津、大連、京城、倫敦、紐育等に出張所を置き、別に神戸に船舶事務所を置き、航海運輸の業を營む。

現重役は社長古河虎之助男、専務吉村萬次郎、常務井上定次、同萩野元太郎、取締役井上公二、菅禮之助、山口喜三郎、監査役昆田文次郎、石井政吉の諸氏にして、同社に於て現に取扱へる商品は、古河鑛業會社生産品全部の外に横濱電線製造會社、大正鑛業株式會社生産品其他豆粕、足尾鑛岩機、セメント、晒粉、曹達、護謨、諸雜貨等なりとす。

東京古河銀行

山下合名會社

大正六年九月の設立にかゝり資本金五百萬圓、現社長古河虎之助氏なりとす。(銀行の部参照)以上は、之を直系會社とも稱すべく、即ち資本の全部が古河家及其關係者の出資になれるものなるが、此の外、資本の一部又は大部分を古河合名會社より出資して且つ其代表者を選任せる者あり、以下之を列記して古河家事業の大觀を終り、益々多端なる戦後の事業界に於ける同家直系傍系事業の大飛躍を期待せんとす。

横濱電線製造株式會社
大阪電氣分銅株式會社
大正鑛業株式會社
日本人造肥料株式會社
日本電線製造株式會社
旭電化工業株式會社
九州電線製造株式會社
日光電氣軌道株式會社

山下合名會社

所在地 東京市日本橋區吳服町二二  
設立 大正六年五月  
資本金 一千萬圓  
代表者 出資社員山下龜三郎  
同社は山下龜三郎氏一族の結合せる會社

下田炭坑	石炭	五十萬貫
新目尾炭坑	石炭	百五十萬貫
好間炭坑	金	一萬二千貫
日光精銅所	精銅	五千四百萬斤
	銅條棒	三十萬斤
	銅線	二千三百萬斤
	真鍮板棒	三十五萬斤
	丹パン	三百萬斤
尼崎工場	銅	六百萬斤
	精鉛	二百萬斤
	精銀	四百斤
	鐵線	六十萬斤
	鐵線	五十萬貫
	真鍮板	五十萬斤
	銅板	六十萬斤

右の内、其の最も主なるは足尾、阿仁の二鑛山なり。現重役は社長古河虎之助、専務取締役兼經理部長昆田文次郎、常務取締役兼鑛山部長淺野幸作、常務取締役兼工業部長、山口喜三郎、取締役兼足尾所長木部一之枝、監査役井上公二、監査役小田川全之の諸氏なり。

にして、其の目的は有價證券及不動産の取得利用にて、其の他山下氏關係せる直系傍系會社の監督をなす可き處にて、即ち山下氏經營せる各社の本總部なり、出資社員は山下龜三郎氏六百五十萬圓、山下カメ百萬圓、山下太郎百萬圓、山下三郎五十萬圓、山下象子五十萬圓、山下波郎五十萬圓の諸氏にて、重役は社長山下龜三郎、理事事松木幹一郎、理事林武平同鑛谷正輔氏等なり。

山下汽船株式會社

所在地 本店 神戸市榮町通二ノ四七  
支店 東京市日本橋區吳服町  
設立 大正六年十一月三十日  
資本金 三千萬圓  
代表者 社長山下龜三郎

同社は明治四十四年六月設立せる、舊山下汽船合名會社の組織變更せるものにて營業の目的は一般海運及仲立業にて、最初は資本金十萬圓を以て斯界に活躍し、幾多の苦辛變遷を経て、今日の月桂冠を得たるものなり、即ち山下龜三郎氏の中心事業にして、同社の沿革に就て叙述せんと欲せば先づ之れが創業者山下氏の奮闘史を記せざる可からず。

抑も山下龜三郎氏は伊豫國喜佐方村の庄家山下源二郎氏の二男、十九歳にして郷關を出で京都東京に苦學し、後日本橋區某商店に勤め更に横濱に行き、刻苦具に嘗め盡し精力益々旺盛、年齢并始めて小資を得、同市に横濱石炭商會を開始せり、(之れ現今石炭事業の起原なり)氏は茲に奮闘努力大に業務の盛大を致し、明治三十八年日露の風雲に乗じて巨利を得、山下汽船營業部を設け之れより海運界に雄飛せり、(之れ現今汽船事業の遠源なり)後ち小樽木材株式會社を創立し、又韓國倉庫株式會社を成立せしめ、或は社外船主トラストたる日本汽船株式會社(資本金三千萬圓)の設立計劃をなし、當時既に天下の耳目を聳動せし事跡ならず、恰も好し順風胎濟の時期に遭遇して、大正四年歐洲大亂の勃發せるや、一躍して巨萬の富を得、茲に於て幾多の苦辛をなせる目的を達して、遂に天下の山下として世に知るゝと共に、會社の資本金を參千萬圓となし、組織を改めて株式會社となす、今や我が海運界の重鎮として、斯界に異採を放てり、而して現在重役及支店出張所は左の如し、

社長山下龜三郎、專務取締役鑛谷正輔、常務取締役畑茂、取締役松木幹一郎、同林武平、取締役營業部長玉井周吉、監査役町田豊千代、東支店長玉井周吉、臺灣支店長、内藤正太郎、新嘉坡支店長白城定一、倫敦出張所長久富保一。  
本社 神戸市榮町通二丁目  
東京支店 東京市日本橋區吳服町  
横濱出張所 横濱市相生町六丁目  
門司出張所 門司市東本町四丁目  
臺灣支店 臺灣臺北府後街四丁目  
基隆出張所 同 基隆船頭  
打狗出張所 同 打狗新濱町  
Yamashita Kisen-Kaisha,  
Windsor House,  
15, Collyer Quay, Singapore.  
新嘉坡支店

山下鑛業株式會社

所在地 東京市日本橋區吳服町三三  
設立 大正七年十二月十七日  
資本金 二千萬圓(拂込一千萬圓)  
代表者 社長山下龜三郎

15, Collyer Quay, Singapore.  
新嘉坡代理店  
Yamashita Kisen-Kaisha,  
Kings Building, Hongkong.  
香港代理店

福島炭礦株式會社

所在地 東京市日本橋區吳服町三三  
設立 大正五年十二月  
資本金 二百萬圓(拂込一百二十萬圓)  
代表者 取締役社長山下龜三郎

同社は元、福島縣人敷江三左衛門氏の所有に係る同縣石城郡赤井村の鑛區約二百萬坪を買収し、大正五年十二月本社を設立し、同六年一月より事業に着手せり、而して鑛區は有望にて目下年産額二十五六萬噸なれども、將來は三四十萬噸は必ず出炭の豫定なりと、之れが販賣部に於て一手販賣を爲す、同社現重役は社長山下龜三郎、專務取締役林武平、取締役藤田謙一、同長崎英造、同松木幹一郎、監査役阿部元松の諸氏なり。

山一汽船株式會社

本社 東京市日本橋區北島町一ノ三七  
支店 神戸市榮町通三丁目廿九番地

同社は大正四年十一月資本金三百萬圓を以て設立せる山下石炭株式會社と、明治四十年十一月設立せる資本金一百萬圓の奔別炭礦株式會社の兩社を合併の上、新に山下鑛業株式會社(資本金二千萬圓)を設立し、右兩會社の業務一切を繼承し、從來は石炭の採掘並に販賣業を目的とせしが尙一層業務の擴張を圖り支店出張所を全國各樞要の地に設置せり、現在重役は社長山下龜三郎、專務取締役林武平、監査役鑛谷正輔、同畑茂氏の諸氏にて主なる社員は、技師長柳田友磨、本店支配人足立盛夫、北部營業所長兼小樽支店長吉田貞吉、西部營業所長中村定安、北部鑛山部長櫻羽薫、宮尾炭鑛長野口章大、大谷炭鑛長淺野三郎、東京支店長折田新六、大阪支店長伊藤好三郎、門司支店長中井俊藏、名古屋支店長兼横濱支店長渡邊忠治。

同社の支店及出張所左の如し、  
東京市日本橋區吳服町二十二番地  
東京支店  
青森市新安方町百七拾六番地  
東京支店青森出張所  
新潟縣直江津町諏訪區  
福島炭礦株式會社

東京支店直江津出張所 大阪市西區川口町二十二番地  
大阪支店 和歌山市久保町四丁目二十二番地  
大阪支店和歌山出張所 神戸市榮町通三丁目  
大阪支店神戸出張所 門司市東本町四丁目 門司支店  
横濱市吉濱町十四 横濱支店  
名古屋市西區小島町七十八番地 名古屋支店  
小樽區南濱町四丁目七番地 小樽支店  
函館區東濱町二十九番地 小樽支店函館出張所  
室蘭港海岸通一番地 北部營業所  
筑前若松市海岸通り二丁目 西部營業所  
北海道空知郡幾春別村北部鑛山部 奔別炭鑛 歌志内炭鑛  
奈井江炭鑛 新志内炭鑛  
福岡縣田川郡勾金村 宮尾炭鑛  
福岡縣粕谷郡宇美村 大谷炭鑛  
Yamashita Kisen-Kaisha,  
Windsor House.



設立 大正七年九月  
資本金 三百萬圓

代表者 社長山下市助

歐洲大戰の齎らせる我が海運事業の隆興は未曾有のことにして、何れも大發展大成功せざるはなく、僅少の筆紙にては其のよく盡すを得ざるの盛況を來せり、殊に山下市助氏の經營せる山一汽船合名會社は此好時期に於て生れ斯界の潮流を好迎して旭日昇天の大發展をなし、遂に現在の株式組織となり、大資本の基礎を確立するに至れり。

抑も同社の前身山一汽船合名會社は、山下市助、山下岩衛兩氏の經營にて大正六年二月資本金五萬圓を以て創立し、我が海運界に活躍の旗幟を翻へせり、業務は開業以來順潮に發達し、益々擴張せるに依り大正七年三月資本金を一百萬圓に増加せり、然る時勢の趨向を觀察し、更に一大活躍せんとし、別に山下市助、高島三郎、山下岩衛、渡邊榮次の四氏相謀り資本金十萬圓の山一汽船株式會社を大正七年九月十八日設立し、茲に前記合名會社を合併して、同年十一月二十八日登記を了し、更に資本金を増額し、一躍三百

萬圓(全額拂込済)の大會社とし、同時に神戸支店を設置せり、業務は合名會社一切の事業を繼承し、其の種目は一、船舶海運に關する一切の業務、一、船舶建造及修繕に關する設計監督、一、船舶代理店に關する一切の業務等にして、航海の航路は目下の處日本近海及南洋方面を主として、漸次歐米方面に發展の計畫豫定なりと、尙會社の關係代理店を擧ぐれば左の如し。

- 中村商店船舶部總代理店
- 日本網管株式會社船舶課總代理店
- 佐々木漁業汽船株式會社代理店
- 笹川商店船舶部總代理店
- 大洋商船株式會社代理店
- 野原商店船舶部總代理店
- 佐々木兵五郎商店船舶部總代理店
- 總谷商店船舶部總代理店
- 富本商店木材船積總代理店
- 同社現在重役は取締役社長山下市助、常務取締役兼神戸支店長高島三郎、取締役山下岩衛、監査役渡邊榮次の諸氏なり。
- 因に同社長山下市助氏は、我が海運界の重鎮山下龜三郎氏とは個人の親交最も深く、相互會社は何等の關係なきも、兩雄

相携へ策應するを以て、同社は創立日淺きと雖も、陰然たる其勢力は實に大なるものあり、愈々今後の活動は期待する處あらん。

### 南洋郵船株式會社

東京市京橋區木挽町十丁目

世界大戰の結果、南洋諸島は我が新領土として近時著しく發展し、内地人の移居するもの頗る多く、從つてそれに伴工商業も又盛況に向ひ、商工貿易等は非常の隆盛なるを極めり、内外人の往復頻數となるに到れり、先是我鋭眼なる海運界の名士、緒明圭造、板谷宮吉、原田十次郎の三氏相謀り大正元年十月南洋郵船組を起し、南洋航路の第一歩を開始せり、始め資本金七萬五千圓なりしが開業以來業務順潮にして、毎航滿載の盛況を呈し殊に戰亂の好影響を受け、大發展を成したる爲め、大正三年十月組織を株式會社に改め、同四年四月資本金を七十五萬圓に増資し、大擴張を行ひ更に同七年五月一躍百五十萬圓に倍加し、南洋開拓の使命に貢獻の基礎を築けり。航路は亞細亞大陸の東南、蘭領東印度諸島の内、瓜哇、センペリ、ボルネオの一部、又その洋上

一帯の島嶼にして、それ等幾多の島嶼の内には英、佛、獨、米、蘭、葡等の諸國の所領もあり土地豊沃にして、而かも人口稀疎造化の自然は、人爲の開發を待つもの、如く、天與の惠澤は移住を奨むるもの、如し、夫れに通商、貿易、移住、農場探礦、採貝漁撈等諸業の企業頗る有望にして、當社の經營する南洋航路瓜哇線は此の寶庫たる南洋の關門瓜哇に到る、本邦直通定期航路にして、南洋渡航の好機關なるを以て、我帝國政府の命令航路として大正元年十月より開始し、毎月一回往航神戸を發し、門司、香港、を経て瓜哇のバタビヤ(Batavia)スマラン(Samarang)に寄航し、スラバヤ(Sourabaya)に到り復航スマランを發し、マカッサラ、(マレボス島)バリクパシ(ボルネオ島)、香港を経て門司に寄航し、神戸に歸着する直通定期航路なり、而して南洋と云へば一般世人は全部未開の島嶼の如く、解すれども事實は然らず、瓜哇島の如きは幾分未開の地りも、沿岸近き地帯は總て非常に發達し、商工業など般盛を極め本邦などに劣らずと、其の一例を示せば我が國にまだ自動車が一十臺内外位の時代

帝國電燈株式會社

### 帝國電燈株式會社

所在地 東京市京橋區日吉町八  
設立 明治四十四年五月  
資本金 五百六十六萬圓  
代表者 取締役會長久野昌一

に既に四千臺以上もありて、諸種の事業に使用せりと、以て其の程度を知るべし。使用汽船は萬里丸(三二五〇噸)、北都丸(三二八二噸)、旅順丸(四七二八噸)、ポルネオ丸(三九一四噸)の四隻にして、營業機關は本店の外、本航路の起點地たる神戸に支店を設け、營業上諸般の事務を辦理し、寄航各地には代理店を置き、萬事誠實簡捷懇切便利の取扱を爲す。同社最近大正七年九月、第八期の決算を示せば、資本金一百五十萬圓に對し、利益金五十九萬二千五百七十圓餘を擧げ、一年一割の株主配當を行ひ、諸準備金に二割以上を積立、後期へ金四十五萬一千百餘圓を繰越せり、營業方針の如何に堅實なるかは之れを見て知るを得べし、現重役は取締役社長原田六郎、専務取締役松本良太郎、取締役神戸支店長佐伯俊太郎、取締役板谷宮吉、監査役緒明圭造、板谷順助の諸氏なり。

同社は元帝國瓦斯力電燈株式會社と稱し松尾寛三氏、岡部則光氏外數名の發起に依り、明治四十四年五月設立せられたるものにて、大正三年五月内部の組織を變更すると共に、現稱號に改めり、資本金は最初二百萬圓なりしが、大正五年以降に於て、東豫水力電氣株式會社、阿瀬川水力電氣株式會社、銚子電燈株式會社、北海道電氣株式會社、小樽電氣株式會社の五社を合併し、外に三浦電氣株式會社、士浦電氣株式會社等を買收し、漸次業務擴張と共に現在資本金は五百六十六萬圓に増加せらる、營業の目的は電燈電力の供給販賣にして、主に北海道、東京府、茨城縣、千葉縣、兵庫縣、愛媛縣、埼玉縣、神奈川縣の各府縣及び前記各會社所在地方を營業範圍として活躍せり、營業方針は極めて堅實主義で成績最も良好最近五六回毎期一割二分以上の配當を持続し、前途頗る好望なり。

而して同社重役は創立當時、社長松尾寛三、常務取締役岡部則光、取締役永橋至剛、同福島宜三、田艇吉、芹澤登一、宇野哲夫、監査役星野錫、同田口重一、同増田信一の諸氏なりしが、漸次變遷して

現在重役は左の如し、取締役會長久野昌一、専務取締役極島禮吉、常務取締役永橋至剛、取締役河原直孝、同松尾寛三、同松本留吉、同田健吉、同寺田省歸、同青山藤郎、同櫻井平兵衛、監査役星野錫、同吉村鐵之助、同指田義雄氏等にて何れも現代錚々たる名士たり。

因に同社營業地は現在十七ヶ所にて、大正七年十月末現在敷は電燈十八萬一千百餘動力三千七百餘馬力にして、前期末に比すれば、七萬四千四百四十餘燈、二千三百二十馬力餘の増加をなし、殆んど旭日昇天の如し。

茂木合名會社

所在地 東京市丸之内(本店横濱市)

設立 大正二年六月

資本金 八百萬圓

代表者 社長茂木惣兵衛

當代に於ける新進實業家として、名聲噴々たる茂木惣兵衛氏は、第三世の主人として同家事業を經營すること茲に六年、同家經營の事業は、今や各方面に及び其勢駭々として止まる處を知らざるの有様にて、方に一箇龐大なる茂木王國を現出

せんとす、而して茂木合名會社は茂木家の根幹を爲すものにして、本部を横濱市辨天通二丁目に置き、便宜上の事務所を東京海上ビルディング第三階に置く、遠く安政六年の開業に係り、始め野澤屋の商號を以て生絲商を營み、漸次事業を擴大して各種商品の輸出入貿易を營むに至り、而して茂木合名會社と稱せしは、大正二年以降に屬し、其以前は合名會社茂木商店(明治二十八年)又は單に茂木商店(明治十六年)と稱せり、同社内部は

△生絲賣込部 △生絲輸出部 △絹物部 △綿糸布部 △機械部 △金物部 △羊毛皮革部 △油脂工業部 △雜貨部

等に分たれ、其取扱品は凡百の貨物に及び、最近に於ける取引高年額三億六千萬圓と註せらる、同社海外支店の主なるものは、倫敦、紐育、里昂、孟買、甲谷陀新嘉坡、シドニー、上海、漢口、天津、青島、濟南、河南等にして、其外に出張所及代理店等隨所に在り、内地支店は東京、大阪の二箇所及神戸、福井、金澤等に出張所を有し、福井市に直營の絹織物工場あり、猶ほ此外近く九州支店開設の筈なり、而して同社資本金は、積立金共

八百餘萬圓なるが、遠からずして大々的組織に變更せらるべし、此大企業を經營しつゝある幹部員は、社長茂木惣兵衛、専務理事山口精一、理事長與程三、理事高橋次太郎、理事小宮幸次郎の諸氏にして、其外參事支配人以下使用人約八百四十名を算す。

△生絲賣込部

同部は茂木合名會社の管理に係り、安政六年横濱開港と同時に開設せられ、茂木家の最も中樞事業にして、其沿革に於て其範圍の廣汎なる點に於て、他に匹儔を見ざるものなり、事業の旺盛なる、輸出生絲全額の約五分の一たる九萬餘個てふ多大なる取扱を爲せるに見るも之を知る可く、幾多生絲商中斬然頭角を現し居れり。

△絹物部及生絲輸出部

絹物部及生絲輸出部は生絲賣込部と並び茂木合名會社の主要部にして、絹物部は明治十七年の開設に係り、羽二重及各種輸出絹織物を取扱ひ、其取扱年額數十萬圓に達す、生絲輸出部は大正六年七月の開設に係り、開設以來日猶ほ淺しと謂ふと雖も、動かざる地盤と信用とを有し

△間接投資事業

三井物産、原合名輸出部と並び、横濱大輸出商の一に數へらる、特に絹物部は絹物輸出中絶大なる勢力を有すると同時に、先代茂木保平氏以來終始一貫斯界に盡瘁し、輸出絹織物に對する一大先覺者とし、將た又本邦輸出絹物界の一大恩惠者として畏敬せらる、蓋し本邦絹織物貿易今日の隆運を來せるは、同社に負ふ所多大なりと云ふ可し、宜なる哉當主茂木惣兵衛氏は、大正七年十月先代故茂木保平氏七週忌を機とし、先代の遺業を襲ぎ日本輸出絹同業組合聯合會組長に擧げられたり。

▽直接經營事業

株式會社東西製作所  
太平紡績株式會社  
厚狹化學工業株式會社

茂木合名會社

茂木製絲部 茂木家地所部

茂木製絲部は生絲賣込部と共に、茂木家發祥の業務にして因縁最も淺からず、一個の獨立せる個人經營事業に係り、左記工場を管理せり。

岡崎市三龍社 △高崎及前橋市龍興社 △埼玉縣日新館  
生絲產出額年額一萬餘箇、此價額無慮一千萬圓により職員三百名、職員男女を通じて七千五百名を算す。  
茂木製絲部は未だ開設以來日猶ほ淺しと雖も、業務各方面に亘りて發展し、各所に廣大なる鑛區を領有し、是等は概ね皆前途有望なるものなるが、同部は益々鑛區の精選を爲すと同時に、頻りに其擴張を行ひ、嚮後一層の發展期して待つ可きものあり。  
茂木製絲部は獨立せる個人經營にして横濱市辨天通り二丁目野澤屋絹商店並に野澤屋吳服店を管理するものにして、野澤屋絹商店が獨立して開店せるは、明治三十四年の事に屬す、由來横濱には多數の外人入港し、特に絹反物等に興味を持って購買するを以て、其品質優良なると、意匠の高雅斬新にして能く彼等の嗜好に適

すると否とは、惹ひて本邦絹織物の消長にも關する所尠ならず、斯る主旨の下に生れたる同店が、絹織物の小賣商として、横濱市内に常に新意匠の先驅をなしつゝ、常に在留其他古來の外人間に絶大の信用を得たるは、蓋し當然の結果たるべし、又野澤屋吳服店は、横濱の三越との稱を得、信用最も厚く、常に優良なる品質の供給を爲して、同地流行の魁をなすもの、店頭四時顧客蒐集して隆昌を極め、特に萬般の設備等を加へて、克く顧客の期待に反かざる様努め居れり。

株式會社東西製作所 阜月商會 太平紡績株式會社

右は實業界に於て盛名噴々たる茂木家の直接經營に屬する事業たり、而して株式會社東西製作所は、資本金三百萬圓、所在地は横濱にて、電氣機械を始め各種機械器具の製造に従事し、傍ら電氣製鐵を營み、工作材料を自給す、又大平紡績株式會社は、資本金百廿萬圓にして所在地は岡崎に在り、三龍社製絲場の副産物たる屑物處理を基礎とし、内地及支那其他原料を採り、一般絹絲紡績業を營み、自家用發電所を有す、厚狭化學工業株式會社は資本金五十萬圓にして、正に縣下厚狭なる日本火藥會社工場の附近にあり、火藥會社の副産物を原料とし各種藥品の製造に従事す、阜月商會は神戸にあり、商工部船舶課とも稱すべき者にて、阜月丸、老松丸、永樂丸、辨天丸の汽船四隻を所有し、一般海運業並に船舶仲介業に従事す。

日本製麻株式會社

本邦に於ける製麻事業は、創始以來既に三十年苦心研鑽の結果遂に今日の成績を擧げ、殊に最近數年間には非常なる進歩發達をなし、諸他の工業に比し將來益々多望なるべし。 本社は大正三年二月資本金二百萬圓を以て創立し、京橋區銀座二の十四に於て營業を開始せり、製品は「麻糸」及「麻織物」にして其の用途頗る廣く、一般社會の生活向上に伴ひ、需要の開發促進し擴張無限にして、常に供給不足を告げつゝあり然るに歐洲大亂に依り、其需要一層激増し本社の事業益々盛況を來すに及び、大

正六年六月資本金を五百萬圓に増加し、事業の大擴張をなし銳意製品の増大を計りて漸く一ヶ年前の賣約に向つて供給なすの盛運なりと云ふ、如何に同社事業の有望なるかを知らるべし。

大正六年事業發展の爲め本社を麴町區丸之内に建築し、同八年四月竣成移轉せり支店は大阪市東區高麗橋詰町四八、北海道札幌區北二條西一の一にあり、府下岩淵町に赤羽製品工場及び北海道に原料工場あり。

本社は創立の當初に於て専ら其設備の實質に留意し、力めて經費を節約したる爲め固定したる資本極めて低額にして經營上至大の便宜を得、殊に製品工場が京都に接近したる至便の地を占め、而も北海道に百三十萬坪の亞麻工場並農場の經營地を有し、創立日淺きにも係らず毎期二割以上の配當をなし猶五割以上の積立金をなし社礎益々鞏固に旭日昇天の大發展をなせり。尙ほ經營の任に當れる現重役は取締役會長菊池長四郎、專務取締役宮内二朗、取締役楠竹三右衛門、大塚金兵衛、原邦造、渡邊四郎、市原求、支配人山里徳太郎、監査役高橋善十郎、渡邊信

三、神戸第一の諸氏なり。

因に本社長菊池長四郎氏は、我が實業界の重鎮として世既に定評ある處なり、専務宮内氏は舊姫路藩士にして、曾て神戸市に水道部長として大に令名を馳せたりしが、後下野、大阪、近江の三製麻會社より成る製麻合同販賣所長に擧げられ明治三十六年三社合同して日本製麻會社を起すや、其の支配人となり、同四十年更に北海道製麻會社と合併して、帝國製麻會社の成るや、引請支配人として非凡なる手腕を發揮し、製麻界に在ること前後三十年、始終献身的努力を以て斯業の進歩發達に盡し遂に今日の地位を爲すに至れり、斯業の今日あるを致せるは、偏に氏が非凡なる手腕の賜に外ならずや。

北海道炭礦汽船株式會社

所在地 東京市日本橋區本町五丁目  
設立 明治二十二年十一月  
資本金 二千七百萬圓  
代表者 取締役會長岡本  
北海道炭礦汽船株式會社は、石炭の採掘販賣並に鐵道運輸の二業を經營する目的を以て明治二十二年十一月資本金六百五十

るや、茂木商工部に屬するものにて、同部は茂木家が直接間接に經營又は投資せる事業を管理するものにして、右の外同部所管に屬する事業として、  
△化學分析所△羊毛研究所△東洋課等なり、猶ほ此外油脂工業及纖維工業に關する試験工場建設中なり。

日本製麻株式會社

所在地 東京市麴町區丸之内  
資本金 二百萬圓  
設立 大正三年二月  
代表者 取締役會長菊池長四郎  
本邦に於ける製麻事業は、創始以來既に三十年苦心研鑽の結果遂に今日の成績を擧げ、殊に最近數年間には非常なる進歩發達をなし、諸他の工業に比し將來益々多望なるべし。

萬圓を以て設立したる者にして、當時鐵道の延長六十一哩、採掘炭礦は僅に幌内幾春別の二坑のみなりしが、爾來事業の擴張と共に漸次増資して、同三十八年には既に資本金二千七百萬圓に上り、採掘炭礦六ヶ所、鐵道延長二百八哩に及びり而して翌三十九年十月社有鐵道の國有に歸するや、北海道炭礦鐵道株式會社を改めて現今の商號と爲したり、爾來主力を炭山の經營に集中し、尙(一)石炭、鐵礦其他礦物の採掘、賣買(二)骸炭の製製及賣買、(三)鐵、銅其他の製鍊並に諸機械の製造及販賣(四)回漕業(五)電氣事業(六)煉瓦の製造及販賣(七)山林の經營及製材販賣事業をも兼營するに至れり、更に明治四十年三月英國アームストロング會社と共同して室蘭に日本製鋼所を起し又大正六年二月從來直營せる輪西製鐵所を改め三井合名會社と共同して、北海道製鐵株式會社を創立し、別項記載の如く兩社共に順調に發展しつつあり、現今採炭稼業中の炭礦は、夕張、真谷地、楓、萬字、美流渡、空知、幌内、幾春別の八礦にして、此礦區面積三千二百萬坪、出炭年額二百五十萬噸なり、尙數年を出でず

して四百萬噸を出すの計畫あり、其出炭高の内譯を示せば左の如し、(單位噸)

名張礦	一、一〇〇、〇〇〇
真谷地礦	二一〇、〇〇〇
萬字礦(美流渡共)	四二〇、〇〇〇
空知礦	三八〇、〇〇〇
幌內礦	二五〇、〇〇〇
幾春別礦	一四〇、〇〇〇

其炭質及用途を記せんに、夕張炭(夕張、真谷地、萬字産)は發焔熔結性石炭にして火力強烈、用ひて適せざるものなく、就中汽船の燃料瓦斯及煤炭用の製造に適し、其好評海の内外に洽し、又空知炭(幌内、幾春別産)は發焔不熔結性石炭に屬し、其質堅硬にして粉碎し難く、燃燒充分火力強烈にして、各種の蒸汽瓦斯發生機並に發焔爐用として極めて優良なるを以て家庭用として大に歡迎せらる。

同社の所有石炭礦區は石狩、天鹽、北見、膽振の四ヶ國に跨り、探掘三十七礦區、試掘九十六礦區ありて、前記稼業の炭礦を合すれば實に一億二千萬坪に達し、他年事業完成の曉は、現今に數倍する出炭額を見るに至るべきなり。

其石炭の販賣は、從來直接之を行ひしも大正三年以降、三井物産、三井礦山、石狩石炭の三會社と共同して、四社賣炭部を組織し賣買を委託せり。

電燈 室蘭及西紋魁の二ヶ所に電燈事業を營み、最近供給燈數十燭換算二萬燈に達したり。

煉瓦 野幌に煉瓦製造所を有し、燒窯六臺にして年産額一千萬本を算し、其品質良好且つ耐寒性なるを以て酷烈なる寒氣に對し毫も凍損の虞なく、各種の建築工事に適す。

山林 尚、同社は夙に抗木需給の關係を慮り明治三十一年、栗山及雨龍に於て植林の計畫を立て、其後益々之を増加し現今社有の山林は鐵區所在の各地に散在し、其面積二萬六千餘町歩に上り、毎年植栽と補植を行ひ、又農耕に適する地には小作人を入場せしめ、以

て開墾を獎勵し、其既墾面積千八百町歩に及べり。

使用人 使用人は社員千五百人、鐵夫及職工一萬三千人にして、之が住居に充つ可き住宅及長家數七千五百戸を有せり。

同社創業の當初は沿道概ね未開の山林原野に屬し樹木鬱蒼として雜草繁茂し、殊に炭礦所在地の如き、地形險峻、罷熊出没し全く無人の境なりしも、鐵道の敷設は年々移民を招致し、停車場の設置と炭礦の開發とに依りて、所在忽ち部落を形成し、爾來事業の擴張に伴ひ年々異常の發達を遂げ、附近には農事拓け商況盛となり地方頗る發展して、事業は頻々と物興し日を遂ひ月を累るに従ひ、驚く可き長足の進歩をなすに至りたるは、實に同社の功績と謂ふを得べし、因に現在同社經營の任に當る重役は左の諸氏なり。

取締役會長 團琢磨、專務取締役 磯村豐太郎、同 宇野鶴太、常務取締役 高城規一郎、取締役 池上伸三郎、同 山田直矢、監査役 小野友次郎、櫻内幸雄の諸氏なり。

株式會社日本製鋼所

所在地 東京市日本橋區本町四丁目

設立 明治四十年十一月  
資本金 一千五百萬圓  
代表者 社長 高崎親章

民間に於ける兵器製造界の權威たる日本製鋼所は、北海道炭礦汽船株式會社及英國アームストロング會社、同グイツカール會社の共同經營に係り、明治四十年十一月創立し四十四年一月一日營業を開始したるものにして、資本金一千五百萬圓社債一千萬圓なり、同社は本店を東京に工場及支店を室蘭に置き、又大阪に支店吳、佐世保、舞鶴、横須賀及英國新城中出張所を設置して専ら營業品各種の製造販賣に従事せり、茲に同社の製品種目を舉ぐれば左の如し。

(一)陸海軍用に徑十六吋以下各種砲、同砲身素材、各種彈丸、水雷氣室、水壓唧筒機、砲架金物等、(二)鑄上り重量百噸迄の各種鑄鋼物、(三)重量八十噸迄の各種鑄鐵物、(四)鑄上り重量三十噸迄の各種鑄鐵物、(五)鑄上り重量三十噸迄の各種合金物、(六)船舶用諸軸類、(七)鐵道車輛用諸車輪及車軸類、(八)其他各種機械器具類並に附屬品。同社室蘭工場の概況を記せば左の如し。

株式會社日本製鋼所

鍛冶工場 廣さ千二百餘坪、蒸汽錠及暖爐數基を備へ小鍛冶物を製作し、最大汽錠は十二噸にして、又ローリングミルを備へ各種桿材を展製す。

模型工場 二階建煉瓦造り廣さ二百七十餘坪、最新式木工用諸機械を備へ、鑄造用模型を製作す、本工場には自動安全消火器の設備あり。

鑄造工場 廣さ四千九百餘坪、大小各種の熔鑄爐、起重機、鋼塊切斷機等を備へ、鋼材、鐵材其他各種合金鑄物を製造し、最大熔鑄爐は五十噸、最大起重機は百廿噸にして、製鋼能力は一ヶ年約十三萬噸なり。

瓦斯發生所 最新式瓦斯發生爐四十基を備へ、鑄造工場、鍛冶工場及燒入燒嵌工場に要する瓦斯を製造し、一晝夜石炭使用量約二百五十噸なり。

鍛鍊工場 廣さ三千四百餘坪、大砲、彈丸、諸軸類其他に所要の鋼塊を鍛鍊する所にして、大小數基の水壓鍛鍊機、還燒爐、梁上起重機及鋼塊切斷機二十餘臺を備ふ、最大水壓鍛鍊機は四千噸、最大起重機は百噸なり、又六百五十噸コッキングミル及四百五十桿ローリン

グミルを備へ、丸鋼棒を壓延展製す。

燒入燒嵌工場 廣さ七百六十坪、砲身其他諸材料の燒入及砲身層成作業を行ひ八十噸起重機暖爐及油槽を備ふ。

發電所 廣さ三百餘坪、附屬汽罐室六百五十餘坪、工場内諸機械並に起重機用動力及點燈用の電氣を發生す、自動給炭機付高壓水管式汽罐二十基及千キロワット三臺、二百キロワット一臺の直流發電機を備ふ。

機械工場 粗仕上工場、仕上工場及彈丸工場の三部に分ち、廣さ七千五百餘坪に上り、工場中最大の建物にして各種大砲旋削用大旋盤以下諸機械五百餘臺を備ふ、梁上起重機の最大なるものは八十噸なり、其他煉瓦工場(木造二百坪)製圖瓦室(木造平屋建三百三十四坪、煉瓦倉庫を備ふ)實驗室(煉瓦造二百八十六坪)材料倉庫(煉瓦造六百二十五坪)等なり。

用地及埠頭 用地總坪數六十五萬坪にして用地の一角より海上に副六十呎の埠頭を築き棧橋を架す總長千三百呎、端に百噸電力起重機を備へ、隨時大船巨船を横付にし重量品の積卸に便ならし

鐵道 構内縦横に鐵道を敷設し材料、燃料及製品の運搬を爲す、廣狹軌道延長十四哩餘、狹軌道は鐵道院御崎停車場にて官線に連絡し、尙外に四哩餘の輕便線を有せり。

水道 水道は専ら各工場及社宅に給水するを目的として敷設したるものにして工場を距る七哩なる鷺別川上流より引水し、用地内最高所に在る配水地に導く、一日の水量約三百萬ガロンにして鐵道院及港内碇内の船舶並に室蘭市街一般に分水す。

同社は従業員に對する諸般の施設として社宅、病院、學校、職工共濟會、家族共勵會、納稅組合、購買組合、御傘山神社職員俱樂部、職工俱樂部、共樂座及百花園等の設ありて、生活上總ての點に於て不安及不便を感せしむる事なく、且慰安を與ふる事に努めつつあり、同社重役は左の諸氏なり。

取締役社長高崎親章、水谷叔彦、樺山愛輔、磯村豊太郎、ドクラス・グキツカース、ジョン・ヘンリー・ブリューネル、ノープル、エフ・ビーター・トレベリア

ン、廣澤金次郎、監査役サクストン・ウヰリアム・アームスロンク・ノープル、寺島誠一郎、阪東喜八の諸氏なり。

東京紙器株式會社

所在地 東京市小石川區西江戸川  
設立 大正六年八月一日  
資本金 一百萬圓  
代表者 取締役會長山本留次

同社は元水野俱吉氏の個人經營にて、其の創業は、明治三十五年頃にして、我が國紙器會社中最古の歴史有するものなり當時は四谷區大番町一の三番地に在り、尙山堂と稱し、斯界に於て其名聲治く最も信用ある製品を出し、業務益々發展せし結果時代の趨勢に伴ふ可き擴張計畫の爲め、茲に資本金五十萬圓の東京紙器株式會社を組織し、從來の業務一切を繼承し、本社及工場を現在地に建築移轉せり次で更に設備の充實内容の整頓を期す可く一百萬圓に増資し、大いに陳形を張り日本紙器會社と共に本邦斯界の双壁として事業界に重きをなせり。

其の營業種目は紙工品の製造販賣、各種の製版印刷、製本其他之に附帶の事業をなし、特に印刷は美術的方面總てに亘り

て最も精工を極め古代印刷、浮上印刷等に至つては他に於て比類なきものと既に世評あり、工場の設備は、目下年産額一百万圓の能力を有し、職工男女三百餘名にて、今後尙發展の餘力を有し、將來益々有望なり、現重役は取締役會長山本留次、専務取締役井上源之丞、常務取締役淺野鐵二、取締役井口誠一、河合辰太郎、長沼恒次郎、監査役伊藤貴志、藪谷英夫水野俱吉の諸氏なり。

東洋拓殖株式會社

所在地 東京市麹町區有樂町一ノ一  
設立 明治四十一年十二月二十八日  
資本金 二千萬圓  
代表者 總裁男爵宇佐川一正

東洋拓殖株式會社は朝鮮に於ける拓殖事業を主眼とするものにして、明治四十一年八月日鮮兩國政府の協約によりて茲に東洋拓殖會社法を發布し、拓殖殖民の會社を組織し、之をして農業の改善進歩を圖らしむると同時に、優良なる本邦農民を移殖して集團的經營の實地模範を示し又之等の改良を圖るために低利なる拓殖資金を供給し、朝鮮の國利民福を増進せん事を期せり。

初め日韓兩國人よりなる資本壹千萬圓の株式會社として、明治四十一年十二月設立され、其れが本店を京城に置けり、是れが設立委員は日本政府及び韓國政府に於て、それ／＼自國側委員を任命せるものにして、治く官吏、學者、實業家、貴衆兩院議員の各方面よりその委員を選定せり、即日本側委員として、委員長伯爵正親町實正氏を始めとして、時の法制局長官安廣伴一郎、内務次官一木喜徳郎、大藏次官若槻禮二、軍務局長男爵宇佐川一正氏等八十一人、韓國側より趙鎮泰外三十二氏を擧げて委員となせり。

來の朝鮮十三道内に限定されたる其營業範圍を擴大するの必要に迫られ、遂に第四十議會に於て(一)營業範圍を擴大して廣く滿蒙其他海外に於て拓殖事業を營み滿鮮兩地の經濟的聯鎖機關たる事(二)從來便宜上横濱正金銀行の司とり居たる滿蒙方面の長期個定資金供給を全部移して同社の管掌に歸せしめ、以て滿蒙一帯の地に於ける不動産其他長期金融の機關たるべき事の二大趣旨を以て、東洋拓殖會社の法の改正を見るに至り、同社亦右改正の實に副はんが爲にその資本金を倍額の二千萬圓に増加し着々として業務の改善圖る事となれり即ち現在に於ける同社の營業項目は、朝鮮及外國に於て、(イ)拓殖の爲め必要なる資金の供給、(ロ)拓殖の爲め必要なる農業水利事業及土地の取得、經營、處分、(ハ)拓殖の爲め必要なる移住民の募集及分配、(ニ)移住民の爲め必要なる建築物の築造、賣買及貸借(ホ)移住民又は農業者に對し拓殖の爲め必要なる物品の供給及其生産したる物品の分配、(ヘ)委託に依る土地の經營及管理、(ト)其他拓殖の爲め必要なる事業の經營、(チ)定期預り金等至つて廣汎なる

ものなり、今や其の支店出張所の如きもの左記十四箇所の多きに達せり。

本	店	東京市麹町區有樂町一丁目一番地
京城	支店	朝鮮京城府黃金町二丁目百九十五番地
奉天	支店	滿洲奉天西六條街十八
大連	支店	關東洲大連市百一十一區三十八號地
京城	出張所	朝鮮京城府黃金町二丁目百九十五番地
水原	出張所	同 京畿道水原郡水原
江景	出張所	同 忠清南道論山郡江景面
金堤	出張所	同 全羅北道全堤郡金堤面
榮山浦	出張所	同 全羅南道羅州郡榮山面
大邱	出張所	同 慶尙北道大邱府
馬山	出張所	同 慶尙南道馬山府
沙里院	出張所	同 黃海道鳳山郡靈泉
平壤	出張所	同 平安南道平壤府
元山	出張所	同 咸鏡南道元山府

下關出張所 同 下關市岬町七九の

三五(移住民事務取扱)

同社の營業項目は前記の如く、廣汎なりと雖も、是れを區別する時は、資金の供給、土地の經營、殖産事業、植民事業等にして、以下順次其れが概要を掲ぐれば資金の供給とは、

(一)移住民に對して二十五年以内の年賦償還又は五年以内の定期償還の方法に依る移住費の貸付

(二)生産者に對し其生産物を擔保とする一年以内の貸付(此場合に於ては手形割引の方法に依る事を得)

(三)三十年以内の年賦償還又は五年以内の定期償還の方法に依る不動産、鐵道、鑛業權其他不動産上の權利を擔保とする貸付

(四)公共團體又は特別の法令に依り組織したる産業に關する組合に對し三十年以内の年賦償還又は五年以内の定期償還の方法に依る無擔保貸付

(五)農業者二十人以上連帯して債務を負ふ者に對し五年以内の定期償還の方法に依る無擔保貸付

(六)移民取扱業其他殖産事業を營む事

を目的とする會社の株券又は債券の應募引受

(七)移民取扱業其他殖産事業を營む事を目的とする會社の株券又は債券を買とする五年以内の定期償還の方法に依る貸付

(八)法令の規定に依り設定したる財團其他確實なる物件を擔保とする三十年以内の年賦償還又は五年以内の定期償還の方法に依る貸付

以上の方法に依り朝鮮及外國に於ける殖上必要な資金の供給貸付をなすものにして、本年三月末の貸付現在高は、二千二百三十二口、其金高千三百四十三萬一千七百圓に上り其後業務の擴張せられたる結果、従来の貸付以外、更に大正六年十二月創立に係る海外興業會社(在東京、資本金九百萬圓)の株式五萬二百株を引受けて第一回拂込を了し、大正七年四月北滿電氣株式會社(在哈爾濱、資本金百二十萬圓)の株式六千株及東省實業公司(在奉天、資本金三百萬圓)の株式一萬五千三百株を、次で同年六月遼東銀行(在大連、資本金百萬圓)の株式二千株を引受けたるのみならず、之等諸會社

め各地に於ける未墾地利用計畫は、現に著々進捗して、土地經營事業の前途愈々多望なるものあり。

最近一箇年間に於ける殖産事業の成果を窺ふに足るべき重要事項の三四を擧ぐれば、稻作の改良普及が社有田四萬五千町歩中改良種栽培適地二萬八千町歩に對し既に其八割強の二萬三千町歩に達せる事稲作改良を目的とする採種小作出圃面積二百十四町歩に亘り種子更新のため七町五反歩の原種田を設置せる事、大豆作改良を目的とする種圃二十五町歩、改良普及面積三百四十五町歩に達せる事、資力薄弱なる小作人及移住民に對する耕牛貸付頭數九千八百七十餘頭に上れる事、京畿道高陽郡蘇島面に於ける果樹園整理完成して苹果百八十貫餘、梨二十四貫餘、葡萄千九十二貫餘を收穫せる事、造林經營面積二萬六千九百餘町歩の植付を終り新に五千四百餘町歩に十年計畫の造林を開始せる事、竹林經營立派に成功して改良を目的とする買収竹林九十五町歩苗竹新植を目的とする新植地八十町歩に及べる事等蓋し其重なるものなるべし、次に植民事業も最近顯著なる發展を遂げ今年三

銀行に對しては、將來必要な事業資金の供給を契約し、又東洋畜産興業株式會社(在京城、資本金二百萬圓)の株式一萬株金五十萬圓を引受け、且引受株式に對しては現物出資を爲すの契約にて、大正七年九月耕牛一萬三千三百餘頭を提供し、最近又滿蒙毛織會社(奉天に設立、資本金一千萬圓)の株式二十萬株中の四萬株を引受くる等業務の進展頗る目覺ましきものあり、尙此外大連支店に於て正金銀行より引繼ぎたる特別貸付金百五十五萬圓等あれど略す。

朝鮮に於ける事業用社有地は、咸鏡北道を除く他の十二道に亘り、大正七年三月末現在總面積七萬四千七百餘町歩に上り右社有地中移民割當地、果樹園並に林業苗圃地の如き直營地の外從來の慣例に依りて朝鮮人に小作せしめ居るものに、最近一年の小作人収入高百七十三萬圓に達し、其他今年三月に終る一年度内の水利土木工事は堤防、水路、溜池及整理等八百五十二箇所にして、其結果新に同社の獲たる水田九十二町八反一畝此小作料収入七百四十石を算し、尙全羅南道に於ける干潟地二千九百町歩の大開墾事業を初

株式會社秀英舎

所在地 東京市京橋區西船場二七

設立 明治十五年五月

資本金 一百萬圓(拂込八十萬圓)

代表者 專務取締役杉山義雄

當舎は明治九年十月故佐久間貞一、故宏佛海、故保田久成、大内書齋の四氏合資の下に資本金一千圓を以て、活字若干と手引印刷機械三臺を備へ、舎名を單に秀英舎と稱し現在の本店所在地なる京橋區西船場町に活版印刷所を開業せるに濫觴す、當時文化未だ洽からず僅に開知新聞明教新誌、かなよみ新聞等二三種の印刷を引受けしに過ぎざりしが、爾來世運の開進と共に業務漸々繁忙を加へ同十二年十一月今の東京毎日新聞の前身なる東京横濱毎日新聞の印刷を依託せらる是れ當舎が日刊新聞の印刷を爲せる嚆矢なりとす、同十三年五月資本金を五千圓に増加して規模を擴張し技術の改善を行ひたるを以て繪入自由、中央新聞、國民新聞等各新聞社より續々其の印刷を託せらる、

同十四年一月資本金を一萬圓に増加し、新たに鑄造部を設け、之を整文堂と稱し、活字類の鑄造販賣を開始す、同十八年一月石版部を新設して泰錦堂と稱し、石版印刷業を開始せり、同十九年一月資本金を五萬圓に増加し、牛込區市谷加賀町に約五千坪の敷地を買収し、活版工場、鑄造工場、石版工場等一切の設備を完成せり第一工場即ち是なり、同二十一年四月更に資本金を十萬圓に増加し、會社組織に變更し、有限責任秀英舎と改稱す、同二十六年十二月新商法の實施に伴ふ定款の改正を決議し、同二十七年一月設立登記を了し、改めて株式會社秀英舎と稱す、同二十九年三月資本金を二十萬圓に増加し、益々諸般の設備を擴張し、新たに鐵工部を設け、機械の製造修繕を開始せり、同三十六年一月資本金を三十萬圓に増加し、舍業の一大革新を圖ると共に第一工場内に細網寫真版部を新設し寫真製版の業務を開始せり、同四十三年四月京橋區西紺屋町なる本店不幸にして火災に罹り爲めに業務上一大頓挫を來したれども、之れに屈せず、同年六月資本金を五十萬圓に増加し、現在の本店を新築し、尙ほ

第一工場内へ印刷工場一種を増設し、各種の新しい印刷機械を歐米各國より購入し以て損害の回復に努力せり、同四十四年十二月整文堂を改めて第二工場と稱し、同時に泰錦堂の稱呼を廢す、大正五年六月資本金を一百萬圓に増加し、最新式活版輪轉印刷機械及「オフセット」印刷機械等を増設し、基礎愈々鞏固に企業益々進展し以て今日に及へり。

代表者 取締役會長末延道成、專務取締役各務鎌吉、平生夙三郎  
現重役は專務取締役杉山義雄、取締役鈴木良輔、同宏虎童、同角田眞平、同増田義一、監査役肥塚龍、同田市克、支配人青木弘の諸氏なり、營業科目は活版、石版、オフセット版、シキタ版、凹版、凸版、木版、寫真版、電胎版其他諸版彫刻印刷、活字鑄造、各種製本業にして、従業員總計二百七十七名、工場第一、第二工場あり、機械各種合計二百餘臺あり、現今我が印刷界の重鎮にして期日の正確、印刷物の優美なること既に定評あり、今後發展停止する處を知らず。

東京海上火災保險株式會社

所在地 東京市麹町區永樂町一ノ一  
設立 明治十二年十二月  
資本金 千五百萬圓(諸準備金三千八百卅萬餘圓)

明治生命保險株式會社

機運を醸成して、遂に三十三年以降は連年好成绩を収め今や大阪、神戸の各地に支店を設け、その代理店に至りては、日本内地に於て三百六十二個所、海外各地に百七十五個所を有し、又歐洲總代理店として、英京倫敦コンヒル街にウヰリスフエーバー商會、米國紐育サウスウヰキナム街にアツブルトン、エント、コックス等の二個所を設け、時勢の進運に伴ひ益々事業を擴張して、大正三年より火災運送自動車保險の兼營を始め、大正七年四月社名に火災の二字を加え、同時に北米合衆國に於て、手擴く火災保險業を營む爲め、紐育メヂデン、レーン街八十番館火災部代理店を設け、今や資本金千五百萬圓に對する拂込額七百五十萬圓、諸準備金及繰越益金參千八百參拾餘萬圓に達し、世界的一流會社たるに至れり。

明治十二年の末、莊田平五郎、小泉信吉の兩氏が生命保險の必要なるを説き、後幾もなく、莊田氏は小幡篤次郎氏に謀りて先づ東京生命保險會社創立見込書なるものを草し、人命保險の必要を説て之を友人間に示し、評議の結果、阿部泰藏氏を舉げて當事者となし、明治十四年二月愈設立計劃に着手し、社名を明治生命保險會社と改め、同年六月を以て創立願書を東京府知事に提出して其の許可を得、此時に小幡篤次郎、朝吹英二、阿部泰藏、莊田平五郎等の諸氏發起人となり、七月愈株主總會を開き、阿部、小幡、朝吹、莊田、杉本正徳、中村道太、吉川泰二、西沼弟二郎、淺田正文の九氏を取締役に、肥田昭作、早矢仕有的の兩氏を檢査掛に頭取に阿部泰藏氏を選び、物集女清久を支配人として、同年九月より開業せしもの、即ち今日の明治生命保險株式會社なり。

今こそ堂々たる生命保險會社なれど、開業當時は京橋區木挽町に一小屋の二階を借りて家賃僅かに二十圓、社員としては頭取及支配人の外書記二名が常日出勤せる位にて、被保險人體格檢査醫にも別に俸給も拂はず、年末に車代として若干の金を贈りしと云ふ位なれば、勿論取締役も檢査掛りも無報酬にて只管損の無らんことに努力せり、當時世人は未だ生命保險の何物たるを解せず、其勧誘にも頗る困難を極め、阿部社長自ら出陣して熱心勧誘せし程なり、斯くの如く細心の注意を拂しを以て設立の年には、純保險料式に依つて、責任準備金七千六百餘圓を積立尙外に剩餘準備金三十四圓をも積立翌十五年には剩餘準備金僅かに七圓に減じ、十六年には千七百九十一圓となり、十七年には八千八百五十二圓となり、十八年には再び四千八百六十六圓に減じ、翌十九年には五千九百四十四圓となり、二十年には責任準備金十五萬圓、剩餘金一萬七千九百八十三圓に増加せり、而して同年末に於ける被保險人員も四千四十三人、保險金額百九十八萬三百餘圓に達

し、從來其の進歩は遅々として進まざり。被保險人の死亡經驗に基きたるものは得しが、茲に我が保險事業の確乎たる基礎を發見し、漸く將に發展せんとする機運に向へり、以來同社は堅實の發達をなし彼の明治二十六年より三十年に至る我國生命保險會社濫設時代も經過して、三十七八年の厄期に到れり、時恰も日露戰役の影響として新契約は減少して解約頗る多く、且つ保險人の戰歿するもの少からず、眞に生命保險會社未曾有の厄期なりしも同社は些の故障なく、戰死者に保險金を支拂ふと共に一方努めて軍事公債の募集に應じ、反つて世人をして生命保險の必要と保險會社の勢力とを認めしむるに至れり、平和克復後は駭々として進み、新設會社も續出するに至り、同社は帝國生命、日本生命と協議して三會社の材料によつて、死亡表を調製せんと企てり、蓋確實なる死亡表が生命保險に必要なるは言を俟たず、同社の創立當時に於ては、未だ確實なる我國の死亡表なかりしより、同社は止むなく英國十七會社死亡表を採用せり爾來生命保險會社は此の表によるか、或は別に死亡表を調製するも、所謂經驗死亡表即ち生命保險會社の

にして三十五年間同社の經營に努力せし社長阿部泰藏氏は、今や我が保險界の泰斗として、又我が保險界の恩人として永世斯界に崇敬せらるゝに至れり、尙同社現重役氏名は左の如し。

取締役會長 莊田平五郎、專務取締役 藤田讓、取締役阿部泰藏、同末延道成、同本山彦一、同三村君平、監査役草野清四郎、診査醫長醫學博士栗本東明の諸氏なり。

**明治火災保險株式會社**

所在地 東京市麹町區永樂町一丁目一番地  
設立 明治二十四年二月  
資本金 一百萬圓(拂込済)  
請準備金 六十八萬九千餘圓  
代表者 取締役會長 末延道成、專務取締役 各務謙吉

に推し、莊田、末延、谷田の諸氏取締役に爲り、高田小次郎、朝田又七、二橋元長、の三氏を監査役とし、初め本店を明治生命保險株式會社内に設け、資本金六十萬圓を以て營業を開始せらるゝに始まり、實に我國火災保險會社の開祖にして、後同年十二月更に資本金を百萬圓とせり、爾來日本火災、銅業火災、大阪火災、帝國火災、日本酒造火災、横濱火災等の諸會社濫設されしが、其後泡沫會社の消滅と一方東京火災、日本火災、横濱火災等と同盟し、保險料率を一定の率に引上げんが爲め、四十年五月火災保險協會を組織し、四十一年一月より之を所行するに至れり、然るに各社の競争は漸次激烈を極め、加ふるに各所の大火の爲め各火災會社共に大打撃を蒙りしが、其間同社のみは陣容些も亂れず一年と其基礎を鞏固にし、大正六年十二月末に於ける内外契約件数は十一萬二千二百四十件、此契約金額は五億九千二百七十五萬三千七百九十四圓にして、諸積立金六百八十五萬九千七百餘圓の多額に達し、遂に我火災保險界に覇を稱するに至れり、現重役は取締役會長末延道成、專務取締役各務謙吉

取締役阿部泰藏、同莊田平五郎、同三村君平、支配人水澤謙治、監査役草野清四郎、同瓜生震の諸氏なり。

而して大正六年十月本社を現在地に移轉せり、其の現在支店出張所は左の如し。

大阪支店 大阪市東區道修町四ノ七  
京都支店 京都市下京區四條通蘇屋町  
名古屋支店 名古屋市中區榮町七ノ一  
同東區小市場町四ノ十一  
福岡支店 福岡市中島町七七  
金澤支店 金澤市南町七〇  
神戸支店 神戸市榮町通三ノ一八  
横濱出張所 横濱市辨天通五ノ八八  
長崎出張所 長崎市大村町四番地  
其の他代理店を日本内地、臺灣、朝鮮、滿洲、支那、香港、西貢、新嘉坡、孟買其他各地に於て五百四拾四個所を有す。

**日本倉庫株式會社**

所在地 東京市京橋區月島西河原通九丁目七番地  
設立 明治四十年三月  
資本金 七十萬圓(拂込金額二十八萬圓)  
代表者 取締役社長 新海榮太郎

同社は明治四十年三月資本金二百萬圓を以て創立せられたり、當時日露戰役後の諸會社濫興の際とて俄かに經濟界不振の



壹萬餘圓を積立金及繰越金となし、社礎益鞏固となれり、斯の如く會社の成績は概ね順調なりしが、七月二十二日に至り倉庫の一部火災に罹り一戸前の倉庫と保管貨物とを焼失したるも、幸にして火災保險の契約に依り、保險金を以て寄託者との關係を圓滿に解決し、猶ほ焼失したる倉庫を復舊竣工し、會社の營業上には何等支障なく益々盛況に向へり。

株式會社帝國ホテル

所在地 東京市麹町區内山下町一丁目  
設立 明治二十三年

資本金 百二十萬圓(拂込金額七十五萬圓)  
代表者 取締役會長大倉喜八郎

東洋一大ホテルとして其名海外にまで知られ、本邦に來遊する大多數の外國人を宿泊せしむる者を帝國ホテルと爲す蓋我國維新以來萬般の文物長足の進歩發展を遂げ、外人の本邦に來遊するものも亦年々多きを加ふるに至りしが、之等の旅客を宿泊せしむべき旅館なく、僅に鹿

鳴館、離宮等を以つて之に充てしと雖、之固より自分資格ある人のみに限り、一般の旅行者に至りては、東京ホテル、精洋軒、メトロポリタンホテルの外適當の場所なく、之亦多數の旅客を收容する能はず、之を大にしては國家の體面に關するを以つて、明治二十年、時の外務大臣井上侯の勸誘に依り、澁澤榮一、大倉喜八郎、益田孝、横山孫一郎氏に於て一大ホテルの設立を議し、政府及び宮内省の賛成を得て、地を東京市麹町區内山下町にトし、資本金二十六萬五千圓を以つて建築に着手し、建築請合を土木會社に托し、明治二十三年十一月落成し同時に開業せり、其建築物三層六百坪にして、室内裝飾は勿論一般の設備等、東洋の一大ホテルとして辱ぢざるものあり。

爾來有名の旅客は多く之に宿泊し、天長節、其他多くの大宴會は概ね同ホテルに於て催さるゝに至りぬ、然るに當時未だ我國に於て經營法に通ずるものなかりしかば、多く外國人を雇入使用せり、蓋ホテル業の事たる客扱其外經濟の整理に非常の技術を要し之が適當の擔任者を得難かりしにある、然るに近來外國の來遊者

益増加し、同ホテルの營業も亦益隆盛に赴きければ遂に規模を擴大せんとて、資本金を増加して之を百二十萬圓とし、益その設備を改良して顧客の利便を圖り、其取扱法に至りても、次第に熟練と進歩とを來して漸く舊時の面目を一新するに至れり、更に其の後に至り永く歐米にありし、林愛作氏を迎へて、常務とし茲に同ホテル營業方針に一大革新を加へ、其客扱の親切なる點に於て、將た設備の完備せる點に於て、我國ホテル業界の模範となるに至りぬ。

加ふるに最近に於ては、先年米國觀光團の來遊せるを始め、幾多の國際的觀光團の渡來するに至り、常に之が旅館として充てらるゝ同ホテルも、今や國際的の一機關となり事業の成績も良好にして、資本を倍加し、多年計劃したる、新ホテル建築に着手すべし。

尙現任重役としては取締役會長大倉喜八郎、常務取締役兼支配人林愛作、取締役原六郎、同村井吉兵衛、同若尾幾造、同小林武次郎、監査役淺野總一郎、同喜谷市郎右衛門の諸氏なり。

株式會社小林商店(ライオン齒磨)

所在地 東京市本所區外手町六番地  
設立 大正七年九月四日

資本金 一百萬圓  
代表者 專務取締役小林富次郎

株式會社として的小林商店は、大正七年九月四日にして、未だ僅に二星霜に滿たずと雖も、是れが前身たる小林商店に臻りては、相當に永き沿革を有し、爾かも其れが製造に係はる、ライオン齒磨に至りては、其の名聲噴々、三尺の兒童と雖とも知らざる者なし、由來本商店の創業は明治二十九年七月にして、當時未だ現今の如く齒牙口腔衛生の發達を見ず、従つて品質粗惡、實に社會衛生、國民の體育上一日も忽緒に附す可からざる者なり、茲に於てか同店之を遺憾とし、品質外國製に勝り、且つ價格廉にして一般階級の需要に應じ、社會衛生に貢獻し、同胞國民の體格改善の法を講せむ爲め、遂に諸種の齒磨に就き綿密なる研究を重ね廣く近代の學術に釋ね、幾多の辛酸と幾回の實驗とを積み、茲に一種獨得の齒磨製造法を案出し、初めて多年の素志を達するを得たり、之れ「ライオン齒磨」な

り、爾來改善を重ね、販路の擴大、販額の激増に伴ひ、人力原動機を罷絶し、之に代ふるに最新式の瓦斯發動機を用ひ、加之多年苦心の結果自家に於て發明せし混轉機、及び混轉綿縮機を使用し、殆んど製法に於ては完璧を期し、品質、製法の改善に従ひ、愈々廉價に販賣供給し得るの道を拓けり。是れ實に本品が他に見ざる廉價にして、同時に又他に優る數等の品質を有する所以なり。猶ほ香氣の放散を防止し、原料の均一混和を充分ならしめ、益々理想齒磨の實現を期せむと日夜苦心研究に意を注げり。尙ほ同店は原料及び製品に就いて嚴密なる試験をなさむが爲め、早くより化學研究所を設け、熟練なる數名の専門技師を招聘し、各産地本國より直接輸入、若くは間接購入せる諸原料は、設令如何に確實なる品質の證明を有する物と雖も、必ず一應此化學研究所に於て嚴密の試験を行ひ、其品質の優秀を確めたる上に於て初めて用ふる事とせり。明治廿二年大阪に支店を開設し専ら關西同業者、並に顧客各位の便利を圖り、又一般需用者の満足を得たり。明治廿八年、先代店主親しく約一年間、歐

米諸國の同業者を歴訪し、巨細に其製造方法及び販路擴張振りを視察して、其間大に資くる所あり。後に販路を海外に擴張せむと欲し、歐洲に在りては倫敦に、米國に在りては市俄古に特約代理店を設け、盛んに輸出發展の道を講じたり。續いて明治四十年又親しく清國、印度、其他の東洋諸邦を巡視し、中華民國天津、漢口、上海の商業中心地に支店、出張所を設置し、印度及び南洋諸國にありては孟買、マドラス、カルカッタ、蘭貢、古倫母、新嘉波及び香港等の重要地に特設代理店の契約を締結し、爾來内地販賣と相伴うて輸出に意を注ぎたる結果、日を逐ひ月に隨ひて、輸出販賣及び生産、共に其額を激増し、今日の盛況を見るに至りぬ。明治四十四年名古屋に支店を開始し、明治四十三年、北米沙市に開設せられたる大博覽會に本品を出陳し、名譽金牌受領の光榮を荷ひ、尙ほ此他内外の博覽會に於て多數の名譽賞牌を受く。同店の製造に係はる品名種類は、ライオン煉齒磨、ライオン水齒磨、ライオン石炭酸齒磨、ライオン子供齒磨等にて、何れも其品質の優良なるは勿論、且つ價格

廉にして、販路廣大なり、現在重役は、專務取締役社長小林富次郎、取締役小林友三郎、同井口昌藏、同神谷市太郎、同兼支配人松岡保三助、監査役小林幸吉等の諸氏にて、同店は製造部、販賣部、廣告部、仕入部、會計部、倉庫部、庶務部、人事部等の各部に分れ、各部主任を置く何れも熱心に事務に執掌しつゝあり、本店、工場、化學研究所は前記の東京市本所區外手町六番地に、分工場は群馬縣碓氷郡碓氷村にあり。

因に同店は職工徒弟の爲め特に夜學校及寄宿舎等を設け、其の待遇獎勵上に於ては、通常二期に分ちて一般の昇級を行ひ特に成績優等なるものに對しては模範獎勵として定時以外に特別昇級を行ひ、尙ほ其者の胸間には名譽表彰の徽章を佩用せしめ、各部の職工取締役をなさしむ。猶ほ永年勤続せる日給雇に對しては特に之を月給雇に昇進せしむる制を定む、又職工慰安の方法としては、場内に運動場を設け、各種の運動器具を備へ、休憩時間中隨時運動の用に供し、身體の健全と精神の慰安とを謀る。

しめ、趣味ある教育幻燈、蓄音機快活なる音楽等、其他高尚なる種々の娛樂方法によりて慰安と教訓とを與ふるに励めつゝあり、又勤儉貯蓄美風を教へむが爲め全く餘裕なき僅少者を除くの外、殆んど全職工に對して、毎月十四日、並に月末の兩度に於て給與さるゝ賃銀の内、幾分を割きて、郵便貯金をなさしめ、着々其實を擧げつゝあり。

日本皮革株式會社

所在地 東京府下町千住大字千住中組  
設立 明治四十四年四月  
資本金 二百五十萬圓(全額拂込)  
諸積立金 一百二十萬圓  
代表者 取締役社長長男爵大倉喜八郎  
當會社は明治四十四年四月の創立に係はる

と雖も、其前身は株式會社櫻組、大倉組皮革製造所及東京製皮會社等を合同したるものにて、右は何れも明治初年の創業に係はれり、當會社は即ち其動産不動産の全部を買収して直に其の事業を繼承し以て、現今に及べるものにて、陸海軍其他諸官衙及市中一般の需要に應じつゝあり、營業科目は多脂牛革、堅牛革、牝牛革、黃鞣革、靴底革、靴甲革、中底革、赤毛皮、羊皮、パツケン用革、ローラーレザー、帽用綠革、調革其他革具及布具類の製造販賣等にして、工場及製造所は東京府南足立郡千住大字千住中組、大阪市東區船出町及支那上海寶山縣潭子灣に工場を有し、此の外天津に日支合辦の裕津製革公司あり、又北海道十勝中川郡池田驛に製造所を有し、専ら社用單寧エキス製造に従事す、工場及建設物は百九十二棟にして、此坪數は壹萬貳千坪なり抑も當會社の事業たるや、社會の進歩と至大なる關係を有し、前途の活躍期して俟つ可きなり、今當會社製品につき見るに、社會の進歩と共に一般市中に於ける靴の需要は、頗る増加し從て之に要する皮革の需要も増加することとなり、爲

めに一時米國より輸入せらる靴底革は實に年々二百萬圓の巨額を算するに至れり當會社は茲に見る處あり技師を歐米に派し、以て長所を習得せしめ、改善に改善を加へたる結果、堅牢なる優良品を製出するに至る、現に市中製靴業者の用ゆる靴底革の上等品は總て當會社製造の鳳凰印靴革ならざるはなく、從て昔日の輸入は全く防遏し得るに至れり、調革は前身會社より引續製造に従事し居れるも、當時副業たりしに過ぎざりしを以て其の成績に遺憾なき能はざりしが、輒近各種工業の發達に伴ひ、其需要益急なるを以て當會社は、技師を先進國に特派し以て其の製法を實修せしめ、或は最新機械の設備を爲す等、銳意研鑽の結果今や優良耐久確實なる堅牢品を、製出するに至れり、現に各作業廳及一般工場の需要者の稱賛を博し、以て製造數量頗る増加するに至る、キッド革は原料の蒐集、製造の至難、販路の偏僻等種々困難の事情多き爲め、未だ本邦の製品に完全なるものなく全部を擧げて外國品を仰ぐの状態にあり、實に遺憾の極なりしが、大正貳年以來當會社に於て之れが製造に着手し、

酷苦慘憺俱に苦楚を嘗めたる末、最近漸く良品を製造し得たるを以て市場に販賣を試みたるに、幸ひにして外國品に比し大なる優劣を認めざるに至りたり、而して當會社の製造力は、當會社主要機械の備附數は、約七十臺使用職工は、常備臨時を併せて約千名、其の一年の製造力は各種皮革取交せ平時七十萬枚にして極力製造するときは、優に五倍の數量を製出することを得、因に大正七年九月三十日現在に於ける、當期利益金は四拾貳萬四千九百九圓七拾五錢にて、之れに前期繰越金五萬四千參百貳拾參圓五拾六錢を加へて、合計四拾七萬九千貳百參拾參圓拾壹錢となり、此分配は、別途積立金拾萬圓、工場改築積立金參萬五千圓、役員賞與金參萬四千圓、株主配當金即ち年貳割の貳拾五萬圓、後期繰越金六萬二千二百卅一圓三十一錢なり、當會社現重役は、取締役會長男爵大倉喜八郎、專務取締役伊藤琢磨、取締役大澤省三、同賀田金三郎、同高島小金治、同町田豐千代、監査役淺田德則、同八十島親治等の諸氏なり。

千代田生命保險相互會社

所在地 東京市京橋區桶町十八番地  
設立 明治三十七年四月十五日  
現資産 金一千八百七十四萬餘圓  
代表者 取締役社長長男爵大倉喜八郎  
明治三十七年四月十五日、日露戰爭の砲聲を聞きつ 開業したる千代田生命保險相互會社は、實に本邦第一の相互會社にして、創業以來未だ日淺しと雖も、能く斯界古參會社の間に併立馳驅して、漸次其勢力範圍を擴大するは勿論、新たに發展の方面に開拓して、滿天下の視聽を集め、其前途に多大の望を囑せられつゝあり、抑も同社は我實業界に、大勢力を有する三田系を根據として成立せるものに、其地盤の鞏固なること他に類例少し殊に慶應出身の有力なる發起に係り、前慶應義塾々々長門野幾之進氏及び北川禮弼氏を擧げて代表し、明治三十七年四月基金三十六萬圓を以つて開業し、最も進歩したる相互會社の文明的組織を採用し、今や基金は全部大正五年度に於て償却したるを以て、名實共に相互會社たるに至れり。

今同社が開業以來十五星期間に於ける發

展向上の跡を示さんか、保険契約高に於ては初年度の約四十倍に達し、責任準備金は亦二百八十倍の多きに至れり、左に各

年 度	現在契約高	責任準備金	社員配當金	現在資産高
初 年度末	二、六二、三〇〇	五、一五五	五、二九二	四三、七六八
第二年度末	六、五九、七〇〇	一、八六、五三三	二、四九二	六五、五六六
第三年度末	一、三三三、一〇〇	六、四四、四九九	五、八九二	一、〇八九、三三三
第四年度末	一、六六、九〇〇	一、八六、五九九	一、〇〇、三六六	一、六九七、五五五
第五年度末	二、四四九、六五〇	二、九七、七七七	一、六、四六二	二、五〇七、一九九
第六年度末	二、六、五七、七〇〇	二、七、八三、三三五	二、七四、一八八	三、五五五、二〇三
第七年度末	三、四、八八、三三〇	三、八〇、五七七	四、六、〇〇六	四、八五〇、〇一一
第八年度末	四、七、七、九二〇	五、三、一九四	六、五、九七七	六、三六一、六五〇
第九年度末	五、三、三三、五五五	六、五七、一〇七	八、六、九三三	八、一四一、六四四
第十年度末	六、五、三、九八三	八、三、一、七七一	一、一〇、〇三三	一〇、〇〇一、八三一
第十一年度末	六、五、三、二〇〇	九、六、一、四四五	一、三、八、六六六	二、八八一、九三三
第十二年度末	六、五、九、四二	一、一、三、五七四	一、八、八、八四二	一四、〇七、三九九
第十三年度末	七、〇、五、九、五三三	二、五、五、七四八	二、五、五、七四八	一六、一七〇、六〇三
第十四年度末	八、五、九、四、〇七七	三、三、七、九六九	三、三、七、九六九	一八、七四四、六六五

置せり。  
 當會社現在役員は、取締役社長門野幾之進、専務取締役北川禮弼、取締役松原量榮、同伊藤欽亮、同濱田長策、同堀井卯之助、監査役岩本述太郎、同麻生義一郎、診査部長醫學博士酒井和太郎氏等なり、又同社は相互組織なるを以て、社員中より一百名の評議員を選挙す、而して現任評議員は早川千吉郎、井上角五郎、波多野承五郎、和田豊治、益田孝、藤山雷太等現代一流名士を網羅し、之れが經營上に就き評議すること、なり居れり。

**三共株式会社**  
 所在地 東京市日本橋區室町三丁目十番地  
 設立 大正三年三月一日  
 資本金 五百六十萬圓  
 代表者 取締役社長高峰謙吉

常の好評を博し居ることを知り、兩人及福井源次郎と三名にて小資本の匿名合資組織の横濱三星商會を起し、其製造所たる小半パークデビス會社より輸入發賣を開始せり。

其後組合は鹽原又策一人の所有となり、同人は本業たる羽二重輸出業を廢し、藥業を以て世に立たんとせし時、偶々高峰博士の歸朝に際會し、博士が新たに發見したる「アドリナリン」の一手販賣權と博士がパークデビス會社より依囑せられたる同會社製品の日本一手販賣權とを得て三共商店と改稱して、明治三十五年の春店舗を東京市日本橋區南茅場町に移し、今尙工場の一として使用し居る箱崎工場を設け、製藥事業を開始し、他面に於て主として北米合衆國の各種工業會社に接近し、其代理店として化學工業用品及機械類の輸入販賣を力め、業務は年を追って盛大となり、四十年四月同人夫妻兩名にて資本金五十萬圓の合資會社組織となし四十二年同區室町三丁目に移轉し、益々其業務を擴張し、大正元年高峰博士をも出資社員に迎へ、資本金六十萬圓となし大正二年二月株式組織に變更し便宜上渡

邊福三郎、大谷嘉兵衛外數名と別に資本金十萬圓の三共株式會社を起し、之と合併の方法を執り、拂込資本金九十五萬圓となり、同五月金百五十萬圓資本増資の決議をなし、同年七月之を結了し二百萬圓となり現今資本金五百六十萬圓の外、各種積立金器械銷却代金二百萬圓を有し、株主は百七十四名にて、日本財界著名の人士を網羅せり。如斯本會社は順次旺盛の域に進み來れるが、就中世界の大戦亂は第一に藥品の缺乏に關し、注意を拂はしめたり、蓋し本邦醫師が使用する主要藥品類は、従來外國より輸入したるが爲なり、茲に於てが本會社は此等輸入に待ちたる藥品類の製造に率先着手し、約一ケ年にして完全主要藥品を市場に提供するに至れり、即本會社は從來製造のゴニス製劑、新藥並に特種製劑以外、主要藥品として世界的に使用せらるる數十種の新藥を其製品中に加ふるに到れり、本會社は日本最大の醫藥藥品製造業者を以て自任するの外、各方面の化學工業に出資して（現在投資額金六十萬五百圓）本邦化學工業の發展に努め居れり、就中近時本會社が試みとするサトウライトと

稱する不燃性なるセルロイド類似品の製造事業の將來は、世界の注目を集めつゝあり。

今右に營業事項、營業所工場及工場を擧ぐれば（營業事項）醫藥用藥品類の製造及輸入品取扱、工業用藥品類の製造及輸入品取扱、硬化油の製造、醫科理器器械類の製作及輸入品取扱、化學工業用機械類の製作及輸入品取扱、ベークライト各種ミット、テギット各種製品及其電氣用具類の製作。フアイバー、マイカナイト、プレスパン等の絶縁材料製作及輸入品取扱サトウライト製品、各種化學工業事業に出資、（營業所及工場）本社は東京市日本橋區室町三丁目一あり（登録電宛名英文 DIAMASE, TOKYO 和文トウキョウウ、三キョウウ。英文使用コード、エー、ビー、シー第五版、エー、ワン、コード、リパー、コード、ウエスタイン、ユニオン、コード、ベントリース、コード）北米合衆國に於ける本會社一切の業務取扱所、紐育市ブロード街百二十番エグイテール、ビルディング内高峰研究所、工場は東京北品川、南品川、東京箱崎町、

東京小名木川、東京向島及大阪野田町にあり、職員合計三百五十名、男女職工二千餘名を使用し藥品類、硬化油、絶縁材料、醫科、理科器械等の製造に従事す、右の内品川工場は、日本最大の製薬工場なり。

當會社現在重役は、取締役社長高峯讓吉、専務取締役鹽原又策、取締役大橋新太郎、同植村澄三郎、同古田宗二郎、同福井源次郎、監査役室田義文、同大谷幸之助等の諸氏なり。

株式會社博文館

所在地 東京市日本橋區本町三丁目八番地

設立 大正七年十二月

營業 雜誌の發行、圖書出版、販賣に關する一切の業務

資本金 二百萬圓

代表者 社長大橋進一、監督大橋新太郎

現代進歩せる我出版界に於て、牛耳を取れる株式會社博文館が、其前身博文館の創業後幾年ならずして、克く斯界の先驅者となり、常に有益なる幾多の圖書を發行して一國文明の指導者たり、國民智識の供給者たらん事を期し、存々として其事業の發展を圖り來りたるは、世人の等

文藝俱樂部 第五卷 明治二十八年一月  
講談雜誌 第五卷 大正四年四月  
家庭雜誌 第五卷 大正四年六月  
淑女書報 第八卷 明治四十五年三月  
女學世界 第九卷 明治三十三年十二月  
幼年書報 第九卷 明治三十八年十二月  
幼年世界 第九卷 明治四十三年十二月  
少女世界 第九卷 明治三十九年九月  
少年世界 第五卷 明治二十七年十二月  
中學世界 第五卷 明治三十一年九月  
冒險世界 第五卷 明治四十一年十二月  
文章世界 第五卷 明治三十九年三月  
農業世界 第五卷 明治三十九年三月  
野球界 第九卷 明治四十四年九月

の諸種にして、何れも同種雜誌中嶄然頭角を現はし多數の讀者を有せるもの、みにして、同館の發行物が如何に社會の信用を博せるかは、殊更に言を要せざるなり。  
又別に印刷製本の機關としては、小石川區久堅町に株式會社博文館印刷所(大正七年十二月株式會社に組織變更)の設けありて、同館發行物は勿論尙一般の注文に應じ、各種製本より印刷製本迄一切の業務を經營し、更に神田錦町一丁目洋

書名 卷數 創刊

太陽 第五卷 明治二十七年十二月  
鐵 第一卷 大正八年一月  
ポケット 第二卷 大正七年九月

紙販賣をなす同館分身たる株式會社博進社あり、用紙類一切は主として、鉦より供給せり。斯の如く其設備の完全せると規模の大なるを、將又技術の進歩せる點に於ては、世上既に定評の存する所なり現在重役氏名は左の如し。

取締役社長大橋進一、専務取締役羽田福太郎、取締役坪谷善四郎、同長谷川誠也、同杉山常次郎、監査役山本留次、同大橋光吉、同遠藤好夫、監督大橋新太郎の諸氏なり。

株式會社博文館印刷所

所在地 東京市小石川區久堅町

設立 大正八年一月

資本金 二百萬圓(拂込六十萬圓)

代表者 専務取締役大橋光吉

同社は元個人經營にて、我出版界の重鎮博文館の印刷所として附屬設立せられたるものなるが、創業以來業務益々盛んにして名聲天下に洽ね、印刷界の代表者として知らるゝと共に業務擴張發展の爲め、時運の趨勢に伴ふ可く組織を變更して、分離獨立なし株式會社博文館印刷所と名稱して、同所從來の業務一切を繼承なし設立せられたるにて、營業科目は印

株式會社博文館印刷所、株式會社東京堂

株式會社東京堂

所在地 東京市神田區美神保町三

設立 明治二十三年三月

資本金 五十萬圓(拂込卅萬圓)積立金五萬七千圓

代表者 専務取締役大野孫平

斯界の重鎮東京堂は、初代故大橋省吾氏の創業にして、氏は博文館主先代大橋佐平氏の次男、即ち大橋新太郎氏の令弟たり、抑も其の創業の動機は、博文館にて出版業を爲す關係上同館發行の書籍は勿論、一般各種の同業出版物を汎く全國に亘り販賣普及するの目的を以て開業せる

ものにて、爾來奮闘努力の結果、業務漸次發展し、規模益々擴大し其の間日清日露兩戰後には一般社會の膨脹に伴ひ著しき隆盛を來せり、然るに明治四十四年一月創業者大橋省吾氏故人となりしを以て其事業を永遠に繼續發展せしめんと、組織を改めて合資會社となし、資本金十萬圓を以て會社の經營をなす、之れ明治四十四年二月なり、越て大正六年四月更に時代の趨勢に伴ひ、資本金五十萬圓の株式會社に組織を變更し、以て今日に到れり。

最近に於ては歐洲大戰の影響にて社會一般に物價昂騰し、殊に洋紙及印刷等の出版に關する材料の暴騰甚だしく、爲めに出版界は社會の好況に反し、不振に陥りしが、同社は永年の信用と、地盤の鞏固なるに依り、獨り益々盛んにして斯界に一頭地を抜き東洋一の書籍販賣店として今や名聲噴々たり、現取引書店は全國に亘り二千有餘あり、一ヶ年間の取扱高は一千萬冊以上に達すと、營業成績は益々良好にて從來毎期一割の配當を繼續せりと云ふ。  
蓋し斯業の如きは他の事業と異なり、利

益本位にては到底爲す能はず、國家的觀念を以て社會の進化を助長し、教育の普及を達成せしめる、即ち社會的の事業にして其運命は國家社會と共にする處の遠大なる事業なり。

現重役は取締役會長大橋省吾、専務取締役大野孫平、取締役杉山常次郎、同赤阪長助、同平澤直吉、監査役高橋新一郎、同大橋幹二、同羽田福太郎、相談役大橋新太郎の諸氏なり。

株式博進社

所在地 東京市神田區錦町一丁目十番地

設立 明治三十年七月

資本金 二百萬圓

代表者 取締役社長山本留次

現今出版界に於て其の雄を振ひつゝ、ある博文館主故大橋佐平氏が、明治二十年本郷區弓町に出版業を開始するや、現社長山本留次氏は常に其許にありて奮闘努力克く其の難苦に耐へ、爲めに日に月に隆盛に越けり、茲に於てか博文館の發展擴張と共に山本氏の功勞を謝し慰勞金三千圓を贈れり、是れ博進社の萌芽にして氏は自から一事業を開始せんとて種々考慮の末、主家と聯絡ある業務を營み以て相

互の利益を増進せんとして洋紙販賣業を計營せんと企圖せしも、新事業の困難なると、加ふるに資力充分ならざる爲め、大橋家に計り猶ほ二三有志と共に資本金一萬圓の合資會社を組織して、洋紙販賣業を開始せり、是れ實に明治三十年七月

なりき、時や恰も日清戰役後に於ける經濟界振興の時代に遭遇し、一大長足の新展を爲し、同三十二年大阪に支店を設け資本金を二十萬圓に増加し、後更に三十萬圓に増加して、年と共に業務を擴張せり、同三十七年頃より洋紙の需要大に増加し、創立當時と比較する時は、全國の需要額倍加の盛況を呈し、猶ほ出版事業の物與は益々洋紙の需要を増加するに至れり、同四十三年山本氏歐米諸國を漫遊視察するや、今後益々洋紙需要の増加す可きを察知し、歸朝後大橋一家と計り、同四十四年四月資本金一百萬圓の株式會社と爲し、事業の益々擴大するや、大正六年一月一躍資本金を倍額の二百萬圓に増資し、猶ほ同年二月名古屋支店を開設し、翌七年六月福岡支店を開設し以て現今に及べり、當會社現在重役は、取締役社長山本留次、常務取締役、中村孝吉、

株式小石川製作所

所在地 東京市小石川區久堅町一〇八

設立 大正六年三月二十日

資本金 一百萬圓(拂込六十萬圓) 設立會費八千圓

代表者 専務取締役大橋光吉

同社は元博文館鐵工所と稱せしを、繼承して大正六年三月内容を充實し、組織を變更して株式會社としたるものにて、營業種目は英米式高級鐵工機械一式、電動機、發電機、變壓器各種スイッチ及抵抗器類、電線、綿卷線、絹卷線、ゴム線其他各種電線の製作販賣及其に附帶する業務等にて製品は優秀なる設計と卓越せる技術とにより、常に需要家各位に多大の賞讃を博せり、尙常に専門家によりて研究を重ね改良新案の先驅者となれり。

をなし、今や博文館系事業としては將來最も有望なるものにて、又期界に於ても嶄然頭角を現はすに至れり、現重役は専務取締役大橋光吉、取締役伊藤欣二、同高橋季吉、同羽田福太郎、同兼支配人井上廉、監査役大橋新一、同大橋幹二、同大野孫平、監督大橋新太郎の諸氏なり。

山一合資會社

所在地 東京市日本橋區兜町

山一合資會社は株式界の重鎮として、最も斯界に權威あるものなり、而して其經路を記述するに當り、茲に想起するを得ざるは舊小池合資會社なり、回顧すれば斯界の長老小池國三氏が、東京株式取引所仲買を開業せしは、去る明治三十年にして、明治四十年には小池合資會社を起し、前後二十年の長歲月に亘り斯業に従事せしが、初期の宿望を達するの域に至るや、同氏は遂に斯界を勇退し、會社も亦光輝ある榮譽の解散を告げたり、然りと雖も、斯界の重望を擔ひ、絶大の信用を博せし同氏が、解散に依りて其の鞏固なる營業地盤を消滅に歸せしむるは甚だ惜むべき事なるのみならず、財界の大動脈を循環する國債社債及其他の有價證券

の日に月に激増するの時に際し、同會社の解散せるは有力なる多數の關係者に取て不利不尠少ならざるべしと想はれしが、幸にも此缺陷を補はん爲め、山一合資會社の設立を見るに至れり。

同社の創立は大正六年四月にして、創業以來未だ三年に滿たざるも、社礎鞏固にして經營確實、早くも嶄然頭角を現はし直に斯界の重鎮たるに至れり、是れ蓋し多年舊小池合資會社に在りて、營業に熟達せる人物のみに依りて組織され、誠實を經とし信用を緯とし、舊會社の營業方針を踏襲し、從來の顧客本位の營業振を示せるの結果に外ならず、資本金は一百萬圓(拂込済)にして、積立及繰越金十四萬圓を算し、現在の幹部及主なる出資者左の如し。

- ▲業務執行社員社長杉野喜精
- ▲理事有田秀造、長谷川日傳、名生昌楠久接、岡本英作
- ▲監事淺川清造、平岡傳章、堀田正由
- ▲主なる出資者、小池國三、堀田金四郎、淺川清造、渡邊仁三、水木常次郎

嗣て有價證券市場の前途は、益々多事多

端にして、戦後に活躍すべき歐米の大舞臺は最も囑望するに足るものあり、同社は早くも歐米諸國の營業者との間に於ける取引を企て、相互の意志疏通して、連絡愈々密接の度を加へつゝあり、内に在りては國民經濟の急激なる發展の爲め、國債證券の賣買取引は一層必要の程度を加ふるの状況なるが、此機運に策應する同社の活動が目すべきものあり、既に偉大なる眞價を發揮して、遍く社會の認識する處となれるが、同店從來の成績に徴するも、國債募集の取扱ひの如きは常に一頭地を抜ける好成績を挙げ、社債市債又は有力會社の株式募集にも多大の實力を發揮し、將來益々同社の募集業務に對する勢力は、嶄然斯界に重きをなすべし。

猶ほ有價證券の賣買に對する同社の客筋は、錚々たる一流の手筋を網羅し、其取扱高は日に月に増進し、進歩的にして而も堅實の風を失はざる發展の勢は、斯界の股賑と伴ひ其の窮まる所を知らざるべく、同社が創立以來日尙淺きにも拘はらず異常の發展を示し、忽ちにして斯界の重鎮たるに至りしは、前述せるが如く、其

前身たる小池合資會社の絶大なる信用の地盤を踏襲せるに因るべけれど、現在同社の經營に従事する現社長杉野氏を初め社員全體が、何れも斯業に充分の經驗を有し、又常に新進の知識を活用して努力奮闘せる賜と云はざるべからず、同社理事者諸氏は只管山一合資會社の繁榮を策するのみならず、他面に於ては現物業の向上發展に留意し、孜孜として不斷の努力を吝まざるは世人の敬服する所にして、斯業將來の爲にも、將又同社前途の爲にも、好經營者を得たるを喜ばざるべからず、尙同社は山一合資會社の外に、杉野氏の名義を以て株式定期仲買店山一商店を經營し、兩々相俟つて業務の圓滑を計りつゝあり、山一商店は定期仲買店なるも、是實株受渡を主眼として經營するものなるが故、所謂放資家の機關たるを目的とし、努めて投機の範圍に入るを避けつゝあるは、其用意周到の程を知るべく信用絶大なるは當然なりと謂ふべし。

東洋製糖株式會社

所在地 臺灣嘉義廳西堡南靖庄  
設立 明治四十年二月  
資本金 一千二百三十萬圓(拂込金額一千十萬圓)

代表者 取締役社長下坂藤太郎  
臺灣に於ける各製糖會社中特に其將來を期待せらるゝ東京製糖株式會社は、本社を臺灣嘉義廳西堡南靖庄に置き、別に東京出張所を麹町區丸ノ内に設けて、社務の敏活を圖れり、抑も同社は徳久恒範氏の主唱に成り、明治四十年二月砂糖製造及甘蔗栽培の目的を以て資本金五百萬圓にて設立され、創立後直ちに甘蔗園二百甲を買入二百二十餘甲の植附をなし、同時に工場建設、機械の据附に着手し、鐵道の完成を俟ち、拂込資本金二百五十萬圓を以て同四十二年十二月、初めて製糖業を開始せり、越えて四十三年事業の擴張に伴ひ、南靖庄工場附屬甘蔗園二百甲に加ふるに十五甲餘を買收し、五十六甲餘の購耕權を取得し、不耕地休閑地百廿四甲餘を除き、他は悉く植附をなし別に第二工場として、認可せられたる烏樹林工場附屬として、百四十四甲餘を買收し尙ほ工場の増設と共に、原料採取運搬上一層の便宜を計らんが爲め、鐵道線路の延長をなし事業益々發展の機運に向へり其後斗六、北港、赤糖の三製糖會社を併合して一千七百七十五萬圓に増資し、最近

又大東島製糖拓殖會社を併合して、更に資本金を一千二百三十萬圓に増加するに到りたるが、寔に同社逐年の發展擴張は本邦製糖會社中其比を見ざる所なり。同社營業成績の良好なるは既に定評ある所なるが、特に今期の營業狀態は最も良好にして、社務の鞏固積立金の豊富なることは今更贅言を要せざる所なるが試みに大正七年六月末日に於る金額を擧ぐれば左の如し。

法定積立金 七九七、五〇〇、〇〇〇  
別途積立金 一、二七〇、〇〇〇、〇〇〇  
機械建物積立金 一、六四三、五〇〇、〇〇〇  
職員職工恩給基金 二〇〇、〇〇〇、〇〇〇  
合計 三、九一一、〇〇〇、〇〇〇

即ち拂込資本金一千〇一十一萬圓に對して約三割八分強に當り、亦創立以來甘蔗の豊凶、糖價の騰落に拘らず、本年迄平均年一割五分の配當を持続せり、斯くの如きは同社重役諸氏の銳意、社運の盛大に盡瘁せし賜ものたらざる非ざるなり。同社の製糖所は南靖、烏樹林、北港、斗六、月眉、大東島、宮古、八重山の八箇所と別に赤糖工場の五箇所なるが、南靖製糖所は曩に白糖工場建設中の 大正七

年四月完成を告げ、月眉製糖所は能力四百五十噸の分密糖工場増築中なりしが、同三月竣工し、又南大東島に能力六百噸の分密糖工場新設中なりしが、之れも同年二月全部其工を竣り、直ちに製糖を開始するに到れり、其他八重山に能力百噸の改良製糖所建設中の處、是又同三月竣工し、白下糖及び黒糖の製造を開始するに至り、茲に同社の製糖能率は俄然激増を告ぐるに臻れり、今工場地と其能力を掲ぐれば、

- 南靖製糖所 臺灣嘉義廳南靖庄 能力 分蜜 一、〇〇〇噸 白糖 一〇〇噸
- 烏樹林製糖所 臺灣嘉義廳烏樹林庄 能力 分蜜 七五〇噸
- 北港製糖所 臺灣嘉義廳北港街 能力 分蜜 一、〇〇〇噸
- 斗六製糖所 臺灣嘉義廳大崙庄 能力 分蜜 五〇〇噸
- 月眉製糖所 臺灣臺中廳月眉庄 能力 分蜜 七五〇噸
- 大東島製糖所 沖繩縣大東島 能力 分蜜 六〇〇噸
- 八重山製糖所 沖繩縣下八重山島 能力 分蜜 六〇〇噸

東京毛織株式會社

東京毛織株式會社

所在地 本社 東京府下町千住町地方橋場  
支店 東京府下町王子町、岐阜縣大垣市至町  
工場及營業所 東京府下大井町  
設立 明治三十九年十一月  
資本金 一千四百萬圓(拂込一千二百五十萬圓)  
代表者 專務取締役藤田謙一

宮古製糖所 沖繩縣下宮古島 能力 白下 一〇〇噸  
重役の氏名、取締役社長下坂藤太郎、常務取締役日向利兵衛、田村藤四郎、取締役松方五郎、同小松楠彌、同藤田謙一、同石川昌次、同松方正熊、同宮本政次郎、同監査役渡邊甚吉、同指田義雄、同宮尾麟同島村足穂、同玉置傳の諸氏なり。

成たるのみならず、一大事業會社の選に漏れず、而して同社は資本金千四百萬圓の内千二百五十萬圓は既に拂込を了し、現在の未拂込株金は三百八十七萬五千圓を剩すに過ぎず、而も此未拂込株金も本年六七月頃には全部拂込を了する模様なるが、未拂込株金の拂込は、雖も増資を連行するものと云はざるべからず、而して増資は更に事業の擴張を暗示せるものにして、休戦條約締結以來一般戦後の營業方針は、概ね保守、縮小に傾き居るに單に本社の意氣の旺盛なる事ろ愉快とすべし、同社は現在六百餘萬圓の借入金金を有するが故に三百八十餘萬圓の未拂込株金の徴收は借入金金の減少を圖るに過ぎずして必ずしも増資を意味するものに非ざるも、同社の事業狀況は益々事業資金を豊富ならしむべく、差迫り居りて増資は畢竟此狀勢に順應するに外ならず、近く會社當事者の希望實現増資の決行を見るに至るべし、資本増加に伴ふ同社の發展振りは更に注目すべき也。

而して同社は、大正七年六月十五日、火災に罹りたるが、罹災物件には何れも英國ロイヤル保險會社外二十三社と四十三萬

六千四百圓の火災保險契約を締結しありたるを以て毫も影響を及ぼさず、罹災工場は直に復舊工事に着手し、翌月中旬迄に建物全部の再築成り、十一月中に於て殆ど焼損機械全部の修復を了へ、何れも故障なく運轉を見るに至り、却つて俗に所謂焼け太りの觀あるは、日頃同社經營方針の堅固不拔なるを語るものに外ならず。

工場整備

同社の工場は

- 一、千住工場 二、王子工場
- 三、大井工場 四、大垣工場
- 五、大阪泉尾工場

の五工場にして、之等五工場の毛織物の生産能力は、一箇年約六百三十萬碼に達すべく、之を神戸日本毛織株式會社の生産能力年二百五十萬碼並に千住製絨所一箇年の生産力七十萬碼に比して、其生産能力の遙に優越的地位を占むるを知るに足るべきなり、蓋し本邦に於ける毛織物一箇年の生産能力は、一千萬碼と見るに至當とすべく、其六割三分は實に東京毛織會社の占有する所に係り、全く日本の毛織物事業に獨歩するものとも云ふべき

なり、世界的に言へば、勿論内地に於ける毛織物の需要は、逐年非常なる増加率を示しつゝある事勿論にして、國家的見地よりするも、斯業の發達は之を熱望せざる能はざる所にして、同社も茲に見る所あり、國家的使命を果すべく、畫策怠らず、昨年下半年中に、本支店に於て新増築したる主なる工場及附屬建物並に購入機械の種數左の如し、  
千住本店 假物置(木造二棟並列建二五二坪)並に取毀舊寄宿舎建物を移轉改築したる男工合宿所一棟(木造二階建八四坪)及同附屬建物、及木造倉庫二棟(平家並列建四三二坪)  
大井支店 煉瓦倉庫一棟(三階建、建坪二〇〇坪)並に罹災建物内配置換の爲反毛工場一棟(木造平家八四坪)増加  
王子支店 女工寄宿舎二棟(木造二階建、建坪二二九坪)及附屬建物  
大垣支店 罹災復舊中なりし染色工場一棟(煉瓦建平家二一六坪)  
機械 各工場機械配合上紡績機械補充の必要を認め紡毛機五臺、整紡機十臺を米國に注文したり。

優越的將來

現在既に毛織界に於て、獨歩的の優越なる地位を占めつゝある東京毛織は、近く未拂込株金の拂込みと増資株金の拂込みとにより、更に其の勢力を増大し、一大飛躍を試むべく、同社事業上の地位益々重きを加ふると同時に、茲に注目すべき事項は、千住製絨所の拂下げ問題之也、千住製絨所の拂下げ問題は、久しき間の懸案にして、從來屢々希望されたる事なれど、其都度軍事當局の同意賛成を得るに至らずして、今日に及べり、然るに軍事當局は、歐洲戰爭の實際に鑑み、其規模と機關の統一増大を欲するに至り、軍需品に對する問題を調査研究の結果、千住製絨所を半官半民の經營となすか、民間に拂下げべきかの二案を具し、之を日本工業俱樂部に内諮問し、其意見を徴したるに同俱樂部は毛織物調査委員會に於て調査研究の結果滿場一致にて民間に拂下ぐるを可とすべき意見を決定答申する所ありたり、軍事當局亦同俱樂部の意見を尊重する事勿論にて、結局千住製絨所は民間に拂下げらるゝ事となるべきも、而も其形式及條件が如何に定まるべきかは未だ不明なるが、現在毛織界に最も偉

大なる生産能力と事業上の大勢を有する東京毛織が今後益々其實勢力を増加し行くべきは、一見明かなる道理なり、而して同社は藤田謙一氏を専務取締役とし、日下吉平、津田五郎、塚口慶三郎の三氏を常務取締役として、日常の經理經營に任じつゝあるが左に取締役、監査役並に相談役の氏名を示すべし。

専務取締役藤田謙一、常務取締役日下吉平、同津田五郎、同塚口慶三郎、取締役諸井恒平、同井田亦吉、監査役大橋新太郎、同門野重九郎、同宇佐美薫次、相談役男爵大倉喜八郎、同日比谷平左衛門の諸氏なり。

鹽水港製糖拓殖株式會社

所在地 本店 臺灣嘉義廳太子宮堡新營庄  
支店 臺灣花蓮港廳蓮花港蓮花港街  
出張所 東京市日本橋區吳服町

設立 明治四十年二月  
資本金 一千二百二十五萬圓  
代表者 専務取締役諸君

臺灣嘉義廳太子宮堡新營庄に本社を置き東京市日本橋區吳服町に出張所を設けて最も健實に、而かも最敏俊なる好成绩を挙げ居れる鹽水港製糖拓殖株式會社の事

鹽水港製糖拓殖株式會社

業は、製糖と船舶とを兼營せる事に於て本邦製糖會社中に斬新なる光輝を放てり抑も同社の創立は元、臺灣人の組織になれるものにて、初めは鹽水港製糖會社と稱し、資本金三十萬圓を以て製糖業を営み居りし處、明治四十二年荒井泰治氏入りて社長となるや、從來の組織を改めて資本金を五百萬圓とし、新界に大飛躍をなし、以來營業成績は年と共に益々良好となり漸次發展し、四十三年九月高砂製糖會社と合併し、資本金七百五十萬圓の大會社となり、越て大正三年八月臺東拓殖株式會社を合併して、更に現在資本金額となり、同時に現稱號に改む、今や臺灣に於ける製糖會社中覇を爭ふの盛運に向へり、而して最近の營業成績を照介すれば左の如し。

先づ製糖の事業より言へば、昨大正七年度に於ける臺灣の糖業は、米價昂騰の結果全島の植附僅かに十萬甲に充たず、且天候其他の影響を蒙りて歩止まりしも、亦多少の低下を見、産糖總額約五百萬擔を出づるのみなりしかば、隨つて同社の産糖額も、同社創業以來の最高記録たる昨年度の六十八萬八千餘俵を再現し得べか

らざりしも、同社は其の大特色たる自營農場の整理擴張に著々成功し、現に昨年度の植附面積の如き優に一萬三千餘甲に達し、その實收額は五十八萬俵を下らず大正六年度に比してこそ、七八萬俵の減收は免かれざれ大正五年度の四十萬俵に比較すれば増收額實に十八萬九千餘俵の多きを達するの好況にして、此の外同社は耕地白糖製糖製造を企て、一俵六ギルター前後の際右原糖を購入せしに、其後一般糖價の昂騰相次ぎ多額の収益を得、而して現在の所砂糖の不足は全く世界的にして戰亂の爲め、歐洲甜菜糖耕地の荒廢して不足を告げ居れる糖界は商況一段と活氣を加へ、砂糖相場は決して低下の見込なきにより、同社事業の將來こそ真に好望なりと謂はざるべからず次に、同社の兼營たる船舶は、先般來より營業を開始し東海丸(六千二百五十噸)及太興丸(三千七百噸)の二隻を所有し、大正七年下半年に於て船舶利益百五十萬圓なりしが、大正八年三月末の決算には六百五十五萬四十餘圓に達せり、現在重役は専務取締役横哲、常務取締役藤崎三郎助、取締役

橋本貞夫、同高橋是賢、同岡田祐二、同佐々木幹三郎、同數田輝太郎、監査役安部幸兵衛、同岩崎總十郎、同原修次郎、相談役荒井泰治氏等なり。

而して大正八年三月末の決算を示せば左の如し。

Table with financial data for Tokyo Rice and Grain Exchange. Columns include: 当期収入 (Current Income), 当期支出 (Current Expenses), 当期純益金 (Current Net Profit), 前期繰越金 (Carry-over from previous period), 合計金 (Total), 利益配當計算 (Profit Distribution Calculation), 法定準備積立金 (Statutory Reserve), 別段積立金 (Special Reserve), 職員職工恩給基金 (Staff Welfare Fund), 役員賞與金並交際費 (Director Bonus and Entertainment Expenses), 株主配當金 (Shareholder Dividend), 特別配當金 (Special Dividend), 後期繰越金 (Carry-over to next period).

株式會社東京米穀商品取引所

所在地 東京市日本橋區本町二丁目二番地
設立 明治九年十月
資本金 三百萬圓(拂込金額二百二十五萬圓)
代表者 理事指田義雄

東京米穀商品取引所は、明治九年五月に創立せられたるものなるが、抑も其始めは徳川中世に於て、一種の米商組合を組織し、中央と地方の米價の平均を計り且つ有無相通するの便を爲せり、されど當時は未だ不完全にして只だ一部の事業に過ぎざりき、爾來幾多の變遷と發達となし、明治初年に至りて、東京商社及び米市場の設立さるゝ事となり、此れ實に米穀取引所の萌芽とも云ふべき者なり又七年には中外商會社起りしが、後米商會所新條例發布と共に東京商社は、兜町米商會所と中外商會社は、彌生町米商會所と變形改稱せり、後年兩者協議の結果合併して東京米商會所と稱するに至れり、その當初僅か十萬圓の資本にして其の功績未だ揚がらざる内に明治二十六年取引條法の發布により、舊會社は廢止となりしかば、再び延期繼續を願ひて許可を得、爾後數十年霜の歲月と共に幾多の變遷と發展を経て、範を外國に取り、終に明治四十一年東京商品取引所を合併して商號を現稱の如くに改め、資本金も時勢の要求に伴ひて増加し、今や三百萬圓を算するに至りぬ、而して拂込金額は二百二十五萬圓にて、之れに對する諸積立金三十三萬圓を有し、配當率は每期二割以上にして、實に都鄙を通じて最上の好成績を呈せり、元來同所の目的は金穀の融通圓滑ならしむると共に、有無相通して社會の進歩を計り、大に開發に助長せんとするにあり、誠に米品は人間と一大密接の關係を有するは勿論にして、殊に米穀を以て常食とする東洋人種に於ては其の高低は以て吾人の進歩、不進歩に一大影響を與ふ、又大にしては帝國の興廢に大なる基因を有す、されば我が政府當局者も常に意をこゝに注ぎ、同所の一舉一動、殆んど政府の焦點となりつゝあり、此れに依るも如何に社會に重きをなされ居るかは明かにして、實に東洋に於ける期米の原動力と云ふも過言ならず、同所に於ける物價の高低は平年に於ては殆んど大差無けれども、戰時に遭遇する毎に一大暴騰を呈するを例となせり、殊に今回の歐洲大戰の結果、まだ甚だしく爲めに同社の營業狀態は益々好況に向へり。

星野錫、理事大島甚三、支配人伊達七藏、支配人竹内廣助、監査役杉原榮三郎、監査役池上伸三郎、監査役上田彌兵衛の諸氏なり。

株式會社東京築地活版製造所

所在地 東京市京橋區築地二丁目十七番地
設立 明治六年八月
資本金 三十萬圓(拂込金額二十七萬五千圓)
代表者 専務取締役社長野村宗十郎

文明東漸の先驅、其の普及に貢獻したるものは即ち活版印刷術なり、此點に於て吾人は活字製造の鼻祖たる築地活版製造所に向て敬意を拂ふことに躊躇せず。肥前の人、本木昌造氏が蘭人に學び、甫めて活版製造の法を日本に創設するや、門人平野富二氏東京に出で、販路の開拓に當り、明治六年七月現在の假工場を設けたるもの、即ち築地活版所の起原にして、世漸く其利用の便を覺り、需要日に増加して、次第に規模の狭少を憚ふるに至り、幾計もなく現事務室に充用しつゝある煉瓦家屋一棟を建設し、尋て業務擴張し、工場を増設して、年々其發展を加へ來れり、明治十八年組織を改め株式會社となし、以來營業の基礎愈々確定し、

株式會社東京築地活版製造所、日本護謄株式會社

平野氏は社長として、松田源五郎、品川東十郎の二氏は取締役に就任せり。斯くて二十年平野氏の任を辭するや、昌造氏の遺子本木小太郎氏社長心得となり、翌年又支配人曲田成氏社長の任に就きて能く難局を處し、二十七年曲田氏の病歿するや、名村泰藏氏入りて専務取締役に兼社長となり、經營最も努む、されば社運は逐年發展して増資の必要を生じ、三十三年には十六萬圓となし、三十九年には二十萬圓となし、既に光明に耀けるH字の商標は更に羽翼を加へて、宇内に雄飛するの實力を備へんとせり、然るに此向上の機運に會せる名村氏も亦四十年九月を以て易簣されたるなり、茲に野村宗十郎氏取締役より推されて社長となれり、爾來社運は駁々として隆盛を致し、四十一年には更に十萬圓を増資して、月島工場を擴張し、各種印刷機械の製造販賣を兼營し、其の製品を日英博覽會等に出品して最高の名譽大賞牌を授與せられたる事ありと、今や我が出版界は異數の發達を遂げ諸種出版物、新聞及雜誌發行の盛なる實に筆致に盡し得ざるの盛況に至れり是れらの發行物の印刷に使用せる、活字

日本護謄株式會社

所在地 東京市淺草區玉姬町百三十四番地
設立 明治三十三年十二月
資本金 三十萬圓
代表者 會長中村清藏

當會社は日本ゴム合資會社と吉田ゴム製作所の合同して、株式組織となりたるものにして、其設立は明治三十三年十二月營業の目的は護謄製品及附屬品の製造販賣なり。吉田ゴム製作所は、現當會社取締役工務監督吉田靜吉氏が明治二十九年市内小石川區久堅町に設立したるもの、又日本ゴム合資會社は卅二年淺草區橋場町に設立せられたるものなり。當初資本金十八萬圓を以て營業を開始し、順調の發展を遂



け明治四十三年には、其製造高創立當時の十五倍に上り、偉大の隆盛をなしたるに翌四十四年の吉原大火に類焼し、倉庫一棟を除く外建物全部烏有に歸し、八萬餘圓の欠損を蒙り、遂に資本を減じて十萬八千圓となすに至れり、然れども事業は一日休止すべしに非らず、愈々努力發展を講じ、類焼後直ちに龜戸並に向島に假工場を設け、營業を繼續しつゝ、玉姫町百三十四番地に鐵骨煉瓦造の本工場を建築し最新式動力を据付け、生産費の節約をはかり經營奮闘大に勉めしかば、營業成績は類焼前に比し、頗る良好なるを致し前途益多望なるを認めしかば、一層飛躍すべく大正二年資本金を三十萬圓とし、爾後逐年工場擴張を行ひ、今や斯業界に於ける信用最も厚き一大會社たり。殊に近年需要益々多く注文品輻輳し、就中「自動車タイヤ」は内地に於ける製造の嚆矢にして優良なるものを製出す、以て業務の盛況なる事筆端に盡すを得ず、今後の一大發展期待するに足るべし。

部運轉を開始せしに結果良好たり、而して當社の創立は、現在の東市に於ては最も時代の要求に應じたる處置にして、一般より非常の人氣を受け、株式募集の際などには、プレミアム付にて數十倍に達し選定に苦むの盛況なり、之れを以て見會社の有望にして、將來益々發展のする確實なるを證するに足るべし。

井、三菱等に於て各鑛山を經營すると同様、重役及大株主は何れ同人にて各社とも大差なし、故に各社の資本金は少額なるも、事實上の運用は相通じて大會社と同様の實力を有せり、特に各鑛山とも何れも有望なるを今後の發展は、期待するに足るものあり。營業成績は創業以來良好にて毎年平均年一割六分の配當を爲す現重役は常務取締役佐藤謙二郎、取締役田中順一、同石部泰藏、同石川徳右衛門常任監査役伊藤信男、監査役木村謙之助の諸氏なり。

八重山株式會社  
所在地 東京市京橋區元數寄屋町二ノ一  
設立 大正三年八月  
資本金 七十五萬圓(拂込済)  
代表者 取締役社長木村謙之助

八重山株式會社  
所在地 東京市京橋區元數寄屋町二ノ一  
設立 大正二年八月  
資本金 五十萬圓(全額拂込済)  
代表者 常務取締役後藤謙二郎

引田山株式會社  
所在地 東京市京橋區元數寄屋町二ノ三  
設立 大正五年十二月  
資本金 三十萬圓(拂込二十萬圓)  
代表者 取締役社長佐藤謙二郎

木戸ヶ澤鑛山株式會社  
所在地 東京市京橋區元數寄屋町二ノ一  
設立 大正二年八月  
資本金 五十萬圓(全額拂込済)  
代表者 常務取締役後藤謙二郎

日本曹達株式會社  
所在地 東京市麹町區八重洲町  
設立 大正七年一月七日  
資本金 五十萬圓(拂込二十五萬圓)  
代表者 專務取締役中野友禮

千代田護謨株式會社  
所在地 東京市下龜戸町十二、十三番地  
設立 大正二年七月一日  
資本金 三十萬圓(拂込金額十五萬圓)  
代表者 社長長高次郎

唐戸屋鑛山株式會社  
所在地 東京市京橋區元數寄屋二ノ一  
設立 大正五年七月  
資本金 二十萬圓(拂込済)  
代表者 取締役社長竹内半左衛門

唐戸屋鑛山株式會社  
所在地 東京市京橋區元數寄屋二ノ一  
設立 大正五年七月  
資本金 二十萬圓(拂込済)  
代表者 取締役社長竹内半左衛門

千代田護謨株式會社  
所在地 東京市下龜戸町十二、十三番地  
設立 大正二年七月一日  
資本金 三十萬圓(拂込金額十五萬圓)  
代表者 社長長高次郎

東京市街自動車株式會社  
所在地 東京市麹町區内幸町  
設立 大正七年十一月  
資本金 一千萬圓  
代表者 取締役社長

東京市街自動車株式會社  
所在地 東京市麹町區内幸町  
設立 大正七年十一月  
資本金 一千萬圓  
代表者 取締役社長

千代田護謨株式會社  
所在地 東京市下龜戸町十二、十三番地  
設立 大正二年七月一日  
資本金 三十萬圓(拂込金額十五萬圓)  
代表者 社長長高次郎

唐戸屋鑛山株式會社  
所在地 東京市京橋區元數寄屋二ノ一  
設立 大正五年七月  
資本金 二十萬圓(拂込済)  
代表者 取締役社長竹内半左衛門

唐戸屋鑛山株式會社  
所在地 東京市京橋區元數寄屋二ノ一  
設立 大正五年七月  
資本金 二十萬圓(拂込済)  
代表者 取締役社長竹内半左衛門

千代田護謨株式會社  
所在地 東京市下龜戸町十二、十三番地  
設立 大正二年七月一日  
資本金 三十萬圓(拂込金額十五萬圓)  
代表者 社長長高次郎

酸耐熱ゴム、其他醫療器械用工業用各種  
ゴムにして品質の優良を以て名あり。而  
して護謄製造會社にして、六十萬圓の資  
本を有するものは、當時に於ては同社  
のみにして、創業勿々資本金の過大なる  
爲め、大正三年十萬圓に減資し、次て業  
務發展に伴ひて大正六年三月更に三十萬  
圓に増資せり、護謄製造業は本邦に在り  
て未だ發達の餘地多く、各種工業の發達  
に連れ其需用増大し、年々外國より多額  
の製品を輸入しつゝあるなれば、同社が  
大規模の工場を以て、最新の科學的知識  
に依り、これが製造に當るは機を得たる  
ものといふべく、前途の隆盛豫言するを  
憚らず。

同社の重役は社長尾高次郎、専務取締役  
堤康次郎、取締役辰己一、同井上敏夫、  
監査役福島宜三、支配人武澤與四郎の諸  
氏なり。

株式會社橋本店

所在地 東京市京橋築地二ノ二〇

設立 大正五年

資本金 五十萬圓 全額拂込済 諸積立金三十萬圓

代表者 取締役社長橋本信

株式會社橋本店は、大正五年の創立に係

はると雖も、そは組織の株式に改められ  
し時にして、其の實體たる橋本店の創始  
に至りては、今を去る四十有餘年前即ち  
明治十一年創業に係はり、本邦に於ける  
土木業者中、大倉組と拮抗し來れる著名  
なる老舗なり、創業當時は本店を仙臺市  
に置き、後明治四十三年株式合資會社と  
なし、大正五年に至り更に株式會社に改  
め本店を東京に移せるなり、現今仙臺支  
店の外、全国各地樞要の都市に二十四箇  
所の出張を設け、鐵道院、陸海軍、其他  
有名なる會社商店等を華客とし、盛に土  
木建築業、礦山業、貿易業、運輸及製造販  
賣業を行ひつゝあり。

由來土木業者たる者は、從來の慣習上一般  
に卑下せらるゝの傾向を有し來りしも、  
今は從來の舊習にして、卑下す可き業務  
に非ざらざるは勿論、橋本店の如きに至り  
ては絕對なる文明の必須機關にして、是  
に従事する職員は、各部共は高等  
専門の學術技藝を習得せる諸士にして、  
橋本店の隆昌は是等諸士の與かつて力あ  
る處なり。  
今左に同店の現況に就き、其の一斑を示

株式會社安藤組

所在地 東京市京橋築地三ノ三

設立 大正七年三月

資本金 二百萬圓(拂込一百萬圓)

代表者 取締役社長安藤徳之助

を折衷せる理想的特色を具備し、上流階  
級の愛用措かざる所なり。  
又同店は米國ホストン市のスプレー、エ  
ンゼニアリング會社の東洋一手代理店に  
して、スプレー會社の製造に係る噴霧器  
一切の取扱ひをなしつゝあり、其製品中  
にはクーリング及空氣清淨器ありて、製  
糖用、冷却用、冷蔵用、鑛山坑内換氣用  
其他化學工業用各種に分れ、又蒸氣ター  
ビン、電氣機械應用の冷却機等あり、殊  
にペイント塗器は塗工一人にて、優に數  
人の工事を爲し得る輕便なる機械にして  
工廠及造船工場等に於て、塗法の極めて  
困難なる場所も容易に且完全に塗布し得  
るのみならず、塗布後輕便迅速に施工し  
得るの各種特長を有し、工事上缺くべか  
らざる利益あり。  
同店現重役は、取締役社長橋本信次郎、  
常務取締役小山代吉、取締役橋本良藏、同  
橋本義三郎、監査役橋本才八等の諸氏の  
外主なる社員としては、庶務部森象三、  
土木建築部中平治三郎、鑛業部津々衣麟  
介、貿易部永正定富、會計部新妻伊佐美  
等の諸氏なり。

明治二十年と云へば、維新の初期に屬し  
何事も過度の時代に於て、政治に於ては  
徳川の民は知らしむべからず、倚らしむ  
べしとの法度を打破して、太政官制を施  
行したる位で、佛、英法と吾國の習慣と  
を以て混成された不完全な民法ですら、  
越へて二十三年に現はれて居る、當時は  
勿論法治國として體裁をなさなかつた、  
従つて商工業も世襲的觀念に囚はれ、建  
築請負の如き、頭大工の秘傳に信頼する  
習慣を脱するを得ざりき、然も歐洲文明  
は赤毛布の新歸朝者に依つて滔々として  
輸入せられ、頻りに西洋風に傾く状態を  
馴致しぬ、故人は斯の機運を捉へ、將來  
歐米式建築の必然物興すべきを觀破し、  
何等の背景なく亦私財の誇るべき無きを  
意にせず、斷然創業された、間もなく二  
十三年の金融逼迫經濟界不振に逢着され  
事業上に多少蹉跌を來たしたが、固より  
自信力の強き故人は、不撓不屈事業を生

命として孤軍奮闘、獨力自營、先づ取引  
の安全なる官衙の建築を請負ひて、漸次  
氣勢を擧げ、若々成功し一代にして安藤  
組を金城鐵壁に致したるもの實に偉と云  
ふべし。  
明治四十四年庄太郎氏歿するや、實子徳  
之助氏遺業を繼承して、經營施設宜しき  
を得、著しく事業の發展を爲すに至れり  
斯くて時勢の進運に伴れて、個人經營よ  
り合名組織に更め、自ら其の業務を擔當  
し、茲に大なる抱負を持つて第二期の計  
劃を進め、嶄然新界に重きをなせり、偶  
々歐洲大戰の勃發により、我國の商工業  
空前の繁盛を來し、従つて建築業亦  
なる活躍をなし、茲に於て更に組織を改  
め基礎を益々鞏固に成す爲め、新に資本  
金二百萬圓の株式會社安藤組を創立して  
從來合名會社の一部事業を分離繼承一層  
活動するに至れり。  
安藤組が個人經營より、合名へ更に事業  
の一部を株式に變更したとは云へ、出資  
の態様は一貫してをる只形式を更新した  
るのみ、全く事業の眞實なる發展に伴ふ  
理想的方法である、株式に依つて資金集

安藤清太郎、監査役伊藤貞之進、監査  
役山田廣の諸氏也。

合名會社安藤組

所在地 東京市京橋區築地三ノ三  
設立 明治四十四年一月  
資本金 五十萬圓

代表者 取締役社長安藤德之助

合名會社安藤組の營業目的は、不動産の  
賣買經營、有價證券の取得及利用、金銭  
の貸付等にして、出資社員は安藤德之助  
安藤德太郎、安藤清太郎、支配人松本重  
太郎氏なり。

日本鋼管シャフト株式會社

所在地 東京市本所區中之郷八軒町三十番地  
設立 明治三十一年五月  
資本金 三十萬圓(拂込金額十二萬圓)

代表者 取締役田中榮八郎

本社は東京市京橋區宗十郎町十二番地に  
あり、大阪市東區木野町二四に、大阪出  
張所及第一、第二工場を設置せり、大正  
七年九月六日設立にして、資本金二百萬  
圓内五十萬圓拂込にて業務を開始せり。  
抑も本社は元岡野宗太郎氏、個人經營の  
岡野工場なるものを買収し、機械器具は  
勿論半製品及鐵材等に至る迄、全部の權  
利義務一切を繼承して、創立せるものに  
て創立の日は淺きも、實際の業務は既に  
古き歴史を有するものなり、即ち創業者

東洋硝子株式會社

所在地 東京市本所區中之郷八軒町三十番地  
設立 明治三十一年五月  
資本金 三十萬圓(拂込金額十二萬圓)

代表者 取締役田中榮八郎

同社は田中榮八郎氏所有の田中工場を繼  
承せしものにて、其の前身たる田中工場  
は明治二十三年の創立にして、我硝子製  
造業中最も有力なるものなり、當時斯業  
に志す者ありしも、多くは失敗に終りた  
れど、同工場のみ經營宜敷を得て、順次  
發展したり、明治二十五年頃より完全な  
る製場を得、大日本麥酒、大阪旭、北海  
道札幌、横濱麒麟各麥酒會社に採用せら

日本ヘニー紡績株式會社

本社は東京市京橋區三十間堀に在り、大  
正七年七月十日設立、資本金三百萬圓(四  
分の一拂込)營業の目的は各種層繭及層  
絲の精練漂白並に紡織各種繭及繭絲屑物  
類の買入販賣並に其委託販賣、其他本業  
に關する一切の事業にして、静岡縣大宮  
町に第一大宮工場を設け、業務に着手せ  
り、現在重役は社長中山佐市、専務取締  
役河野英良、常務取締役森田小六郎、同  
萩野萬之助、取締役上甲信弘、同森田退  
藏、同峰岸慶藏、同鹽川萬作、監査役矢  
野莊三郎、同佐野理八、同田野井多吉、同  
須藤嘉吉の諸氏なり。

朝日海上保險株式會社

本社は神戸市前町十五番地に在り、支店  
を東京市麴町區有樂町一ノ一及び大阪に  
設け、大正七年八月二十六日設立せらる  
資本金一千萬圓にて、營業の目的は一般  
海上保險並に海上保險の再保險にして、  
其營業の地域は、日本帝國及び日本帝國  
と通商航海條約を締結せる諸國なり、現  
重役は社長窪田四郎、常務取締役草場茂

るに至り、各社と特約を結び、供給する  
に至り茲に於て全く輸入杜絶し、却て徐  
々輸出高を増進するの勢と變ずるの如き  
發達を遂げたり、同工場創業當時より目  
下の製出高を示せば當初一日僅々六七百  
個越て三十一年に於ては、一日二萬個目  
下一日三萬個を優に製出すと、又從來の  
製繭類のみならず、板硝子各種玻璃器に  
至る迄製造せんが爲め、茲に組織を變更  
して株式會社となすに至れり、是れ明治  
三十一年五月の事にして、従前の計劃よ  
り大いに發展をなせり、茲に一般需要者  
の供給を滿し、製品に於ても獨逸品に遜  
色なきを以て、亞米利加方面に輸出する  
の盛況を呈し、東洋に於る硝子界の覇を  
占むるに至る。

千葉縣安房郡富浦煉乳本工場  
同 縣同 郡九村煉乳分工場  
同 縣同 郡保田町バタ、乳糖工場  
同 縣同 郡那古町菓乳場  
同 縣同 郡岩井菓乳場  
東京府下流橋柏木乳糖精製本工場  
神奈川縣中郡秦野町バタ、乳糖工場  
静岡縣志太郡青島村バタ、乳糖工場  
京都市上京區小川通下立賣上る

カゼイン加工本工場

現在重役及其の役員は左の如し。

取締役會長池上伸三郎、専務取締役關根親光、常務取締役西澤龜太郎、取締役津田毅一、取締役廣瀬千秋、取締役東京工場長山口久四郎、取締役房州工場長川名正吉郎、取締役京都工場長富澤信、監査役醫學博士瀨川昌者、田中喬樹、小西儀助、相談役根津嘉一郎、荒井泰治、衛生顧問醫學博士回生病院長中濱東一郎、醫學博士厚生病院院長川乙治郎、醫學博士東京帝國大學醫科大學教授丹波敬三、獸醫學博士東京農科大學教授津野慶太郎の諸氏なり。

日本電燈株式會社

所在地 東京市本所區藤代町八

設立 明治四十四年十二月  
資本金 一千二百萬圓

代表者 専務取締役島甲子二、同安藤兼吉

日本電燈株式會社は、電燈電力を東京市一圓に供給するを目的とし、初め明治四十三年十二月橋本忠次郎外十三名の發起に因り、其後東都電燈の計劃を合併し、四十四年五月起業目論見を訂正し、同年六月許可を受け、同年十二月設立したる者にて、電力は桂川電力株式會社より極めて低廉なる供給を受け、最新最良の設備により全市に配電することになった、茲に帝都の電燈界は面目を一新するに至り、而して同社の現狀は、桂川電力の戸塚變電所より地下線を以て、小石川變電所(下富坂町)に至り更に淺草變電所(松葉町)に至り、それより淺草、下谷、神田の方面は全部蜘蛛の巣の如く、地下線を配給し、本所深川を始め淺草下谷及全市各方面に向つて其設備完成し、漸次此方面より營業を開始せり、而して一時東電、市電との三者鼎立にて、競争は激甚なりしが、其後協定成りたれば同社は販路擴張に至大の努力をなし、遂に市電及東電の間に介して、更に遜色なく新進の

日華生命保險株式會社

所在地 東京市京橋區銀座一丁目二

設立 大正三年八月

資本金 五十萬圓(四分の一拂込)

代表者 取締役社長長川崎肇

當會社は我國火災保險會社中、堅實の聞へ高き日本火災保險株式會社と、姉妹の關係を有し、同社と多數同一重役の經營に係るを以て、營業方針は日本火災と同様堅實にして、契約者各位の權利を尊重し、利益を擁護し、且實力と堅實を以て顧客本位を主義本領とす、又當會社は株主の利益を制限し、且努めて經費を節約

取締役茂木啓三郎、監査役志方勢七、監査役宇佐美敬三郎、相談役川崎八右衛門、醫務顧問醫學博士高木兼二、醫學博士今村保の諸氏なり。

早川電力株式會社

本社は東京市麴町區有樂町一ノ一にあり

し營業利益(内法定、危險準備金及役員賞與を控除すること他會社同斷)の九割以上を契約者に配當す、株式會社にして而かも相互組織の長所を發揮するは、本社の特色なり、尙保險料は我國最近の死亡率を基礎とせるを以て、公平にして且低廉なり、殊に同社の終身保險は最も卓絶せる特色に富み、近代に於ける生命保險界に一新機軸を出せるものなり、營業成績は日淺きにも拘らず、幾多先進會社を凌駕し、今や大正七年末現在契約高は二四、八九二件、二千一百三十三萬五千餘圓に達せり、而して其の支部及び代理店は左の如し。

大阪支部 大阪市西區京町堀上通  
京都支部 京都市三條通堺町角  
神戸支部 神戸市元町通四丁目  
横濱支部 横濱市辨天通五丁目  
名古屋支部 名古屋市中區新柳町  
廣島支部 廣島市大手町四丁目  
福岡支部 福岡市西多中島町  
仙臺支部 仙臺市國分町一六八  
代理店 全國樞要の地に在り  
現重役は取締役社長長川崎肇、取締役藤山雷太、取締役小林作五郎、取締役安藤浩

早川電力株式會社、高砂生命保險株式會社

同高橋貞三郎、同伊志田平三郎の諸氏なり。

高砂生命保險株式會社

所在地 東京市京橋區宗十郎町一

設立 大正三年三月

資本金 五十萬圓(拂込四分の一)

代表者 取締役社長長川崎肇

本社は株式と相互との長所を併有したる最新式の折衷組織にして、會社に如何に利益がありても、株主配當金は年六分以内止め其餘の利益金の大部分は、保險契約者に配當する組織にて、のみならず、假に會社が損失を蒙る様な場合がありても、相互組織と異り株主に於て全部之を負担し、決して契約者に迷惑を懸くる様な事なく、且つ基礎の鞏固と堅實を期するが爲め事業開始の際、拂込資本金の大半を擧て之を政府に供託なし、又今後事業の進捗發展に伴ひ、保險契約者の爲に積立つべき責任準備金も出來得る限り斯の如き確實なる方法にて、利殖の途を講せんことを期せり、而して本社は創立日淺にも拘らず、既に相當の成績を擧げ我が保險界の新進として、斯界に矚目せらる、殊に社長原邦造氏は、堅實主義とし

て社會の信用厚きを以て、本社の發展期待するに足る。

本社現重役は監督原六郎、監督池田謙三社長原邦造、取締役佐藤作二、同喜多喜太郎、同三枝代三郎、同辰澤延次郎、同子爵伊東二郎九、同古賀春一、同大塚金兵衛、監査役土志田與助、同木村德兵衛同伯爵奥平昌恭、相談役子爵久留島通簡同河瀬秀治、同塚本與三、同額川君平同法學博士岡村司、同法學博士毛戸勝元顧問法學博士陣道文藝の諸氏なり。

- 東京支社 東京本社内
- 大阪支社 大阪市東區今橋二丁目
- 福岡支社 福岡市天神町
- 北海道出張所 小樽區花園町西二丁目
- 福島出張所 福島市榮町
- 名古屋出張所 名古屋市東區宮町
- 京都出張所 京都市押小路通
- 廣島出張所 廣島市元柳町
- 金澤出張所 金澤市彦三七番町
- 神戸出張所 神戸市相生町三丁目

大日本自轉車株式會社

本社は東京市本所區中ノ郷業平町一七一

帝國電球株式會社

本社は東京市芝區芝口一ノ一に在り、明

治四十二年十二月の創立にて、資本二十萬圓全額拂込済なり、其の目的は白熱電燈球及電燈用品製造販賣にして、創業以來業務漸進し、殊に最近一般の好況に伴ひ著しき發展をなせり、現重役は専務取締役中村幹治、取締役松本留吉、同青山祿郎同シー、イー、ランドル、同新莊吉生、同立川勇次郎、同ジエー、アール、ギヤリ一監査役岡田顯三、同福永文之助の諸氏なり。

戰友共濟生命保險株式會社

所在地 東京市京橋區日吉町八

設立 大正七年一月  
資本金 一百萬圓  
代表者 取締役社長井出治

本社は我が國に於ては、最も最新なる企業にして、即ち本保險は在營在郷の陸軍服役者に對し、平戰兩時に互り、簡易適切なる方法を以て、一保險團を構成するものとす。惟ふに、生命保險必要の程度は、各人の地位境遇によりて等差あり、苟も身を軍籍に置く者は、其の必要を感ずること殊に緊切なるものなるべし。然るに、普通に行はるゝ生命保險は、保險料の重荷なるが爲め、之を社會の各階級に普及することを得ず。偶々簡易保險の官營あるも、這是保險金額に制限ありて、共に其希望を満たすこと能はず。所謂長鞭馬腹に及ばざるの憾みあり。陸軍將校間には、夙に義助會の設けあり。畢竟一種の共濟組合に外ならず。今や時世は、一般服役者の爲めに、此趣旨を擴張せんことを要求す。然れども數百萬人の服役者に對しては、到底組合組織を以て律し難く、之を以て目的とする的確なる事業の經營に俟たざる可からず。是即ち本社は、本保險を創始し、戰友共濟の機關

共同コム株式會社、帝國鐵道協會

に供する所以なり。而して本保險の要は殉難殉職者に厚うすると同時に、其他の加入者の爲め、一定期間の後、有利なる普通の生命保險を付するものとす、猶身體診査を行はざると、戰時事變に際し、義助の共濟法を探りたるとは共に著しく契約者の負擔を軽減し、以て加入を容易ならしめたり。

抑も吾人は目下内外の状態に鑑み、本事業に俟つ所愈々多かる可きを信ず。若し夫れ加入者が、治に居て亂を忘れず、常に勤儉貯蓄に志し、一旦事あるに臨んで果して能く共濟の美を發揮することを得ば、獨り本社の目的を達するのみならず軍國に對し貢獻鮮少なざるべし。

共同コム株式會社

本社は東京市京橋區三十間堀三ノ六にあ

帝國鐵道協會

所在地 東京市麹町區丸の内有樂町

我帝國の鐵道は布設以來長足の進歩を爲し、明治三十一年に至り、其線路の延長殆んど三千哩を超え、一ヶ年の運輸數量亦頗る巨額に達し、隨て其の商工業に及ぼす影響極めて甚大となりしかば、鐵道事業に關係あるものは、技術上並に公益上之れが利害研究の必要を生じ、遂に官

民相謀り、一の研究的俱樂部を組織すること、なれり、即ち當時鐵道界の先覺者たりし松本莊一郎、平井晴二郎、仙石貢渡邊嘉一、笠井愛次郎、久野知義等の諸氏協議の結果所謂現今の帝國鐵道協會なるものを創立するに至れり、是に於て明治三十一年十一月二十八日東京市京橋橋西紺屋町の地學協會に於て初めて第一回總會を開き、定款を議了し、評議員二十七名、(其中より更に理事十名)を選擧し越えて三十二年一月に至り、陸軍大將川上操六君を本會の會長に推薦して、同君快諾就任す、然るに其歳五月大將偶ま病を得て遂に薨去せらるゝの不幸に遇ひ、爾來會務は渡邊、松本兩副會長に於て處理せられ當分會長を空位となせり、是より先き關西地方に於ても南清、村上亨一松本重太郎、牛場卓藏等の諸氏發企となり、大阪鐵道協會と稱する團體を組織し鐵道の研究に従事せり、然れども同一の目的を有する同性質の鐵道協會を東西兩京に對立せしむるの不要なるを認め、此歳七月を以て双方の協議を経て遂に合併し、大阪には更らに支會を設置することとなり、當時の支會委員は前記四氏の

外、外山修造、田健次郎、伴直之助の諸氏とす、明治三十四年五月副會長渡邊洪基氏逝去せらる、本會は則ち陸軍中將會我祐華氏を迎へ其缺を補ふ、此の歳七月を以て事務所を購入し、遂に本部を東京市京橋區日吉町十二番地に設立するに至れり、翌三十六年三月松本副會長病を以て大森の私邸に逝去せらる、越えて三十七年五月社團法人と爲し、次で其六月陸軍大將伯爵兒玉源太郎氏を會長に推薦し久しく空位たりし會長席を充實せり、而して此歳七月松本文庫を設立し、故松本莊一郎氏の蔵書を始め獨逸官民より寄贈せる數多の鐵道著書を收容せり、又三十八年五月鐵道協會主催となり、名古屋市に於て全國鐵道五千哩開通祝賀會を開き前代未曾有の盛典を挙げたるは、世人の今猶記憶に存する所なり、是より先き鐵道協會に於ては、鐵道各種の問題に就き左の如き委員を選擧し、之れが研究に従事せり。

- 一 全國鐵道連絡輸送取調委員
  - 一 鐵道諸規定修正委員
  - 一 鐵道課稅問題調査委員
- 此等の委員は數回又は數十回の討議研究

を重ね各問題に對し時々其筋へ建議交渉を爲し、斯業の爲め大に貢獻する所ありたり、明治三十六年三月、松本副會長逝去後は古市公威、牛場卓藏、仙石貢、原口要、平井晴二郎、末延道成の諸氏交々副會長となり、以て會務を處理し、來れり、而して明治四十二年五月に至り、我鐵道界の元勳子爵井上勝氏を推して會長となし、氏も亦悦んで鐵道協會の爲めに盡す所あらんとせり、然るに子爵は其翌年五月歐羅巴鐵道の視察に上り、不幸中途に於て不起の人となれり、是に於て鐵道協會は、明治四十四年二月十日臨時總會を開き滿場一致を以て、陸軍大將伯爵寺内正毅氏を推して、本會々長となし以て今日に至れり、又同年十月十五日臨時總會を開き、舊來の定款を改正して鐵道と密接の關係ある法人並に商人の入會を容易ならしめたり、而して明治四十五年二月本會は再び鐵道に關する各種の問題に就き第一、第二、第三、第四分科を定め研究調査に着手せり。

建築することに決し、同年十二月三菱會社に之が建築を託し、大正五年一月工事竣工し、遂に今日の如き輪奐の美を見るに至れり。又大正六年五月鐵道協會發起と爲り、土木學會聯合して東京市交通調査委員會なるものを組織し、東京市内外に涉る交通事業に就て、大に研究調査する所あり。大正八年三月略は其成案を見るに至れり。同協會は目下内地を初臺灣朝鮮、樺太、沖繩並に支那等の各地に會員を有し、其の數殆んど二千二百餘名に達せり。又會員の中には英米兩國の技術家並に實業家を含めり、又最近に於ける同協會の資産は金二十五萬圓なれども、現在の家屋を時價に見積る時は、總財産五十萬圓以上に達すべしと。

本協會役員は名譽會員侯爵西園寺公望、名譽會員侯爵大隈重信、名譽會員元帥陸軍大將伯爵寺内正毅、名譽會員男爵後藤新平、名譽會員山縣伊三郎、名譽會員原敬、名譽會員孫文、會長元帥陸軍大將伯爵寺内正毅、副會長(理事、評議員)長谷川謙介、副會長(理事、評議員)工學博士渡邊嘉一、主計(理事、評議員)森本邦治郎、理事(評議員)工學博士岡田竹五郎、

關東酸曹株式會社

理事(評議員)工學博士大屋權平、理事(評議員)立川勇次郎、理事(評議員)龍居頼三、理事(評議員)工學博士玉木辨太郎、理事(評議員)工學博士中山秀三郎、理事(評議員)法學士山之内一次、理事(評議員)法學士小林源藏、理事(評議員)工學士木下淑夫、理事(評議員)工學士菅原恒覽、理事(評議員)工學士杉浦宗三郎、理事(評議員)工學士鈴木楚次郎、書記長海野力太郎、外に評議員四十二名あり。

關東酸曹株式會社

所在地 東京府北豊島郡王子町  
設立 明治二十九年十月  
資本金 五百萬圓(拂込三百二十五萬圓)  
積立金 二百五十三萬餘圓  
代表者 取締役社長田中榮八郎

當社事業の起源は明治十二年當時大藏省印刷局長得能良介氏の發意により、輸入品防遏の目的を以て、同局構内に於て抄紙の原料たる苛性曹達、曹達灰、晒粉等を製造したるに始まり次で明治十八年該工場を府下北豊島郡王子村に移轉し、之に硫酸の事業を加へ、印刷局抄紙部製藥課と稱し、同局技師西川虎之助及隈元清幸の兩氏其の衝に當り、専ら同局の製紙用

藥品を製造し、傍ら民間の需要に應せられたるを以て一般の工業家は、其の便益を蒙りたること尠からず、次で明治廿三年該工場を舉げて、宮内省御料局へ引渡され、御料局佐渡支廳附屬王子製造所と改め、支廳長工學博士中澤若太氏所長として就任し、主として佐渡金山又は生野銀山の製煉用藥品を製造し、且つ從來の如く一般工業者の需要を充たしたり。日清戰後即ち明治廿八年十二月同局に於て硫酸製造部を陸軍省に引繼ぎ曹達、晒粉の製造を廢止せられんとするに方り、此事業にして、若し廢止せらるる曉には關東に於ける斯業を營むものなきを以て、需要者は忽ち至大の苦痛を蒙むるを嘆き從來該製品の販賣業に従事せる同業者相謀り曹達、晒粉製造部の拂下を受け、工場敷地を借用し、尙斯業に従事せる職員職工をも引繼ぎ、而して資本金九萬五千圓を以て合資會社王子製造所を起して該事業を繼承せり。明治廿九年十月事業の擴張を圖り、資本金を五十萬圓に増額し、株式組織に改め關東酸曹株式會社と稱し、更に同村荒川沿岸豊島に新工場を設け、硫酸製造装置

を建設し曹達、晒粉工場一切を移轉し爾來益々事業の擴張と製品の改良とに努め、明治四十年三月資本金を壹百萬圓に増加して、人造肥料製造に着手し、續て關西各地に於ける需要者の便利を圖る爲め神戸市新在家に分工場を設置し主として肥料の販売を開始せり、又硫酸原料は從來硫酸を使用せしも時運の變遷に伴ひ、含銅硫化鐵礦に代へ、其の殘滓を利用して製銅事業を開始し、明治四十四年四月に至り、又五十萬圓を増加して資本金を百五十萬圓とせり。

今次歐洲の戰亂勃發するや、時運の要求に適合すべく銳意積極的發展を期す、大正六年三月更に三百五十萬圓の増資を執行し、資本金を五百萬圓として社業の擴張を圖り、同年七月大阪府下中津町光立寺に大阪出張所を設けて、専ら藥品の製造販賣を開始せり、尙多年調査研究せし電解式中最も能率優秀なる最新式新設工場の落成を見るに至り、其の製造能力も數倍加すると同時に多年當社の特色たる製品の精撰は倍々其の特性を發揮すべく、専心以て一般農工界に貢獻せんことを期しつゝあり、以下各部につき順次概

略を述ぶ。  
●藥品部 當社の工業藥品製造は、本邦に於ける始祖にして、今や其の製品の販路は日本内地は勿論、遠く露清及南洋諸島へ輸出し、之れが品質の精選優良なるは既に工業界に認識せらるゝ處にして、各博覽會又は共進會に出品して、賞牌を授與せられたるもの十數個、就中第一流化學者の提唱に依り開設されたる化學工業博覽會に於て、同業者の出品せるもの甚だ多かりしに拘らず獨り當社製品は群を抜き、名譽賞牌の第一位を占めり。

●肥料部 當社製造にかゝる肥料は、各地の地質氣候の關係を精査して、嶄新の學理と實驗とを參酌し、加ふるに原料を精選して土地作物に適應したる、優良の肥料を製造するを以て主眼とすれば、販賣品の選擇に躊躇せらるゝ場合は、直ちに技師を派遣し、其の販賣區域の地質等を調査して最適合品を以て推薦すべく、若し當社製品中に適當品なき際は、更に別種の肥料を新製して提供するの便宜ある爲めに販路益々擴張せり。

燒滓を原料とし、亞鉛の原料は焙燒せる硫化亞鉛及亞鉛合金類にして、何れも當社獨特の精煉法によりて、採收せられたるものなり、鐵煉瓦は當社の一手製品にして石塚、土垣、杵石、敷煉瓦等の代用品として最も適し其價格低廉且つ體裁宜く堅牢にして防火防水性に富むが故に防火壁及倉庫護岸工場等の建設用として、至極經濟的のものなり。

●製銅部 當社精煉の型銅は、硫酸製造の原料たる含銅硫化鐵礦石を焙燒したるに兩氏が店主の純然たる證券買賣仲介業發達の主意を確守し、常に顧客を本位とし、薄利多賣主義を厲行するからである、今や株式現物取引の日に、益々隆昌ならんとするの折柄、同店の如き主義を以て奮進せば、其の將來は實に刮目に値ひするものがある。

### 上甲商店

所在地 東京市日本橋區町三  
店主 上甲信弘氏  
僅々一年有餘にして、兀然兜町に其の頭

角を顯し、將に一流の現物店をも凌駕せんとする上甲商店の繁榮は、實に一大成功なりと謂はなければならぬ、斯の如きは畢竟するに、炯眼なる上甲氏が、早くも株式現物業の發達に着目したると、併せて氏が、實業界に於ける信用地盤の鞏固なる爲め、忽ち得意の開拓に奏功したると、且は一切の業務を任せ居る新進氣鋭の成瀬省一及矢野浩輔兩氏の献身的努力による賜である、上甲信弘氏は現在横濱にて資本金一百萬圓の矢野上甲合名會社を經營し、蠶絲屑物の本邦總輸出額の約七割を一手に取扱ふの盛大を極め、實に屑物業中の巨擘と謂ふを得べく、其輸出入部に於ては紐育及神戸に支店を設け、絹及綿織物を主とし、其の他一般商品の貿易をも營み、尙ほ買収せる資本金五十萬圓の東京矢沼商店と相呼應して益々海外の發展を企畫し、近く南米及濠洲に出張所を新設する爲に準備中である更に同氏は、蠶絲取引の關係上永年横濱取引所仲買人として、生絲及株式の委託賣買に應じ、尙日本ベニ紡績株式會社東日本炭礦株式會社の各取締役、並に横濱燃絲株式會社の監査役に擧げらるゝ等

氏の名聲は、次第に實業界に重きを加へられつゝある。  
由來上甲氏は、資性潤達、飽く迄奮闘的にして、事業以外に復何等の趣味もなく然も年齒未だ四十有七歳にして、前途春秋に富み、實業界に多く囑望さるゝ同氏の如きが、株式現物業を經營さるゝに到りたるは、確に人材拂底の斯界に取つて多幸なりと謂はなければならぬ、又同氏は會て投機に手を染めたる事なく、殆んど株式相場を解せざると、且は純然たる證券買賣の仲介業を發達せしむる主意を以て開店したる次第なれば、自己は屑絲專業を以て一貫し、株式營業は總て各主任者に委せて、多く顧みる處はない。

●製銅部 當社精煉の型銅は、硫酸製造の原料たる含銅硫化鐵礦石を焙燒したるに兩氏が店主の純然たる證券買賣仲介業發達の主意を確守し、常に顧客を本位とし、薄利多賣主義を厲行するからである、今や株式現物取引の日に、益々隆昌ならんとするの折柄、同店の如き主義を以て奮進せば、其の將來は實に刮目に値ひするものがある。

### 合資 日本鉛管製造所

所在地 東京市芝區三田四國町二番地  
設立 明治四十二年三月  
資本金 十萬圓  
代表者 出資社員男爵福城之助  
同社は故海軍技師工學士若山鉉吉氏、大江卓氏と相計り、明治二十九年鉛管製造所を起し躬ら技師、技手を率ひて製造に従事せり、之れ本社の遠源にして、本邦斯業に於ける最古のものなり。而して創業數閱月苦心漸く功を奏し、遂に完全なる製品を發賣するに至るや、大阪水道部にて初めて本社製品を採用せしに、成績良好にして外國品に比し廉價に、而も品質は却て優るものあるを實地に證明し、大いに公衆の注意する處となり、廣島市軍用水道、神戸水道及び東京市相續て本社製品を用ひ、其結果何れも良好なりし

を以て横濱、長崎、函館の各水道部等其  
他益々需要増加するに至れり、殊に板橋  
火藥庫、下瀬火藥製造所の注文に依り納  
付せしに、大に當路技師の稱讚する處と  
なりたり。

會社は製管業に従事してより二歳、技術  
の進歩を計り益々製造に勉めたる結果、  
外國品は著しく其影を密めたるも、未だ  
全く輸入を堵絶せしむるに至らざりき、  
之を以て更に資本を醸集し、工場の規模  
を擴張し、益々斯業の改良に従事し、一  
は以て外國製品を我市場より排去し、二  
は以て之を東邦諸國に輸出せん事を期し  
實業界の諸名士に謀り明治三十二年四月  
日本鉛管製造株式會社を設立し、若山鉛  
管製造所を擧げて其事業を繼承したり、  
爾來本社は益々製品の改良に勉め、専門  
技師が鋭意研究の結果、斯業の濫奥に達  
するに至りたり、然れども需要は年を追  
て増加の傾あり、既設の機械を以ては到  
底其需要を充す能はざるを察し、最新式  
大製管機を英國に注文し、東京本工場及  
び大阪分工場に据付けたるを以て、製造  
力は従來に増加し、大口徑のものも容易  
に製造するを得、盛に各種鉛管の注文に

應じ又遺憾なきに至れり、此處に於てか  
本社が豫期の第一段たる外國品の輸入を  
防止するに至れり。

明治三十八年會社設立當初よりの社長た  
る郷誠之助氏、會社の資産營業の全部を  
譲受け、次で同四十二年合資組織に變更  
し郷誠之助氏業務擔當社員として今日に  
至る、其間機械を増設し製造力を増加し  
日夜事業の發展に怠らず、豫期の第二段  
たる海外輸出を見るに至り、鉛管製造業  
としては、初期の目的たる完成の域に達  
したり然るに當時本邦に於ける化學工藝  
の思想漸次發達進歩するに従ひ磷酸肥料  
硫酸曹達等の製造工場頻りに起り、其必  
要品たる鉛板の需要も亦遂日増加の趨勢  
あるに鑑み、更に最新式ロールを英國よ  
り購入し、鉛板の製造に着手し、同時に  
輸出茶箱包装用茶鉛及び兩切紙巻煙草、  
洋菓子用錫箔等の製造を開始し、之れ又  
外國品に劣らざる製品をなし、需要者の  
賞賛を博し、業務益々隆盛なり。製造品  
目は即ち鉛管、鉛板、鉛線、錫管、茶鉛  
アルミニウム管、内部錫引鉛管、錫箔  
特許土谷式ストップバルブ等にて、大阪  
市北區南森町四十九番屋敷に大阪支店を

設け、地方一手販賣を三井物産株式會社  
に委託せり。出資社員は男爵郷誠之助、  
六萬圓、郷朝進二萬圓、郷升二萬圓也。

株式電氣製鋼所

所在地 東京市豊島區永楽町一ノ一  
設立 大正五年八月  
資本金 二百五十萬圓  
代表者 取締役社長 福澤桃介  
同社は福澤桃介、寒川恒貞、井上角五郎  
等の諸氏の主唱の下に、最初資本金五十  
萬圓を以て創立せられ、漸次業務の發展  
と時運の趨勢に伴ふて、大正七下期に  
二百五十萬圓に増資せるものにて、創業  
以來順調にして、前途益々有望なり。  
抑も同社は、大正三年四月工學士寒川恒  
貞歐米電氣事業視察の途に就き、電氣製  
鋼並に合金鐵製造の必要なるを認め、歸  
朝後大正四年十月名古屋電燈株式會社と  
謀り、同社に製鋼部を置き同社熱田火力  
發電所内に試験工場を設置して、爾來同  
工場に於て、各種合金鐵高速度鋼炭素工  
具鋼等の試作に従事し、傍ら諸機械器具  
注文並に工場建築に着手し、大正五年八  
月一部の落成と同時に、株式會社を組織  
し先づ合金鐵の製造販賣を開始し、(我國

にて電氣爐を以て、合金鐵を製造せるは  
同社を以て嚆矢とす)、大正六年七月鍛  
鋼工場の竣工を遂ぐると共に、各陸海軍  
工廠其の他重なる諸官衙會社及び商店に  
見本を呈出し、公明なる試験を願出たる  
結果外國品に對し、些の遜色なしとの好  
評を博し、商況益々殷盛を告げ、遂に一  
般の需要に應ずる能はざる盛況に及びし  
を以て更に擴張を企劃し、大正七月一月  
一日電爐工場を、同年五月鍛鋼工場及鑄  
鋼工場を擴張又は新設落成を告げ、現在  
にありては、舊生産額の約三倍の生産額  
を得るに至れり、然も尙需要に應ずる能  
はず、大正七年一月長野縣福島町に千二  
百「キロ」の水力發電所を設け、更に同所  
に八百「キロ」水力發電所起工準備中なり  
と、而して工場の設備は、左の如し、

熱田工場 敷地三千三百七十坪、建物一  
千三百七十八坪にして内、電爐工場には  
九百「キロ」以上の電氣爐四臺、鍛鋼工場  
には各種機械三十基、粉碎工場には大小  
粉碎機五基、電動機一基、修理工場旋盤  
四基、ボール盤一基、電動機一臺其他鍛  
冶工具一式、分析工場、鑄鋼工場何れも必  
要一切、又分析室、倉庫、事務所等完備

し、職工二百三十九名なり。  
木曾福島工場 敷地五千三百四十七坪、  
現在建物五百七十三坪にて電爐工場、修  
理工場、粉碎工場、分析室、倉庫、事務  
所及附屬建物一切あり、生産額は一ヶ年  
炭素鋼三百噸、高速度鋼百二十噸、鑄鋼  
三千噸、合金鐵五千噸にして、其の重な  
る賣込先は左の如し。

株式會社日本製鋼所、各海軍工廠、大  
阪砲兵工廠、三井物産株式會社、久原  
鑛業株式會社、川崎造船所、神戸長崎  
三菱造船所、鐵道院、内務省土木課、  
製鐵所、住友鑄鋼所、日本鋼管株式會  
社、戸畑鑄物株式會社、帝國鑄物株式  
會社、株式會社大島製鋼所、東京鋼材  
株式會社、高田商會、千代田組、  
等にして其他全國各地に數十社あり、而  
して現在重役は、取締役社長 福澤桃介、  
常務取締役 寒川恒貞、取締役 井上角五郎、  
取締役 角田正喬、取締役 兼支配人 下出義  
雄、監査役 後藤幸三、監査役 磯貝浩、監  
査役 川崎友之介、監査役 青山鐵四郎、監  
査役 岸義男、相談役 下出民義の諸氏なり  
營業成績は極めて良如にて、大正七年十  
月未決算に於て、年三割の配當をなし、

尙多くの積立金、繰越金をなし、前途益  
々有望なり。

太陽汽船株式會社

所在地 東京市豊島區永楽町(東京海上ホテル)  
ン内)  
歐洲戰亂の齎せる我が海運界の隆興は、  
實に空前の大發展を來し、筆紙のよく盡  
す能はざるの盛況なり、此の好時期に生  
れたる太陽汽船株式會社は、關西實業界  
の重鎮大分銀行頭取小野駈一、小林市太  
郎、小林壽一氏等の計畫にて、大正六年  
五月創立せるものなり、然るに是より先  
き小林市太郎氏大分縣下に於て、個人に  
て小林船舶部を大正四年頃より創始し、  
海運界に活躍の第一歩を踏出せり、時恰  
も斯界隆興の絶頂なるより、忽ち業務順  
潮に向ひ、擴張に次で大擴張の盛況に至  
れり、茲に於て株式組織に改め資本金十  
萬圓の株式會社とせり、營業種目は、船舶  
業、船舶の賣買、貸出、仲介及び主とし  
て備船を目的とす。  
現重役は社長 小林壽一、取締役 小野駈一  
同小林市太郎、監査役 太田秀雄等の諸氏  
なり。  
因に會社現社長 小林壽一氏は、佐賀縣の



素封家小林市太郎氏の次男にして、幼より頭腦明晰機略に富めり、長じて東京市大學工科大學専科に入り、大正二年六月卒業し、直ちにイリス商會に入社し、實地の商略を研め、越へて海運界の盛んなるを觀て、斯業に身を投じ遂に現在の地位を築き上げり、尙春秋に富む氏の前途の發展と、同社の隆運とは俱に期待する處あらん。

株式會社猪原清商店

所在地 東京市京橋區南橋町一ノ八  
設立 大正七年十二月  
資本金 一百萬圓  
代表者 取締役社長猪原清

同社は元猪原清氏個人名義の經營にて、大正三年七月の創業、營業種目はロープの販賣及其他金物類の輸出入にして、東京製鋼株式會社の製品を主に取扱ひ、同社の特約代理店たり、而して創業以來逐年發展の結果、且つ時運の趨勢に隨ひ、今回組織を改めて株式會社となし、從來の業務一切を繼承し、尙一層將來の發展を期待せるものにて、前途に多大の望を有せり。  
現重役は取締役社長猪原清、取締役山田

株式會社明正社

所在地 東京市京橋區龜山町八番地  
設立 大正七年三月二十二日  
資本金 一百萬圓  
代表者 取締役社長福澤大四郎

抑も同社は設立後日淺きも其の起原は、大正元年九月二十二日創立の舊合資會社明正社の經營せる業務、即ち權利義務一切を買收し、更に營業範圍を擴張なし、諸般の準備を整へ、一層活躍發展せるものにて、同社の設立と共に、舊合資會社明正社は消滅せり、今や新なる陳形に依り直輸入業として、斯界に頭角を現はせり、其の取扱商品種目は、屋根材ラバロイド、ルーフキング、道路敷地用ターピア、壁天井材ビーパーボット、セメント防水濟バトロー、SPC絶縁用、ワニス、SPCペイント其他建築材料、磚子屋根瓦張瓦煉瓦其他室業品、傳動機及昇降機用各種ベルト、マニラロープ及アスベスト類、機械用各種パッキング及護謨製品、抄紙用金網フェルト並にカンバス製紙、紡績、電氣製鐵用諸機械、鐵板鐵

日本寒天株式會社

所在地 東京府南葛飾郡龜戶町  
設立 大正六年六月  
資本金 一百萬圓(拂込二十五萬圓)  
代表者 取締役社長指田傳助

同社は我海草業者の重鎮、指田傳助氏外數名の發起に依り、大正六年六月資本金一百萬圓を以て設立せられ、營業種目は

明治運送株式會社

所在地 東京市芝區日陰町一ノ一  
設立 明治三十一年九月  
資本金 一百萬圓  
代表者 専務取締役竹内龍雄

寒天セラチンの製造販賣及副業として、乾燥野菜製造の販賣及び其の他附帶業務にして、最初本社を東京市麴町區有樂町に置き、後現在地に移轉し、工場は第一工場を埼玉縣秩父郡横瀬村に、第二工場を東京府西多摩郡霞村に、第三工場を同吉野村に、第四工場を同小作村に設置せり、一ヶ年の生産額は約三十萬斤にて販路は主に歐米諸國に輸出なし、聲價を海外に博せり、現在重役は取締役社長指田傳助、常務取締役石崎三吉、同柳山次郎、取締役阿部吾市、同鈴木太郎、監査役高木祖來、同吉野喜智、同丸宮重助氏の諸氏なり。

關東工業株式會社

所在地 東京府南葛飾郡龜戶町

同社は大正七年九月、資本金二十萬圓を以て設立し、内五萬圓拂込にて工場を府下王子に設け、營業目的は煉瓦の製造販賣及附帶事業經營にして、一ヶ月二十萬個以上の生産能力を有せり、現重役は専務取締役大野秀一、常務取締役柳山次郎、取締役指田幸三郎、監査役石崎三吉、同高木祖來の諸氏なり、因に同社は日本寒

日本運送株式會社

所在地 東京市芝區日陰町一丁目一番地

關東工業株式會社、明治運送株式會社、日本運送株式會社

設立 明治三十二年十月  
資本金 三百萬圓

代表者 取締役社長山口武

同社の創立は、明治三十二年十月にして最初は日本運送株式會社と稱し、大阪市に於て開業す、當時資本金は十萬圓にて其の目的は、全國運送業者の運賃取立に關する交互巡回計算事項を主として取扱ひ、爾來業務益々發展擴張の結果、大正四年四月資本金を一百萬圓に増加なし、大正五年十一月、天龍運輸株式會社及び山口合名會社の東京、横濱、大阪所在の現業せる支店、出張所を買收して、社名を日本運送株式會社と改稱し、同時に本店營業所を東京に移し、更に社會の好況に伴ふ業務擴張の爲め、大正八年二月資本金を一躍參百萬圓に増加し、益々斯界に發展活躍の基礎を鞏固にせり。  
營業の科目は貨物運送、貸金、荷賃、荷爲替、委託販賣、貨物運送取扱、倉庫保管、代辦行爲、保證行爲、税關貨物取扱其他運送業に必要な附帶事業等にして支店及荷扱所を東京、秋葉原、上野、飯田町、隅田川、兩國橋、錦糸町、日本橋小舟町、馬喰町、横濱常盤町、太田町

神奈川、大阪梅田、東區西橫堀、北區出入橋、安治川口、櫻島、尼ヶ崎の各驛前に設置せり。  
 現重役は取締役社長山口武、専務取締役竹内龍雄、常務取締役中島多嘉吉、取締役男爵中島久萬吉、八坂甚八、鹿島精一、相談役田島達策の諸氏なり。

**日本學用品株式會社**

所在地 東京市神田區小川町三十、四十  
 設立 大正七年五月  
 資本金 一百萬圓

代表者 取締役會長大倉保五郎

本社は此種會社としては、本邦最初のものにして其の設備、其規模何れも完全に前途の有望なること期待するものあり今や創業後僅か一年に至らざるも、既に業務大いに發展せり。  
 抑も資本金一百万圓を擁して、新に立てる同社は、如何なる事業を営むものなりや。惟ふに小學教科書が國定制となりて以來其價の甚廉にして、從て父兄の負擔すべき兒童學費は、之を從前に比して甚だしく輕減せられたり。然も兒童の學費は教科書のみならず、雜設帳、筆墨、鉛筆、繪具其他種々の學用品に費さ

る、もの尙甚多く、近頃文部省亦こゝに着眼して、學用品費の節約を企圖するところありと雖も、これ等學用品費節約の根本的解決は、蓋大資本を擁して大供給の道を講ずるにあり。

日本學用品株式會社は、この越旨の下に出現し、教育的にして而も價の廉なる學用品を教育界に提供せんとするものなり今第一着手として、教育雜記帳を提供せるも、本社の事業は管にこの一事に止まるものにあらず、順次學用品全般に及び單に小學校に限らず、中等諸學校のそれに及び、進んで社會一般の帳簿、手帳類の製作及文房具類の海外輸出をもせんとするの企畫なりと。

而して同社は支店を大阪市東區南本町二ノ五三番地に設け、又販賣店を東京市内は勿論全國各府縣に設け、汎く供給の途を購せり、現重役は取締役會長大倉保五郎、常務取締役森山章之丞、同柏佐一郎、同西野虎吉、取締役大橋佐吉、同松島孫吉、同日黒甚七、監査役三樹一平、同林平次郎、同岸本榮七、支配人阪本秀泰氏等の諸氏にして何れも現代第一流の書籍出版業者の團結せるものなり。

**日東保證信託株式會社**

所在地 東京市日本橋區青物町十七  
 設立 大正七年九月  
 資本金 二百萬圓(拂込五十萬圓)

代表者 取締役社長太宰文藏

同社は我財界當面の要求に應ずる爲め、歐米の保證信託事業に範を採り、又現在各自所有の有價證券、不動産、動産等の諸財産を最善に管理運用處分し、且つ之が積極的の利殖を計ると同時に、他面に於て各般の事業、資力、商取引、法私人等に對し、最良の機關となり、徹底的に金融の疎通、産業の發展、取引の隆昌を招き以て相互の福利増進、國民經濟の繁榮に資せんと目的を以て、設立せられたるものにて、其の營業要目は左の如し、  
 一、有價證券、不動産並農工商業等に對する金融及投資短期資金の株式取運用、  
 二、公債社債株式等の募集取扱應募引受及賣買交換融通等各般の證券業務、  
 三、有價證券不動産商品等の委任に因る管理運用處分仲介等各般の預託業務、  
 四、各種事業の設計分合組織變更經營整理會計検査監督等公私經濟行爲各般の

代辦業務、  
 五、各種財産諸事業商取引並法私人に對する資金融通擔保代位並契約保證等各般の保證業務、

現在重役は取締役社長太宰文藏、常務取締役陸熙、同山本昇雄、取締役井出郷助、同神津藤平、同脇田勇、同渡邊眞藏、監査役櫻内幸雄、常任監査役中山佐一、監査役鈴木圭三氏等にて、何れも現代錚々たる名士なり。

**株式朝倉商店**

所在地 東京市日本橋區南茅場町四八  
 設立 大正八年二月  
 資本金 三十萬圓

代表者 取締役社長長家清吉

同社は元、朝倉永吉氏個人經營のものなりしが、漸次業務發展し益々取引範圍擴張の結果、且つ時代の趨勢に鑑み組織を變更して株式會社となし、從來の業務一切を繼承し、更に一層業務の擴張發展を計り、大正八年二月設立せるものなり、營業科目は公債株式現物賣買、株式擔保貸付ビルブローカー、一般信託業にして横濱市南仲通りに横濱出張所を設け、營業方針は最も堅實にして、且つ顧客に對し

ては親切なること、既に一般の知る處に社會の信用厚く、幾多同業者中特に異採あり、現在重役は取締役社長長家清吉、専務取締役朝倉永吉、取締役山口吉次郎、齋藤一美、金田喜覺、監査役上田長久、長島千代吉の諸氏なり。

**日本樂器製造株式會社**

**東京支店共益商社**

支店所在地 東京市東區橋區竹川町十四番地  
 設立 明治四十三年四月  
 本社資本金 百二十萬圓  
 支店代表者 福島銀雄

同社は濱松なる日本樂器株式會社の東京支店にして、明治四十三年四月時勢の進展と業務の擴張に隨伴して、創立せられたるものなり、本社は日本唯一の洋樂器製造所として社會に認識され、廣く斯界に喧傳されし彼の山葉ピアノ山葉オルガンは皆其の製作品にして、是等の販賣は勿論、グアイオリン、マンドリン、ギター等の洋樂器は總て大規模の工作法を以て製作され、本邦産の材料に能ふ限りの技術と考案とを注入して、數百の職工を督勵し需要に應じつゝなり、猶ほ彼地獨特の製品に至りては、直接各國大工場と

契約を結び、市内は勿論廣く全國に亘りて提供し、其他各種各様の音譜の輸入販賣に全力に傾注しつゝあり、猶ほ同社は名古屋の鈴木製作所に於て、精製せらるる所の各種洋樂器は、總て直接特約して販賣しつゝあり、而して其の堅實なる商取引は社會周知の事實なり。

**化學豆油株式會社**

所在地 東京市東區橋區八官町十一  
 設立 大正六年十一月(存立期間滿三十七年)  
 資本金 三百萬圓(四分の一拂込)

代表者 取締役會長竹内綱

本社は今井喜八氏、竹内綱氏外數氏の發企に依り、大豆油、大豆粕及四鹽化炭素の製造、大豆及一般肥料並に油類の賣買其の他附帶事業經營の目的にて、資本金三百萬圓を以て創立せられたるものにて創立と共に秋山式四鹽化炭素製造装置の特許を讓受け、同工場を静岡縣江尻に設け又苛性曹達及四鹽化炭素の製造工場を東京府下池袋に設置せり、事業の前途は我が農本國の國是として、益々有望なるべし、現在重役は、取締役會長竹内綱、専務取締役秋山一裕、取締役今井喜八、山口文右衛門、白井龍一郎、大澤彦右衛門

常勤監査役青木大三郎、監査役山下秀實の諸氏なり。

### 東京電氣製鐵株式會社

所在地 東京市京橋區八官町十一  
設立 大正七年八月十五日  
資本金 一百五十萬圓

代表者 取締役社長秋山一裕

同社は秋山一裕氏外數氏の發起に依り、銑鐵及び附帶事業經營の目的を以て、創立せられ、東京電氣製鐵所々有物件及權利並に業務一切を買収して、尙設備を改善充實なし、直ちに銑鐵の製造に従事せしか休戦と共に、斯界一般の不況に鑑み更に福島縣下大瀧根電氣工業株式會社の發電所及工場一切を賃借し、大正八年一月より製造に着手せし處、非常なる好成績を挙げたり、現重役は取締役秋山一裕、取締役今井喜八、大澤彦右衛門、常勤監査役青木大三郎、監査役渡邊修の諸氏なり。

### 合資會社 渡部商會

所在地 東京市京橋區明石町十一  
設立 大正六年  
資本金 十萬圓  
代表者 渡部三彦

同社は元秋葉商店の石炭部として、大正元年より個人經營の下に創業せしものを時代進歩の趨勢に鑑み、大正六年會社組織に變更し、營業範圍を更に擴大したるものなり、其の營業は石炭コータスの販賣にて、石炭は主として三井礦山會社の三池炭及び本鴻基の無煙炭の一手販賣をなし、販賣方法は需要家に直接供給し其の取扱年額は約一億萬斤に達すと、斯界に於ける信用程度及營業方針の如何に堅實なるかは、既に世の定評ある處なり現在出資社員は渡部三彦氏七萬圓、飯田佐兵衛氏參萬圓なり。

### 東興業株式會社

所在地 東京市京橋區越前町  
設立 大正六年三月  
資本金 十萬圓

代表者 專務取締役社長中村喜三郎

本社は鑛業木材業、海運業、造船業、農場的經營及び澱粉製造並に之に關聯せる業務を營むるを以て創立し、先づ造船業鑛業木材業に従事し最初めより、相當なる成績を挙げ、第三回の決算に於ては年二割五分の配當を行へり。現重役は社長中村喜三郎、取締役友田貞

### 日本電化工業株式會社

所在地 東京市日本橋區  
設立 大正五年三月

資本金 二百萬圓  
代表者 取締役會長久野昌一

抑も同社創立の起原は、和田豊治氏が先年紡績業視察の爲め、歐洲巡回の際、伊太利國に於て、呂氏の發明せる呂氏特許權を買収し、空中室素固定濃厚硝酸を製造する目的にて組織せるものなりしが、歐洲戰亂の爲め、機械の到着遅延せる故第一期の事業として、先づ鹽酸加里の製造を開始せり、而して同社は東海道山北工場長阪田真太郎氏を社業研究の爲め、歐洲出張を命じ、目下渡歐中なるが近く歸社せる上は、硝酸の製造に着手する由又會社は自給策として、水力電氣工事を起し自家使用の發電準備中なれば、竣成の曉は大に發展する處あらん、營業の成績は創立日淺きにも拘らず、大正七年末第六回決算にて年壹割の配當をなせり、將來益有望なり。

現重役は取締役會長久野昌一、專務取締役高田正一、取締役中谷整治、恒藤規隆、木村平右衛門、阪田真太郎、監査役川崎榮助、相談役和田豊治氏等なり。而して會長久野氏は、温厚篤實なる人格を有し、十五銀行重役を始め、現代實業

東京電氣製鐵工業株式會社

界に錚々たる名士にして、又相談役和田氏の如き富士紡績社長として、其の聲名は天下に洩く工業經營の頭腦綿密なることは既に世人の知る處なり、尙ほ其の他の重役も皆現代一流の大家揃ひなれば、將來の發展期待するに足る。

### 東京瓦斯電氣工業株式會社

所在地 東京市豊島區大手町一ノ一  
設立 明治四十三年八月  
資本金 壹千萬圓

代表者 社長松方五郎

抑も同社は大正六年上半年に於て、從來百萬圓なりし資本金を三百萬圓に増資したるが、幾何もなくして更に新計畫の遂行上資金の必要に迫られ、大正七年五月十六日開催の臨時總會に於て、第二次増資(三百萬圓を一千萬圓となす)を行ふことを決議し、是亦意想外の好況を以て終了し、今や同社は瓦斯電氣工業界の新者となるに至りしなり。

同社は明治四十三年八月前佐賀縣知事故徳久恒範氏の發金にかゝり、財界有力者の賛同を得て成立したるものにして、資本金百萬圓内二十五萬圓拂込を以て本所

區業平町に工場を建設し、瓦斯マンツルの製造を開始したるが、創立の翌年社長徳久氏歿し、且其年の夏工場浸水の厄に遇ひ窮境に陥れるに、同社は創立の際松方侯の援助あり、其關係上侯爵令息松方五郎氏徳久氏の跡を襲ひて社長となれり斯くて松方氏會社の經營を司るや、從來の如き瓦斯マンツルの製造のみを以てしては到底社運の挽回望みなきを覺り、進んで瓦斯事業の請負瓦斯ストーブ及瓦斯器具の製造珙磁器の製造等の事業を順次經營し、同時に拂込資本金も四十萬圓に増加して、活路を開き毎年八朱の配當を繼續せり、然るに大正三年八月歐洲戰亂の勃發するや、同社の瓦斯マンツルは漸次内外市場に賣行を増加し、稍氣勢の昂れる折柄、大正四年の暮露國より我國へ多數砲彈の注文あり、該注文の内同社は、大阪砲兵工廠より信管の下請をなし瓦斯器具製造の設備を利用して、之が製造に従事し、茲に一大發展をなすに至れり、而して該注文は其の價額百數十萬圓に上り、到底從來の機械工場のみを以てしては之が製造を完ふし能はざるより、工場の擴張を決定し、從來廿七臺に過ぎ

ざりし旋盤を一躍三百臺に増加せり、當時斯の如き大擴張を爲すの危険を難するもの多かりしも、當時松方社長は既に引受をなしたる信管の數量にて、優に一年乃至一年半の作業を繼續するを得べく、其後引續き信管の注文無きに於ては、他の事業に轉換し得る方法を案出し得べしとの自信の下に件の大擴張を執行したる次第なるが、此意見は遺憾なく實現せられ、大正六年六月露國信管の製造一段落を告ぐるや、忽ち之に代ふるに工作機械紡績機械、飛行機及自動車並に發動機の製作を以てし、又一方に先だち瓦斯計量器工場を擴張して、一般計量機をも製造することとし、更に瓦斯ストーブの製造工場を擴張して各種のエンメル製品を製造せり、是等の擴張は、新規製作品の増加と相俟つて會社を愈々發展せしめたり同社の現状及諸工場左の如し。

▲大森工場 東京府大森海岸八幡本工場は諸機械、自動車、紡績工作機及び各種の計器製造工場なり。  
▲珙瑯工場 東京本所業平橋從來業平工場と稱し、計器部外五部に分類し居たるも之を前記大森工場に移し本工場を更に擴張して一大珙瑯工場となせし者なり。  
▲マントル製作部 東京市本所區松倉町二丁目百十一番地に在り専ら瓦斯用各種のマントルを製作す。  
▲火藥製作部 東京府北豊島郡志村大字中臺字後案にあり火藥の製造工場とす。  
▲光學機械製作部 東京本郷區向ヶ岡彌生町三番地にあり、望遠鏡、双眼鏡等光學機械を製作す、尙計器類製品左の如し  
△壓力計類△船舶用通信器類△回轉計類△紡績用計器並試験器類△熱度計類  
羅針機類△鐵道用計器並諸機具類△測深機類△電氣計器類△精密諸計器並機械類。  
以上の各種製品は何れも正確にして、製造の迅速は、一般華客の満足しつゝある處なり。  
▲營業の品目左の如し、  
▲機械 陸船用諸機關、鑛山用諸機並に兵器、各種唧筒及び發動機工作機械類等にして  
▲紡績機 は麻、絹、綿、ラミー紡績機  
▲自動車飛行機 は軍用自動車を始め各種の貨物自動車、乗用自動車、自動目

轉車、飛行機發動機、ガンリン發動機、ディーゼルエンジン及び其の附屬品一切なり。  
▲珙瑯 特許エンメル引パイブ真空蒸發罐冷却器、グリセリン分離器、結晶罐、蒸餾、蒸發皿、タンク、漏計遠心分離器、二重蒸汽鍋、ピーカー輸出向珙瑯鐵器一式なり。  
▲火藥 は各種雷管(三號六號八號あり)、導火線等なりとす。  
▲光學機械 は掛眼鏡、望遠鏡、双眼鏡、測遠器、顯微鏡等にして何れも其の製作にては、精巧優秀にして多大の賞讃を博しつゝあり。  
同社の事業は主として、戰亂發生後に發達したるものなれども、性質上何れも平和的にして、一も戰時的色彩の濃厚なるものなし、兵器の製造も政府が漸次民間に發達せしむる方針にて、當時民間に請負はしめ、其技術を熟練せしむるものなるを以て、之又平時的の事業たるのみならず、同社の兵器製造は他の機械の餘力を利用して従事するものなれば、一層安全確實なりと云はざるべからず、殊に同社の組織は、各部各事業の盛衰繁榮に應じ

有無相通じ、折々鹽梅調節して工場經濟を圖るを特長とし、此の特長は到底他の企及し能はざる處なり、同社は偶然にも其主力工場が陸海軍の指定工場及保護工場となり居るに徴するも、設備及技術の優れたるものあるを證するに足る、されば戰亂終結し平和の反動あるも、經濟界が極端なる悲境に陥らざる限り、二割の配當を繼續し得るは松方社長を始め、同社關係者の確信して疑はざる處なり、本社支店出張所の所在地左の如し。

同社は特許絹毛混紡絲、毛絲其他各種混紡絲の製造販賣並其織物の製造販賣及之に附帶する物品の賣買を營むを以て、目的とし、資本金參百萬圓の内、壹百五十萬圓を拂込み、營業を開始せり、本店を東京市に工場を東京、仙臺、古川、足利、沼津等に設け、會社職員五十四名、男女職工五百五十一名を使用せり。  
營業成績は初めより良好にして、順次發展し、今や各工場へ完全なる機械の据附を了し、製産能力も増大し、益々盛況に向ひ、大正七年十一月第四回決算には年壹割三分強の配當を行へり。  
現重役は取締役社長高橋虎太、常務取締役南壽、取締役荒井泰治、渡邊勝三郎、若尾璋八、小野哲郎、監査役安部幸之助吉村錢之助の諸氏なり。

郎、谷道耕太郎、並に海運業に密接の關係を有する諸氏により、船舶を所有し一般海運業を營む目的を以て發起せられ、其資本金額は初貳百萬圓なりしが、以來社運の異常なる發展は、小額の資金にては時代の趨勢に適合する能はざるに至りしを以て、同年八月十八日臨時株主總會に於て一躍五百萬圓に増加の決議をなし此増資株金參百萬圓株數六百株の内四萬株は舊株に割當て壹千株は社員及船員へ率先引受けしめ、残り壹萬九千株を「ゾレミアム」付にて公募し、第一回拂込金七十五萬圓(一株に付十二圓五十錢)の拂込を了し、「ゾレミアム」金九拾五萬圓を得るの盛況を極めり、事業成績は最も順潮にして、世界的大戰争の好影響に依り我海運界は未曾有の地位に在るや、同社の業務は創立と共に、一海千里の大發展をなし、其の間戰時船舶管理令の發布、次で休戰條約の成立等に依り、多少波亂ありしも、既に鞏固なる基礎を築ける同社は何等の支障なく、熾和の曉に於ける準備迄出来、今後益々好況なり。

東京絹毛紡織株式會社

所在地 東京市豊島區有樂町一ノ五  
設立 大正六年三月  
資本金 三百萬圓  
代表者 取締役社長高橋虎太

東京海運株式會社

所在地 東京市日本橋區平松町七  
設立 大正六年六月  
資本金 五百萬圓  
代表者 常務取締役徳島清松  
當會社は時代の要求に應じ、大正六年六月十九日井口延次郎、徳島清松、太田平六、井田榮造、小川誠、山田眞吉、今岡純一

大沼丸、沙流丸の八隻にして、其外定期庸船に、第六多聞丸、大正丸、鶴丸、吉生丸、第一小樽丸、東隆丸、福壽丸、順丸、嘉辰丸の九隻、總噸數二萬八千噸あり。

營業成績は極めて良好にして、第一期に於て壹割二分強の配當、第二期には二割第三期即ち大正七年下半年に於ては、壹百拾二萬餘圓の總益金を擧げ、配當は二割五分となし、多額の積立金及後期へ繰越金をなす。

現在重役は常務取締役徳島清松、井口延次郎、取締役小川誠、太田半六、監査役工學博士今岡純一郎、橋本博介の諸氏なり。

株式池貝鐵工所

所在地 東京市芝區三田四町二

設立 明治二十三年

資本金 二百萬圓(全額拂込済)

代表者 社長池貝庄太郎

本社は明治二十三年池貝庄太郎氏個人の創業に成りしものにて、後同三十九年業務の發展に伴ひ組織を變更して、資本金三十萬圓の合資會社となし、大正二年四月に至り、更に一大發展をなし其れと

同時に又組織を株式會社に改め、其後漸次増資を重ね現在の貳百萬圓(全額拂込済)となる、而して同社は夙に本邦に於ける鐵工機械専門製作を以て、別に一旗幟を樹立し、常に技術の研鑽に全力を注ひて邁進し、製作上の極致と近世技術の蘊奥を極めたるは、其專賣特許の旋盤、鑽孔機等は第一流の外國製品と對等の資格を有するものと技術大家の定評あるを以て方に證するに足る、且つ現社長池貝氏は本邦に發動機の完全なる製作家なきを慨し、優秀なる鐵工技術を以て、工場内に別に石油發動機の一科を置き、之が改良進歩に盡瘁し、是亦旋盤等の鐵工機械と共に成功し、所謂專賣特許スタンダード石油發動機を完成し、陸用船用共現今内地需要發動機の約三分の二は同工場供給に係れり。

明治三十九年彼の煙草界の勇將にして、財界の富豪たる千葉松兵衛氏は池貝氏と提携するに及んで、資力益豊富大に業務の擴張を行ひ、年々工場を増築して、鐵骨煉瓦造の完全なる仕上工場を完成し、又鑄造場を新築し、此工場の夙に苦心研究を續けたる一種の理想的鑄造法を成功

し、第一著に發動機の最重要部たるシリンダーの鑄造を改良し、續て旋盤其他鐵工機械のベツドの鑄造を改良し、何れも一種獨特のチルド式の最も最新完全なる理想的鑄造法と評すべく、未だ外國製機械にも嘗て見ざる先鞭の改良たり、斯の如く常に一旗幟を樹て、勇往邁進するところは是れ此工場の特色にして、技術界の模範と推獎せらる、現時工場の面積は五千餘坪、内建坪四千餘坪にして職工七百餘石を收容し、製作平均年額五百萬圓を下らず、設備諸機械は最新優良なるものを選択し「レウス」「ブレイナー」「ミラー」「グラインダー」其他諸機械四百餘臺を据附け、注文常に輻輳し殘業を重ね猶及ばざるの盛況なりと。

尙製作機械に對し專賣特許權廿三件、實用新案權七件を有す、創立以來茲に二十有餘年間(マシントール)及内燃機關の製作を専門とし、一意技術の精巧に勤め主義を品質本位に採り、幾多の艱苦を嘗め、漸次陸海軍部内に其技能を認められ且つ一般の信用も益々加はり、今や東洋に於ける爲數の鐵工所として知らるゝに至れり。殊に歐洲大戰の結果「マシントール」

資本金 五十萬圓

代表者 取締役社長豊田教嘉

「ルース」は我國陸海軍官衙は勿論、一般工業家の需要増加し非常の繁忙を極めたるのみならず、遠く英京倫敦に池貝式八呎旋盤を輸出し、以て我鐵工業界の新記録を作り、引續き露國へ旋盤數百臺を供給せり。又前記石油發動機は、陸海軍及逓信省より發電機用として大馬力のもの多數製作を命ぜらる、好評を博せしのみならず、運搬船用并に陸上原動機用として需用頗る多く、二馬力以上五百馬力迄のもの各種製造し、尙大正五年に於て露國政府へ(ガフリンエンゲン)數百臺を製作上納せり。

株式豊時計製作所

所在地 東京市日本橋區本石町四丁目十番地

工場 府下澁橋町柏木六七四番地

設立 大正八年一月二十三日

代表者 取締役社長荒川製作所

株式會社豊時計製作所、株式會社荒川製作所、東華生命保險株式會社

株式荒川製作所

所在地 東京府北豐島郡尾久村

設立 大正七年十二月

資本金 二百萬圓

代表者 取締役社長高田釜吉

同社は元豊時計製作所と稱し、豊田教嘉氏個人の經營なりしが、堅實なる營業方針は業務益々隆盛に赴き、取引範圍擴大せるより時代の趨勢に伴ふ可く、今回會社組織に改め、豊田洋行營業科目中の貿易部、鑛山部、時計製作部の中時計製作部を分離獨立して、株式會社豊時計製作所と稱し、從來の業務一切を繼承し、其他金屬製品、精密機械の製造販賣等、尙一層設備を充實なし、五十萬圓の資本金を以て新に發展の地盤を開拓せり、又豊田洋行は貿易鑛山の二部を以て、本社を日本橋區本石町に貿易部を、同區大傳馬町に設け、相提携して益々飛躍せり、現在重役は取締役社長豊田教嘉、專務取締役田島秀雄、取締役瀧澤達、同森本芳兵衛、監査役武藤金吉、同富士治左衛門の諸氏なり。

東華生命保險株式會社

所在地 東京市日本橋區本石町四ノ二七

設立 大正三年七月

資本金 一百萬圓(拂込四分の一)

代表者 取締役社長茂木惣兵衛

同社は始め宮城縣仙臺市に於て、當地の富豪八木久兵衛氏等外數名に依り、發起創立せるものにて、本社を仙臺市に置き

しが、大正七年十一月重役の改選と共に  
本社を東京に移し、横濱市の富豪茂木惣  
兵衛氏社長となり、從來の方針を改革し  
て大いに業務の發展を計るや、爾來漸次  
隆盛に向ひ將來を期待するに至れり、其  
の營業たる本社の特色は、幾多先進會社  
の各長所のみを取り折衷し、更に本社獨  
創の新案を加へ、嶄新なる方法の許に一  
旗幟を樹立せり、然して本社の重役及各  
支部は左の如し。

- 取締役社長茂木惣兵衛、専務取締役池原
- 遠、取締役荒井泰治、同内池三十郎、同
- 平澤越郎、同林鐵太郎、監査役岩崎總十
- 郎、同長與程三、同高橋次太郎、同木幡
- 恭三、同中村梅三、醫務顧問醫學博士小
- 池重の諸氏なり。
- 仙臺支店 仙臺市大町四丁目四四
- 東京支店 本社内
- 大阪支店 大阪市東區備後町一丁目
- 横濱支店 横濱市辨天通二丁目
- 名古屋支店 名古屋市中區東馬町
- 北海道支店 小樽區色内町四丁目
- 福岡支店 福岡市博多藏本町二九
- 北陸支店 金澤市長町三番町十番地

### 株式會社伴幸商店

所在地 東京市芝區櫻田久保町十番地  
設立 大正七年七月廿五日  
資本金 三十萬圓(拂込金十五萬圓)  
代表者 取締役社長伴幸之丞

歐洲の大戦は、我國事業界に偉大の教訓  
を與へたり、爲めに諸種の事業會社設立  
せられ、我國空前の般盛を見るに至れり  
此の時に際し、廣く世界の大勢に眼を注  
ぎ舊態より脱出した營業課目を提げて事  
業界に乗り出したるは本社なり。

從來我國にて使用し來りし唧筒は、其の  
改良すべき點尠からざりしかば、山本氏  
は銳意之れが改善に努められたる結果、  
茲に山本式スチームポンプと命名せられ  
たるポンプを完成し得るに至れり、依て  
本社は之れを汎く社會需要家の爲めに供  
すべく經とし、宮崎式鑛山用電燈金網等  
を緯とし、諸機械の製作販賣及之れに伴  
ふ一切の業務を附帶事項として營業を開  
始したるものなり。其の堅實なる營業方  
法に至つては他に其の類なく、未だ設立  
日尙淺しと雖も、業務の進歩は着々とし  
て歩を進めつゝあり、昨年末突如として  
講和の報に接したる我が業界は、頗る將

來を悲觀したるにも拘らず、獨り本社の  
如きは坦々として益々業務の發展を見つ  
ゝあり。今伴氏の他麻布區西町林五郎氏  
赤坂區表町三丁目藏内次郎作氏取締役た  
り、監査役には神田區富永町山田芳太郎  
氏を戴きて、堅實に働きつゝあり。

### 株式東京株式取引所

所在地 東京市日本橋區兜町  
設立 明治十一年六月一日  
資本金 二千萬圓  
代表者 理事長岩野誠之助

抑も本邦に於て有價證券の賣買取引に關  
し、成文法の制定せられしは、明治七年  
の株式取引條例を以て權輿とす。然れど  
も該條例は範を倫敦株式取引所の規約に  
採りしものにして、幼稚なる當時の我經  
濟狀態と合せざる處多く、政府に於て  
民間の有力者に勸説し、證券取引所設立  
の發起を德懋せしも、其の効なく遂に全  
然徒法に歸せり。茲に於てか政府は、明  
治十一年我邦在來の商慣習と、當時の實  
情とを斟酌して、新たに株式取引所條例  
を發布し、米相場會所の例に倣ひて營利  
組織の株式取引所を認むることとなり、  
茲に當所の設立を見たり。實に當所の開

業は明治十一年六月一日にして、今大正  
八年を距る實に、四十有一年の星霜を経  
來れり、創立當時の我邦は、西南戰爭の  
後を承けて不換紙幣國內に横溢し、物價  
一齊に貴くして貿易權衡を失ひ、正貨の  
流出は金紙の差をして日に溢く、浮薄な  
る投機熱一代を風靡して、世道人心頹廢  
の虞ありしかば、明治十五年政府は條例  
に改正を加へて、仲買人の自己賣買を禁  
ずると同時に仲買營業に重税を課し、一  
時般盛を極めたる各地取引所も、漸く衰  
微に傾き、殊に明治十八年の如き、恰も  
財界の恐慌に際會して、疲弊甚しく當所  
亦收支相償はざる悲境に沈淪せしが、明  
治十九年に入り、不換紙幣の整理完く成  
り財界恢復の端緒に着くや、偶ま取引税  
率の輕減せらるゝあり、彼此相寄り相須  
ちて市況稍活氣を呈するに至れり。然る  
に在來賣買取引に對する政府の取締頗る  
嚴酷にして、市場の賣買取引著しく減退  
すると同時に、他方密賣買盛行し、弊賣  
百出遂に收拾すべからざるものありしか  
ば、制度改善の論議朝野識者の間に鼎沸  
せり。此時に當り政府は時弊の跡を取引  
所の營利組織に歸し、既設取引所は免許

年限の満了を俟ちて、總べて之を廢止し  
之に代ふるに歐米の會員組織を以てせば  
取引所改善のこと易々として掌を運らす  
が如くなるべしとなし、明治二十年歐米  
の制度を模倣して編纂せる新條例を布け  
り。「ブルース」條例として天下の耳目を  
震駭せるもの即ち之なり。當時該條例に  
準據して會員組織の取引所の設立せられ  
しもの二三之ありしも、果然全國取引所  
の猛烈なる反對を喚起し、遂かに株式組  
織の廢絶を期すべくもあらざりしかば、  
一方舊取引所の營業期限の延期を許可し  
て一時を糊塗し、他方制度の改善に關し  
ては更に攻究を積むこととなり、治く各  
國の制度に就きて調査を遂げ、備さに彼  
我の長短を比較して、取捨を加へ此間數  
年を費して、終に明治二十六年新法の發  
布を見たり。現行取引所法即ち之なり。

醉し、不健全なる投機熱上下を風靡し、  
而かも政府の措置宜しきを得ざりし結果  
小取引所濫設せられ、事態寔に寒心すべ  
きものあるに至れり。茲に於てか政府は  
明治二十九年省令を發して、米及び有價  
證券の現物市場の設立に就き、取締を嚴  
にする方略に出でしも、未だ以て時弊を  
救済するに足らざりき。而かも一方經濟  
界の進歩は駸々乎として、晝夜を分たず  
會社企業の發達に伴ひて、有價證券廣く  
上下に普及し株式市場の隆替は、延きて  
國民の休戚を左右する趨勢を馴致するに  
迫り、取引所問題は又復識者の注意を喚  
起するに至れり。明治三十三年の比、  
時の農相平田東助氏は、敢然取引所の改  
善を志し、明治三十五年六月突如勅令の  
改正として、限月短縮令發表せられ一時  
天下の耳目を聳動せしめたり。茲に於て  
全國取引所は聯盟して極力反對を絶叫し  
且つ一方當路に陳情して、施行延期を要  
請せしも容れられず、遂に改正勅令は指  
定の期日より實施せられたり。果然市況  
恐慌狀態を演出し、全國の取引所は忽ち  
一齊に衰頹の極に瀕せしが、就中當所の  
被りし打撃は最も激甚にして、一日の賣

買高僅に一千株内外に過ぎざりしことあり、所屬仲買人亦孰れも休業同様の窮地に陥れり。茲に於てか世論囂々政府亦聊か反省する所あり。三十六年に入るや延取引に一種の轉賣買戻の制度を認むることとして、改正勅令の缺陷を補綴せむとせしも、商況依然蕭條を極め未だ以て取引所機能の障礙を除却するに足らざりしが、七月平田農相の引責辭職と共に限月復舊せられ、始めて當所は復活することを得たりき。明治四十一年の頃當所は明治三十九年の改正勅令に基き、直取引の競賣買を開始すると同時に、新たに直取引專業の仲買人を置き、且手数料制戻の制を開きて、力を直取引の奨励に効し、

り。斯くて直取引の競賣買は胚葉にして早く既に其の發達を阻害せられたれば當所は直取引仲買人を廢すると同時に、曩に一旦休止せし當所新株式の相對賣買を再開せしが、是れ亦當局の内論に依り日ならずして再び休止するの已なきに至りたり。限月短縮令の改廢により一時小康を得し取引所問題は、端なく直取引禁止問題の勃發と共に、又復再燃し終に大正三年の法令改正を生めり。之に關聯して忘るべからざるは、取引所減稅問題なりとす。日露戰役中取引所稅は非常特別稅法により、二回の増率に會ひて著しく加重せしが、平和克復後國費多端に於て遂に減稅を斷行するに由なく、遂に政府は明治四十三年に迫り、國債證券を課稅物件より除外すると同時に、非常特別稅法による増徴を本稅に合算し、事實上之を恆久稅に改定せり。戰後狂的時代に際しては又征稅の多寡を顧慮するに迫らざりしが、人氣鎮靜に歸するに連れ負擔の過重を感ずること漸く痛切となり、

減の趨勢を追ふて市況闊然たり。此時に當り全國取引所聯合會は、數次協議を重ねて當路に進言する處あり、政府亦當業者の意見を參酌するに吝ならず、大正三年取引所法を改正すると同時に新たに取引所令を布き且取引所稅法を改めて、大に稅率を輕減するに迄りしかば、當所亦新法令に據りて定款、營業細則を改正し併せて賣買手数料率を改定したり。近時歐洲動亂の影響を被りて、物價平準を失し殊に米價は大正六年四五月頃以降運りに昇騰を告げ、政府に於て百方之が調節を試みしも未だ騰貴の趨勢を抑止するに足らず、終に空前の高値を現して漸く國民怨嗟の聲を聞くに至りしかば、大正七年六月仲小路農相は、取引所令に改正を加へて斷然小口落を禁止せり。蓋し小口落の制度は取引所計算上の一便法にして多年の慣行に屬し、大正三年の取引所法改正に際しては、政府も之を是認する旨公然言明したる所なり。加之素と株式と其他の物件に米穀とは、其間事情大に相異なるものあるに拘らず、政府は法制上主義統一の上より株式取引所にも均しく之が禁止を命ずるに至れり。是より先當

所は有價證券近時の發達に鑑み、定期取引と相駢ひて現物取引を振作し、以て證券流通の圓滑を圖ると同時に益々取引所の經濟機能發揮する方案を樹て、屢次當局と折衝を重ね來りしが、未だ其の解決を見るに迄らずして、荏苒今日に及べり。然るに晚近現物賣買の盛行に張目すべきものあり、時勢の要求は仲買人の自覺發奮と相俟ちて遂に現物取引組合の成立を見るに至りたれば、當所も仲買人を公認し、九月より現物取引の名の下に直取引と延取引とを併せ行ふこととせり而して明治十一年開業の當初、當所の賣買物件は國債證券兩三種に過ぎざりしが幾もなくして當所株式の賣買を開始し、爾後相踵いで二三證券の上場を見しが、當時最も取引の頻繁に行はれしは、金祿公債にして其の他の國債類之に亞ぎ、株式の賣買の如き、殆ど見るに足るものなかりき。然るに翌十二年九月金銀賣買の開始せらるゝや、人氣翕然として此に集注したりしが、明治十九年に至り、幣制の整理完成を告げ、金紙の差消減して銀貨賣買全然其の跡を絶ち、公債價格の激動漸く鎮靜に歸して、再び昔日の波瀾な

く市人相率ひて株式に傾倒するに至り、遂に今日の盛況を將來せり。爾來上場物件の銘柄數は年を逐ふて増加し、日清戰役後に於ては、八十種を數ふるに至りしが、日露戰後の沸騰時代に至りて、遂に一百を抜き、大正七年度上半期決算の際に於ては國債十二種、外國債三種、地方債二十三種、社債百二十一種、株式二百四十三種に上り、上場株式資本金高は十五億圓に垂むとせり。次に定期取引賣買高、取組高及受渡高を見るに株式一日出來高三十四萬五千七百七十七株(大正五、十一、一)同取組高三期合計百三十五萬九千二百四十株(大正五、十一、一)一箇月受渡高株數五十三萬六千五百五十九株(大正五、十二)同代金五千二百七十七萬五千九百九十圓(大正五、十一)の記録を作れり。

は開業の當初米商會所の建物を讓受けて之に充てしものなるが、明治二十八年一旦之を改築し、明治四十四年更に大に其の規模を擴大して、稍形容を整へたりしに不幸にして大正六年十二月中大火災に罹り、市場を除く外建物概ね灰燼に歸したれば、目下工費二百萬圓の豫算を以て新當所の營業年限は幾度か更新せられしが最近大正二年中、更に同年十月一日以降向ふ十箇年間營業繼續の許可を得たり。當所の役員は當初頭取の下に、肝煎四名を置く定なりしが、設立當時就任せしは頭取小松彰氏、肝煎福池源一郎、小室信夫等の諸氏なりき。其の後澁澤喜作、井關盛良、河野敏謙、谷元道之、大江卓の諸氏相前後して頭取の椅子を襲ひしが、明治二十六年新取引所法の實施と共に頭取、肝煎の名稱は廢せられて、理事長並に理事と改められ、大江氏理事長に就職せり。明治三十二年の改選に際し、金子堅太郎氏理事長となり、翌三十三年中野武營氏之に代りて爾來職に留る事十有餘年の久しきに亘りしが、明治四十四年の改選に當り、中野氏と共に理事伊藤幹一

中島行孝の兩氏亦同じく再選を辭し、新に男爵郷誠之助氏理事長に、角田眞平氏理事長代理に、前川太兵衛、藤山雷太、山口卯之助の三氏理事に新任し、其他は重任せしが、大正七年五月江口駒之助氏理事を辭するや、岡崎國臣氏入りて之に代れり。監査役は岡谷兵助、渡邊勝三郎、小池國三の三氏なり。

東洋商業合資會社

所在地 東京市麹町區丸之内三番二十五號館  
設立 大正二年十二月  
資本金 十萬圓

代表者 無限責任武藤武全

外國品及機械金物輸出入者として、其の名聲斯界に知られたる本社は其の始めは現代表社員武藤武全氏個人にて「エフ、ダブリユウ、ハムモント商會」を經營し外國各社の日本總代理店をなせし處、偶々大正三年歐洲大亂の勃發と共に業務俄然好況を呈し、將來益々有望となるに依り同年十二月、武藤氏は知人福島浪藏、前田二平、永井誠也の三氏と相謀り資本金十萬圓の合資會社に組織を改め「エフ、商會」の業務一切を繼承し、茲に東洋商業合資會社の創立を見るに至れり。

合名下谷製作所

所在地 東京市京橋區月島通九丁目十二番地  
設立 大正三年五月廿二日  
資本金 八百圓(積立金十六萬圓)

代表者 柿崎嘉市郎

同製作所は高坂又藏氏の創立に係り、當初下谷區金杉に小工場を創設し、孜孜業務を固めつゝありしが、業績意の如くな

四萬個以上にて内壹萬個を内地に販賣し三萬個は外國に輸出す、其の眞價は之れを見ても知るを得べし、尙同社は最近業務の擴張に付隣接地四百餘坪を工場敷地として買収し、既に二百坪は設置し、其の他も目下建設中故、全部完成の上は大發展をなすや期して待つべきなり。

合名會社玉置商會

所在地 東京市京橋區入船町三丁目  
設立 明治四十三年七月  
資本金 三十萬圓

代表者 出資社員玉置すみ

東洋の小コンブス若くはロビンソングルーンとして、即ち南洋貿易の先驅者として、將又南方經營の先覺者として、尙世上の記憶に新なる、信天翁故玉置半右衛門氏の鴻業を繼承したるものを合名會社玉置商會なりとす、業祖半右衛門翁は鳥島先占に依つて魁名を四海に馳せたる人なり、維新前の時昔文久年間に於て逸くも圖南の雄志を抱き先づ崑山代官の依頼に基きて、小笠原島の開拓に指を染たるが、偶時の令尹と意見を異にし而も空しく歸朝するを潔とせず、歸途鳥島に上陸し、大日本鳥島を建つ、鳥島

合名會社玉置商會

らず、資金の缺乏はやがて自滅に瀕せむとす、偶々柿崎嘉市郎氏と相識を得茲に於てか資金を仰ぎて事業を挽回し日を遂ふて業務を擴張し、需要頓に増加して工場の狹隘を感ずるや、大正三年五月廿二日現在の地を相して移轉し、同時に組織を變更して合名會社となせり、同所は自動車、自轉車其他有ゆるバルブを製作し、又副業として安全剃刀、電球ソケットを製作し、深甚なる信用を博し居れり、其製品は神戸ダンローブ、大阪角一護謨會社及び東京にては東洋護謨、東京

今や同社は、漸次業務發展なし、南洋及歐米の各國に多數の直輸出をなす、其額バルブ及び安全剃刀にて、年額壹百二十萬圓以上に達すと云ふ、而して安全剃刀は今や同社の主なる製品にて、幾年かの研究遂に其の功を遂げ、我國に於ては他に模造する能はざる同社獨特の製品にて外國品を凌駕するに至り、生産額は毎月

なる稱呼は同氏に依つて名付けられたるものなり、越えて明治七年圖南の雄圖に便せんが爲め、臺灣役に献替したるが病魔の襲ふ所となり、本邦へ後送せらるゝに至り、更に伊豆七島及小笠原島に航運を啓きたるが、明治廿年愈々鳥島の捕鳥及開拓事業に着手し、之を英、米、獨逸に輸出し、巨萬の遺利を擧げ、續いて南太平洋諸島及支那海に於ける諸島の探査及海洋の遺利の收拾に従事し、大利を擧げたり、蓋し本邦に於ける遠洋漁業の如きは氏を以て嚆矢とするものにして、先年支那との國際問題を惹起せるプラタス島(西澤島)の如きは、其前既に同氏より探査の上投棄せられたるものに屬し、續いてボロジノ島(南及北大東島)ラサ島を探究し、時の縣令故奈良原男爵の慫慂に依り前記三島を拜借し、茲に製糖及燐礦探掘事業を開始するに至れるが、此間終始南洋發展を念として、毫も易らざるものあり、蓋し同氏は本邦無人島開拓の鼻祖と云ふべく、本邦圖南の氣の煥發せられたるは全く同氏が實際上成功の刺戟に俟つもの多きは識者の認むる處なるべし。大東島列島(南北、南、北、大東島、及ラサ



本會三十萬圓に、加ふるに右糖業の身代り株を新に基本金に加へて、其目的事業に一新紀元を劃せんとす、而して未亡人すみ子刀自をその代表者とし、其三男玉置傳氏は會社創立以來の總支配人にして玉置家女婿商學士堀越久氏を總支配人代理とし、大阪支店長石山保次郎氏、本店詰金子佐助氏、常任營業顧問として化學工業界の奮闘家根岸信氏、貿易業界の經驗家藤田彌三郎氏等の實際上新進の適材を擧げて事に當り、一切の經營畫策に任じ一門の精髓を傾して、傳來の使命を全うしつゝあると同時に、其他幾多事業に努力しつゝあり。

同商會は明治四十三年、業祖故半右衛門翁の晩年に臨んで設立せられ、目的は島嶼の開拓、内外貿易、製材事業、各種工業家及び一般代理業を營むにあり、本社を東京京橋區入船町三丁目に置き、支店を大阪市東區長堀橋筋周防町角に出張所及代理店を、横須賀、吳、佐世保、新舞鶴、長崎、門司、支那、南洋及、南北米濠洲の各地に設け、幾多海外知名の取引店を有し、遠く英、米、濠洲より南洋及支那一帶の地域に亘り、手廣く各種要品

九州炭礦汽船株式會社

の輸出入及販賣其他の業務に任じ、就中南米、支那、南洋諸島方面に對しては、會社の全力を傾注し、販路の擴張商權の確立に努め、今や同地方に於ける一大權威として、前途の多望と共に信用益加はりつゝある會社なり、而して、同社の重要輸入商品は、諸機械工具、瓦斯機關及其諸材料藥品、洋紙、調帶、機械油、染料、硝子コブラ及エプラ油、コーバルガム、ラック、護謄、皮類、貝類、香料、其他天產物等にして、其重要輸出商品は、各種植物油、魚油、食料品、綿布類、セメン、マツチ、マシントール、紙類、藥品、各種雜貨等にして、他に同商會は陸海軍工廠及び有力なる各造船所に入出、其註文請負高のみにても年額實に二百數十萬圓に達しをるが、斯の如く一大註文を得て他方に專屬工場其他に前貸し數個有力なる各種製造業者の總代理權を有し、其代金領收權を以て、逐次前貸資金の廻收をなしつゝある由なるが、此一事を以て同商會營業方針の鞏固にして、其基礎の益々堅實を來すの一斑を見るべく、同商會の前途は蓋し刮目に値するものあるべし。

と見做せば、一坪に付二十一噸強、總理藏炭層一億六千萬噸なり、今此の半額を採炭販賣し得るものとせば、總量八千萬噸にして、一ヶ年平均百五十萬噸を採掘するとせば、五十三ヶ年餘の採炭に堪へ而もその海面下の礦區は、殆んど無限なり、以てその炭量の豊富なるを窺知し得べし。

前記組合の礦區を買收し、更に炭層及び炭層の性質を精査し、且つ明治四十二年中金剛石試錐を福浦に施し、其結果第一開坑の位置を福浦に決定し、明治四十二年三月より斜坑開鑿に着手し、同四十三年十月其開鑿を了したるを以て爾來採掘に着手し、更に第二坑(立坑)を淺浦にトし、明治四十五年六月より開鑿を始め目下採掘に従事す。

同社の現有する石炭礦區は、長崎縣西彼杵郡崎戸村及び其接續海面に存在するもの、並に隣島の黒瀬村及其隣接海面に亘りたるもの九百十七萬餘坪にし、全礦區に對する地殻の構成、礦床の狀況は農商務省技師及専門學者の詳細なる調査を経、既に試みたる六ヶ所の試錐の結果を綜合し、尙之を福浦斜坑の開鑿結果と比較審査し、石炭層は全礦區を通じ、三層より成立し、上二層は厚さ四尺乃至五尺下一層は厚さ十三尺乃至二十尺なる事を確めたり。

今本炭田の礦量を測定するに、黒瀬村の百五十四萬坪を除き、崎戸村附近の者約七百六十三萬坪に對し、四尺、五尺、十五尺の三層を併せて採炭可能層厚さ十六尺

大日本圖書株式會社

所在地 東京市京橋區銀座一ノ二二  
設立 明治二十三年三月  
資本金 十五萬圓(全額拂込済)  
代表者 専務取締役宮川保全  
明治十八年の頃文部省は、圖書編輯局を

設けて、國民教育の教科書を編輯出版し其賣捌方を民間書肆に委託せしが、明治二十三年に至りて、政府は編輯出版一切の事業を書肆に交附すること、なれり、是に於て右教科書出版の爲、營利以外の目的に向つて努力せし故、秀英舎社長佐久間貞一氏委員長となりて、遂に資本金十萬圓の株式組織なる本社創立を見るに至れり、爾來同業者間の競争激しく、幾多の困難ありしと雖も、同社多年の經驗は愈々其基礎を鞏固にし、中等教育教科書の出版を始めとし、諸大家亦其著述の出版を委託せられたるもの多く、以て現代社會に重要視せらるる書籍は、何れも同社の手を経て供給せらるるものなり、而して同社は本邦に於ける出版界に於て會社組織の嚆矢なり、以來今日に至る迄三十有餘年間漸次社會の信用を博し、何れの出版と雖も其の版を重ねる事數十版常に好評噴々たり、又同社の基礎に於ては過去數十年間の經驗と、社會の信用とは會社無形の資産にて數百萬圓以上の資本金に相當する處あり、現重役は専務取締役宮川保全、取締役江草重忠、同林平次郎、同杉山常次郎、監査役小柳津要人

同字津木信夫、副支配人雲田平太郎の諸氏なり、配當率は年一割五分の好成绩を挙げ、前途の有望なるは言を俟ざる處なり。

東京商業會議所

所在地 東京市麹町區有樂町一ノ一  
設立 明治十一年三月  
會頭 藤山雷太

歐米に於ける商業會議所の起原沿革は各其の趣を異にし、一樣に記述する能はざるを以て、今茲に我邦に於ける商業會議所の沿革を案するに、今を距ること約四十有餘年前、即ち明治十年に於て當時の内務卿(故伊藤公爵)及び大藏卿(大隈伯爵)は民間の有力者に對し、會議所の設立を勧誘したることあり、茲に於てか澁澤榮一、福地源一郎、益田孝、三野村利助、大倉喜八郎、澁澤喜作、竹中邦香、米倉一平の諸氏發起人となり、同年十二月を以て東京商法會議所設立の案を具し、之が認可を時の東京府知事(故楠本正隆男)に請願したり、而して越へて明治十一年三月其の許可を得たり、依つて前記發企人諸氏は各方面に向ひて會員の加盟を誘導し、茲に初めて商法會議所なる一

新團體の成立を告げ、澁澤榮一氏を會頭に選舉し、事務を内國貿易、外國貿易、運輸船舶、工業、農業等の各部に分ち、各委員を設けて之れが調査を擔任し、以て會議制度の事務を行ひたり、是れ實に現在東京商業會議所の起原にして、而して又我邦に於ける商業會議所の起原と謂ふ可きなり、然れども當時の商業會議所は現時の如く法律に依り、成立したるものに非らずして、其の活動の要素たる經費の如きも、時に些かに政府より補助ありたる外は、總て會員に於て之を負担關出したるものにして、純然たる私設機關たるを免かれざりき、爾後幾多の年月を経過して明治十六年五月に至り、政府は太政官布達第十三號を以て、全國各地方に於て地方の便宜に従ひ、勸業諮問會并に勸業委員を設置することを得る旨を達し、照準條項九箇條を標示したり、茲に於てか當時の東京府知事(子爵芳川順正)は東京市に於ける會社組合等の總代百餘名を召集し、諸布達第六條、區町村若くは聯合區町村に於て、農業會、商業會、工業會、若くは農工商を併せたる勸業會其他同業會を設置するときは、勸業委

職出するの制に據りたれば、之れを商法會議所の當時に比すれば、稍々公設的機關たるの性質を帯ぶるに至れると、同時に其機能に於ても或は政府の諮問に應じ或は自から意見を政府に建議する等、直接又は間接に商工業一般の爲めに、貢獻する處少なからざるものありたりき、是時に當り全國各地に於ても、亦斯くの如き機關の必要を認めたるもの少からずして、殆んど同性質の商工團體各地に設置せられたり、是れ即ち各地に於ける商業會議所の起原なり。

爾後農商務大臣は是等商工團體に關し、其組織及び効果を精査し更に一步を進めて、之れが改良を計らんとの希望を抱き明治二十二年に至り、商業會議所條例の起草に着手したり、而して全國各地に於ける商工團體も亦其の必要を認め、或は意見を開申し、或は之れが建議をなすもの少なからざりしか、農商務大臣は二十三年九月に至り、遂に法律第八十一號を以て商業會議所條例を發布し、引續き省令第十二號を以て同施行規則を定めたり是に於て全國各地に於ける商工業團體は先を争ふて、之が創立を計劃し、二十三

年より二十四年末に至りて、十五會議所の設立を見るに至れり、東京に於ても條例發布と同時に直に發企人を定め澁澤榮一、益田孝、奈良原繁、莊田平五郎、阿部泰藏、益田克徳、梅浦精一の七氏を設立委員となし、二十四年一月其認可を得て、茲に新條例に基づける商業會議所の設立を了せり、而して是と同時に東京商工會は其財産を新設會議所に引繼ぎ任意解散を爲したり、爾後各地に於ては、商業會議所の必要を認むるもの益々多く、明治二十五年より三十三年に亘りて更に新に四十一會議所の新設を見、全國を通じて五十六箇所の多きに達せり。

改正條例による組織の大意は商法會議所及び商工會と全く其の趣を異にし議員は市内に於て規定の納税額を有する被選舉權者にして、選舉有權者より選出せられたるものを以て組織し、且つ會議所に要する經費は、總て選舉有權者より徴收支辭する等、純然たる公法人の機能を附與せられたるものなるを以て其の機能も亦大に擴張せられ、獨り直接に一般商工業者に關する事項を研究調査するのみならず、或は法律命令等の改廢に關し、或は

員をして會員たらしむることを得、又同七條「府知事縣令に於て勸業委員の設置及び第六條の各會設立を要しと認むるときは誘導して之れを設置せしむることを得、此場合に於ては農商務卿に稟議して認可を受く可し」との條項に依り、東京全市聯合の商工業會を設立する必要を説き、之れが組織を爲さんことを勧誘したり、而して出席各代表者は滿場一致を以て之れに贊同の意を表したるを以て、知事は直ちに創立委員として澁澤榮一、小室信夫、莊田平五郎、益田克徳、梅浦精一、渡邊治右衛門の六名を推薦し、六氏は其後種々の手續を了し、同年十一月に至り發會式を擧げ、之を東京商工會と名けたり、是と同時に東京商法會議所は任意解散の決議をなし、其の財産及び事務に關する全部を東京商工會に引渡し、其の終局を告ぐるに至れり。

商工會の組織は多少商法會議所と其趣を異にし、會員は市内重なる團體組合會社等に於て各々其代表者を選出したるものにして、隨つて經費の如きも會員直接に私財を職出する事なく、代表會員を選出したる各會社及び組合に於て之れを負担

澁澤倉庫株式會社

所在地 東京市深川區福住町二番地  
設立 明治四十二年七月  
資本金 五十萬圓(拂込済)  
代表者 取締役佐々木勇之助

明治四十二年七月男爵澁澤榮一、澁澤篤二、尾高幸五郎、八十島親徳、利倉久吉、松平準太郎及び増田明六の七名發起し澁澤倉庫部の資産及び營業を繼承して、同時に市内南茅場町靈岸島町に出張所を設

置して開業したるものなり、即ち澁澤倉庫部は其の前身にして、爾來依然として澁澤家、第一銀行系、澁澤喜作氏系の三系にて經營せらる、前身澁澤倉庫部の起源を緋ぬれば古く十數年の以前にして榮一氏一父子弟を集め、人間處世の心得並に經濟運用の途に就て訓諭する所あり、談偶々倉庫の事に及ぶや福住町の邸内なる、巨多の倉庫を以て營業するも、能く事務員労働者數十人の口を糊し、猶ほ相當の利益を擧ぐ可きを説き、且つ長男篤二氏を顧み乃父の志を繼ぐの意あらば試みに座中の子弟と共に其經營の方案を立て來れと、是れ其動機にして斯くして明治三十年三月迄に開業を見るに至れるなり爾來年と共に業務隆盛を致し、三十五年頃には土蔵を凡て煉瓦造に改築し、漸次營業の確實と取扱の懇切敏速とを以て聲價を高め三井、三菱と共に新界に鼎立するに至り、茲に簡人經營を改めて資本金五十萬圓の株式會社となれり、其後舊倉庫は煉瓦造及鐵筋コンクリート造に改築したり、是れ東京倉庫業者間に在りては該會社を以て嚆矢とす。續て大正四年十月北海道小樽區色内町一丁目に出張所を

開設し、大に斯業の發展を圖れり。今第一期間の營業成績を見るに日露戰爭の瘡痍全く癒へず、財界一般不況の中に開業したるを以て成績之より豫期の如くなる能はざりしと雖も、此の間保管貨物三十三萬七百二十二個此評價額金二百八十二萬五千二百六十圓、保管殘高を次期へ繰越し、純益金三千二百五十八圓二十四錢を擧げ得たり、轉じて最近大正七年下半年の成績を擧ぐれば、保管貨物五十四萬四千四百一個、此評價額金一千七百四十二萬三千三百八十二圓五十六錢の保管殘高を次期に繰越し純益金九萬四千六百四圓七十錢を擧げ得たり。而して同社は開業以來總ての積立金は倉庫建築費とし、數年間株主配當をなせし事なく、並に將來の發展に付施設せり。現在役員は取締役會長佐々木勇之助、專務取締役八十島親徳、取締役日下義雄、監査役上原豊吉、同増田明六の五氏にして、營業部長利倉久吉氏専ら業務を擔任せり。

東京信託株式會社

所在地 東京市日本橋區元大町十番地  
設立 明治三十九年四月

資本金 百五十萬圓  
代表者 取締役會長前山久吉  
同社は前身を東京信託社と稱し、其起源は元三井にありし岩崎一氏によりて企劃せられしものにて、我國に於ける信託業の嚆矢なりと其事業は一切の不動産の委託管理、一般財産の整理、土地建物の改良整理、信託金及代理貸付金不動産抵當貸付、土地建物賣買の紹介又は評價、或は建築工事及土木工事の設計監督、測量及び製圖の依頼に應ずる等、其營業範圍は極めて廣し、從來は土地建物の管理を爲すものに差配なるものありしか、之固より舊式の方法たるを免れずして其弊も亦著し、依りて毎月精算表を添へて委託者に納付し、敷金は之を會社に保管し、租税、地代を代納し、又諸官署に對する願書届書等は一切之を會社に於て代辨し(然し立替又は代納の金員は委託者の負擔とす)同社成立以來斯くの如き方法によりて營業を開始せしにより、差配人の惡弊を改むるに至れり、又不動産は從來銀行に於ても資本の固定を恐れて之に對する貸付は成可く之を拒みたるが、同社は之が缺陷を補はんが爲め、土地買入代

金及び建物新築資金をも月賦返済法によつて融通し一般依頼者の便宜を計れり。現重役は取締役會長前山久吉、專務取締役馬場崎治、取締役津田與二、武知直道、稻茂登三郎、監査役北川禮禰、下郷富太郎の諸氏なり。

猪苗代水力電氣株式會社

所在地 東京市墨田區有樂町一ノ一  
設立 明治四十四年十月三十日  
資本金 二千一百萬圓(拂込金額一千二百六十萬圓)  
代表者 取締役社長豊川良平

水力電氣を以て火力に代へ、諸般の動力及び電燈用に供する利益は、普く世人の認識するところにして、近來各地水力電氣事業の勃興するは、經濟上自然の趨勢なり、東京市の如きも益々水力電氣の世界たるべきは謂ふまでもなき次第にして各方面より其の供給を受けつゝあるも、就中猪苗代水力電氣株式會社の如きは最も注目し價すべし。同會社の水力は有名なる猪苗代湖より流出する流域の水力を利用せるものにして、第一に水力電氣事業に最も恐るべき洪水の被害なること絶無なり、第二に無盡蔵の水量を有す、第三に水量が平準上多量なる爲に、測定上

猪苗代水力電氣株式會社、日本勸業株式會社

日本勸業株式會社

所在地 東京市京橋區南榮六町十五番地  
設立 明治三十五年六月  
資本金 五百萬圓  
代表者 取締役社長小野寺瀧次郎

當社は株式會社不動貯金銀行と姉妹會社にして、同行とは密接の關係あり、抑も同社は初め専ら金融機關たるの目的を以つて牧野元次郎、小野寺瀧次郎、中村陶夫外數氏相謀り、明治三十五年六月資本金十萬圓を以つて組織せしものにして、創業以來意外の隆盛を見て大發展を遂げ明治三十九年十一月、日露戦後の活景況に乗じ、一躍資本金一百萬圓となし、更に歐洲戰亂の好況に乗じ、五百萬圓に増資せり。現今の拂込資本金額亦三百萬圓に達し、優に大會社の班に列し昇天の勢ありと云ふも敢て過言にあらざるべし。蓋し同社は勸業債券及び貯蓄債券の賣買土地家屋の管理、不動産賣買の仲介、不動産評價鑑定及代理金融事業等の外に大正六年七月より鑛山事業を兼營し、現在に於ては既に相當の成績を擧げ、其前途は頗る有望なるものあり、今大正七年九月末報告によるに、當期純益金二十萬八

千餘圓を擧げ、年一割の配當をなし、尙後期へ七萬八千餘圓を繰越せり、其の營業振り刮目すべきものあり。現在重役は取締役社長小野寺瀧次郎、取締役壹岐寛柳井信治、監査役子爵梅小路定行、牧野芳太郎の諸氏なり。

日本硫黄株式會社

所在地 東京市京橋區加賀町十二番地  
設立 明治四十年四月  
資本金 一百萬圓(拂込金額五十二萬圓)  
代表者 専務取締役山田彰

我が國に於ける硫黄の産額は伊太利、北米合衆國に亞ぎ、世界の第三位を占む、然れども其年産額に至りては、當時僅かに五六萬噸に過ぎず、是れ實に本邦に於ける硫黄採掘業は未だ頗る幼稚なるものにして、其經營の多くは個人の手にかゝるに依る、茲に日本硫黄株式會社の創立せられたる豈に偶然に非ざるなり、同社は明治四十年の創設にして、新進有爲の一大會社として社會に期待せらるゝ所多く、資本金の如きも一百万圓を擁して大規模の事業大に見るべきものあり、將來我が國に於ける斯業の發展は、一に同社に歸する所ありと謂ふべし、福島縣耶麻

郡吾妻村宇沼尻なる同社の稼行礦山は礦量豊富なるが上に、經營者の施設よろしきを得たるがため、創立以來良好の成績を擧げ來り、殊に最近二三年來硫黄の市價昂騰せるを以て、同社の營業成績は益々好況を呈し、現在に於ける一ヶ年の産額は約一萬五千噸を有するに至れり、其産出額の大部は三井物産及外國商館の手を経て、米國、濠洲、支那、香港、印度地方に輸出せらる。

今同社の資産額を見るに一百万圓の資本の下に、積立金六萬二千六百餘圓を有せり、尙は斯業の將來は有望の運命を有するが故に從て同社の事業も益々發展の餘地を有し、漸次順潮なる傾向を示しつゝあるなり。現在の重役は専務取締役山田彰、取締役宏虎童、福間申松、原安三郎、監査役篠崎友三の諸氏なり。

株式會社明治屋

所在地 本店 横濱市本町一丁目十三番地  
支店 東京市京橋區銀座三丁目  
設立 明治四十四年(創業明治十八年)  
資本金 一百万圓(全額拂込済)  
代表者 社長米井信夫  
同店は故法學士磯野計氏の設立に係るも

のにして、明治十八年店舗を横濱市本町に開き専ら洋酒、洋食料品の販賣に従事したり、氏は松岩崎彌太郎氏の援助に依り、久しく英國に留學して其間親しく商店に入り、實地商業の研鑽を重ねて大に悟る所あり、歸朝の後自ら身を商業界に投じて我商業の弊風を一掃し、其發達を計らんとするの抱負を以て之れを經營したるものなり、爾來營業は順調の發展をなし、日本郵船會社の御用を勤めて多數の船舶に食料の供給をなし、又明治二十年には「キリンビール」の總代理店となり益々事業の擴張を促し、所謂英國風の堅實なる取引は大に世間の信用を博して將に其理想を實現せんとするに當り、明治三十年十二月氏は急に病の爲め斃る、是に於て久しく氏を輔けたる親戚米井源治郎氏は遺子の後見となりて、事業を繼續したりしが、明治三十六年に至り是れを米井氏、磯野長藏氏の共同事業となし合名會社を組織し、更らに明治四十四年に至り、店員中より多年功勞あるものを選び之れを加へて、資本金五十萬圓の株式組織となし、越へて大正七年五月時代の趨勢に伴ひ一躍して一百万圓に増資し以

て今日に及べり。大正八年七月社長米井源吾氏逝去し米井信夫氏後を襲ぐ。

同會社は本店を依然横濱に置き、支店を東京、京都、名古屋、金澤、神戸、大阪、門司、京城に設けて「キリンビール」を始め其他の洋酒、洋食料品、洋食器、各國煙草、化粧品等の販賣をなせり、而して同店が販賣する輸入商品の如きは、皆歐米著名の製造所と一手販賣の特約を結びて直輸入する所にして、從て其品質の佳良なる商品の確實なる事は疑の餘地なしと云ふべし、殊に同店は宮内省御用達たるの一事に徴するも明かなる所なり。今や同店の名聲と信用は遠く海外にも傳はり、外人の我國に來る者にして同店を訪はざるはなく、旭日昇天の勢を以て事業の大發展をなすに至り、其販路は朝鮮、支那、南洋、海峽殖民地方面に迄も擴張せらるゝに至れり。

日本傷害保險株式會社

所在地 東京市京橋區南金六町九番地  
設立 明治四十四年五月  
資本金 二百萬圓  
代表者 社長法學博士粟津清亮

文明の進歩に伴ひて増加する所の負傷の

如上の経路を以て生れたる同社は、最も確實なる經營方針に基き、爾來銳意奮闘の結果漸次社會の認識を受け、各種工業従事員は勿論一般人士の之に加入するもの尠からず、即ち開業後一ヶ年間に於て被保險者一萬數千人の多きに達せり、尙之等の保險者中傷害の發生に因り、保險金の支拂を爲したるもの亦少しせず其數實に死者五名、傷者八百餘名を算するの狀況を呈せり、如斯して創業の當時より、發展の域に進める同社は總ての方面に多大の注意を拂ひ、一層募集力の増加強盛を計る爲め、大正二年三月神戸市に出張所を設置し、大阪支店と相待つて阪神地方に發展せり。

爾來年と共に業務益々隆盛に赴き、特に歐洲大戰の影響に依り、諸工業の般盛に伴ひ、又同社の營業一大發展をなし、其の結果大正七年五月一躍二百萬圓に増資せり同時に火災海上の二保險の兼營を計畫し同年十月より營業を開始す、其の成績は、火災保險(再保險のみ引受)僅か二ヶ月にて而も五萬五千三百九十餘圓を收め海上保險は設備未だ整はず爲め記すべきに非らざるも、六千五百五十餘圓を擧げ、

將來は兩保險とも相當の期待あり、而して主たる傷害保險に於ては益々一般世人の認識を得、當會社も亦此機に乗じて積極的に活動したるに依り、本年度の收入保険料四十四萬四千四百四十圓に達し、内他會社へ支拂ひたる再保險料七萬六千五百二十四圓を控除するも、正味收入三十六萬七千六百十六圓にして、前年度の收入保険料額に對し、三割五分の増加を爲せり、而して營業費は十三萬七千八百三十四圓にして、總收入保険料に對し三割一分の低率たるを得たり、而して諸積立準備金二十三萬餘圓をなし、専ら社礎の鞏固を計れり、現在重役は取締役社長栗津清亮、専務取締役長谷川吉之助、取締役範多龍太郎、同久保田堅次、同牧野治、監査役永見吉明、同中鉢美明氏等なり。

徴兵保險株式會社

所在地 東京市京橋區新町十九番地  
設立 明治三十年十一月  
資本金 三十萬圓  
代表者 總裁男爵小澤武雄 専務取締役太田清藏  
我國に於ける新事業の多くは、其範を泰西に則りたるものにして生命、火災、海陸上其他の保險も亦同じく西歐よりの輸入

物なるは争ふべからざる事實なり、然るに徴兵保險は全く我國に於ける風物、人情に照し獨得の組織に由りて構成せられたるものなる事は、吾人の大に誇とする所なり。

同社は我國に於ける徴兵保險の元祖にして其の設立は、明治三十年十一月、營業を開始せるは翌三十一年五月一日星霜を閱すること二十餘年基礎確立し、其經營者の人格閱歴は單に徴兵保險の創始者として第一の榮譽を擔ふのみならず、又最も信用あり安全なる會社として、大に吾人の世に紹介せんと欲する所なり。

同社の由來沿革を尋ぬるに、明治二十七年の初冬干戈外に動き、艦艦清韓の海を壓し内には、國民戰勝の聲に醉心たるの時に當り、前同社長岡田治衛武氏私かに思へらく、君國に生を受けたるものは君の爲めに常に生命を捧ぐるの覺悟なかるべからず、而して國民皆兵の我國に於ては國民の義務且つ權利として、兵役に服し盡忠報國の任に當らんことを冀ふもの毎歳數萬の多きに及び、世界の強國をして遂に體若たらしむるは、是我國國民性なりとは雖も、之が爲め一家の生計に及ぼ

す經濟上の痛苦を顧みれば、轉々感慨を禁する能はざるものなり、且つ一旦壯年の男子を徴せらるゝ時は、老少男女或は耕耘の力を缺き、或は營業の助を失し遂に衣食を得るに苦しむものあるは、吾人の俱に目撃し、且つ同情に堪へざるものあり、之が救済の方法として有志相謀り徴兵者待遇規約、徴兵慰勞會若しくは徴兵家族助成會其他種々なる機關を設け徴兵者慰安の途を講ずると雖も、其組織たるや世の仁人義士の同情に訴へ、應分の義捐を得て是を徴兵者家族に分配するものにして、確實に平等に分配を期し難きのみならず限りある資金を以て、多數の徴兵者家族若くは遺族に贈與する者なるが故に、其間途に種々なる事情の纏綿する所となり、其永續を期するは至難の事に屬す、茲に於て保險の組織を應用して完全なる相互救済の方法を案出せんと欲し保險學者栗津博士に謀り博士の深遠なる學識と緻密なる觀察とにより、遂に特殊の徴兵保險を組織せり、岡田氏はこれを以て當局の有志に國家的保險として採用せんことを勸告せしも、當時保險の思想頗る幼稚にして、其議遂に擧げられず

同氏は更に松浦伯、若宮正音、有島武其他知名の諸氏に謀りたるも、其の事容易に進捗せず、然れども堅忍不撓なる氏は百難を排し村田峰次郎、根津嘉一郎、澁谷嘉助諸氏と力を協せ、遂に三十年十一月現今の會社を設立するに至り、翌年五月一日より營業を開始せり、爾來二十有餘年間業務漸次發展し、今や大正七年四月末現在に依れば、件數廿九萬五千九百五十六件、此保險金額五千三十萬圓餘の契約高を有するの盛況に達し、又責任準備金一千六百六十八萬七千八百八十圓を有し營業成績は良好にして年と共に益々發展せり。現在重役は取締役總裁男爵小澤武雄、専務取締役太田清藏、取締役伊豆凡夫、同太田大次郎、同正富照治、監査役山中立木、同濱地八郎氏等なり。

田中商事株式會社

所在地 東京市麹町區有樂町三ノ五  
設立 明治三十五年  
資本金 一百萬圓(拂込額二十五萬圓)  
代表者 社長田中李次郎  
同社は初め田中李次郎氏個人經營にして明治十五年日本橋區本町三丁目開設し當時營業科目は、醫療、理化學器械並に

田中商事株式會社、東京印刷株式會社

子製品並に附帶品の製造販賣をなせり、營業方針は極めて堅實にして、成績良好毎期一割以上の配當を續行せり。現重役は取締役社長田中李次郎、専務取締役田中奎兵衛、取締役毛利恰、柳澤次郎、監査役溝口潤太の諸氏にて、株主人員三十四名なり。

東京印刷株式會社

所在地 東京市日本橋區兜町二番地  
設立 明治二十九年六月  
資本金 五十萬圓  
代表者 専務取締役社長星野錦  
抑も同社は、元王子製紙會社の分身にして、明治七年に横濱分社及同八年に東京製紙分社を兩地に設置せり、之れ同社の萌芽にして、爾來製版印刷製本洋紙賣捌を専業として、王子製紙の抄造せる和洋紙を全國に賣捌きたり、當時洋式帳簿は官衙及び民間に最も必要あるも、僅かに紙幣寮活版部の製造の外なく、民間に於ては始めて大藏省の帳簿の製作をなしたるを初めとして以來王子製の五番紙十番紙を使用し、次で舶來筆記用紙の注文をなし、以て益々事業隆盛を促し、全國各府縣は毎年度の需用を充たし、帳簿使用の

氣運を鼓吹し、又た活版は司法省の訴訟用界紙を始めとし、第一回内閣勸業博覽會報告の如き亦た銅版刷を以て地券狀を印刷する等、分社當時の事業としては大

且つ其の時代は王子製紙及び舶來洋紙を以て各洋紙商及び各新聞社に賣捌き、猶舶來上質及印刷紙フルスクラップ等の直輸入をなし、一方に舶來新聞紙を防歴し一方には輸入紙を洋紙商に卸し、大いに開發を計りしが、時運の進化は十年を待たず第一に紙業者の發達を促がし、製造所と洋紙商俄かに増加し、組合組織已に成る、隨て供給力稍々充分なると共に本會社の事業も益々増加し、彌々發展の域に進みたり、依て斷然洋紙賣捌方を廢止して、王子の製紙は直ちに本社より各地に輸送し、分社は力を專業に傾注し、同二十年に現在の専務星野錫は、製版印刷研究の爲め、北米に渡航しホリヨーク市及びニューヨーク市にてデビネー氏及びピースタード氏に就て諸製版印刷術を實習し、居ること三年歸朝後シンク版製版アートタイプ印刷等を口授し、又は實地に施し、斯業者の面目を改善したり、爾

來會社の信用倍々加はり、愈々事業擴張の時運を開きたり。

茲に於てか二十九年上期の總會を以て王子本社を分離し、星野氏發起人となり資本金を十五萬圓とし、組織を改め商號を東京印刷株式會社となし、同時に横濱製紙分社を横濱分社とし、猶ほ進んで深川區東大工町に模範的一大工場を増設し、之を深川分社と稱して、爾來獨立活歩上下共に技術の競争を以て目的とし、進んで斯道の指導者として自から任じたり。又た三十九年關東州大連市に出張所を始開し、十一月三日を以て滿洲日々新聞の發行と同時に種々の製版印刷を營み大いに新開地の開發に務めたり、而して事業は引續き順境に進むと共に、資金も漸次増加して、四十一年社會全般が、最も事業不振に苦しむの時代にも拘らず、總資本金は五十萬圓となしたり、然れども同社は發展進取の目的は一日も忽がせにせずして四十三年の春數年間の經營を顧みず出張所全部を擧て之を滿洲日々新聞に譲渡し再び内地の經營を強大にし、大いに新機械を増設し、常に社運は駁々として漸進し、殆んど停止せざるものなり、蓋

し同社々長星野氏は、現代實業界の重鎮にして社會の信用厚きを以て、同社今日の發展を得たるも決して偶然にあらざるべし。

營業科目は公債、手形類、地圖、廣告、寫真版、銅版、木版、電氣版、同三色版、株券、諸表、書籍、網三色版、紙型、凸版、シンク版、簿記帳、債券、商標、雜誌、寫真石版、鉛版、鉛版、アートタイプ等の各印刷にして、其の美術的精工の點に至つては他に比類なし、現重役は専務取締役社長星野錫、取締役藤山雷太、齋藤章造、監査役高橋金四郎の諸氏なり。

東洋コンクリート工業株式會社

所在地 東京市東區木挽町二ノ二  
設立 大正六年十一月  
資本金 五十萬圓  
代表者 酒井祐之助  
同社は資本金五十萬圓の株式會社として大正六年十一月の創立に係はるものなるが、其の事業の實際より云へば、夙にワイ、エヌ商會と稱し、現専務取締役たる酒井祐之助氏の個人經營に係はりし事業を繼承し、内地及び臺灣に於ける本支店一切の營業權を譲り受けたるものなれば

古屋合名會社

所在地 東京市神田區鍛冶町三四  
設立 明治三十六年七月  
資本金 十萬圓  
代表者 出資社員古屋德兵衛  
本社は元横濱市に在り、我が吳服商の重鎮として知られたる横濱の鶴屋吳服店東京の松屋吳服店を經營せしものなるが今回組織變更に依り、吳服店は各分離開立し、本社は單に之れ監督の地位に在り(松屋吳服店と參照のこと)。

株式松屋吳服店

所在地 東京市神田區鍛冶町三十四番地  
設立 大正八年三月  
資本金 一百萬圓  
代表者 取締役社長古屋德兵衛  
三越白木等と共に、都下三大吳服店に屈指せらるゝ今川橋畔の松屋吳服店は元古屋合名會社の經營に係り、横濱隨一の鶴屋吳服店は實に其姉妹店たり、而して現代表取締役社長たる古屋德兵衛氏は其二代目にして、敏腕達識の紳商なり、氏は夙に慶應義塾理財科を卒業するや、家業を繼承して今日に至れるにて、令弟惣八氏は横濱鶴屋の經營に當れり、而して業

土木建築界に於ては光輝ある歴史を有するものなり、其の營業科目は、酒井式倉庫建築、酒井式コンクリート管各種、酒井式コンクリート柵柱、酒井式鐵筋コンクリート體鐵道枕木、酒井式間仕切及屏積用耐震セメントブロック各種、T S 式花壇綠石下水綠石、下水溝渠用材料、貼付用各種セメントタイル、コンクリート製敷石、コンクリート土木建築材料各種等にて同社の製品は、何れも政府の專賣特許若くは實用新案の登録を終たるものなり、同社は府下南葛飾郡砂村に工場を置き、數箇の支店及出張店を設けあり、而して本社は元芝區白金志田町にありしが、本春現在地に移轉せり、同社の重役は、専務取締役酒井祐之助、取締役植原悦二郎、同大井慶光、同秋山眞澄、同伊東泰二郎、監査役弘田國太郎、江副隆一、建築顧問福井房一、同河合幾次、同舟橋喜一等の諸氏なり。

- 大阪出張所 大阪市西區江戶堀南通
- 臺北支店 臺灣北大正街八條通四
- 臺中出張所 同臺中老松町五百五十一
- 臺南出張所 同臺南壽町十七番地

祖德兵衛氏は甲州北巨摩の人、天稟の商才鋭敏にして、明治二年二十一歳の頃、逸くも横濱に出で、吳服太物商を營み、當時未だ漁村沼澤に類せし石川町龜の橋を卜して、敢然土藏建物を新築し、今日の鶴屋吳服店を開業す、斯くて拮据經營自ら時勢に適應し來るや、滾々たる資源を分ちて、東京市場へ販路を擴張し、明治二十年今川橋松屋を買収し、同四十年宏壯なる建築を爲して、盛名都下を壓するの一大吳服店たらしむ。

柳も古屋合名會社は明治三十六年四月の設立に係り、當主德兵衛氏を代表社員となし、古屋惣八、古屋大吉の兩氏を社員となす、惣八氏は出で、横濱の店舗を督し大吉氏は支配人内藤彦一氏と相俟つて松屋の經營に従事す、而して東京の店員三百餘名、横濱を合すれば無慮五百餘名の多きに達せるが、何れも先代德兵衛氏の遺訓家憲を服膺し、孜孜として店務に努力せし爲め業務年と共に發展し、益々擴張の結果、今同時運の趨勢に鑑み、大正八年三月更に組織を變更なし、別に資本金一百萬圓の株式會社松屋吳服店を設立して從來の業務一切を株式會社に引渡

し分離するに至れり。茲に於て舊合名會社は單に有價證券の買及不動産の取得利用等の業務を營み、同時に横濱本店を東京に移轉せり。

株式會社精養軒

所在地 東京市京橋區采女町三十三番地  
設立 大正七年一月  
資本金 一百萬圓(拂込済)  
代表者 取締役社長北村重昌

本邦に於ける洋食料理の王者として、卓絶せる地位を有し、二六時中外社會各階級の紳士淑女を送迎して、萬人視線の標的となれるものは、株式會社精養軒となす。當軒は明治初年先代北村重成氏の創むる處なり、現社長北村重昌氏は其の長男にして、夙に明治學院に學び、文業を繼承するに及んで、鋭意其の發達を圖り、世運の進展に伴ひ從來のホテル料理部以外に、或は仕出部食品雜貨部、東海道及び山陽道線食堂列車部を設け、諸材料の如きも世界に亘りて良材逸品を蒐め、種目の豊富と品質の精良なる點に於て海内の同業比肩するもの無し、之を以て外は外國の王侯宰相を始め、幾多の國賓は勿論、内は宮中の調度を始め奉り荷

も注目すべき調理の用命に預らざるなし殊に精養軒の一大光榮とすべきは、明治十年以來、明治天皇、昭憲皇太后陛下が前後二回行幸啓を賜りたる事是なり、蓋し同軒は創業以來益々發展せしを以て、大正七年一月時代の趨勢に鑑み、株式組織となし從來の業勢一切を繼承して、茲に株式會社精養軒となる、而して同軒の營業所は左の如し。

- 築地 精養軒 京橋區采女町
- 副支配人 奥田安之助
- 東京ステーションホテル 麹町區永樂町
- 支配人 澤野富三郎
- 上野 精養軒 下谷上野公園
- 支配人 北村重六郎
- パークホテル 宮城縣松島海岸
- 支配人 鈴木伊三郎
- カフェー、ライオン 京橋區銀座角
- 主任 仙石 勲重
- カフェー、シンパシ 同 南金六町
- 主任 石田勝三郎

熱心なること先きの精工學士以上にて、爾來業務大いに發展せり。  
合名會社市原唧筒諸機械製作所  
所在地 東京市日本橋區墨堤町三ノ二  
設立 明治三十八年十一月  
資本金 三萬圓  
代表者 出資社員市原求、市原一郎  
同社の創業は、今を去る四十有五年前にして、實に我國斯業の嚆矢あり、明治七年川路大警視は本邦消防機械の舊幕時代の状態を脱せざるを嘆じ、獨逸及佛蘭西より二臺の唧筒を購入して、之が試用研究を諸方に奨励せしと雖も、當時未だ機械等幼稚にして、自ら進んでその研究と製作を試みんとするものなかりしが、茲に獨り市原求氏ありて嘗て學びたる砲術の經驗を以て之が試作に従事し、苦心研究の結果遂に佛蘭西式唧筒を作出し、意外の好成績を挙げしを以て、之を東京市消防組に使用せしめしより、警視廳とは密接の關係を保ち、爾來警視廳御用の大看板を掲げ明治十年の第一回内國勸業博覽會を始め、屢々各地の博覽會に授賞さるゝに至りぬ。  
明治十七年類焼の厄に會ひしと雖も、事業は巍然として發展し、二十九年に至りては遂に、消防用蒸汽唧筒を製出す、之

東洋生命保險株式會社

所在地 東京市日本橋區本町一ノ十一  
設立 明治三十三年十月  
資本金 一百萬圓  
代表者 取締役社長尾高次郎

れ實に我國に於ける蒸汽唧筒の鼻祖なり其後次第にその販路を求めて、需用を喚起し、今日に至りては一ヶ月平均三四臺の製作を見るに至れり、又之の販路は内地のみに限らず、支那政府及滿洲の我陸軍等にも之を供給して、朝鮮は獨立國の時代より多數の需用あり、當今に至りては注文益々多きに達せり。  
同社は始め市原氏の個人經營にありしを後三十九年十一月、組織を變更して合名會社となせり、同社製作品種目は、消防用蒸汽唧筒及び一般唧筒、附屬品一切にして、導水管は帝國製麻會社と契約して一手販賣をなし、一ケ年の製産高普通唧筒三百臺、蒸汽唧筒三十臺以上にして、其の價額は三十萬圓以上に及べり。  
又同社の製作に係る最新式蒸汽唧筒の如きは、外國品を壓倒する逸品なり、尙同社技師精工學士は熱心なる唧筒研究者として、同社の爲めに暫く盡力せられしが、其の後警視廳へ轉任と共に、同社長市原求氏の長男市原氏、大正四年東京帝國大學工科大学を卒業し工學士の稱號を得、以來同社の工場工務監督として實務に衝

東洋生命保險株式會社は、大谷幸兵衛氏の發起に係り、共慶生命保險會社の名稱の下に、明治三十三年十月開業せしものにて、當初は資本金十萬圓、社長に大谷氏が就任してゐたが、不幸にして業績更に擧らず、辛酸多年、尙ほ孤城落日の觀があつた。そこで三十七年に至り、専務取締役として森村金造氏が入社し、資本金を五十萬圓に増加すると共に、社名を現在の如く改め、併せて株式と相互を折衷せる新營業方針を樹て之より稍や面目を一新したのであつたが、社業は依然として萎微振はず、兎角涉々しき發展を見るを得なかつた。然るに明治四十三年七月、我國實業界の元勳澁澤榮一男の愛婿たる、尾高次郎氏が社長に就き其の經營に移る事となつてからは、總ての組織は更革せられ、内外事務は刷新されて、社

業は頗に隆昌に赴き、殊に大正三年資本金を一百萬圓に増加して以來は、旭日昇天の勢ひを以て、寧ろ驚くべき發展振りを示しつゝある。而して近時に於ては、同業四十會社中に在りても異數の伸張力を現はし、大正八年二月末現在契約高の如きは、件數八萬八千三百七十七金額六千二百六十六萬七千八百六十八圓に達せり、從つて同社の沿革史上を飾るは、現社長尾高氏就任以來、即ち明治四十三年七月の組織改革の時を以て、そのスタートと爲さねばならぬ。今や同社は正に所謂百花の燎亂たるが如き、現狀を呈して居るのである、しかも社礎は愈々鞏固を加へ内容は遺憾無く充實なるに至れり、現に本社を東京市日本橋區本町一丁目十一番地に置き、支店支部出張所を東京、大阪、京都、名古屋、京城、金澤、福岡、仙臺、臺北、廣島、札幌等全國樞要の都市に設置する外、帝國の領土内は勿論滿洲、支那に涉り、地位信用の卓越せる名望家を選擇して代理店を依頼する事、其の數二千有餘に及べり、眞に是れ内外の施設整然として、些の間然する所無しといふべきなり。

抑も尾高現社長の就任後濫澤男は機會ある毎に同社の爲めに盡力せらる、從つて同社は濫澤系統に屬する多數有力者との連繫を固くするに及び、又尾高社長以下重役並に社員諸氏の精勵努力の結果、組織改革後僅か一年にして契約高一千萬圓に達し、其翌四十五年十一月には早くも二千萬圓、其亦翌年の九月には三千萬圓といふ風に順調に發達して、大正六年六月には四千萬圓、翌七年四月には五千萬圓となり、同年十一月には俄然遂に六千萬圓を突破せしむるに至つたのである。蓋し同社が斯の如く急激の發展をなせる理由は上述の外にもあり、夫れは即ち株式組織にして然も相互組織の長所を大に綜合折衷せる事、保険料の低廉なる事、被保險者の職業又は旅行戰亂等の危險に對して保険料の割増や保険金支拂の條件を付けぬ事、保険種類が豊富で、何れも利益配當付の長壽、長壽組合、聯合長壽不老、養老の各種類を有し殊に聯合長壽長壽組合、不老、養老等の新種類を有する事は其の最も大なる特色と云つても差支へないのである。而して此の中の相互組織を折衷した經營は、即ち同社の利益

金處分に關する根本規定が明示して居る所であつて、保険契約者の爲めに頗る有利な利益配當の制度である。既に同社は、大正二年度を第一回として、毎年保険契約者へ此の利益配當を實行して居るのである。昨大正七年度の如きも、十三萬三千八百三十三圓餘の利益金を擧げたが、此中の大部即ち二萬六千五百七十五圓を保險契約者配當金に、五萬五千四百八十九圓五十六錢を保險契約者配當後期繰越金として處分した程である。以て其の大凡を推知するに足るべく、今や上述の如く六千萬圓以上に達し、諸積立準備金の如きは昨年末に於て、法定準備金二萬四千四百四十四圓、責任準備金四百五十六萬四千九百八十九圓餘、長壽組合利益配當積立金一萬二千五百二十餘圓等合計約五百萬圓を算して居るが、此の中心責任準備金は明治四十三年には僅々三萬五千餘圓に過ぎなかつたものが、實に今日は約十九倍強に増加してゐる譯である。而して此等資産中の主なるものは、銀行預金百十八萬九千二百二十五圓餘、

貸付金四十五萬九百五圓餘、有價證券二百六十四萬五千五百四十圓餘、不動産二十七萬五千六百九十九圓餘に分れて居るが之等は何れも濫澤系の第一銀行其他第一流の銀行の保管に委すると共に、確實なる擔保の下に確實有利の方面へ運用されて居るもの許りである。是れ亦同社保險契約者の意を安んじて可なる點なり、而して現在重役は左の如し。

取締役社長尾高次郎、常務取締役福島宜三、取締役佐々木清麿、取締役日下義雄、取締役西谷金藏、取締役古城菅堂、監査役鎌田勝太郎、監査役井上敏夫の諸氏なり。

**國光生命保險相互會社**  
所在地 東京市京橋區尾張町  
設立 明治四十年十月  
資本金 二十萬圓  
代表者 取締役社長尾高次郎、常務取締役福島宜三、取締役佐々木清麿、取締役日下義雄、取締役西谷金藏、取締役古城菅堂、監査役鎌田勝太郎、監査役井上敏夫の諸氏なり。

明治三十八年の秋、岩村兼善、山根正次、大木宗保、廣木三藏氏等發起人となり、第三生命保險相互會社を創立したるも爾來幾多の困難に遭遇し認可を得るに至らざりしを以て、伯爵島津忠亮氏入りて社長となり、次で岩間六郎氏入社し、廣く基

金を名門華族に求め、銳意諸般の改善を遂行し名を國光と改稱し、同四十年十月認可を得開業するの運に至れり、是れ世に華族保險の名ある所以なり、越て四十二年六月社長島津伯堯、伯爵眞田幸正氏一時社長代理たりしも、同年九月社長に子爵佐竹義理氏、專務取締役に横山寅一郎、大繩久雄兩氏就任し、岩間氏は依然主事として會社の基礎愈々確實となり大正三年四月佐竹子爵堯去後、同年六月故島津伯の次男なる男爵島津健之助氏社長となり、以て現今に及べり。

同社は前述の如く、現代の社會に於ける地位及人格ある名譽の士を擧げ、或は徳義を重じ、又は常識に富む多數有力者の出資者より成る者にて、嶄新にして進歩せる配當法により、加入者には最も有利なる條件を與ふる者なれば、信賴すべき會社なり、當社の取扱ふ保險は養老保險にて利益配當の方法は、毎年配當法と満期配當法との二種ありて、加入者の隨意選擇に應せり、毎年配當法は年一回づゝの利益配當を受くるものにして、保険料より年々の配當金を差引するが爲めに、將來拂込む保険料が漸次減じて、一種の

保險料割引方法とも稱せらる、換言せば一年と格安の保険料にて、永く生命保險を附けらる、加入者に最も便利なる組織なるのみならず、長壽者には又先行き樂しみ多き配當法なり満期配當法は契約満期のとき一回多額の利益配當をなすものにて、年々割當てたる配當金は會社に積立て利殖し置き契約消滅の爲め遺留せらる、配當金をも合せて、満期生存の被保險者にのみ一回多額に配當するものにして、趣味最も深く長壽の被保險者に、此れ又利益多きものなり、而して本會社の加入者が利益配當を受取り得る時期は加入當時より會社の決算毎年六月末まで満一箇年以上経過したるとき、配當金の割當あり、其四箇月後より受取らるゝ事となり居るを以て、遅くも翌々年には必ず實際に配當せらるべし、今我國保險會社中にて實際配當の時期早きは、當會社の右に出づるものなし、第十一期決算即ち大正七年六月の報告に依れば、現在被保險者數五萬七千二百十四名、此保險金額三千四百七十七萬八千五百五十三圓にして、第十一期中の純利益金は、十五萬一千八百餘圓にて、此内十萬二千四百圓餘は各

契約者の配當となり居れり、而して第一期契約者には年二割第二期契約者には年一割八分と云ふ割合に第十期に至るまで年次を経る毎に増加して連續實際配當を實行し、又諸準備積立金は今や三百八十八萬圓に達したり、當社は東京、大阪、廣島、福岡、名古屋、金澤、仙臺、秋田、鹿兒島、札幌に支部を、松本、京都、和歌山、徳島、姫路、釧路に出張所を設けて、被保險者の便益を謀りつゝあり。

現在重役は取締役社長男爵島津健之助、同副社長男爵佐竹義立、同伯爵中川久任同伯爵島津忠慶、專務取締役横山寅一郎、取締役加治木勇吉、同樋脇盛苗、監査役柳田清兵衛、同久保成、同日高榮三郎の諸氏にして、相談役に大繩久雄氏あり、主事アクチアリーとして岩間六郎氏、副主事には松尾敬行、同鷺見健之助の二氏ありて、社業は我國生命保險社中好評を博せる所謂國光式を以て、最も堅實に内容の充實せる經營法に依り、着々大成の域に進みつゝあり。

**日之出生生命保險株式會社**  
所在地 東京市京橋區三十間柳一丁目  
設立 明治四十年五月



資本金 四十萬圓(總株數四千株)  
積立金 二百八十五萬六千圓  
代表者 社長大倉喜三郎

同社の組織沿革を識らんと欲せば、先づ社中の重鎮たる専務取締役岡本敏行氏に關し、筆を起さざる可からず、氏は近江に生れ、幼にして才名翳氣あり、長ずるに及び志を立て、上京するや、渾身是獨立の氣を以て溢れ、時に或は勞働苦學、實に立志傳中の人物たるに不耻、後資を得て渡米し具に苦難と戦ひ、勞働の傍コロンビア大學醫科大學を卒業し、更に歐洲諸國を歴訪し各地の大學に於て、學理と實地との蘊奥を極め、殊に保險醫學に對し、多大の趣味を有したるを以て、銳意之が研究を重ねつゝありしが、歸朝後偶々紐育生命保險會社日本支店の醫長に聘せらるゝや、氏は多年研琢の知識を披瀝して、大に内外人士の間に其技倆を發揮せり。

當時外國生命保險會社が、我日本に於て有したる勢力は實に其極に達せんとし、世人も亦漫然之れに保險を託せんとして顧みるの傾向なし、斯くして更に幾年を経過したりせば、保險料として年々外國

に流出する我正貨の莫大なるを看取するや、氏は斷乎として其地位を捨て國家經濟上之に對抗す可き新機關を創設せんとし大倉喜三郎氏と共に、知名の士を歴訪し當時の狀態を訴へ、萬難を排して明治四十年五月設立せられたるもの、即ち日之出生生命保險會社なり、故に同社の株主中には現代の名士を網羅せり、實に保險界の奇蹟を以て目せらるゝも亦故なきにあらざる也。

日之出生生命保險會社創設せらるゝや、同社の盛衰は一に岡本氏の双肩にあり、氏は又新會社を提げて、既設會社の間に處して其の難戰の苦闘想像するに艱からず而も氏は急激なる發展は、會社百年の計にあらずとなし斷乎として、漸進的方針を採り、經費の濫消を戒めたるを以て創業當初より實に健全なる發達を遂げ、僅々六ヶ月間を以て締切りたる同社第一回決算に於て金六千餘圓の剩餘を出したる亦同業會社中、多く例を見ざる處なり、爾後幾歳を重ねるに從ひ、益々其步調整頓し、漸次好域に向ひつゝあり、今大正六年度末に於ける同社成績の主なるものを擧ぐれば、保險契約高一千二百八萬千

餘圓、諸準備積立金二百八十五萬六千餘圓、資産總額三百三十萬餘圓なり。

要するに同社は日本に於ける最大なる會社たらんことを欲するにあらず、寧ろ日本一の最良なる會社、換言せば最も信頼す可き會社たらんことを欲するもの、如く、岡本氏の主義方針は之を證するに疑からず、今同社の組織中特色とすべきものを摘記せば、株主配當を年一割以下に制限し、株式名義書換は凡て會社の承諾を必要とせること、専ら會社の安固を圖る上に於て株主に對しては、大なる制限を加へたるも、之に反し保險契約者には利益配當の優先權を與へ、(就中同社の確定配當附養老保險には既拂込の保險料に對し、毎年五朱の確定配當をなすと云ふ)被保險者の死因を追究せず、職業の變更を拘束せず、尙外國より斬新なる延長保險の制を輸入實行せる等實に有利且寛大なる條件を提供しつゝあり。

同社は初め神田區淡路町一ノ一に於て營業を開始せしが、如上の堅實主義は大に社會に歡迎せられ、漸次契約高の増加するに從て事務所狹隘を告げたるを以て、大正二年秋現在地に新築移轉せり。

### 安田商事株式會社

所在地 東京市日本橋區吳服町一番地  
同社は明治三十二年の創立にして、最初安田商事合名會社と稱し、資本金一百萬圓を以て製釘、鐵工、倉庫、運送等の事業を主として經營なし、並に鑛山事業をも一時兼經せしが、業務の都合上他に讓渡し、後資本金を五十萬圓に減じ、當時一般不況なりし、餘波を整理し、同四十四年九月、資本金五十萬圓の安田商事株式會社を別に組織して、前者を合併し、茲に又復一百萬圓の商事會社の出現を見るに至れり、越へて大正五年七月十二萬五千圓の肥料會社を更に併合なし、資本金を一百二十二萬五千圓となせり、此頃より我が商工業の隆興に伴ひ、同社の事業は益々好況に向ひ、每期莫大の利益を擧げ發展擴張停止する處を知らず。

安田商事株式會社、東京サルヴェージ株式會社

### 合名會社安田保養社

所在地 東京市日本橋區吳服町一番地  
本社は安田家の事業一切を管理する處にして、明治三十二年の創立、最初資本金二百萬圓なりしが、後ち一躍して一千萬圓に増加せり、保養社として直接に取扱ふ事業は土地及株式證券等にて、別に複雜せる業務は取扱はず、即ち同社は安田家の系統に係る處の各事業に向ひ、投資する機關にて、同時に各社の事業監督をなし安田家最高の策源地なり、總長安田善次郎翁の許に安田一家の重鎮を以て組織せるものなり。

### 東京サルヴェージ株式會社

所在地 東京市神田區永樂町一ノ一  
設立 大正六年三月  
資本金 九十萬圓(全額拂込済)  
代表者 取締役會長藤本綱之  
本社は明治六年三月資本金六十萬圓を以て、麹町區八重洲一番地に於て創立し、後現在地に移轉せり、會社の目的は海難救助を主とし、併せて曳船、運送、船舶及動産の賣買、海事に關する検査、鑑定

仲裁等を兼營す、同社はまだ創立後日淺きにも拘らず、僅か九ヶ月の間に(自大正六年三月、至大正六年十二月)遭難船の救助作業十七件船體撤作業五件の多きに達せり、其の重なるもの二三を擧ぐれば左の如し。

- 汽船大連丸 三、九七八 救助成功
- 津輕海峽龍飛輪 九九四
- 汽船全羅丸 九九四 撤撤終了
- 朝鮮江原道長甯海岸 撤撤終了
- 汽船地洋丸 一三、四三一
- 香港沖ノ島 撤撤第一期終了
- 汽船黄海丸 七七一

期鮮江原道注文津海岸 撤撤終了  
而して第一期營業に於ては、一の蹉跌を見ず、何れも相當の救助報酬を收得し、撤撤品賣却に關しては偶々鐵類の價格騰貴し居りしを以て、從つて高價に之れを賣却し、就中全羅丸汽船一個及地洋丸汽船六個は入札に附したる當時本邦の市場に在りては、製罐用鋼板絶無の好機に會したるが爲め、容易に見る能はざる高價に賣却するを得、豫想外の良好なる成績を擧げ、次きの如き決算を發表せり、資本金六十萬圓に對し、純利益金七十五萬

餘圓、内譯は法定積立金五萬圓、特別積立金二十萬圓、六萬圓株主配當(一割)、三十萬圓株主特別配當(五割)、合計第一期に於て六割の配當をなし、尙役員手當及使用者慰勞資金三萬九千圓を引き十萬五千餘圓を後期に繰越せり、之れ我海運界の一般に好況なる結果、同社の營業も又順潮なりし爲めなり、茲に於て大正七年五月資本金を九十萬圓に増加し、更に活動を擴大せしを以て、次期は一層好況を見るに至れり、然し同社の如き成績は如何に我海運界の盛況時代とは云へ、他に比肩するものなかるべし。

現在重役は取締役會長茂木鋼之、取締役各務鎌吉、同平生鈺三郎、監査役岩田宙造、支配人森貞範の諸氏なり。尙同社作業船は

吾妻九四一七噸九七(無線電信設置)  
榛名九一九噸八一(無線電信設置)  
海壽丸六六噸八五

東海運株式會社

所在地 東京市京橋區南新堀一丁目十番地  
設立 大正六年十一月  
資本金 一百萬圓  
代表者 皆川助一郎

東海鋼業株式會社

所在地 東京市京橋區尾張町  
設立 大正五年十一月  
資本金 三百萬圓  
代表者 取締役社長大川平三郎

同社は東正五年十一月の創立に係はり、當初本社を横濱市久保町に置きたるも、

大倉商事株式會社

所在地 東京市京橋區銀座二丁目七番地  
設立 大正七年七月  
資本金 一千萬圓  
代表者 社長兼大倉喜八郎

同社は東正七年七月の創立に係り、業務の部署を概ね左の六分に分てり、(一)總

務部、(二)營業部、(三)電氣部、(四)貿易部、(五)保險部、(六)會計部と爲し、鐵及銀、車輛船舶、武器軍需品、電氣機械、毛絲物獸皮、肥料及油脂、木材製紙其他を取扱ふと同時に保險業の代理、並に信託の業務を營むに在り、而して同社は、東京支店の外、内外地重要市場を選んで七支店、十四出張所を置き、又隨所に出張員を派遣す、即ち大阪支店、天津支店、大連支店、上海支店、倫敦支店、紐育支店、シドニー支店、橫濱出張所、名古屋出張所、橫須賀出張所、舞鶴出張所、神戸出張所、吳出張所、門司出張所、佐世保出張所、臺北出張所、京城出張所、北京出張所、青島出張所、漢口出張所、長沙出張所及び函館、若松、基隆、奉天、天城山、青根、香港、桑港、浦鹽等に出張員を置く、同社の重役は取締役社長大倉喜八郎、常務取締役山田馬次郎、取締役玉木誠次郎、同門野重九郎(大阪支店長)、同大倉象馬、同大倉喜七郎、監査役高島小金治、同伊藤琢磨、同清水雄次郎等の諸氏なり。

合名會社大倉組

所在地 東京市京橋區銀座二丁目七番地  
合名會社大倉組、電氣化學工業株式會社、タクシー自動車株式會社

設立 大正七年七月  
資本金 一千萬圓  
代表者 社長大倉喜八郎  
我が事業界の霸王にして、國家に貢獻する處偉大なる大倉組は從來の營業部、鐵山部、土木部を分離獨立せしむると同時に、其總務部を擴張し、且つ組織を改めて合名會社大倉組と爲せり、而して其の創設は大正七年七月にして、有價證券及不動産取得利用に任ずるに在るか、事實に於て、今回の新設に係る大倉商事株式會社、大倉鐵業株式會社及大倉土木組を管理し以て其運用の能率を増進する勞ら從來同組との關係淺からざる諸會社、若くは將來資力を頼つべき新事業を管理し相互の連絡を全からしめて、庶幾くは有終の美を濟さんとするものなり、同社は特に支那部を設け、大倉商事の上海及天津兩支店若くは大連支店を通じて、之が運用を監督しつゝあるが、今や其事業は本溪湖鐵道公司を始とし、遼陽馬車鐵道公司、裕元紡織公司、豐津製草公司あり、本溪湖鐵道公司の各般の指揮を大倉鐵業株式會社に俟ち、他は何れも同組に歸屬せり、裕元公司の如きは本店を天津に設

け民國政府農商部より、年八分の補給特權を有するものにして、總資本二百五十萬圓の内、同社は日本棉花會社と分擔八十萬圓を出資せり。

電氣化學工業株式會社

所在地 東京市日本橋區本町屋町四番地  
設立 大正四年五月  
資本金 五百萬圓  
代表者 會長馬越基平

同社は現常務取締役藤山常一氏の經營に係はりし、北海道苫小牧に於ける北海カークライト工場を買収し、其れを基礎として、資本金五百萬圓の株式會社を起し、從來の外に工場を設けて、大規模の製産に従事し、以て年々激増する需要に應じ且つ進んで壯んに、海外に輸出を謀らんとするにあり、現重役は取締役會長馬越基平、專務取締役太田黒重五郎、常務取締役藤山常一、取締役大橋新太郎、同植村澄三郎、同牧田環、同藤原銀次郎、監査役藤野龜之助、同間島與喜、同中上川次郎吉等の諸氏なり。

タクシー自動車株式會社

所在地 東京市豊町區有樂町三丁目一番地  
設立 明治四十五年七月

資本金 金五拾萬圓

代表者 社長山口恒太郎、專務取締役柴山安

同社は明治四十五年七月の創立に係はり  
資本金五十萬圓を以てタクシー自動車  
創業せるものなり、抑も是れ國民の最も  
必要に迫られ居たる當面の急務に投じた  
ること、して、業績は著しき長足の進歩  
を示し、現に東都に於ける重要な交通  
機關として歓迎せられつゝあり、同社は  
現に百有餘臺の新式自動車を有し、數寄  
屋橋際に本社を置き、神田和泉橋畔に車  
庫を設へ、其の駐車場は東京新橋の二大  
驛を始めとし、市内各驛及び、本郷白山  
淺草吾妻橋際、赤阪辨慶橋際其他市内の  
交通頗繁なる場所に置きて市民の利便を  
圖りつゝあり、同社の重役は、取締役社  
長山口恒太郎、專務取締役柴山安、取締  
役小林源藏、監査役岡田秀男等の諸氏な  
り。

日本化學工業株式會社

所在地 東京市南區葛飾戸町大字龜戸

設立 明治四十二年九月

資本金 五百萬圓

代表者 會長男爵大倉喜八郎

同社は明治四十二年九月の創立に係はり  
本邦化學工業に於ける權威たり、其の製  
造販賣に係る沃度劑、鹽酸加里、黃赤磷  
硝石、亞硝酸曹達、硫化曹達、次亞硫酸  
曹達、工業用鹽酸、バリウム鹽類、硫  
酸加里を始めとし、諸多の化學工業用品  
は何れも品質の善良なるを以て既に定評  
あり、殊に同社の發賣する各種加里肥料  
(硫酸加里)は特許製法により加里原料を  
配合し、何れも硫酸鹽類に變性せるもの  
にて、植物に有害なるクロールを含有せ  
ず、實に加里肥料の上乗なるものなり、  
同社は右の外、電力供給、電燈點火併に  
電氣機械器具の賣買貸附、化學工業を目  
的とする會社又は個人の事業に出資する  
事、化學の研究者に對し、研究費を補助  
し其研究に依りて得たる產出物の製造販  
賣權を取得する等、苟も國家の化學工業  
を發達せしむる上に於て、最善の努力を  
竭しつゝあり、同社は京橋區館屋町に出  
張所を設けて、營業上其他一般の事務を  
取扱ひ、本社及び龜戸工場を府下龜戸町

株式會社園池製作所

所在地 東京府原郡大崎町八五番地

設立 大正六年三月

資本金 五十萬圓

代表者 園田武彦

同社は大正二年池田靖氏の個人事業とし  
て草始したる池田製作所に其端を發す、  
後偶々園田武彦氏と肝膽相照の間となつ  
て事業を共にすることとなり、大正三年  
六月園池工具製作所と改む、而して時局

の突發以來急激なる發展を來し、之が對  
策として、大正六年三月組織及名稱を變  
更して、株式會社園池製作所とし、資本  
金五十萬圓を擁するに至れり、工場を東  
京市外大崎に設けて、専ら工場用機械器  
具を製作し、千代田組、三井物産、高田  
商會を通じて、一般に供給しつゝあるが  
現重役は取締役社長園田武彦、專務取締  
役池田靖、取締役園田忠雄、監査役吉富  
磯一等の諸氏なり、因に園田武彦、園田  
忠雄兩氏は、財界の巨人園田孝吉氏の後  
嗣及び兄弟にして、獨立獨歩、上流社交  
界に氣を吐きつゝあり、池田靖氏は東京  
高等工業學校機械科の出身なり。

株式會社東京製鐵所

所在地 東京府葛飾郡砂村字新田六三七

設立 大正六年六月

資本金 三萬五千圓

代表者 專務取締役立見齋吉

東京製鐵所は、大正六年六月の創立に係  
り、其の事業は諸機械鑄造並に再製鐵製  
造販賣等なり、同社が將に事業其緒に就  
かんとしたる大正六年十月一日拂曉、前  
古未曾有の大暴風にて、其建築物は破壊  
され、續いて大海瀕の爲め一物をも存せ

株式會社東京製鐵所、日染合資會社、日本加工製紙株式會社

ざる大損害を蒙り、越へて大正七年一月  
十日祝融一過工場の全部を燒盡するの不幸に  
際會せし、右の如く頻々たる不幸に  
際會せし、幹部は聊かも屈せず百餘名  
の職工は、終日不斷の活動を繼續しつゝ、  
あり、同社の重役は、取締役社長田原當  
一、專務取締役逸見敦温、取締役森明夫  
三郎、中村矢平等の諸氏なりしも大正七  
年下半期より專務取締役に立見齋吉、取  
締役關銀次郎、早川德衛、小野又一郎、  
監査役に宗馨、狩谷定吉の諸氏就任半期  
末の大なる製鐵界の波瀾の渦中に在つて  
克く闘ひ、克く堪へ殊に專務立見氏は身  
を職工とともに奮勵し、彼を督し、我を  
努めて今日に及べり。

日染合資會社

所在地 東京府下大崎町居木橋三三番地

設立 大正六年二月

資本金 十五萬圓

代表者 出資社員小池功

日染合資會社は、大正六年二月の設立に  
係り、染料香料石鹼藥品等の製造を目的  
とす、其の創立以來の日子猶ほ未だ淺き  
も、同社の前身は西澤元助氏が個人にて

經營せし工場にて、同氏は數年間該工場  
を營み、斯業に對して學術的研究を怠ら  
ざりしが、時代の要求は遂に該工場の組  
織を變更して、合資會社となし、小池功  
氏其れが代表社員となり、爾來盛んに製  
造に従事し、今や其の製品の優良なる點  
に於て遙かに同業者中の群を抜くに至れ  
り、爾來本邦に於て斯業の大に振興すべ  
きの時なるを思ひ、合資會社を組織して、  
其れが代表社員となりしなり。

日本加工製紙株式會社

所在地 東京府下北千住町中組五百九十六番地

設立 大正六年二月

資本金 百五十萬圓

代表者

從來外國よりの輸入によりて、國家の需  
要を充しつゝありし、加工製紙即ちア  
トペーパー、マニラボール、クロモペー  
パー、各色艶紙、各色艶消紙等の精巧な  
る製品の生産に努めつゝあるは、日本加  
工製紙株式會社なり、同社は大正六年二  
月、資本金百五十萬圓を以て創立され、  
以來日猶ほ淺きも、曩に現專務井口誠一  
水野俱吉氏の合同經營に係る、日本ア  
ト紙製造合名會社の事業一切を繼承し、

其れを基礎として、更に擴大したるものなれば、根底の牢固たる、而して前途の發展膨脹や一目瞭然たり、同社の重役は常務取締役井口誠一、同水野俱吉、取締役堀越壽助、大川平三郎、同田中榮八郎、同山本留次、同藤原銀次郎、同下郷寅次郎、同穴水要吉、福澤大四郎、同監査役岡田來吉、中井三之助、同淺野泰次郎、同相談役大橋新太郎等の諸氏なり。

南洋貿易株式會社

所在地 東京市京橋區上柳原町

設立 明治二十六年

資本金 六百萬圓

代表者 社長田中丸善藏

本社は明治二十六年の創立に係り、大正六年五月資本金を三百萬圓に増加し、英領海峽殖民地、蘭領印度、佛領印度、比律賓諸島、濠洲、及び我が新占領地諸島を含む、南洋一帯の地域を中心として貿易、運輸、海産、鑛業、拓殖等各種業務の經營を目的とする會社にして、創業以來、順潮に發達し、業務擴張の爲め、大正八年一月六百萬圓に倍額増資せり、如何に會社の發展振の急劇なるかは、何人

も驚かざるものなし、是れ同社が戦時中に獲得せる幾多商權の基礎を確定し、平和克復後の商戰準備を整ふるの頗る緊要なるものあるが爲めに、從來設置せる占領地マリアナ群島のサイパン、西カロリン群島のヤップ及バラオ、東カロリン群島のトラック及ボナベ、英領マーシャル群島のマーシャル、同ビスマルク群島のラバウル、同ギルバート群島のギルバート、蘭領センベス島のメナフ等各地支店の大擴張を斷行せる外、新に新嘉坡支店及び蘭領瓜哇のスーラバヤ、同センベスのマカッサル、ボルネオ、バリツク、パン其他の出張店をも開設して、從來の營業範圍たりし裏南洋より、更に表南洋に進出せるのみならず、更に北米桑港、濠洲シドニー及マニラの貿易を開始する等、營業地域著しく擴大せり。

其取扱ひ商品は綿織物、莫大小、セメン、ト、雜貨、食料品、罐詰等の本邦商品の輸出販賣、コップ、鐵、砂糖、麻等の輸入にして、又之れに要する自給船腹の造船計畫を立て、從來所有の日邦丸(四六五〇)を海丸(一六〇〇)補助機關は、帆船二十二隻約七十噸の外、曾て買収せ

る鳥羽造船所にて建造を急ぎつゝあり。其利益金は最近三四回毎期五割の配當を繼續し、殊に七年下半年に於ては、百萬圓餘の純益金を計上するに至れるが如き恰も我が對南洋貿易額の増進と、形影相伴ふの觀あり、從つて戦後に於て我が對南貿易が一種の國是として、他迄も現狀維持に努めらるゝ限り、同社も亦永久に現在の隆運を持續し得べき當然の運命を有す、況んや會社は斯の如き自然的好運にのみ甘んぜず、自ら進んで平和克復後の對策を講じ、既得商權の維持新事業の撰擇等各方面より著々計畫の歩を進めて萬遠算なきを期しつゝあり、之れが經營の任に當れる現重役は、社長田中丸善藏、取締役岩崎清七、石川又八、佐藤適、監査役川崎肇、田中丸清次の諸氏にして、相談役には藤山雷太氏あり。

株式會社審美書院

所在地 東京市京橋區新町十三番地

設立 明治三十九年一月

資本金 二十五萬圓

代表者 社長濱田勤六

我が精工印刷界の泰斗にして、其名は夙に歐米印度の工藝界に喧傳せらる、株式

會社審美書院は、明治三十九年一月の創立にして、其の前身は京都眞美協會と稱せり、創立當初は資本金十一萬圓全額拂込なりしが、明治四十二年中十四萬圓を増資して現在の二十五萬圓(拂込済十八萬圓)となし、(外に社債五萬圓)、斯くて四十三年の日英博覽會に際するや、重役及社員三名を歐洲に派遣し、倫敦に中樞出張所を設けて、約二ヶ年の久しきに亘り歐洲各地に出版物の展覽會を開きて、其勞作品の販路を遍く擴布したる結果、爾來着々として其効果を奏し、同院獨特の印刷物及出版の海外に輸出せらるゝもの逐年増加するに至れり、今や廣汎なる出版物五十餘種に達し、就中東洋美術大觀の如きは、世界に比儔するものなき、大美術書にして(價格金九百圓)内外の賞賛を持せるものなり、同院の重役は、専務取締役窪田勤六、取締役上野榮三郎、同倉知誠夫、監査役中田敬義、同執行弘道等の諸氏なり。

代表者 田中榮八郎

株式會社審美書院は、本邦に於ける鐵道用諸機械製造販賣業の嚆矢たる服部商店の月島に於ける、工作部を本店と分離獨立せしめ、其れを基礎とし、大正六年十二月を以て、株式會社を組織したるものなり、隨つて其の會社として、この營業は日猶ほ淺きも、機械工業に關しては夙に地歩を占め、現在五十萬圓の資本を擁し、鑛山用捲揚機、精練用諸機械、鐵道用諸機械其他の製造に従事し、技術の精巧製品の堅實は世既に定議ある處にて現に鐵道院を始め、高田商會、淺野セメント等有力なる大會社の得意を有せり、而して在在重役は、取締役社長田中榮八郎、常務取締役窪田勤六、同中島統一、取締役岩崎治郎吉、同長谷川太郎吉、監査役小西安兵衛、同熊澤一衛、同松村精一、相談役大川平三郎、同服部鎮三郎、技術顧問松野千勝、工場長石川政良、主任技師若原收藏等の諸氏なり。

株式會社服部製作所

所在地 東京市京橋區月島通六丁目

設立 大正六年二月

資本金 五十萬圓

株式會社服部製作所、合資會社東洋商會、東京澱粉精製株式會社

合資會社東洋商會

所在地 東京市麹町區有樂町一丁目一番地

設立 明治三十一年四月

資本金 百五十萬圓

東京澱粉精製株式會社

所在地 東京府下大島町八丁目二二六番地

設立 大正二年

資本金 二十萬圓

代表者 取締役社長村上濱吉

同社の創立は大正二年なるが、歐洲大戰物發以來其製品は露、米、南洋諸國に對する重要輸出として歡迎され、品質亦外國製品を凌駕するの名稱を博せり、殊に本社製造の水飴は著名なる者にて、大正二年の博覽會には銀牌、大正五年の日本菓子博覽會には金牌、更に大正六年の化學工業博覽會には銀牌を授與さる、又同社のグルコースは我國に於ける製造の嚆矢にして品質優良米國及南洋よりの注文織るが如し、猶ほ是等以外に一般澱粉製造品一式、カラメル、澱粉等なるが何れも品質優良の定評あり、現今伊豆新島及静岡縣富岡の二ヶ所に有する工場能力のみにては、到底需要を滿すを足ざるの盛況にありて、更に原料精製所を増設の計畫あり、同社の重役は取締役社長村上濱吉、専務取締役中村喜三郎、取締役鈴木富士彌、同嶋山一郎等の諸氏なり。

### 田中鑛山株式會社

所在地 東京市京橋區北組屋町十二番地  
設立 大正六年三月  
資本金 二千萬元  
代表者 社長田中兵衛

長兵衛氏が、多年獨立を以て經營し來れる鑛山事業を基礎とし、時運の進歩事業の擴張に伴ひ、大正六年三月株式會社組織となせるものにて、公稱資本金二千萬元(全額拂込済)なり、而して同社は、鑛山、社用運送、經便鐵道、鑛物加工精鍊及び賣買を營業とし、大阪其他各地に出張所を置き、岩手縣釜石、臺灣の金瓜石宮城縣の新月、及石狩の文珠炭礦等を有し、其一ヶ年に於ける産額は實に著大なる者なり、而して同社の重役は、社長田中長兵衛、専務取締役田中長一郎、取締役工學博士香村小録、中大起氏道、監査役吉田七二郎等の諸氏なり。

### 株式會社住友鑛鋼所

所在地 大阪府西區島屋町  
設立 大正四年十二月二十五日  
資本金 六百萬元  
代表者 男爵住友吉右衛門

同所は明治三十四年本邦鑛鋼業の先驅たる名譽を荷ひたる合資會社日本鑛鋼所の業務を繼承せるものにて、初め大阪府西成郡北傳法村に在りしを、爾後業務發展の都合上、同四十年現在地に新築移轉せるものにて、大正四年十二月二十五日大

### 帝國製糖株式會社

所在地 臺灣臺中十番地  
設立 明治四十三年  
資本金 千五百萬元  
代表者 社長松方正徳

同社は明治四十三年十月山下秀實、松方正熊外數氏の首唱に依り創立せられ、分蜜糖、精製糖、糖蜜の製造並に販賣を目的としたりしが、近時時局に鑑み、更に鐵道及び船舶の業を開始し營業範圍の擴大を來すと共に、社運益々隆昌に向ひ、旭日天に沖するの勢を示せり、同社所有面積は七百九十一甲餘、又官有地及民有地を撰耕せるもの七千二百九十九甲餘、又原料採取總面積は三萬九千四百二十七甲餘なり、鐵道は五十六哩五分、船舶は二千噸級新造船二隻及び三千噸級既成船一隻を購し新造船二隻は他に備船となし三千噸級一隻は目下運航中にて成績良好なり、同社の重役は、創業以來専務取締役として社長山下秀實氏を佐け練達の聞高き松方正熊氏現に社長の職を荷ひ牧山清砂氏新に専務取締役に昇任社長と共に經營に全力を傾注しつゝあり。

### 吉林倉庫金融株式會社

所在地 滿洲吉林  
設立 大正七年八月  
資本金 二十萬元  
代表者 専務取締役堀井覺太郎

日支親善の表象たる可き吉林倉庫金融株式會社は、大正七年八月の創立に係はり資本金二十萬元の日支合辦組織にて、其れが目的とする處は倉庫業及び寄託貨物に對する貸附並に之等に附帶する各種の業務を遂行せんとするにあり、由來吉林の地たる排日の氣風旺なるにも拘はらず從來企劃設立されし日支合辦の會社は其の多くは少數の人士のみ關係せし爲め、往々一般公衆の疑惑を招くの惧ありき、然るに同社は是れと反し、會社創立の際に於て深く此間の消息を研究し、其れが設立の要旨も會社自身の利益を謀るより寧ろ吉林に於ける日支間の經濟的親善の一機關となり以て日支商工業の發展を助長せんとする大眼に着眼して廣く地方人士を網羅し盡せるは、實に同社成功の第一歩たりと謂ふべし、爾かも從來吉林商工業不振の大主因たる倉庫業を目的とせしは、是れ時勢の要望と相合致する

者にして、將來に於ける吉林商工業發展の爲め大に祝福すべき事なり、同社の重役は、専務取締役堀井覺太郎、取締役佐藤精一、同内垣實衛、同馮開秀、同何裕康、監査役細野喜一、同苗經魁、同吳獻之、支配人松尾惣太郎等の諸氏なり。

### 城東電氣軌道株式會社

所在地 東京市本所區錦糸町百九十三番地  
設立 大正二年八月  
資本金 六十萬元  
代表者 社長尾高次郎

同社は大正二年八月の創立に係り、資本金は當初より六十萬元にして大正六年十一月末の第八回決算尻に於て四十五萬餘圓を拂込み既に豫定工事の大半を完成し大正六年末開業式を挙げ、本社を本所區錦糸町現在の地に移す、同社創立當時は伯爵廣澤金二郎氏を社長とせしが、後之を大塚喜一郎氏に譲り、大正四年十二月更に尾高次郎氏に引繼ぎ現今に至れるも同社に於ける目的は都市膨脹郊外轉住の時世的要求に應ずるは勿論、其沿線たる中川畔の舟遊釣魚、或は江東六阿彌陀、龜戸天神臥龍梅、香取神社等の名勝古跡を探ぐるに足るべきものあり、同社の現

重役は、取締役社長尾高次郎、取締役大川平三郎、同大塚喜一郎、同大倉發身、同川野濱吉、同鶴岡英文、同植村澄三郎、同秋本豐之進、監査役福島宜三等の諸氏なり。

中外製藥株式會社

所在地 東京市神田區本業町十一番地  
設立 大正五年九月  
資本金 十萬圓  
代表者 社長伊東祐毅

同社は、大正五年九月の創立に係はるものにて、創立以來日尚ほ淺きも、四周の情勢は同社當局の奮勵と相俟つて着々其の功程を擧げ、現に最新の科學を應用して壯んに新時代の製藥に従事し、内地は勿論大に海外に輸出して濟生の福音を宣傳しつゝあり、同社の重役は、取締役社長伊東祐毅、取締役兼支配人多々良初一、取締役宮崎政吉、同久本泰三郎、監査役田中喬樹、同鈴木秀次、相談役田中丸善藏等の諸氏なり、因に社長伊東祐毅氏は多年内閣統計局にありて我國統計學界の第一人者、取締役兼支配人たる多々良初一氏は小壯敏腕の活動家なり。

合資會社圓城商店

所在地 東京市日本橋區本石町三丁目七番地  
設立 明治四十年十月  
資本金 四萬九千圓  
代表者 圓城半右衛門

合資會社圓城商店が藥業に執りしは其源を江戸時代に發す、彼徳川幕府が唐藥取業を許したる時、現合資會社圓城商店の代表社員圓城半右衛門の祖先是所謂問屋株を買得開業せるに創り、爾來年を閱する事一百有餘年、代を累ぬる五世、祖先の遺業を繼承進展し來れり、適々明治四十年十月法人組織となすの必要を認め、茲に圓城半右衛門の營業を繼承し合資會社圓城商店を設立し同時に更に營業課中に製藥並に委託販賣の二を加へ、東京府下染井の地に一大製藥工場を建設し之に關係諸方面の學者を招聘して名稱新藥の發見に努め傍らデグスチン其他の藥品製造に従事しつゝあり、同社製品として最も高評噴々たるは消化新藥デグスチンと丹波プロタイレンなり。

大日本鑛業株式會社

所在地 東京市赤坂區池田町六番地

縣最上郡舟形村に、專屬鐵工所を東京市深川區猿江裏町に設け盛んに操業しつゝあり、同社の重役は取締役社長武田恭作、取締役田島信、同磯部正勝、同前川益次、同波木金太郎、監査役山田信一、同鈴木紋次郎等の諸氏にて支配人は波木取締役之を兼ね、淺野總一郎氏相談役たり。

株式會社大阪株式取引所

所在地 大阪府東區北濱二丁目一番地  
設立 明治廿六年十一月  
資本金 一千四百萬圓  
代表者 理事長島德藏

同所は明治十一年六月の創立に係り、當初二十萬圓の資本金を以て營業を開始したるが偶々西南戰役後の幣制動搖に禍せられて十四年之を十萬圓に減却し尙も斯界の波瀾に漕して夙夜其の使命に忠なるや、明治二十六年二十萬圓、同二十八年三十萬圓、翌二十九年六十萬圓に増資するの盛運を招來し、其間日清戰爭を中心材料とす相場道の高潮頓と乗切りて金本位制の實施と共に内外金融の疏通苦しからんとする新機運を迎ふるに至りぬ、後日露戰爭の突發、ポツマウスの條約の締結を迎へて株式界は將に黃金時代に入

株式會社大阪株式取引所、東京鋼材株式會社、株式會社大林組

東京鋼材株式會社

所在地 本社東京府下大島町六丁目五十番地  
設立 大正六年四月  
資本金 三百萬圓(拂込二百萬圓)  
代表者 社長工學博士原口要

同社は、大正六年四月東清氏の經營に係る東京鋼材製作所及び東京スプリング製作所の事業を繼承創設されたるものにて營業種目は、各種スプリング、鐵道用、機械用、紡績用、電機用、兵器用、船艦用自動車用其他、坩堝爐及平爐鋼、高速度鋼、工具用鋼、特殊鋼、發條用鋼、鑄山用鋼、軟鋼類、特殊鋼鍛工品、各種曲軸車軸類、各種齒車、連結桿、アーム類、其他にて創業の即日より作業を開始して製品を市場に提供せり、製造能力は、大島町六丁目の鋼材工場に於ては一ヶ年平爐鋼二、〇〇〇噸、坩堝爐鋼一、八〇

株式會社大林組

所在地 大阪府東區北濱二丁目廿七番地  
設立 明治四十二年  
資本金 五十萬圓  
代表者 伊藤哲郎、白杉龜造

由來大林組は明治二十五年關西實業界の巨擘故大林芳五郎氏の創設せし處にして其の企畫經營宜しきを得、漸次隆昌の域に達し、遂に日本土木建築界の權威と公

同社は、大正四年十一月の設立に係る、創立以來日猶ほ淺きも其前身たる武田鑛業本店は古き沿革を有す、是より先き藤田組を辭したる現社長武田恭作氏は、先づ前記店舗を開設し秋田縣下の吉野鑛山を經營したるが、不幸にして成績良好ならず、爲めに大正三年九月閉店したるが、殘務の整理に取掛るや、偶々同鑛山に於て黒鑛の豊富なる脈層を發見し、前途頗る有望なるより、茲に資本金二百萬圓を以て株式會社を設立したり、吉野鑛山は秋田縣雄勝郡西成瀬村にあり、其産出に係る黒鑛は、金銀、銅鉛乃至重石を含む有する礦石にして、同社の業況は之が爲に著しく面目を改めたるに、元椿銀山として知られたる八盛鑛山を買収し、又山形縣下の木友炭山を併せ、尙關東鐵工所を引受くるに及んで、頓に事業規模の擴大を告げられたれば、資本金を五百萬圓に増加せり、同社は本社を東京市に置き、前記吉野鑛業所の外、八盛鑛業所を秋田縣山本郡八森村に、木友炭礦事務所を山形

認せらるゝに至る、其の組織を合資組織に改めたるは、明治四十二年にして、初業二十七年の星霜を閲す、同組は東京に東京支店を、小倉に小倉出張所を置く而して今日迄同組が竣工したる諸種の建築物中主なる者を擧ぐれば、東洋第一の稱ある東京中央停車場を初め、大阪灣築港、第五回博覽會營造物、日露戰役中の軍用鐵道敷設、廣軌復線一萬一千八十八呎の生駒山隧道工事、大阪新難波橋、京都停車場等にて、殊に明治天皇并に昭憲皇太后兩度の御大喪に當り、勅命に依つて桃山御陵及東桃山御陵の御造營を承り永世不滅の榮譽に浴したるは、同組の最も光榮とする所なり、同組の代表社員は伊藤哲郎、白杉龜造の兩氏にして、技師長は工學博士岡胤信氏なり。

株式會社兼松商店

所在地 神戸市海岸通三丁目二番屋敷  
設立 大正二年五月  
資本金 二百萬圓

同商店の創立は大正二年五月なりと雖も其の由來する所は頗る古く、即ち彼の豪放瀾達の資を有し、周竟周到にして克く海外の情勢を詳にせし有名なる兼松澤洲

翁の個人經營に係りし、明治二十貳年創立の兼松商店の業務を承繼しその組織を變更して、大正二年五月合資會社となしたるものなり、創立當初は資本金拾萬圓なりしも、事業の進展と共に大正五年六月之を倍加して、六拾萬圓に増資し更に大正七年四月一日、資本金貳百萬圓(全額拂込濟)の株式會社に變更したるにて主として濠洲、英國、南阿、南米に對する輸出入等に從事せるが、大戰以來著しく好況を呈せり同社は本店の外東京及びビシドーニーに支店を有し、南米アルゼンチン南阿ヨハネスブルグに出張員を派遣す、重役は、取締役北村寅之助(志度尼)、前田卯之助(本店)、入江金三郎(本店)、四方素(本店)、藤井松四郎(本店)等の諸氏なり。元取締役古立直吉氏は監査役に現任せり。

太平洋運株式會社

所在地 神戸市京町十一番地  
設立 大正六年七月十九日  
資本金 二百萬圓  
代表者 石田貞二

同會社は、大正六年七月十九日の創立に係り、本店を神戸市に置く、資本金は貳百

株式會社神戶米穀取引所

所在地 神戸市兵庫町水通三丁目一番屋敷  
設立 明治二十九年九月  
資本金 八十萬圓  
代表者 理事長伊藤英一

同所は明治二十九年九月の創立に係はり當初の資本金は二十萬圓なりしも、日露戰役後即ち明治四十年上半期に於て、一

躍五十萬圓に増資し、更に大正四年下半

期に於て三十萬圓を増加せり、同所は兵庫

庫水通三丁目本社及米穀市場を置き

神戶元町通四丁目株式市場を設け、株式

仲買人七名(身元保證金五千圓)米穀仲

買人八名(同五十圓)米株兼業二十四名

(同七千圓)合計三十九名の多きに達す、

而して之が代表者と取引所理事者とを以

て大正七年三月創立を告げたる資本金貳

百萬圓の神戶取引信託株式會社を運營し

専ら取引の圓滑を期待しつゝ、あり、同所

は株式取引に於て明治四十三年上半期の

出來高四十七萬三千株を最高とし、大正

三年上半期の二萬五千株を最低とし、毎

期十萬臺を抜き、大正四年下半期の如き

は無慮四十三萬二千株の記録を作れり、

而して米穀取引に於ては、株式直取引賣

買大正七上半期九十九萬株、同下半期

百二十七萬株、大正三年下半期早くも千

萬石を突破し、大正五年下半期更に二千

四百萬石、六年下半期稍々下りて千八百

萬石に達せり、同所は理事長伊藤英一、常

務理事岸本恒太郎、理事高木庫二、乾繁

東和汽船株式會社

所在地 神戸市海岸通二丁目六番地  
設立 大正五年五月  
資本金 一千萬圓  
代表者 菊池吉藏

同社取締役社長菊池吉藏氏は、經年支那に航して、遍く禹域の各縣を踏破し、明治四十年滿洲營に店舗を開設し、合名會社東和公司と號し、主として船舶業を營み、兼て貿易業に從事す、後東西海運業の中樞地なる神戸に地を下し、大正五年五月神戶東和汽船株式會社を創立し、從來東和公司船舶部の事業を繼承せしめ、東亞公司貿易部は、依然存置して現に三宅駿二氏の管掌に任ねたり、時間以來燭眼なる菊池氏は巧に備船を爲し、瞬時にして巨利を博し、資本金拾萬圓の同社をして一躍壹千萬圓に増資し、現に淺間丸東和丸、東蒙丸、東隆丸、龍裕丸、總計二萬三千五百噸の外新造船を有す。

長崎紡織株式會社

所在地 長崎市幸町一丁目  
設立 大正六年十二月  
資本金 二百萬圓

東和汽船株式會社、長崎紡織株式會社、松本米穀製粉株式會社

代表者 社長肥塚源次郎

同社は、大正六年十二月の創立に係り、當初資本金一百萬圓を以て、長崎築港埋立地に工場を設け、リング二萬三千二百錠を操業したるが、折柄原棉の豊作低落、支那動亂の平定、綿製品の需要激増等に

て開業勿々莫大の利益を擧げ、幾何もなく、リング二萬錠の増設を計畫し、之が

資金六十萬圓は、工場財産を擔保として

大阪なる三十四銀行より借入れ、以て第

二工場の建築に着手し、大正六年九月よ

り其一部の運轉を開始し、今や完成を見

るに至れり、猶ほ第三次擴張計畫として

中糸紡績及び織機増設の内議あり、資本

金は其後倍加して、今や同社は資本金二

百萬圓、拂込百五十萬圓を擁して着々事

業を進捗しつゝなるが、同社は遠からず

九州に於ける屈指の紡績工場たるに至る

べし、同社重役は、取締役社長肥塚源次

郎、取締役橋本辰二郎、同脇山啓次郎、

同志方勢八、同肥塚慶之助、監査役藤瀬

宗一郎、同岡村勝正、相談役山邊丈夫、

同高木與作、同永見寛二等の諸氏なり。

松本米穀製粉株式會社

所在地 埼玉縣熊谷町百七番地

大安生命保險株式會社

設立 大正三年三月  
所在地 橫濱市本町六丁目八十四番地  
資本金 一百萬圓  
代表者 社長木村利右衛門

松本米穀製粉株式會社は、同社前社長松本平藏氏が松本平藏商店の名に於て、天保年間埼玉縣熊谷町に米穀商を開始し、爾來連綿として、八十有餘年の星霜を経來りしに始まる、而して人文の進歩世運の進展が組織變更の必要を感じ、松本平藏氏及び現社長松本眞平氏等が、明治三十九年、從來の主業たりし米雜穀肥料販賣の外に米國製ロール式製粉業を開始し極力製品の改善に努力し、着々其の功を奏するや、大正三年三月全部拂込済三十萬圓の株式會社と爲し、一族郎黨を擧げて主たる株主となせり、同社は米雜穀肥料部と製粉部に分ち、前者は關東地方を始め、信越東北諸部及び有名な米産地と商取引を結び、後者は埼玉全部を始め群馬、栃木、信越及び東北諸部を主たる販賣地とし、年々三十萬袋の製品を市場に供給しつゝあり、因に社長眞平氏は明治三十四年の東京高等商業學校出身の壯年實業家なり。

勝田汽船株式會社

設立 明治二十七年一月  
所在地 神戶市海軍通二丁目六番地  
資本金 二百五十萬圓  
代表者 理事長高橋彦次郎

現社長勝田銀次郎が、個人財産と過去の經歷とを以て、勝田商會名義の下に海運業を開始したるは、是れ實に明治三十五年の初春なり、是れ同社は今日の大を爲すの第一歩たり、後ち明治四十年の頃、所謂戦後恐慌の色彩濃厚となりしも勝田氏は悠々經營の術に當りしが、計らずも歐洲大戰の勃發に際し、茲に一大發展をなし帝國海運界を席捲するに至れり、從つて時勢の進運に伴ふ爲め、大正六年八月資本金五十萬圓の株式會社に改め、更に大正七年一月一日一躍資本金を一千萬圓全額拂込となし次で大正八年更に二千萬圓となす。其の所有船八隻五萬噸、備船十數隻十萬噸を有し、東京、橫濱、函館、門司等に出張所、代理店を設け、而して世界重要航路に於て、其の船影を見ざるなきに至れり、現重役は専務取締役社長勝田銀次郎、専務取締役營業課長村田彌次郎、取締役會計課長青木晋松、監査役中川周吉、船航監督課長門宗太郎、庶務課長中西治等の諸氏なり。

千代田印刷株式會社

設立 明治四十五年七月十二日  
所在地 東京市京橋區弓町十二、十三番地  
資本金 五萬圓  
代表者 社長師岡智

同社は佐野政道諸氏の發起の下に、明治四十五年七月十三日創立を告げ、本社及工場を京橋區弓町に置く、當初の資本金は金十萬圓内拂込二萬五千圓なりき、而して初期決算に於て、九千餘圓の收入を擧げ、爾後一萬二千圓乃至一萬五千圓の收入を擧げ來りしが、時間の影響を蒙り紙價及インキ類の暴騰及一般勞銀の騰貴職工の補充難に遭遇し、大正六年四月之が改革を斷行せり、後大正七年三月資本總額五萬圓に改め、新陣容既に整然たり、同社の重役は静岡縣知名の素封家伊豆銀行其他該會社の重役たる師岡智氏取締役社長たり、取締役は菊地武次、同秋谷梅之助、監査役香取壽郎等の諸氏にて加ふるに敏腕の評ある武井萬二郎取締役兼支配人として、益々業務の擴張を圖りつゝあり。

株式會社名古屋株式取引所

所在地 名古屋市中區南伊勢町

千代田印刷株式會社、株式會社名古屋株式取引所、近江水力電氣株式會社

株式相場の大權威として、玄人筋に注

視されつゝある名古屋株式取引所は、東西大市場の間に介在し、同時に本邦中腹の生産地を控へ居れば、其他位や重且大なりと謂はざる可からず、同所は明治二十七年一月の創立に係はり、當初は僅々十萬圓の資本金なりしも、日露戦役後經濟界の膨脹に伴ひ業務の繁榮著しく、同四十一年上期一躍七十萬圓に増資せしも間もなく四十二年下期に至つて、倍加百五十萬圓に増資し、大正六年下期更に二百五十萬圓に増資し、以て現今に及べり、同所の仲買人(身元保證金一萬圓)は四十名の多數なれば、賣買出來高も從つて多額に達し、大正二年八十九萬株、大正三年九十九萬株、大正四年三百六十六萬株、大正五年四百六十六萬株、大正六年三百六十八萬株、大正七年三百三十七萬株の多數取引を見るの盛況にあり、同社重役は、理事長高橋彦次郎、理事後藤幸三、平子徳右衛門、監査役服部小十郎、村瀬淳一郎の諸氏にて、重なる職員

近江水力電氣株式會社

設立 明治四十年十月三日  
所在地 滋賀縣犬上郡彦根町大字平田  
資本金 二百萬圓  
代表者 社長前川善平

は、出納部主任島木謙之助、商務部主任祖父源治郎、庶務部主任太田松兵衛、秘書役野村仙之助等の諸氏なり。同社は現常務取締役たる前川善平氏等を中心とし、傍ら我國電氣化學工業界の泰斗たる野口遊氏を後援とし、明治四十年十月三日創立を告げ、水力事業中比較的吉き沿革を有す、本社を滋賀縣彦根町に置き、當初資本金五十萬圓にて愛知川流域の水力を利用するに止まりしが、明治四十二年二月三日姉川水電株式會社發起人と協合したる結果、姉川上流の水利權を繼承し、大正三年一月資本金を百萬圓とし、更に大正三年九月琵琶電氣株式會社發起人と、又同四年七月湖州電氣株式會社、取締役と妥協の結果各其水利權を増加せり同年九月資本金を二百萬圓に増加せり同年九月佐目子谷水力電氣株式會社發起人との協合を俟つて、湖東湖北の要地を其勢力範圍とし、大正七年六



月資本金を四百萬圓に増加せり、取付電燈九萬六千燈、電力一千四百馬力に上る現重役は、常務取締役前川善平、取締役安居喜八、同吉田半治郎、同西田久太郎、西川仁左衛門等の諸氏なり。

大日本石油株式會社

所在地 東京市神田區美土代町一ノ三番地  
設立 大正五年十二月  
資本金 七百五十萬圓  
代表者 會長伊藤義五郎

本社は時局に於ける石油量の急に應ずると共に、豫ての懸案たる外油驅逐の實を全ふせん爲め、寶田石油系を地盤とし、新に目論まれたるものにて、創立當初の資本金は五百萬圓なりしが、翌六年五月豊礦石油株式會社及新日本石油株式會社を合併して、更に二百五十萬圓を増加し七百五十萬圓の公稱資本を有し、新會社中の隨一に推さるゝに至りし者にて、新潟、秋田兩縣、北海道及臺灣に亘る所有鑛區の内、新潟縣下の朝日鑛場外九ヶ所、秋田縣の豊川鑛場外三ヶ所、及北海道振老鑛場にロータリー、其他鑿井機を据附平均日産額四十五石位の實績を收めつゝあり。

大正七年八月秋田石油鑛業株式會社の鑛區及鑛場所在の財産全部を買收せり、目下所有鑛區總面積は、五千五百四十六萬六千三百二十二坪にして、其の鑛場及内譯左の如し。  
新潟縣下に朝日、新津、金津、東島、鳥越、宮本、東山、名立、牧、横山、秋田縣下に豊川、道川、小國、落合、北海道に振老あり。

縣名	合 計
新潟縣	二四、〇四三、九一九
秋田縣	二六、四四四、八四一
北海道	三、五三三、一三五
臺灣	一、三八四、四一七
合 計	五五、〇四六、三二二

試 掘	採 掘	出 願 中	計
四三	二八	四	七五
四六	三	四	五三
六	一	一	八
一	三	一	三
九五	三五	九	一三九

大正七年十二月末の營業成績は、純益金二萬九千四百三十圓、前期繰越金二萬一

株式會社松昌洋行

所在地 東京市京橋區銀座三丁目十七番地  
設立 大正六年七月  
資本金 一千萬圓  
代表者 社長山本唯三郎

松昌洋行は明治二十二年、下村廣政氏の發起に係るものなり、當時は主として支那に於ける鐵道用枕木を北海道より輸出せるを主なるものとし、事業の範圍甚だ狭少なりき、然れども時勢の推移と共に

發展の緒につき、事業の統一を圖り以て飛躍するの必要に迫られ、大正六年七月組織を改善して合資會社山本總本店松昌洋行と改稱し、資本金二十五萬圓となし從來の松昌洋行の事業は、之れを株式會社松昌洋行に繼承せしめ、資本金を五百萬圓と爲せり、營業の範圍は頗る廣汎に亘れるも、之を木材、石炭、海運の三分課に統一し、事業の發展を期したるが、遂に木屋瀨探炭株式會社(資本金五十萬圓)、福岡鑛業株式會社(資本金七十萬圓)、株式會社芝浦造船所(資本金百萬圓)、株式會社高尾造船所(資本金五十萬圓)、咸興炭礦株式會社(資本金六十萬圓)の五社の事業全部を山本總本店に於て管理することとなり、事業の範圍の宏大なる實に驚くべきなり、同行に於ける木材部及石炭部は樺太泊、伯州米子に出張所を設け、松材及建築用丸太の伐採を營み、炭礦部は支那直隸省京奉線唐山驛を中心とせる開平炭礦の産炭一手販賣を爲すの外、神奈川縣東神奈川に炭炭製造所を營む、船舶は四隻一萬五千五百餘噸の所有船と二十二隻六百萬噸の備船とに依り、今や世界の各地に其名を轟かせり、同行は社

紀州貝卸株式會社

所在地 和歌山縣西牟婁郡新庄村三百七十三番地  
設立 大正七年二月  
資本金 五十萬圓(拂込金額十七萬五千圓)  
積立金 三千七百圓  
代表者 常務取締役橋本六之助

貝卸製造は、最近の事業なりと雖、大正七年の如きは輸出額一千萬圓を超へむとするの盛況にありて、重要輸出品の地位

長山本唯三郎、營業部長稻生二平、船舶部長小野衛二氏等之れに膺り、炭礦部長の風間禮助氏併に經理部長の森一兵氏等皆松昌洋行の柱石たり、而して同社販賣炭は、福岡炭、木屋瀨炭、高谷炭、本高江炭、三隔炭、以上福岡鑛業會社採掘、開平炭、(當會社日本一手販賣)、咸興炭(咸興炭鐵道株式會社採掘)、支店、出張所は左の如し。  
東京市京橋區銀座三丁目

株式會社	松昌洋行
大阪市西區北堀江 同	大阪支店
福岡縣若松市本町 同	若松出張所
同門司市棧橋通 同	門司出張所
同福岡市外西新町 同	福岡出張所
名古屋市西區船入町同	名古屋出張所

を占むるに至れり、當地方に於ては明治三十六年頃、本社常務取締役橋本六之助氏等家庭工業的に、製造を開始したるを嚆矢とす、而して原料は總て他地方より供給を受くるも、當地方民が先天的に貝卸製造に適せる爲にや、順次長足の發達を遂げ、近年に至りては鮑、榮螺卸にありては、大半當地方の生産に係り、紀州貝卸の名聲は、市場に噴々たり、然れども此好況は延びて小工場の簇出と爲り、原料の購入、製品の販賣等互に激甚なる競争を惹起し、職工の爭奪寧時なく同業相食み、遂に粗製濫造に陥り、積弊百出殆んど收拾すべからざるに至る、是に於て乎同業者を糾合して事業の合同を行ひ各般の設備を改善して、以て生産費の輕減を圖り、併せて品種の統一を期するは戰後世界的商戰に對應するの吃緊事業なるに鑑み、業界の先聲橋本六之助、南平藏、野村重吉、鈴木茂等の諸氏個人營業を合同し、組織を株式會社に改め、大正七年二月二十日を以て開業を爲したり。而して會社の商號を紀州貝卸株式會社と命名したるは本社が尤も本縣内の貝卸工業を代表するものなればなり。

鮑貝、榮螺及玉貝の各種、貝卸の製造并に原料の販賣を目的とし、榮螺、玉貝は十四ラインより二十八ラインまで、鮑貝は十四ラインより五十ラインまで、如何なる品種にても註文に應ずべく準備しあり、殊に各種の彫刻卸に就ては、嶄新なる意匠を凝らしつゝあり、尙本社製品は、多年研究の結果一種の艶出法を發明し他の模倣する能はざる特有の光澤を有し、番型、穿孔の優良劃一と兩々相俟て取扱業者の賞讃を博しつゝあり、而して營業は尤も着實穩妥を主眼とし、積極に趨らず、消極に失せず、永遠の間に於て自他俱に利を收むるを以て目的とするを以て、仕入、販賣共に篤實なる取引先多々益々増加の状況にあり。

出張所を設け、原料の蒐集と工場監督を爲さしめつゝあり。而して本社製品の大部分は、輸出品なるに付、世界的經濟界の影響を受ける事尤も鋭敏なり、昨年五月以後は彼の英國の輸入解禁の爲め、非常の好況を呈したりしか、休戦條約成立以後先安見込注文手控の爲め一時商況頗る不振を極めつゝありしが本社は尤も堅實なる營業方針を執り來りたると共に、多大の信用とを有するを以て其影響を蒙ること、比較的僅少にして反つて將來に來らむとする反動時代に對する畫策に忙殺されつゝあり、尙昨年未だ於ける第一期の利益配當は年一割にして、今後毎期一割以上の配當を爲すべき確信あり、現重役は常務取締役橋本六之助、取締役南平藏、同野村重吉、同鈴木茂、監査役橋本周次郎、同森脇竹藏、同生駒恒七、會計部長野々田九平、製造部長南定一良、計算主任杉村政次郎の諸氏なり。

日本電球株式會社

所在地 京都市下京區四條通御旅町  
設立 明治四十年九月  
資本金 二十萬圓(内拂込金八萬圓)

代表者 社長橋本重一  
營業項目 マツダ電球並に電氣器具及機械販賣  
近時電氣事業の異常なる發達に伴ひ、之が材料の一たる電球造製に従事し、斯界に於て有数の地位を占むるに至りたるものに、日本電球株式會社なるものあり、當會社は初め河村春太郎氏が、大阪市西區靱南通五丁目に於て開始せるものにして、現在の地に移轉せる當時偶々歐米に於てタンダステン電球の發明あり、該電球は消費電力僅小なるに由り、需供兩者に多大なる利益を享受し、國家經濟上の利益も亦尠からざるを以て、同氏は之が研究に志し、令弟現會社技師長河村久吉氏を英國に派し、之が研究に従事せしめ大に得る處あり、爾來時勢の進運に従ひ電球の需用日に月に激増し來り、工場擴張の機運に迫られ、同氏の先輩野口道、堀啓次郎、範多龍太郎、安宅彌吉、土岐儀、廣田精一、川北榮夫の諸氏主として同氏を援け、男爵横山隆俊、横山章、伊藤由太郎、渡邊義郎氏株主となり、遂に明治四十三年九月資本金を二十萬圓となし、當會社の設立を致せり。爾來萬圓の設備を整へ、一ヶ年二百萬圓の製産能力

を有するに至り、殊に英獨第一流電球工場と關係を結び、技術上の連絡を保ち其進歩に隨伴するに努め、今や同業者の中に一頭地を抜き、偉大なる發展をなせり其營業成績の如きも良好にして、常に一割以上の好配當をなし來れり、同社は創立以來僅か十餘年にも係らず、此の隆盛なるに於ては、今後の發展豫測するに能はざるものあり。

又當社の製作品は、炭素線並にメタライズト電球、タンダステン電球、着色各種電球の外に專賣特許を得たる、暗明自在電球改良ハイローランプ、經濟電球、電流盗用豫防裝置等にして、着色電球は同社が多年腐心學理と實驗に基き、容易に褪せざる色素の加合に依る嶄新なるもの、殊に大正二年一月米國ゼネラル電氣會社の日本に於て保有せるマツダ、トロン、ワキヤ、タンダステン電球の特許實施權の分讓を受けて、熾に同品の製造をなし、斯界に一新紀元を畫せり、かくの如くにして、當會社は今や大に事業の大發展を來したれば更に工場の新設計書をなし、愈々益々斯界に活躍を試みむとす、大正三年十一月に到り、電氣科學

江井ヶ島酒造株式會社

進歩趨勢は小資本の製造工場の經營を不利なりとし、其製造を東京電氣會社に委託し、本社製造工場を閉鎖し、定款を改正し専ら白熱電燈球及電氣器具機械の販賣に従事し以て今日に及べり。

一、大正五年十一月京都に出張所を設け各種電球の外電氣器具、機械を陳列し其使用法を演習せしめ、汎く電氣知識の普及を圖り、一面京都電燈會社用電燈球供給の外一般に販賣を開始せり。

江井ヶ島酒造株式會社

所在地 兵庫縣明石郡大久保村魚住三五  
設立 明治二十一年六月  
資本金 一百萬圓

代表者 社長橋本重一  
日本酒の本場は灘、伊丹、兵庫縣の重要産物は清酒なるは世人の知る所、灘も伊丹も兵庫縣下の地名である。

江井ヶ島も兵庫縣下の一地名、往昔より清酒の醸造をなし來つたが、明治の初年に至りこれが醸造に従事するもの二十七戸の多きに達し、漸次隆盛の域に向はんとした、此機運を助長し、大に江井ヶ島の清酒をして名を擧げるには、團體共同して従事するに優れる手段はないと、有志の議經り同社の設立を見るに至つたのである。發企人諸氏の理由とした會社組織の動機は(1)災害に罹るも一家の衰頹せざること、(2)貯蓄の餘財を利用すること、(3)原料諸品の買入を廉らしむること、(4)戸主の婦女幼年たりとも商業衰微せざること、(5)清酒の販賣を擴張すること、等である、發企人の氏名は橋本重一、橋本八右衛門、川崎權次郎、衣笠豊太郎、田口政五郎の諸氏である。

しないのである、従つて同社醸造の清酒は漸次年と共に其眞價を認められ、今や米國にまで販路大いに擴張し、益々發展の機運に向へり。

抑も當會社は社長ト部兵吉氏の祖先が寶曆六年始めて清酒を醸造し、爾來百五十餘年間繼續せる所の酒造業を繼承して、明治廿一年六月創立せる者にして同社の基礎は創業以來堅固に築き上げられ、最初資本金三萬圓なりしが、漸次増資して目下資本金一百萬圓諸積立金十九萬五千圓にして、十六ヶ所の醸造場と貯藏倉庫

精米所、製樽場、壘詰所、荷造場等十ヶ所の建物有す、此坪數五千有餘坪なり而して、同社は創業以來常に醸造法に一大改良を加へ、尙多年の經驗と學理を應用し、品位高尚優美の銘酒を醸成せる結果、明治三十七年十一月米國聖路易萬國博覽會に於て、最高大褒賞金牌を受領せるのみならず、其他内外國博覽會、共進會に於て、金銀賞牌等二百七十餘個を受領せり、而して一期の造石高は一萬六千餘石にして近來大に販路を擴張し、内地は素より支那、朝鮮并に米國、布哇等各國到る處に販賣店あり、爲に海外輸出

高は一ヶ年間優に五千石を以て算するに至れり。

本年度より一層業務を擴張し、更に味淋及燒酎の製造を開始し、味淋醸造場一ヶ所、燒酎蒸餾場二ヶ所を増設せり。

而して同社目下の首腦者左記之如し。  
社長ト部兵吉、專務ト部豐太郎、常務ト部八右衛門、常務川崎文太郎、ト部隆三、田口政五郎の諸氏なり。

### 大阪電燈株式會社

所在地 大阪市北區中之島  
設立 明治二十年十二月  
資本金 二千六百六十萬圓  
代表者 社長田所美治

沿革 近世に於いて最も利便多くして、最も需要の大いなるものは、電燈事業なるべし、今大阪電燈株式會社の起原を尋ぬるに、今を去る三十餘年前即ち明治二十年十二月を以て、大阪市に創立せられたるものなり、創立當時は僅か四十萬圓の資本金を以て、營業を開始せるものなるが、何分人智進まず、文明の利器を利用する事を知らず、當時に於ける需要高は

大阪全市に亘りて僅かに五百燈に過ぎざりしと、今日よりして之れを見れば眞に隔世の感ありと云ふべし。

されば其の當時に於ける、本社の經營は頗る困難を極めしかど、其後世運の進歩發達に伴ひ、漸次需要者の増加するあり隨て營業狀態も次第に順調に向ひしが、二十八年には却つて反對會社の計畫を見るに至りし故遂に之れを買収したり。

明治三十六年第四回内國勸業博覽會の大坂の地に開催さるゝや、需要頓に増加したり、越へて三十九年大阪市の間に報償契約を締結したる結果、本社の基礎も愈々強固となり、社運益々發展の機運に乗せる時偶々日露戰後一般の財界著るしく好況を呈し、茲に社運も亦大に熟し一大膨脹を見るに至れり。

本社の營業區域は、大阪市及其近郊は勿論堺市に出張所を設立し、遠くは舞鶴、佐世保、門司地方にも支店を設け、業務の擴張を計り、逐次其勢力範圍を廣むる事に腐心したるが、本社は營業の統一上門司支店の事業は之れを九州電燈軌道株式會社に譲渡したり。

### 櫻島土地株式會社

所在地 大阪市東區北濱五丁目二十二番地  
設立 大正五年一月  
資本金 一百萬圓 拂込金額三十萬圓  
代表者 常務取締役小倉正徳

當會社は大正五年十一月十八日同時設立により成立し、住所を大阪市北區富島町六十番屋敷に定め、西區櫻島町西成線以北の埋立權利地を獲得せり、次て大正七年八月一日住所を東區北濱五丁目二十二番地に移したり。營業の目的は土地建物の賃貸及其賣買等にして、現重役は小倉正恒、山下芳太郎、松本順吉(以上取締役)、草鹿丁卯次郎、日高直次(以上監査役)の諸氏なり。

### 日本製布株式會社

所在地 京都市紀伊郡向島村  
設立 明治二十九年二月四日  
資本金 三百萬圓  
代表者 専務取締役井上金治郎

當社は明治二十九年二月四日、主として綿ネル製造販賣の目的を以て京都市に設

其需要は供給力と權衡の相一致せざるの盛況を呈するに至りしかば、發電力充實の必要を生じ、爲めに大擴張を決定する事となり、北區安治川に最新式の發電所を建設し、尙進んで宇治川水力電氣株式會社との間に電力供給を受くるの契約を締結し一層の進運を爲すに至れり。

顧みれば本社の曩きに營業上の都合に依り、佐世保支店の事業全部を擧げて、京都電氣株式會社に譲渡せりと雖も、今は單に營業の統一上打算して譲渡せるものに過ぎずして、其當時に於ける本社の營業狀態は何等の不安ある事なく、依然として向上の域に進みたるなり。

吾人は餘りに過去の事に多くの貢を費せり、過去は要するに過去に過ぎざるなり、今筆硯を新たに於て、最近財界の大膨脹に依つて來せる本社の活躍振りを紹介せんとす。

現況 本社の現在に於ける點燈數は大阪市内に於て百二十六萬二千九百有餘個にして、三百八十三個の孤光燈の外に電動機八千三十馬力、電力裝置三千二百十八キロワットと云ふ驚く可き數字を示したり、尙市外に於ては電燈數三十七萬三千

三百個を供給しつゝあり、恁は一に時運の進展に依る處多しと雖も、一面又同社の經營宜しきに適ひたる結果と云はざるべからず。

今最近(七年度下半年)の營業狀態を見るに當時に於ける資本金總額二千六百六十萬圓(全部拂込済)、諸積立金三百三十萬圓減價償却累計四百八十萬圓にして、純益金百七十五萬三千有餘圓なり、而して其分配方法左の通りなり。

- 利益金 一、七五三、三四〇圓
- 内法定積立金 八〇、〇〇〇
- 別途積立金 一五〇、〇〇〇
- 特別積立金 二〇、〇〇〇
- 役員賞與及交際費 四五、〇〇〇
- 株主配當金 一、二九六、〇〇〇
- 後期繰越金 一六二、三四〇

即ち年一割二分の好配當を行ひ得たるものなり、尙最後に特筆すべきは製作所の事なり、本社は電燈及び電力供給の事業以外に製作所を設立し、各種の電氣機械を製作し、需要者の好評を博しつゝあるは甚だ喜ぶべき現象なりとす。

首腦人物 取締役社長田所美治、常務取締役千頭茂壽、取締役寺田甚與茂、同島

立せられたり、當時は本社を京都二條城附近に置き社名を五二會京都綿糸株式會社と稱し、資本金五十萬圓を以て事業を開始せるが、明治二十九年十一月一日工場所在地たる葛野郡朱雀野村に本社を移轉し、専ら捺染綿糸の研究に従事し三十二年に至りては、其研究完く成り舶來品に劣らざるの好評を博するに至れり明治三十二年十一月一日京都綿糸株式會社と改稱、明治三十四年四月八日京都紡績株式會社を合併し、資本金八十萬圓となる、爾來紡績の増進、製織起毛の擴張を圖り之れに費す、資金亦尠からざるを以て、明治三十八年七月十四日資本金八十萬圓を増して百六十萬圓とし、明治三十九年九月社債金六十萬圓を募集して之れが資に充て一方には、更紗捺染の目的を以て、伏見に一大捺染工場設置の計畫を樹て其資金の爲めに明治四十年一月更に資本金三百四十萬圓を増して、五百萬圓となすの決議を爲したり、明治三十八年より明治四十年に至る、三ヶ年間は毎期年三割の配當をなし、一時は同地方に於ける事業界羨望の的となりしも、後ち綿糸の不況、資金固定に基く金融の

蹉跌の爲め昔日の隆盛を見るを得ざるに至れり、明治四十一年六月十五日日本製布株式會社と社名變更す、明治四十二年九月伏見工場は完成し、愈試運轉をなすに至りしも、同年末豫て當社の金融機關として、多大の便宜を感せる一銀行の破綻の爲め、營業の方針根柢より覆へざるに至り、明治四十三年十月資本金を半減して二百五十萬圓となし、大正二年十月、社債百萬圓満期償還に要する資金、一百萬圓を日本勸業銀行より借入れの際其附帯條件たる資本金を更に百五十萬圓に減少、伏見工場を廢し、他の工場は全部賣却の件は大正四年七月を以て遂行し本社を現今の場所に移し、専ら更紗捺染ホワイトシャーチングに力を注ぎたるに大正五年度に於ては、内地向のみならず昌え、大正六年末資本金を倍加し、三百萬圓となしたり、大正六年以後今日迄年二割の配當を持続せり、特に最近に至りて南洋、浦羅斯德方面への輸出著しく、有望となれり、現今の重役は専務取締役井上金治郎、取締役加瀬正太郎、同廣瀬滿正、監査役松居庄七、同新實八郎兵衛

大阪商船株式會社

所在地 大阪市北區富島町六十四番地  
設立 明治十七年五月  
資本金 五千萬圓 積立金六千六萬圓  
代表者 取締役社長堀野次郎

相談役野澤源次郎、同關本英作の諸氏なり。

は開かれたりと雖も、之に加入せざる船主尠しとせず、依然競争の態度を持續し經營依然と困難を告ぐるを以て、事情を政府に具陳し、明治二十一年より向ふ八箇年間毎年金五萬圓の補助を得て更に郵便物航送料として前記補助期間中更に毎年金二萬圓を下附せらるゝこと、なる是に於てか、本社は萬難を排し、積弊を矯め、銳意斯業の發展と船舶の改修とを計り、明治二十六年資本金を百八十萬圓となし、二十七年に更に資本金を増額して二百五十萬圓となせり。此年朝鮮の事變及び日清の戦役の際會し、本社は三十餘隻一萬二千五百餘噸の船舶を擧げて、軍用に供し、以て緩急奉公の任を盡したり、又戦後國運の伸張は本社の業務擴張を促がして止まず、乃ち明治二十九年臺灣總督府の補助を受け、茲に内地臺灣間の定期航路を開始せり、此年資本金を五百萬圓に増加し、翌三十年更に壹千萬圓となし、又明治三十一年に至り、政府補助の下に、清國揚子江沿岸の航路を企劃せり、然るに戦後事業擴張の反動襲來し金融の緊縮となり、一般商工業の不振を來たし、航運業も著しく不況に陥れり、

爲に本社の經營隨て困難を感じ、資本金を當時拂込額五百五十萬圓に減額し、専ら業務刷新を期するの止むなきに至れり然れども一般商界の漸次恢復し來ると共に、明治卅二年臺灣總督府の補助によりて更に南清航路を開始し、明治三十三年共立汽船會社を買収し、再び資本を増加して一千一百万圓とするの議を決せり、此年北清事變の起るに際し、二十四隻の船舶を軍用に提供し、翌三十四年伊豫汽船會社を買収し、其餘力を以て清韓兩國に於ける使用船舶を増加し、擴張資金として、第一回社債一百万圓を募集し、次で三十五年第二回社債一百万圓を募集し、三十六年更に第三回社債二百五十萬圓を募集すると同時に、第二回社債を償還し、著々船舶の充實改善航路の擴張、並に諸般の設備の完備を期せり。茲に明治卅七年日露の開戦となるや、本社は七十三隻七萬八千八百八十餘噸の船舶を提供してこれを軍國の用に供したり即此年下半期に入りて、三十三年總會にて決議せし、新株五百五十萬圓の募集を斷行し、三十八年時局の進展に伴ひ大阪大連線を始め、大阪安東縣及牛莊、天津

浦潮等の諸線の航路を開始せり、一面船舶の大部を擧げて更に軍用に供せり、翌三十九年平和克復せらるゝや、戦後の發展に資せんが爲め、更に五百五十萬圓の増資を決行し、資本金一千六百五十萬圓とせり、此年日韓鐵道連絡の完成、時局の終了に伴ふ御用船の解除及捕獲船の拂下等相俟つて、甚しく船腹の過剩を來し運賃は未曾有の混亂低落を見、經營亦意の如くならず。四十年四月清國揚子江航路に於ける本邦汽船業者合同の議熟し、日清汽船株式會社の成立あるや、本社亦同航路に屬する船舶設備を擧げて同社に引續ぎ、他方に在りては土佐商船株式會社を買収して業務一切を繼承せり、同四十二年に至り米亞交通の經營を始め、勢の擴張に資し、四十三年鹿兒島郵船株式會社との協定を告げ、益々内地航路の改善を計り、超て四十四年四月打狗上海線、香港福州線、打狗廣東線を開始するの外、神戸基隆間及び南洋印度方面に新航路の開拓に努め、大正二年一月四日市孟買間の定期航路を開始し、大正三年三月本社を始め、從來樺太航路に従事せる船主共同して新に北日本汽船株式會社を

設立し、同航路に於ける一切の業務を之に引継ぎたり。越て同年七月歐洲戦亂の勃發するや、多年沈衰の状態にありたる海運界は、俄然未曾有の盛況を呈するに至り、茲に本社沿革史上に一大特筆の發展期を造るを得たり、大正四年一月青島と大阪間の定期航路を開始し、着々新航路の開始を見るに至れり、米國航路は従來桑港線に從事せる太平汽船會社が、東洋方面に於ける航路を廢止したる爲め、甚しく貨物の停滯をなせる結果、大正四年八月橫濱桑港間の航路を始め、日米貿易の助長に資するところあり、尋で大正五年に入り南洋印度洋南阿及南米の各地に於て、本邦品の需用頗る多きを加へ、貨物の堆積を見るに至りたれば、大正五年四月本邦南洋諸島間毎月一回の定期航路を開くと共に同年十月日濠貿易の助長に資せんが爲め新に橫濱より濠洲「アドレド」に至る毎月一回の定期航路を始め、次で十二月南米航路は、其計畫確立したるを以て年四回橫濱より阿爾然「ベノス、アイレス」に至る定期航路を開始し、爾來豫期以上の好成績を挙げ、亦將來大いにその驥足

を世界海運界に展ぶるの準備として、大正六年五月從來の資本金二千四百七十五萬圓を五千萬圓に増加し、更に大正七年に入り、南洋航路の範圍を擴張し、新嘉坡を起點として、南洋諸島間の沿岸航路を開始し、尙同年四月孟買より馬耳塞に至る南歐洲線を開き後之を日本馬耳塞直通線と改むると同時に、久原鑛業株式會社が伊國政府と契約の下に經營しつゝありたる孟買ゼノア線を繼承し、印度航路との接続により、良好なる成績を收むるを得たり、又一面聯合國と共同策應の便宜を進むる趣旨に基き、帝國政府の命令に依り、瓜哇丸、印度丸、馬來丸の三隻を北米合衆國の使用に供せり。同年十一月歐洲の戰亂漸く熾り、休戰條約の成立を告げ、地中海の航行安全となりしを以て、橫濱より倫敦に至る北歐洲線を開始し、第一船アルタイ丸を同年末倫敦に發航せしめたり、本航路は倫敦同盟加入の成否に就て、斯界に於て大に問題せられたりしが、大正八年一月二十二日同盟加入を承認せられたり、又一方新造船の續々其功成りて、就航せるもの多く、大正七年度に於ける本社の營業狀況

に創立以來未曾有の好況を呈し、其總收入實に一億六千餘萬圓の巨額を算するに至れり。創立以來發展に次ぐに發展を以て、現今に至れる本社の沿革の一斑は既に其概要を述べたる如く、而して今や同社の事業は頗る膨大にして、組織複雑を極め、一見其内容を窺知し、難きが如しと雖、仔細に營業の状態を觀收支及財産の狀況を研せば克く本社の現狀を知るを得べし。而して本社は資本金五千萬圓を以て、汽船百二十四隻、三十萬二千有餘噸を有し内外の定期航路を經營し、大正七年度に於ける運賃收入額荷物運賃一億四千九百餘萬圓、船客運賃六百五十餘萬圓、合計一億五千五百五十餘萬圓に達する良好なる成績を挙げたり。現重役は取締役社長堀啓次郎、同副社長山岡順太郎、同理事加藤力太郎、取締役豊田善右衛門、寺西成器、田中隆三、阿部彦太郎、監査役野元驥、範多龍太郎、多羅尾源三郎の諸氏なり。

揖斐川電化株式會社

所在地 東京市京橋區區野町二ノ三

設立 大正元年十一月二十五日  
資本金 一千萬圓(拂込四百三十七萬五千圓)  
代表者 取締役社長立川勇次郎

本社は元揖斐川電力株式會社と稱し、資本金壹百萬圓を以て設立し、岐阜縣揖斐郡久瀬村に發電所を設け、大垣市を中心として附近の町村に電燈電力供給の目的を以て營業を開始せし者なりしが、創立以來順調に業務漸次發展し、殊に社會一般の好況や、諸工業の發達に伴ひ、電燈電力の需用著しく増加せし爲め業務擴張の必然的結果として、大正七年十一月資本金を二百萬圓に増加し、次で同年十二月資本金壹百萬圓の揖斐川電化工業株式會社、資本金二百萬圓の東海電化工業株式會社、資本金二百萬圓の株式會社電氣製鐵所の三會社を合併し、各社の資本金を合して、總額九百萬圓の大會社に一躍せり、同時に社名現在の如く改稱し、更に六月に資本金一百萬圓の日本電氣黒鉛株式會社を合併し、隨て資本金總額一千萬圓に増加せり、爾來營業範圍を擴大し、其の營業科目を擧ぐれば左の如し、  
滿鐵、珪素鐵、鏡鐵、珪鏡鐵、格魯鐵、タングステン鐵、モリブデン鐵

株式會社部時計店

其他合金類一切、銅鐵、錳地金、鋳地金、彈條、鑄鋼、其他鋼類一切、炭化石灰、電柱、人造黒鉛等なり。

而して出張所及び工場所在地左の如し、

- 發 電 所 岐阜縣揖斐郡久瀬村
- 大垣出張所 大垣市西大垣驛前
- 西大垣工場 同 切石町
- 室 工 場 同 室町
- 大島 工場 東京府南葛飾郡大島町
- 王子 工場 同 北葛飾郡王子町
- 深川 工場 東京市深川區東平井町
- 小名木川工場 東京府南葛飾郡砂村
- 現在重役は取締役社長立川勇次郎、常務取締役稻井初司、同坂口拙三、同三浦良幹、取締役笠井愛次郎、同牧野小太郎、同櫻内幸雄、同棚橋寅五郎、同宮口竹雄、同日下部庄吉、監査役山田勸治、同井島茂作、同根岸鍊次郎、同小寺源吾の十四氏にして、重なる社員は、支配人立川廣大垣工場技術長東武平、電氣技術師長高木清吉、王子工場技術師長山縣友雄、小名木川工場技術師長永井定次郎、庶務課長岡田由之助、用度課長矢崎曠、經理課長荒川重次、販賣課長蛭間録太郎の諸氏なり。

株式會社部時計店

所在地 東京市京橋區區銀座四ノ八  
設立 大正六年十月  
資本金 一千萬圓  
代表者 取締役社長服部金太郎

同社は社長服部金太郎氏經營の個人商店なりしが、時代の趨勢に應じ、株式會社に組織を變更せるものにて、株式會社とは云ふもの、一般より株式を募集せしものに非らず、服部一家の持株にて、株式と言ふは名義上のみにて從來と何等變る所なし、然し營業上の發展は社會の好況に伴ひ近時著しき隆盛を迎へ、範圍擴大となるに依り、必然的結果として株式會社に變更せるものなり、今同社の沿革を叙さんとするに當り、先づ是れが創業者たる社長服部金太郎氏の經歷より筆を起すを順序とす、されど氏は既に世人が知る如く、現代立志傳中の大人物にして自己の事業の外諸種の事業に最も關係多きを以て、自然經歷に於ても、一片の紙面を以て盡すを得ず、殊に複雑なる事業界なれば吾人は唯に其梗概を略述せんとし、世に傳ふ處の日本名家列傳中より、抜萃し以て聊か其一端を陳ぶ。

始め氏の父は郷國尾張を去りて、帝都に來り夜店を出して漸く一家を支へしもの家計の困難亦言ふを要せず、氏此貧に生れ、此貧に長じ早く其辛きを嘗め、よく其味を知る、一日論語を求むとて父に請ふ、父曰く之を求むるが如き餘裕一奴もなしと、氏此時痛く悲み、大に勤勉貯蓄の緊急なるを覺れりと、蓋氏の今日ある偶然にあらず、年漸く十二の時京橋八官町の辻唐物店に雇はれて、丁稚となる年少なりと雖も、家を思ふこと頗る厚く、一日も早く業を覚え、父母を安じ參らせんと勤勉怠らざりしが、十五歳の頃不圖思へらく唐物商は資本を要すること莫大、赤貧余の如きもの之を覺えて何をかなさんと、忽ち其志を翻し、遂に日本橋區の某時計師の弟子に入る、然れども初めは容易に業を習ふ能はず、多くは子守等の難用に使用せらるゝのみ、残念に堪へずと雖も、亦如何とす可からず、涙を飲んで時の至るを待つ、其の餘暇に經傳餘師を購ふて、毎夜之れを獨習す、後故ありて下谷の某時計商に雇はれ、居る事二年、不幸にして主家の倒産するに遇ふ解雇せられて去らんとするや、金七圓

を主人に捧げ告て曰く、之奴が數年蓄積する所其額小なりと雖も、希くは以て今後の資を補はれん事をと、嗚呼何ぞ、れ主人を思ふの厚きや、直に家に歸りて時計商となり、晝は業を勵み、夜は漢學英學を習ひ、少時も怠らず、十四年遂に店を京橋區采女町に開くや、十六年不幸にも火災に遇ひ、僅かの資本過半烏有に歸す、己むを得ず木挽町に轉じ、小店を開き晝間は此處に働き、夜は同業者間に奔走し、夜の間もねえずに立ち働き、一時一分空消するなし、茲に於てか勤勉の効漸く顯はれ、資産日に多きを加へ、明治二十年遂に銀座通りに移轉するを得るに到る、此頃より時計の需要次第に其多きを加へ年を追ふて其輸入高を増進す、氏私かに思へらく、拱手して只だ輸入品の販賣に安するは國家經濟上不利甚だし、如何にしても完全なる時計を國內に於て製出し、以て外國品と對抗せんと欲し、廿五年本所柳島に精工舎を設立し、先づ掛時計の製造を始め。

精工舎沿革

明治二十五年五月、本所石原町に試験的時計製造場を設け、精工舎と稱せり、同所は人家稠密の故を以て、監督官廳は動力汽鐘の設置を許さず、依て僅に人力を以て蒸汽に代へたり、翌二十六年十月現在柳島町に移り、八十馬力の蒸汽力を使用して専ら掛時計製造に従事す、精工舎の掛時計は製造當初より中外に好評を博し、日本製造中常に最上位を占む、蓋し他の同一製品に比し二十年間絶へず市價は一割乃至一割五分の高値を保てり、之を以て其の製品の優良なるを證明するに足るべし、是れ當舎が他の製造者に卒先して歐米より最良の製作機械を取り寄せ、又は當舎の考案になる製作機械を使用して、専ら製作器械に重きを置き、之を精選せし結果なりと信す。

掛時計 一一五、五〇〇  
置時計 五七四、〇〇〇  
懷中時計 二〇八、七〇〇

此の價格約五百萬圓。

中日實業株式會社

なるを認識せられ、逐年獨逸品の輸入高減少して今は殆んど輸入の跡を絶てり、加之のみならず數年前より支那、朝鮮、滿洲等の市場に於ても勝利者たるを得て絶へず輸出を爲しつゝあり。

所在地 本店東京市麹町區内幸町一丁目三番地  
設立 大正二年八月十一日  
資本金 五百萬圓(拂込二百五十萬圓)  
代表者 總裁李士偉、副總裁有知鐵吉  
北京總行 北京化石橋  
上海營業所 上海香港路六十號  
濟南出張所 山東省濟南南門三馬路  
長沙出張所 湖南省長沙商埠  
桃中出張所 安徽省繁昌縣荻港鎮

中日實業株式會社は、大正二年二月孫逸仙氏來遊の際、澁澤男爵と協議の上日支經濟連絡の目的を以て、告示組織の會社の設立を計畫したるに始まる、即設立當初は中國興業株式會社と稱し、初志貫徹に努め種々の經過を重ねたるが、其結果大正三年四月名稱を中日實業株式會社と改稱し、愈々その目的事業に向つて躍進しつゝ、今に至りしなり、元來本社は株式組織のものなるを以て、勿論利益を度外視するものには非ざるも、然も會社存立の第一要義は日支の經濟的連絡を計るに

今一個の懷中時計の製造工程は、實に二千〇八十八の分業を要す一個の懷中時計に用ゆる材料個々なる百六十七の部分品より成立す、其複雑精緻なる工業中類を絶せり、而して同舎の設備及び最近の生産能力を示せば左の如し、

工場動方(電氣) 三四六馬力半  
(蒸氣) 三二馬力  
据付機械數 一六五九臺  
職工數(男) 一六〇四人  
(女) 三五六人  
中日實業株式會社

あり、故に此點に於て他の普通營利會社と自ら其選を異にするものあるなり。同社は其本店を前記東京市麹町區内幸町一ノ三に置き、その營業所を北京及上海の二ヶ所に設置し、尙出張所を濟南長沙荻港に開始し、以て事業の進展に力を盡しつゝあり、然して其營業の目的は、一各種企業の調査設計引受及仲介、二、各種事業に對し、直接に又は間接に資金供給及融通をなすこと、三、各種債券の應募又は引請、四、其他一般金融並びに信託事業の四項をなすにあり、既に鑛山業電氣事業、其他多くの事業及借款に對して染手するところあり、兩國經濟提携の實を擧げると、我々倦まざるの態度を持續し居れり。

然して右鐵山は頗る有望にして、鐵道設備完成の曉には、一日大に一千噸の鑛産額を見るに至るべしと云ふ、次に大正五年農商部より、公式に採掘許可を得たる安徽省安慶府懷察縣下にある大凸山炭鑛は鑛區百六十餘萬坪を有し、爾來試掘に従事しつゝありしが、最近最も有望なる無煙炭層に著炭せり、尙樂平豫昌其他二三の炭鑛にも着目し、試掘或は其他の必要なる手段を講しつゝあるを以て、やがては其實績を擧ぐるに至るべし。

其他同社の夙に中國の電氣事業に着眼し専門技師を派して、諸方面の調査に従事せしめつゝありしが、其結果借款其他の方法を以て、既に關係を結びたるもの尠少なりとせず、即ち一例を示せば大正五年八月の交北京交通部の希望に基きて電信電話の擴張資金一千萬圓の借款に應じたる如き、尙請負入札に依つて一百萬圓の武漢電話工事に着手し、既に開通竣工せしめたるが如き、又電燈会社の借款に應じて、其資金の供給をなせるが如き何れも其顯著なる實例にして、又以て如何に新業方面に力を盡しつゝあるかを察知するに難からざるべし。

又上記の諸事業を別となし、現に着手し又將來着手せんとしつゝある事業に至つては銀行、鐵道、土木、地方整理借款並に各種製造業等、其種目實に驚く可き多數に及び、到底總指するに遑なき有様なり、然も同社は是等廣汎なる事業に對し、夫々専門的技術家に依つて専門的調査を遂げ、細心にして然も大膽なる行動を執りつゝある事は、吾人の以て多とする所なりとす。

同社は大略前述の如き事業を中國に於てなしつゝあるを以て其株式も亦日支兩國に於て半數つゝ引受け、役員も如きも彼我同數を選任するの規定に依れり、即ち現在に於ける役員は、取締役總裁李士偉、同副總裁倉知鐵吉、專務取締役尾崎敬義、同揚毓城、取締役岡部三郎、同仲生一義、同曹汝霖、同男爵中島久萬吉、同周普鑑、同陸宗輿、監査役大橋新太郎、同孫方尙の諸氏にして、相談役には男爵 澁澤 榮一 男爵 近藤 廉平 男爵 大倉喜八郎 男爵 郷 誠之助 井上準之助 志立鐵次郎 櫻井鐵太郎 早川千吉郎 三村 君平 小山 健三

美濃部俊吉 土方 久徵 藤山 雷太 古市 公威 山本條太郎 揚 度 周 馥 張 賽 李 經 義 朱 佩 珍 孫 多 森 熊 希 齡 王 克 紋

の諸氏あり、何れも彼我兩國に於ける代表的人物を網羅せり、然して現在資本金は五百萬圓(内拂込二百五十萬圓)現在株主は中國人則二十四名、日本人則九十一名、合計百十五名なりとす。要するに同社は過去三年間に至つて、中華民國に於ける鑛山業、電氣業、銀行業其他百般の事業に手を染め、借款を基礎として彼我福利増進のために、貢獻する所頗る大なるものありたり、然して既着手事業は前述の如く、何れも相當の成績を擧げると同時に、確實なる基礎の下に活動を持続し、未着手或は將に着手せんとするものに對しても、既記の如く細心の調査をなし、以て萬一に蹉跌に苦しまざらん事を期しつゝあり、今や斯の如き状態なるを以て、同社の信用頗る厚きを加へ、事業の申込愈々激増し來れり、即ち其將來に於ける一大飛躍の機も遠きに非ざるべく、日支親善兩國經濟の提携實

現の楔子として、同社の健全なる發達を望むものなり。

大正八年四月現在の決算を示せば左の如し。

- 一、資本金 五百萬圓
- 一、拂込高 二百五十萬圓
- 一、積立金 一萬三千五百圓
- 一、前期繰越損失金 一萬六千七百四十四圓十六錢
- 一、當期益金 二十八萬六千六百二十七圓五十七錢
- 一、當期配當率 年六分
- 一、後期繰越金 六萬五千九百十三圓四十一錢

社団法人生命保險會社協會

所在地 東京市麹町區有樂町一ノ一

本協會は、明治四十一年十月二十日萬歲日本、日宗、東洋、徵兵、太陽、第一、大同、内國、帝國、愛國、共濟、有隣、明治、眞宗信徒(後其保と改稱)仁壽の十六生命保險會社發起して、生命保險事業の進歩發達各社共同利益の保護増進を目的とする機關として、社団法人を組織し同年十二月七日を以て主務大臣の許可を得

茲に社団法人生命保險會社協會の成立を告げたり。

然るに其始めは、實に明治三十年に始まる當時生命保險會社の數は、既に三十を超えたりと雖も、其多數は創立勿々に屬し、全國各社に於ける一箇年の新契約高は、僅に四千五百萬圓にして、現在契約高亦一億二千萬圓に過ぎず、其保險加入者の總數も僅に五十三萬人に止まり、保險思想甚だ幼稚にして、生命保險の性質を了解する者極めて少なく、越えて明治卅一年生命保險會社談話會を組織し、商法案修正案に付き、發起會社七會社の外愛國、有隣の二會社を加へて之を實行委員とし、明治三十二年三月法律第四十八號を以て、修正商法公布せられ、新法の適用に付き共同研究の必要を生じ、殊に各會社は何れも保險約款に、改正を加ふべきこととなりたるを以て、明治三十三年七月模範約款起草し、茲に多數會社の契約取扱手續の歩調を一にすることを得るに至りたり。

爾來事業の普及發展に伴ひ、常設機關の必要を認め、明治三十八年五月、談話會を改めて、生命保險會社協會を設立し、生命

保險會社談話會組織以來、十年を経て明治四十年に至りては、保險事業漸次發達を遂げ、一箇年の新契約一億一千萬圓を超え、年末加入人員百一萬人現在保險契約金額三億六千萬圓に近く、之を明治三十年に比すれば、一箇年の新契約高に於て二倍以上加入人員に於て、約二倍年末現在契約に於て、三倍を算するに至りたり、益々保險事業の進歩發達に資すべき設備を爲すの必要を認め、乃ち明治四十一年八月會館を建設するの議を決し、明治四十三年五月、現在の地三百六十七坪餘を三菱合資會社より借受け、辰野工學博士の設計にて、同年六月十七日會館の建築に着手し、翌四十四年十一月に至り、上棟式を行ひ、其翌大正元年十月に至りて落成したり。

明治四十三年より、農商務省商工局編纂保險年鑑の印刷發行を本協會に引受け、爾來今に至るまで發行回数三十回を重ねるに至り。大正二年三月、政府案たる銀行業者の借入金、保險會社の責任準備金等を課税の標準に加ふるの案あり、本協會は其不當なる所以を説明し、遂に課税標準より削

除せらるゝに至りたり。

尙同年十二月生命保險契約に對する、配當準備金は會社資本に屬する諸種の準備金と異にして、責任準備金と同じく保險契約上の義務を果さんが爲めに、準備する金額なれば、之を營業課税標準より除算すべきことを明にせられんことを政府に建議したり。

大正四年十二月簡易保險官營法律案の議會に提出せらるゝや、前記答申の趣旨に依り反對意見書を公にし、又其十二月十一日建議書を政府に提出し、翌年に亘り該法案の帝國議會に於て討議せらるゝに當り、全國保險業者の反對運動あるに際し本協會に於ても之に對し便宜を謀りたり。

大正六年三月農商務省に於て、保險從業者取締規程を定め、保險會社に從事する者は悉く農商務省の免許を受けしめんとするの議あるを聞き、同月八日を以て却て事業の善良なる發達を阻害する處あることを陳情し、又同年四月歐洲變亂區域に到る船舶乗員に對する特別保險料率を協定したり。

其他農商務大臣次官等、當局の交渉ある

毎に招待會を開き、官民意見の疏通を圖り、生命保險俱樂部に於ては、毎月一回晚餐會を開き、朝野の名士を招待し意見を交換し、又研究部に於ては事務、醫務兩研究會を開き、業務上必要な諸種の討究調査を怠らず、以て生命保險の善良なる發達に資することに努め、着々其目的を達成することに努めたり。

現今本協會に加入せる會社數は、三十一會社にして其社名左の如し。

- 萬歲生命保險株式會社
- 日本生命保險株式會社
- 日本共立生命保險株式會社
- 日華生命保險株式會社
- 日清生命保險株式會社
- 蓬萊生命保險相互會社
- 東海生命保險相互會社
- 東洋生命保險株式會社
- 常磐生命保險株式會社
- 中央生命保險相互會社
- 橫濱生命保險株式會社
- 太平生命保險株式會社
- 太陽生命保險株式會社
- 大正生命保險株式會社
- 高砂生命保險株式會社

第一生命保險相互會社

大同生命保險株式會社

八千代生命保險株式會社

富士生命保險株式會社

福徳生命保險株式會社

福壽生命保險株式會社

國光生命保險相互會社

帝國生命保險株式會社

愛國生命保險株式會社

共保生命保險株式會社

共同生命保險株式會社

共濟生命保險株式會社

有隣生命保險株式會社

明治生命保險株式會社

仁壽生命保險株式會社

日之出生生命保險株式會社

本協會が社團法人として、成立したる以來理事監事として本協會の爲めに盡力せられたる人の氏名左の如し。

- 理事 福原有信、矢野恒太、鈴木萬次郎
- 安田善三郎、下郷傳平、監事 藤村義苗、藤田讓の諸氏なり。
- 本協會に加入せざる會社は現在左の如し
- 千代田生命保險相互會社
- 旭日生命保險株式會社
- 東華生命保險株式會社
- 徴兵保險株式會社

日本徵兵保險株式會社 大安生命保險株式會社  
戰友共濟保險株式會社 博濟生命保險株式會社  
日本教育生命保險株式會社

### 大迫商事株式會社

所在地 東京市神田區一ツ橋通り

設立 大正六年十一月

資本金 二十五萬圓(拂込済)

代表者 取締役社長大迫利亮

本會社は、株式會社富強世界社及び株式會社恆産銀行と姉妹會社にして、大迫利亮氏一派の經營に係り、大正六年末の設立にて營業期間滿三十ヶ年、資本金二十五萬圓(全額拂込済)にして、總株數一萬二千五百株なり。

而して營業科目は、公債、地方債、社債株式現物賣買所有及び其の募集取扱ひ、又は引受け及び株式定期賣買、鞘取賣買金貸付、仲介資金運用の受託、不動産賣買、貸借仲介、財産整理の受託等にて即ち各種證券の賣買及金融機關なり。

現在重役たる經營主腦者は、謂ふ迄もなく大迫氏にして、氏は斯業に經驗深く、機敏に富めるを以て計畫常に成功し、創業以來社業益々擧り、年と共に發展し、從つて社會の信用も愈々加はり、前途に一

大迫商事株式會社、株式會社富強世界社、萬歲生命保險株式會社

大光明を確認するに至れり、取締役は大迫氏の外に、谷崎二三、志和知真、監査役中村泰治、眞下五郎の諸氏なり。

### 株式富強世界社

所在地 東京市神田區一ツ橋通り

設立 大正六年二月

資本金 二十萬圓(拂込済)

代表者 取締役社長小西榮三郎

本會社は即ち大迫利亮氏を中心にして、其の關係一派に依り、計畫せられたる會社にて、營業の目的は株式の通信賣買にして設立日淺きにも拘らず、業務大いに擧り顧客は全國に亘りて數萬を有し、營業方針堅實なる爲め一般の信用を博し、益々隆運に向へり。

而して近時事業界の好況に連れ、株式賣買を種に色々な手段を以て、地方八を勧誘する懇練なるもの多く、當局に於ても之れが取締を嚴にせんとする時に當り、本社は巍然として社會に頭角を現はし、模範的通信機關として、斯界に權威あり又機關雜誌富強世界を毎月一日、十五日の二回發行し、且つ姉妹會社大迫商事株式會社と提携して業務發展を計れり。

現在重役は、取締役社長小西榮三郎、無

務取締役大迫利亮、取締役眞下五郎、監査役中村泰治氏等にて、大株主は即ち大迫利亮(一、二二五)、高柳淳之助(一、五〇〇)、小西榮三郎(一、五〇〇)、眞下五郎(一〇〇)の諸氏なり。

### 萬歲生命保險株式會社

所在地 東京市日本橋區本町一ノ二二

設立 明治三十九年八月

資本金 一百五十萬圓

代表者 取締役社長藤村義苗

本社は明治二十七年十月頃を以て、現社長藤村義苗、岩下清周、渡邊亨の諸氏の發企にて西村勝三、馬越恭平、太田黒重五郎等十九氏の賛成を得、初資本金五十萬圓を以て創立せるなり、爾來漸次業務發展し、活動範圍擴大するに及び、資本金を一百萬圓に増加せり、更に大正五年度に於て、博愛生命保險株式會社を合同して茲に一百五十萬圓の資本金となる。而して本社の營業方針は最も堅實主義にして創業以來順調に發達し、年と共に漸次隆盛に赴き、基礎益々鞏固となれり、其の保險の種類は養老、教育、終身の三種にして、本保險の特色は他會社に卓越し、保險契約者に有利なり。



最近大正七年末の契約高は、二千九百四十四萬七千餘圓、此の件數五千二百八十八件あり、收入保険料一百二十三萬六千七百餘圓にて、支拂保険料四十萬三千五百八十四圓、當望利益金十一萬一千五百圓年一割の配當をなす。

現重役及支店支店左の如し、社長藤村義苗、取締役柳谷謙太郎、同渡邊亨、同大田黒重五郎、同川崎榮、同男爵中島久萬吉、常務取締役鴻田秀一、同中越正彰、監査役上原鹿造、同石井政吉、同小林懋、常任監査役伊藤鼎の諸氏なり。

- 大阪 支店 大阪市南區順慶町通堺筋
- 東京 支店 東京市日本橋區平松町
- 東北 支店 福島市榮町二十一番地
- 廣島 支店 廣島市大手町三丁目
- 名古屋支店 名古屋市中區横代官町
- 金澤 支店 金澤市尾張町四十五番地
- 九州 支店 福岡市博多下小山町一
- 北海道支店 北海道小樽區稻穂町西五
- 四國事務所 高松市濱ノ町九十三番地
- 山陰事務所 松江市天神町六十二番地

仁壽生命保險株式會社

所在地 東京市麹町區内幸町一ノ三

設立 明治二十七年九月  
資本金 一百萬圓  
代表者 社長下郷傳平  
同社は明治廿七年九月資本金十萬圓を以て松平直亮伯、戸田康泰子、西邑虎四郎、三野村利助、今村清之助、辻新次男、東條一郎、藤木久三郎の諸氏の發起により創立せられし合資會社なりしが、大正四年十二月十日、株式組織に變更し、同時に資本金を百萬圓となせり。

會社は其の發起者の關係上、先づ其の努力範圍を銀行界及教育界に擴げて、其の信用を博し、爾來着實なる營業方針と經營者之の献身的努力に依り、整然たる發展をなし、茲に營業期を重ねること二十四回資本充實して、大正七年末に於て諸準備金一千七十八萬七千八百餘圓、責任準備金は純保険料契約額、五千六百三十六萬九千七百五圓に達し、創業以來拂渡したる保險金額七百四十四萬一千三百八圓餘に上り。

し却つて百三十九萬餘圓を減じ、差引本年度に於ける純増加契約高は、一千五百六萬餘圓を獲得するに至れり。

又之を收支勘定より見れば、前年度に比し收入保険料に於て、六十四萬四千九百六十六圓餘を増し、責任準備金支拂備金に於て、一百四十萬餘圓を増したることは、會社の基礎に一段の安固を加へたるものと謂ふべし。  
同社の引受くる保險金額は、一人につき最低三百圓とし、最高五萬圓と定め、而して保険料の低廉と取扱の簡易迅速を旨とし、支拂保險金の如きも、亦迅速に扱ひ營業の繁盛を期せり、殊に大正六年度よりは利益配當附契約を設け、其の契約に關する損益を特別に計算し、利益あるときは、其の利益の百分の八十を第三年目以降既拂保險料に對し、分配するものなれば保險料は益々低廉となるべし、又保險金の支拂に際し、其の年度の保險料は未拂込の分あるも、之を差引かす且つ契約五箇年を経過するときは、不可抗争にて保險金を支拂ひ、尙解約價額一百圓以上を有する保險証券に對しては、擔保貸付金を爲し、契約者の希望に依りて

は拂濟保險証券を發行する等、保險契約者に對し、幾多の有利なる約款を設けあり。

當時同社長は、下郷傳平氏專務取締役は、下郷寅太郎氏、取締役は大川平三郎同吉澤幹三郎、同玉木爲三郎の三氏、監査役は廣瀬滿正、同門野安太郎、同北河豊次郎の三氏、醫務顧問は醫學博士三宅秀氏評議員は田中榮八郎氏、支配人は千葉斷一氏なりと云ふ。

東洋木材防腐株式會社

所在地 東京市麹町區内幸町一丁目  
設立 明治四十年一月  
資本金 一百五十萬圓

代表者 取締役會長工學博士平賀義美  
當社の事業は腐物利用なり、從來世人は難木は劣等なる木材として空しく山野に委棄して顧みずと雖も吾國工業の進歩は木材の需要を喚起し、木材の市價漸次昂騰するに至り、天然の良木のみを以てしては多額の費用を要することとなりたるを以て、此の間の需用者を満足せしむるには難木即ち不良木材の利用方法を講ずるの急務なるを察し、質の劣悪なる木材に防腐加工し以て内外木材市場に低廉な

東洋木材防腐株式會社、日本電話工業株式會社

日本電話工業株式會社

所在地 大阪府北區堂島濱通一丁目六五ノ一  
設立 大正七年二月八日  
資本金 一百萬圓(拂込金額五十萬圓)  
代表者 專務取締役若目利助

萬次郎、同工學博士下村孝太郎、監査役渡邊千代三郎、同野元曉、顧問工學博士五十嵐秀助、同工學博士三好久太郎の諸氏なり。  
本社は電話電信其他通信用諸機械器具材料及び電氣計器の製作、並に一般弱電流機械器具の製造、販賣、輸出入及び私設電話工事の設計、保守及施設の請負、電話に關する事業の經營及び投資を營業の目的とせり。  
抑も電話の需要は、世運の進展に伴ひ、益々旺盛に趨くべきは、自然の狀勢にして前途洋々として多望なり、然し本邦の電話事業は政府の專掌に屬し、創設以來既に三十年に垂んとし、其の大正五年度末に於ける加入者無慮二十三萬名を算し、其の内尙は開通を得ざるもの約十五萬名之れ蓋し官業の性質上止むを得ざること屬し、從來常に財政の都合に制肘せられ、擴張施設一般の要望に伴ふ能はざり

しに基因せしに外ならず。  
 政府は今や一億餘萬圓の鉅資を扱じて電話需給の不調和を救済せんとするの計畫を樹て、大正六年度より十三年度に至る八年度間に於て、既往に於ける申込分は一掃せんとすの豫定にて、既に實行中に屬せり、而して爾後毎年度に於ける加入申込は、全部其年度内に開通せしめ、毫も積滯を生ぜざらしめんとすの豫定なるが如しと雖も、方今物價の奔騰は電話用品をも其の渦中に投せしめ爲めに、政府の豫定計畫は其の約三分の二を遂行し得るに過ぎざるへしと聞く、更に之を電話需の旺盛なる歐米各國の實況より推考するも需給の調和果して所期の如くなるべからざるは明なる所なりとす。

工場、大商店等業務上多數の電話を使用する處にては、私設電話の施設盛にして之れに要する機械及材料の需益益々多し其の他、隣邦支那に於ては、電話事業の創始後尙十數年を出でず、爾來官營に將た民業に多少、之に對する施設を見たりと雖も、未だ極めて微々として振はず、數年來各國相競ふて、自己の勢力扶植に力め事業の經營に將た機械材料の販賣に汲々たりしと雖も、歐洲大戰亂の勃發以來本邦よりの輸入は英獨二國を凌駕し、將に第一位に至らんとするの狀態にあるを以て今にして之が根柢を築き、他日雄飛の素地を固むべき計劃を以て、若目田利助、川北英夫、井原外助氏等發企人となり設立せるものなり。

而して其の製品販賣並に私設電話工事請負に關しては、株式會社北川電氣企業社と提携し、銳意懇切機敏の營業方針を以て需家の満足を主とし、又南清波浪嶼の電話事業は、株式會社川北電氣企業社が一切の事業を舉げて、買収せるを以て其の改良擴張施設に付き、當社は之に助力を與へ、南清に於ける模範電話局たらしめんとし其の施設に力を致しつゝあり。

現時電話機械の需益極めて旺盛にして當社製品の市場に現出するを切望するもの取引先は、勿論一般の要望實に雲霓も嘗ならずと雖も、電話機械類たるや極めて精巧を要するものなるを以て、寧ろ自重専心研鑽を積み、完全なる製品を産出せんと欲し、拙速の輕舉を敢てせざらんと期するものなりと、次に電話工場完成と共に株式會社川北電氣企業社今福工場の一部たる計器製作部を適當の條件の下に買収し、之を當社工場に移轉し、更に大規模の下に計器の製作を開始せんとす。要之當社事業の前途、實に洋々春海の如きものなりと謂ふを得べし。

現重役は專務取締役若目田利助、取締役

川北榮夫、取締役井原外助、監査役矢村克、監査役阿部繁一の諸氏なり。

**高崎水力電氣株式會社**

所在地 群馬縣高崎市大橋町  
 設立 明治三十六年六月廿五日  
 設本金 二百三十萬圓  
 代表者 小島彌平

高崎水力電氣株式會社は、明治三十六年五月事業許可を得、翌三十七年十二月電燈及電力供給を開始し、次で明治四十一年十月電氣鐵道業の許可を得、同四十三年九月開通式を舉行、更に高崎市の瓦斯供給を爲すに及んで、業務益々繁忙となり、今や資本金二百三十萬圓内拂込百七十七萬五千圓の巨資を擁し、高崎市を中心とし、群馬縣六郡及び埼玉縣五郡に渉る地方有數の大會社なり、本社は高崎市に置き發電所を同縣吾妻郡東村なる鳴澤川同群馬郡室田村なる烏川、同吾妻郡若島村なる温川及大谷澤川の三ヶ所に設け有効落差三百尺乃至百十五尺、使用量十五個乃至百三十個の間に於て、常用電力一晝夜二千キロワット時に達せるが、更に昨年十二月開業の烏川水力電氣會社より其の全出力一千「キロワット」を受電

高崎水力電氣株式會社、上毛倉庫株式會社

し得ることになれば、目下同社の供給力は三千百「キロワット」にして尙吾妻郡岩島村温川に三百「キロワット」の發電所を建設中なり。

同社の重役は、取締役社長小島彌平、專務取締役小澤宗平、常務取締役櫻井仙次郎、取締役瀧川喜平、同大谷藤三郎、同木暮武夫、同井上保三郎、同山田昌吉、同松本文作、監査役岸龜吉、同新井清兵衛、同松山真哉、同住谷喜平、同千明三右衛門等の諸氏にて支配人は、金山鐵吉郎氏、主任技術者太田仙太郎、顧問は須藤清七氏なり。

**上毛倉庫株式會社**

所在地 前橋市中町  
 設立 明治二十八年十二月六日  
 設本金 十萬圓  
 代表者 專務取締役江原桂三郎

前橋市は古來繭絲市場を以て名あり、年々生産高は長足の進歩をなせるに係らず同市場の發展之れに添はざるを慨し、之をして盛大ならしむるには、繭絲貯藏に適する倉庫と、金融機關完備の急要なるを思ひ、併せて從來不便を感じたりし米穀貯藏の缺を補はんと、元三十九銀行取

締役長尾三十郎氏及鷺田迅雄氏等、主動者となり、江原芳平、勝山善三郎等の諸氏と謀り、日清戰後企業熱勃興の機運に乘じ、之を發起し長尾氏は日本銀行より卅九銀行の手を経て、繭絲資金融通の道を開き、鷺田氏は創立百股の事務に當り明治廿八年十二月六日、資本金十萬圓を以て上毛倉庫株式會社を設立し、繭絲米穀其他の商品の寄託を受け、其預り證券を發行して金融の資に供し、且つ生繭乾燥を附帶事業とす、後明治三十一年五月伊勢崎町機業家の希望に依り、同地に出張所を置き、織物並に其原料を保管し、尙ほ明治三十七年七月より、保管貨物に對しては之を擔保として、貸付事業を營むこととせり。

本社創業當時は六、七朱乃至一割の利益配當を株主に爲すを得たりしも、卅二年末より、卅三年に渉る不景氣に機業家の重なるもの二、三倒産の悲況に陥りて之等のもの、寄託せし、織物中に不良貨物幾多存在せし爲め、證券を擔保に貸付を爲したる銀行に對し、辨償すべき債務を生じ、其額會社資産の過半に達する窮狀に陥りしが、種々の曲折を経て卅五年に

至り、銀行に本社株券の半數を譲渡して其債務を解除し、此時より伊勢崎出張所を廢止し、専ら堅實の營業方針を採り三十八年に至り、漸く前途の曙光を觀、爾來年々七、八朱前後の配當をなし得るに至れり、前述の窮境に際し、克く會社をして今日あらしめたるは、高橋源之助、江原桂三郎の二氏の力預つて功あり、本社株金の拂込は、明治廿九年一月二萬五千圓、同年六月一萬五千圓、同四十年六月十五日一萬圓、同四十三年七月十五日一萬圓、大正三年七月一萬圓の數回に拂込を爲し現在額に達せり。

秋田木材株式會社

所在地 秋田縣能代港町  
設立 明治四十年三月  
資本金 五百萬圓(拂込金額三百五十萬圓)  
代表者 取締役社長 井坂直幹

最近營業の狀況は、世界的動亂の影響を受け、前橋市に於ける製絲業も著しき發展を招來し、其原料たる繭類の寄託も隨て増加したるが爲め、市内清王寺町に本社出張所を置き、倉庫を増設し夏秋の交際に際して收容繭類の價額、二百萬圓以上に達す、米、麥其他雜貨の寄託は甚だ多からず、價額大概廿萬圓前後に過ぎず、金貸貸附も小口物に限り、其額平均三、四萬圓を出す。

我國の製材事業は、甚だ幼稚なりと雖も獨り秋田木材株式會社に至ては、其規模の大なる世界に於て稀なる所なりと謂ふ、而して創立は近く明治四十年三月に係ると雖も、其事業は古き發達を有する會社の後身にして、即ち明治三十年の創立に係る舊能代挽材株式會社(資本金三十萬圓)同三十年の創立に係る能代材木合資會社(資本金五萬圓)及び同三十四年の創立に係る秋田製材合資會社(資本金五萬圓)の三社を合同し、更に一層事業の發展を謀るの目的を以て、前記三社の重役及重立たる株主二十二名發起人とな

株主に割當て都合五百萬圓十萬株となせり、而して同社の木材業は從來主として針葉樹の伐採製材及買賣にありしも、時勢の進運に伴ひ、近く雜木利用の事業に着目し「ベニア」木管其他の製作と共に醸石事業をも兼營すべき計畫を立て、又遠

く海外の木材事業に雄飛せんとして、着々調査を進めつ、ありといふ。今同社の株金拂込年月金額、主なる關係會社への投資時期金額、支店出張所の創立時期名稱等を擧ぐれば左の如し。

Table with columns for investment period, capital amount, and company name. Includes entries for 'Old Shares (40,000 shares)', 'New Shares (60,000 shares)', and 'Total'.

一、同社が約半數の株式を引受けて創設したる主なる關係會社の設立時期及資本金額

Table listing various companies and their investment periods and capital amounts.

一、支店出張所の創立時期名稱

名稱	創立時期	所在地
大阪支店	明治十一年七月	大阪市西區南堀江通
東京出張所	明治四十年四月	東京市深川區木場町
名古屋出張所	大正元年中	名古屋市中區下堀川町
青森製材所	大正四年四月	青森縣東津輕郡野内村
淡路製材所	明治四十四年七月	同三戸郡小中野村
小樽出張所	明治四十一年中	北海道小樽區花園町
猛拂出張所	明治四十年中	同宗谷郡宗谷村
稚内製材所	大正二年十月	同稚内町大字聲間
網走製材所	大正三年十月	同網走郡網走町

小坂鐵道株式會社

本鐵道は元合名會社藤田組經營に係る、小坂鐵山専用鐵道的一般公衆の便に資せんが爲、株式會社を設立し、之を買収して明治四十二年五月、旅客貨物運輸の營業を開始し、爾來今日に至る、次で大正五年一月更に花岡鐵山専用線を買収合併せり本社線營業哩は、十九哩四十五鎖にして著名の銅山たる小坂鐵山及三大美林の一

を以て稱せらる、長木澤森林を叩ふる等  
其輸送貨物潤澤にして、一ヶ年實に四十  
五萬噸に達し、旅客八員亦三十萬人の多  
きを算す。

現重役は取締役社長藤田徳次郎、取締役  
新山敏介、同中川直也、監査役河口忠次  
郎の諸氏にして拮据經營に努めらる。

### 八戸水力電気株式会社

所在地 青森縣三戸郡八戸町大字八日町  
設立 明治四十三年七月十六日  
資本金 三十萬圓(總株數三千株)  
代表者 社長橋本八右衛門

水力電気は今日日本邦事業界の形影として  
到る所之れが企畫を見ざるなきの有様な  
り、八戸水力電気株式會社は、青森縣三  
戸郡是川村地内及同縣同郡崎守村地内に  
於て新井田川の流水を利用し、電気事業  
を經營するの目的を以て設立せられたる  
ものなり。

同社電力電燈供給區域は八戸町及附近村  
落にして、工業用動力三百キロワット其  
の他普通電力用二百キロワット電燈數一  
萬三千五百燈の多きに達す。  
電燈電力の需用は日に追ふて増加し、來  
りし爲め、現今にては既に餘力なく新な

る申込は謝絶の有様に至り、今や新第三  
發電所の計畫中にあるなり。  
同社は電燈料の低廉と光力の大とを以て  
需用者の便益を計り丁事を以て、營業の  
方針となしつゝ、あれば愈々信用を博し、  
營業益々好況に向へり。今試みに大正  
七年下半年に於ける收支を示せば左の如  
し。

固定資本金四十一萬四千七百三十三圓  
に對し、總收入電燈料金二萬九千六百  
九十六圓、電力一萬百十圓、其他雜收  
合計四萬五千二百八十九圓を挙げ、電  
氣事業其の他の支出二萬三千三百七十  
七圓、二萬八千四百五十八圓の純益金に  
て年八朱の配當をなす。

固定資本の狀態、其他萬般に亘り周到な  
る經營振りは、地方實業家の健實なる態  
度を窺ふべき同社の前途頗る有望なりと  
斷するに憚らざるものあり。

同社現在の重役は取締役社長橋本八右衛門  
取締役鈴木吉十郎、取締役泉山岩次郎、  
取締役山本勝次郎、取締役山田常次郎、  
監査役の横澤新太郎、監査役出町甫の諸  
氏にして主なる社員は、支配人鈴木昌實  
技師長二宮中輔、主任技術者技師津田鐵

### 諸戸殖産合名會社

所在地 三重縣桑名郡桑名町大字太一九  
設立 明治四十一年一月一日  
資本金 百二十五萬圓(全額拂込済)  
代表者 代表社員諸戸清六

三重縣の富豪諸戸家の所有する田畑、宅  
地、山林の巨大なるは洵く世人の知る所  
なるが、同家に於ては祖先以來銳意之れ  
が改良整理に熱心し、殊に先代諸戸清六  
氏は慈善心に富み、公益の志厚く自己の  
所有する土地に種々の設備改良を加へ、  
借地人をして、低廉なる借地料を以て良  
好なる田畑、山林を耕作し得らる、種種  
々苦心し來りしかば、現當主清六氏又父  
の遺業を繼承し、明治四十一年一月一日  
同族のものと相謀り、資本金百五十萬圓  
を以て田畑、宅地の經營、殖産事業を開  
始せり、是れ自家の資産を強固ならしむ  
るのみならず、兼ねて借地人の利益をも  
計らんとの趣旨に出でたるものと云ふべ  
し、而して是れが擔任者として家臣故小

池正一、故後藤啓次郎、故近藤清吉の諸  
氏尤も功勞多し、明治四十三年二月二十  
六日、資本金を二百五十萬圓に増加せし  
が、同四十五年二月九日、社員諸戸精太  
郎氏退社するに及びて、現在資本金百二  
十五萬圓に減資せり。

大正四年三月支配人近藤清吉の爲め没  
せしは實に會社の爲めに、痛惜すべき所  
なりしが、大正六年十一月に至り、法學  
士小池一(前支配人小池正一氏息)入りて  
支配人となり専心事業經營に盡し、大正  
七年十一月十一日先代清六翁の十三周  
忌を期して、大いに其の組織を改め、多  
年會社の事業に従事し、功勞顯著なるも  
の並に新に入社せる重役を社員に列し、  
益奮勵を望むと共に、年々利益の幾分を  
配當して其勞に酬ゆる事となり、其基礎  
益々鞏固となれり、即現在代表社員社長  
諸戸清六社員木村敬義社員、支配人小池  
一社員相談役青木文治郎社員、副支配人  
近藤茂同松永千秋、同田中雅太郎社員、  
重役藤井良三、同安藤藤佐衛門、同水谷  
磯八重役水谷忠三の諸氏、専心經營の任  
に當り、尙新に朝鮮に土地を購入して大  
井順之助氏を朝鮮部長とし、益々事業を

擴張しつゝあり、而して今や積立金九十  
四萬圓餘、特別積立金五萬圓餘を算する  
に至れり。

### 合名會社 木商店

所在地 兵庫縣神戸市兵庫東川崎町一  
設立 明治三十五年十月  
資本金 五十萬圓  
代表者 鈴木よね

日本の代表的貿易業者として又最大の内  
國商人として且つ最も偉大なる事業經營  
者として内外の耳目を聳動せしめつゝあ  
る同店は明治三十五年十月の設立にて公  
稱資本金額は僅か五拾萬圓なれども其の  
創業は明治七、八年頃にして實際の資本  
は鈴木家の全財産を運轉し代表社員鈴木  
よね總支配人金子直吉氏以下多數の店員  
が獻身努力の下に日に長足の進歩を  
なしつゝあり。同社の取扱品は砂糖、薄  
荷、船舶、機械、汽鐘、金屬、石炭、燐  
寸、米、麥、麥粉、大豆、肥料、油、染  
料、麥酒、生糸、綿糸、綿花等にして殆  
ど各種の商品を網羅し商業の地域は國の  
内外に洵く東京、大阪、横濱、名古屋、  
下關、小樽、旭川、函館、鹿児島、那覇  
臺北、臺南、京城、仁川、釜山、大連、

倫敦、紐育、シヤトル、桑港、ボートサ  
イド、カルカッタ、ボンベイ、新嘉坡、  
浦鹽斯德、哈爾濱、長春、青島、濟南、上  
海、漢口、香港等の各地に支店及出張所  
を設け本店と相呼應して敏活なる經營を  
なせり。  
然して其經營に係る事業會社は船舶、機  
械、鑛山、紡績、水力電気、保險業及倉  
庫業等を始め前記の商品に關する總てに  
亘り其の直營及關係會社工場の數は頗る  
多く就中重なるもの一二を擧ぐれば次の  
如し帝國汽船株式會社、株式會社神戸製  
鋼所、日本金屬株式會社、東洋製糖株式  
會社、帝國麥酒株式會社、株式會社大里  
製粉所、日本酒類釀造株式會社等にして  
枚舉に遑あらず。  
又同社は曩に寺内内閣の當時政府の指定  
商として外米管理部の命に依り朝鮮米の  
移入及外米の輸入をなし國家社會に多大  
の貢獻をなせり。  
今や同社は神戸のみの鈴木木商店にあらず  
我國の一大商店にして世界的名聲を擅に  
し東京の三井三菱をも凌駕せん勢力を示  
せり。  
現在出資社員は鈴木よね、柳田富士松、金

子直吉氏にて支配人は西川文藏、森榮郎の兩氏なり。

名古屋製糖株式會社

所在地 名古屋市南區熱田東町字丸山二番地  
設立 明治四十三年十二月三十日  
資本金 二十萬圓(拂込資本金十二萬五千圓)  
代表者 社長平子徳右衛門

本社は糖製造販賣及附屬事業をなすの目的を以て設立せしものにして取引先は全國各地及遠く臺灣朝鮮支那等に及べり、其の事業は昔時より始まり我國特有のものにして需用家其者が自ら製造し供給せし程のものなりしが世の進歩に伴ひ分擔事業として供給家起り尙進んで機械的組織をなせる當會社の創設を見るに至れり而して當會社は設立以來明治四十四年十二月より試験的最初の製造をなし爾後引續き職工を督し製造に従事せしも新設機械に對する職工不熟練機械不備の爲め、製品品質不揃且つ同業者の壓迫を受け加ふるに創立以來事業界不振の渦中に入りたると風伯の天災を蒙りたる等の内憂外患交々至り多大の頓挫を來し實に瀕死の状態なりしも能く堪へ能く忍び奮勵努力製品の研究改良に勉め機械設置の變更改

善を行ひ事業上一大改革を加へ只管苦心經營し爾來昔日の不振を復活し今日の名聲を得益々販路擴大するに至れり。顧り見れば開始以來三年間は實に試験的時代たり過度時代たるの期にして斯業の緒に就きしは實に大正三年一大革新以來今日に及べり此間世界一戰亂に相遇し諸原料工費暴騰したるも機宜に應じ適當なる處置をなしたる爲毎期二割五分乃至五割の利益配當を獲得し尙ほ時代に伴ひ倍額の増資をなすの現態をなせり爾今尙穩健着實進歩發達を完成すべく内外の改善に意を注ぎ以て前途の大成を期せんとす近時に於ける損益計算は利益の部に於て船製造高金四拾萬七千六百六十四圓六十一圓、船製造出高金三萬七千五百廿三圓八拾三圓、船製造入高金九千三百廿一圓五十四圓、計金四拾五萬四九百九十八圓九角。損失の部に於ては原料消費高金三拾五萬五千七百圓六拾三圓、營業費金一萬四千七百廿三圓六拾九圓、製造費金六萬四千三百八拾九圓九錢、家屋償却金壹千二百圓、合計金四拾參萬六千拾三圓四十一圓一角。而して差引金一萬七千九百九十六圓五拾七錢の當期利益金を得年二割八分の配當をなす

株式津米穀取引所

所在地 三重縣津市東町二六番屋敷  
設立 明治二十六年十二月  
資本金 十萬圓  
代表者 理事長川邊格彌

明治貳拾六年參月法律第五號を以て取引所の發布より同年拾一月二十二日法律に據りて後藤仁兵衛外十九名の發起人より設立免許を申請し同年拾一月三十日を以て其の免許を得同年十二月二十四日市場を開始す。初資本金六萬圓にして内參萬圓を倉庫資本とす、創業當時役員に就任せしもの左の如し、理事長後藤仁兵衛、理事佐伯惟毅、理事小島徳右衛門、理事村上勘七、監査役川喜田四郎兵衛、監査役芝原七右衛門、明治二十七年より二十九年の間に於て倉庫用敷地として津市大字津與字船頭町に於て千〇二十六坪餘の地所を買ひ入れ之れに四棟の倉庫を建築し又津市賢寄町に於て地所七十參坪

餘の地所と倉庫一棟を買ひ入れたる、明治二十八年下期に取引所の資本金を四萬二千圓とし翌年上期に五萬圓に増資せり明治二十九年三月十七日株式取引營業増加の件認可を得たるを以て從來株式會社津米穀取引所とあるを同年三月二十三日より株式會社の津米穀株式取引所と變更し同年五月十日株式取引の開業を始めた、明治三十一年米價非常に暴騰し之れが調節策として同年六月期より朝鮮米外國米を受渡しに代用するの規定を加へたり、明治三十二年所有倉庫を津倉庫株式會社に貸與せり、同年八月より仲買人身元保證金を二千圓と改定す、明治三十五年勅令第七十四號の改正に依り、當取引所の資本金を十萬圓に増加せり、同年七月十七日株主總會の決議に依り明治三十六年十一月三十日より向ふ滿十ヶ年間營業繼續の手續をなしたる處三十六年八月十四日を以て免許し難き指令書到着せり依て九月廿五日臨時株主總會を招集し處分取消の行政訴訟を提起するの件を決議し拾月拾三日を以て該願書を行政裁判所に提起し勝訴の結果十一月二十八日を以て農商務大臣の認可を得たり、三十八年

下期に於て仲買人身元保證金を一千圓に改定す、明治四十五年五月二十三日受渡代米格付表中へ米價調節の爲め臺灣米朝鮮米を端境期、即ち八九十月の三期に限りに受渡しに代用し得るの規定を追加せり大正六年下期に於て定款及營業細則全部の改正をなしたり。當取引所營業年限はふ十ヶ年間繼續免許の件大正元年十二月二日を以て農商務大臣へ出願し大正二年八月二十九日免許を得たり、大正二年壹月臺灣米朝鮮米を受渡しに代用せしむるの規定を追加し同年五月期米より之れを實施せり。

たり、大正七年六月取引所令第十一條の改正(小口落禁止)に伴ひ營業細則の變更をなせり、大正七年上期に於て米價非常の昇騰を告げたるより之れが抑止策と受渡しの圓滿を期せむ爲め標準米の品位を低下し大正七年六月期より大正八年一月限り迄之れを實施せり、大正七年八月十五日暴徒騷擾の際類焼の厄に遇ひしを以て爾來假營業所に於て業務を營みつゝあり、大正八年一月臺灣米、外國白米を受渡しに代用し同年四月限りより拾月限り迄實施するの規定を追加せり。

現重役は理事長川邊格彌、理事大川馬三郎、理事木谷利吉、監査役岡長平、監査役後藤仁兵衛の諸氏なり。而して設立以來の配當率を示せば左の如し。

大正二年三月より仲買人身元保證金を二千圓に増額せり、大正二年十二月一日より株主總會の決議に基き有價證券の賣買取引を廢止し且つ商號を株式會社津米穀取引所と改稱せり、大正三年九月辰より臺灣米の代用を廢止せり、大正參年九月取引所法并に税法改正實施以來市況一新し賣買取引高頓に激増を來したり而して大正四年上期に於て定款及營業細則の全部改正をなし同時に仲買人身元保證金を五千圓に増額し賣買單位を五拾石と爲し

自明治二十六年十一月	無配當
同 二十七年	上半年無配當 下半年一割
同 二十八年	上半年一割 下半年一割二分
同 二十九年	上半年一割四分 下半年一割五分
同 三十年	上半年一割三分 下半年一割四分
同 三十一年	上半年九分 下半年四分
同 三十二年	上半年無配當 下半年七分
同 三十三年	上半年七分五厘 下半年一割
同 三十四年	上半年七分五厘 下半年八分

合名會社秋元商會

同	三十五年	上半期八朱	下半期八朱
同	三十六年	上半期八朱	下半期無配當
同	三十七年	上半期無配當	下半期四朱
同	三十八年	上半期四朱	下半期六朱
同	三十九年	上半期六朱	下半期六朱
同	四十年	上半期五朱	下半期七朱二厘
同	四十一年	上半期七朱	下半期七朱五厘
同	四十二年	上半期八朱	下半期九朱
同	四十三年	上半期九朱	下半期一割
同	四十四年	上半期九朱	下半期一割二分
同	大正四十五年	上半期一割二分	下半期六朱
同	二年	上半期八朱	下半期六朱
同	三年	上半期六朱五厘	下半期一割一分
同	四年	上半期一割	下半期一割五分
同	五年	上半期九朱	下半期一割五分
同	六年	上半期一割三分	下半期一割
同	七年	上半期一割七分	下半期一割三分

合名會社元商店

所在地 山口縣下關市中之町八十九番地  
 設立 明治四十四年七月  
 資本金 三萬圓(積立金二萬一千圓)  
 代表者 秋元清助

秋元清助、秋元豊二の兩氏は秋元兄弟商會なる名稱の下に明治三十八年以來北韓

即ち朝鮮韓鏡南道永興郡に於て黒鉛採掘業を經營し併せて下關に營業所を設置し此の地を本據として専心海外輸出並に内地販賣を爲し來りたるも事業の整理上其れが必要を感じ、法人組織に改め合資會社秋元商會となし次で昨大正元年十二月更に組織を變更して合名會社となし現今に及べり、本邦人にて新領土朝鮮に於て種々なる事業經營者あるも黒鉛採掘業者として秋元兄弟に關する事業の右に出づる者なし、是れ國富開發者として異採ある者なり。

當商會創立以來資本の増減なく能く其の資産を運用して事業の進行に遺憾なからしめ、事業は漸次堅實なる發展の途に就き而して對外貿易の趨勢は等差級數的に進歩し、内地販賣は電氣工業の急進的發展が需要を喚起して等比較數的の進歩を見つあり、當會社の營業目的たるや前述の黒鉛採掘と輸出販賣を主とし居たりしに偶々歐洲大戰の際に一般經濟界の變動に依り茲に觀る所あり大正五年十一月佐賀縣西松浦郡東山村大字久保岡本賴造氏所有の炭礦を買收し秋元伊萬里炭礦と稱し石炭採掘販賣事業を開始し産

出炭全部を三菱商事株式會社長崎支店に一手販賣の特約をなし漸次事業の發展と時勢の進運に伴ひ左の諸氏により大正七年十月資本金壹百萬圓拂込額七十五萬圓の株式組織に變更し伊萬里炭礦株式會社と稱し本店を横濱市本町一丁目一六番地に設置せり。重役氏名左の如し

- 取締役社長 岡部菊太郎
- 常務取締役 朝田惣七
- 同 秋元豊二郎
- 取締役 秋元清助 高木七五郎
- 監査役 岡部 織吉 秋元 米三
- 取締役社長 秋元清助
- 取締役 岡部菊太郎 朝田惣七
- 高木七五郎 秋元 米三
- 監査役 岡部 織吉 秋元豊二郎

大正五年一月宮崎縣西臼杵郡岩戸村字渡内滿庵礦を買收し秋元岩戸礦業所と稱し而して之が採掘準備の爲め約一箇年を要し爾來採掘中の處目下の生産量一箇月二百噸を産し二三有力會社と特約販賣せり尙附帶事業として石炭販賣仲立取次代理業等にして代表社員は秋元清助、同秋元豊二郎兩氏なり。

濱田電氣株式會社

所在地 島根縣那賀郡濱田町  
 設立 明治四十四年五月八日  
 資本金 六十萬圓(卅九萬三千七百五十圓拂込額)  
 代表者 取締役社長佐々田懋

同社は濱田町及其附近の村落に、電燈電力供給の目的を以て、福澤桃介、松下淺吉、渡邊修、角田重正、中石剛光、松江安太郎、小林藤一郎、俵三九郎、新藤保太郎の諸氏之れが發起人となり、周布川水利使用の許可を明治四十三年八月出願せるに始まり、同十月十日水利使用の許可を得、又一方水利使用許可願と同時に申請出願せる電氣事業經營許可書も、十四年一月十八日附を以て下附せられたるに依り、明治四十四年五月八日創立、事業を開始せり。

濱田電氣株式會社、金澤電氣瓦斯株式會社

本社の營業目的は、電燈電力の供給及電氣作用に關する機械の製造装置、又は賣買併に電氣に關聯せる事業を營み、又は之れに投資をなすを目的とせるものにして、創立當時の資本金は十五萬圓、點火燈数は二千燈に過ぎざりしも、社運の隆昌と時勢の進歩に伴ひ、創立後三回の増資をなし、尙ほ大正七年十月三十日隣郡益田町に設立せる益田電氣株式會社を合併し現在電燈既に二萬五千燈に達し、電力二百馬力を供給し、尙ほ益々之れが發展擴張に盡瘁し、目下東部は那賀郡終端黒松村方面、西部は美濃郡益田町、高津吉田村方面及山口縣阿武郡須佐、江崎村方面に亘りて經營し、尙從來電力の供給なかりし美濃郡へも近々供給する事となりしを以て、現在發電所の發電容量は殆んど全負荷に達せんとするを以て、既設發電所の上流に第二發電所の新設を計畫し、大正七年二月十五日水利使用許可を出願し、同年十二月廿七日水利使用の許可を得たるに依り、近く施行の計畫にして將來の發展、期せずして明なるべく、又社長には地方財界の巨人、佐々田懋氏、専務取締役には、斯業に造詣深き松下淺

金澤電氣瓦斯株式會社

所在地 石川縣金澤市下本町六番丁十一番地  
 設立 明治三十二年七月二十四日  
 資本金 四百萬圓(拂込二百五十萬圓)  
 代表者 取締役社長小池清一

金澤市は、裏日本の雄鎮にして、陶磁器漆器象眼細工の如き、美術工藝品の淵藪にして、織物製紙の如き製造工業頗る旺盛なるが故に、電氣瓦斯の需用日に益々盛なるは偶然にあらず。

曩に明治二十九年七月十三日、金澤市が市營として、電氣事業經營の許可を受けたるも、同三十年十一月四日金澤電氣株

式會社に其事業譲渡の許可を得、越えて同三十一年十二月二十八日、同會新設立の免許を得、同三十三年七月二十四日設立を了し、同三十三年六月二十五日より電燈電力の供給を開始せり、同四十一年瓦斯供給事業兼營を計畫し、同年十一月三日より、瓦斯供給を開始せり、此際現今の社名に改稱す、大正七年に至り、電氣化學工業品の製造事業兼營を計畫し、同年十月二十三日製造を開始し、主として炭化石灰を製造す。

會社の資本は、設立當時二十五萬圓なりしか事業の進展に伴ひ順次増加せり、即ち明治三十七年一月二十五日、三十五萬圓に同四十年一月二十八日五十萬圓に、同四十一年七月二十八日百萬圓に、同四十四年一月二十七日二百萬圓に、大正六年一月二十七日四百萬圓となるなり、當初電氣供給區域は、石川縣金澤市及石川郡野村の一市一村なりしも、漸次増加し今日に於ては一市五町四十箇村を算するに至り、尙石川縣内電氣事業者たる大聖寺川水電株式會社、小松電氣株式會社、小松電氣株式會社津幡支社、七尾電氣株式會社、松金電氣鐵道株式會社、金石電

軌道株式會社の如きも、皆其電力を受電するに至れり。

初め犀川の水力を利用し、石川郡犀川村字下辰巳に發電所を新設し、明治四十四年四月手取川の水力を使用し、福岡第一發電所を大正七年一月、手取川支流直海谷川の水力を使用し、福岡第二發電所を新設し、現在に於ては最大四千六百「キロワット」の發電力を有するに至れり、目下手取川の水力を使用して、吉野發電所を手取川支流瀬波川の水力を使用して市原發電所を新設工事中にして、前者は大正九年末、後者は大正八年末竣成の豫定にして、發電力は五千五百「キロワット」なり、創立當時は中川長吉氏取締役社長となり、經營に任せしも時利あらず社運一時悲境に陥りたるも、小池靖一氏入りて、取締役社長となり、故横山隆興氏取締役となり、久保田全氏專務取締役取締役となり、拮据經營に任じ社運一變し、日々隆々の勢となり、料金は全國に對し、殆んど破格の低價を以て販賣するに拘らず、一割二分の配當を繼續するに至れり、是れ前記三氏の努力に據るものとす、現今の重役は、取締役社長小池靖

一、專務取締役代務久保田全、取締役横山章、本多政由、山田信昌、監査役男爵前田直行、大森孝次郎、田守太兵衛の諸氏なり。

石川縣農業株式會社

所在地 朝鮮全羅北道金堤郡金堤面新豊里  
設立 明治四十年十二月  
資本金 二十萬圓(拂込金額十九萬圓)  
代表者 取締役社長中島德太郎

明治三十九年日露の干戈納まりて、韓國我日本帝國の保護國となりしかば、時の石川縣知事村上義雄、農工商の各業に従事せる縣内實業家を滿韓視察として、派遣せしに何れも韓國の人口土地の割合に少なきのみならず、土地肥沃なるも農業幼稚にして、土地の價格低廉なるを以て韓國の農業經營に適し、移民耕作の有望なることを復命せり、而して知事は更に專問技師並縣屬を派遣して、周到の調査を遂げ、愈々當該事業の確實有望なるを認定せり、茲に於て明治四十年七月矢田與之外七名發企人となり、資本金拾萬圓を以て、石川縣農事株式會社を組織せむとし、創立事務所を金澤市大手町三十六番地に設け、同年十二月創立總會を開き

當會社の設立をなせり、同時に知事に對し、會社の保護方を請願せしに、明治四十一年一月營業資金借入保證、並に會社創立の翌年より三ヶ年間に於て拂込金に對する利益配當年六分に達せざる時は、其不足額を毎年縣費より、補給の指令あり、同年四月取締役北尾榮太郎、相談役本岡三千治、技師農學士村上又次郎の三氏渡韓し、在京城要路の有識者に就き、選地の大體を聞き各方面に亘り調査し、全羅北道東津流域一帶の平野を根據とし、同年七月全羅北道金堤郡金堤邑内に出張所を設け、土地の買収に着手し、縣民の移住を奨励せり、元來朝鮮の地たる氣候の關係上、早魃に罹り易きに拘はらず、水利開けず従つて灌漑の不便なるは農事上の一大缺陷とす、當會社は夙に此處に着眼し、必要の地に溝渠を開鑿し水利の便を計り、模範水田を設置し種子の改良に勉むるなど、専ら農事の改良普及に全力を傾注し、爾來孜孜として、經營する所なく、大正七年に於て、一萬有餘石の粍を收納したり。

然り而して當社は、創立當時の資本は拾萬圓なりしが、四十三年十二月臨時株主

石動電氣株式會社

設立 明治四十三年七月十九日  
資本金 四十五萬圓(拂込額)  
代表者 常務取締役吉田作助

富山縣は山と海と接近し、水力利用の便多く、工業地として世人の注意を喚起するに至れり、殊に水力電氣事業は其豊富なる水源地を有するのために、近年著しく發展し來れり。當會社は目下子撫川、小矢部川の二ヶ所に發電所を有し、其出力六百「キロワット」なるが既に賣盡したるを以て、更に五百「キロワット」のもの一臺増設工事は本年八月竣工の豫定にして、尙久婦須川に於て二千「キロワット」の水利使用の許可を得たるものあり、近く工事に着手すべければ、是等の電力を以て地方産業界のために大に活躍せんとせり、資本は四月總會に於て、百萬圓に増資を決せり。供給區域は富山縣に於て三郡、石川縣に於て二郡に亘り、電燈數一萬五千電力五百餘馬力を供給せる外、中越電氣、出町電燈、羽昨電氣の三會社へ送電せるものなり。

創立發起人は、石動町淺香誠太郎、愛知縣岡崎、近藤重三郎、田中功平、岐阜縣

中津町酒井一平、吉田佐一郎等にして、  
現今取締役は吉田作助、手島鐵司、相川  
久太郎、水牧平助、藤田久信の五氏なり。

久原商事株式會社

所在地 本店 神戸市播磨町十七  
東京支店 麴町區八重洲町一ノ一  
設立 大正七年八月十五日  
資本金 一千萬圓(拂込五百萬圓)  
代表者 久原房之助、栗原素

本社は關西事業界の重鎮、久原房之助氏  
直系會社にして、久原鐵業株式會社と姉  
妹會社なり。従つて規模の大なること商  
取引の確實なる點は、敢て多言を要せざ  
る處なり、其の營業科目は、海運業、物  
品販賣業、仲立業、代理業及び各種業務  
に關する附帶事業一切を營み、内地には  
東京、大阪に支店を、横濱に出張所を設  
け、尙海外に左の出張所を設置す、即ち  
倫敦、巴里、羅馬、紐育、シヤドル、桑  
港、香港、漢口、上海、天津、濟南、浦  
鹽斯德、坡西士、孟買、コロンボ、カル  
カッタ、新嘉坡、大連、ハルビン、奉天  
ベルン、シドニー、瓜哇の二十三ヶ所に  
して、本社は主として海外に發展せり。  
而して現在重役は、社長久原房之助、取

岐阜電氣株式會社

所在地 岐阜市今川町二丁目  
設立 明治四十年一月  
資本金 三百萬圓(拂込二百七十萬圓)  
積立金 十一萬八千餘圓  
代表者 取締役社長岡本六右衛門

當社は明治二十七年七月營業を開始した  
る岐阜電燈株式會社の事業を譲受け、明  
治四十年一月、之が繼承經營したるもの  
にて、事業の目的は電燈、電力の供給、  
電氣機械器具の賣買、貸付並に電氣工事  
の請負等にして、營業方針は當社發電容  
量千五百五十基外に他社契約二千基を有す  
るも全部供給し、現今電力の供給を謝絶  
するの狀態にあるを以て、目下施工中な  
る第三水力發電所工事の完成を促進し、  
之が充實を計り、尙進んで原動力の増設  
を爲し、一面供給區域の擴張を計り一般  
の需用に對應せむと計畫し居れり、資本  
金は創立當時三十萬圓、爾後明治四十二  
年三月五十萬圓に同四十四年五月五十

圓に大正六年三月參百萬圓に増加し、現  
今に至る、岐阜縣大垣市竹島に支店を設  
置せり。  
最近電氣の需用著しく増加し、尙は今後  
倍々需用旺盛なることを豫期せり、現今  
供給區域は二市六十五ヶ町村に亘り、電  
燈數八萬燈、電力數三千二百馬力に達し  
配當率は毎期一割二分を繼續せり、現重  
役は取締役社長岡本六右衛門、取締役桑  
原善吉、同箕浦宗太郎、同渡邊榮吉、同  
篠田祐八郎、同德倉六兵衛、同兼支配人  
大野英治、監査役矢橋亮吉、同杉山銚二  
郎の諸氏にて、其の他重なる社員は工務  
課長技師長内田秀四郎、副支配人小栗卓  
爾、庶務調査兩課長久保田正源、營業課  
長後藤駒二郎、會計課長末松七郎氏等な  
り。

濱松倉庫株式會社

所在地 靜岡縣濱松市(東海道濱松驛)  
設立 明治四十年二月  
資本金 六萬五千圓(拂込濟)  
代表者 常務取締役大野木代次郎

當社は當初濱松銀行支配人たりし、鈴木  
仁一郎、同行頭取中山誠一、天龍運輸支  
配人竹内龍雄諸氏等發起、明治四十年二

月創立、同四十一年八月一日倉庫業、同  
年十二月運送取扱業開始せるものなり、  
而して當社は倉庫業と、運送取扱業を兼  
ね、倉庫運輸設備始度完備せるを以て一  
般運送業者の驛卸後引取積込等のため、  
荷傷經費を嵩む等の不便なく、且つ雨天  
の場合も作業し得るを以て、尤も安全に  
且つ低廉に貨物の取扱をなし得るのみな  
らず、西遠銀行の出張貸付をなす等、保  
管貨物に對する金融の便あるを以て、近  
來異常の發展をなし、當地物産の天産  
物の大部分、遠州綿布通運と共に一手取  
扱米穀肥料の大部分は、當社の取扱に係  
るものなり、一ヶ年倉庫部保管貨物は六  
十萬個以上に及び、運送取扱貨物又、七  
八萬噸以上に及ぶ。

現在重役は常務取締役大野木代次郎、取  
締役中山誠一、同鈴木仁一郎、同深井應  
一郎、同本多寅治、監査役内山嘉吉、同  
津倉龜作、同青木銀藏、支配人太田八郎  
の諸氏なり。

當社倉庫は濱松停車場の東北三丁餘に在  
り、敷地面積三三二四坪、倉庫附屬共二  
四棟大部分は、煉瓦倉庫にして此建坪一  
四三〇坪、倉庫部保管貨物、運送部一時

株式會社長濱米米取引所

預り貨物以外に、八萬個位を收容保管し  
得、倉庫に收容保管し得る數量を俵數を  
以て示せば、實に十一萬五千六百七十俵  
(但し一立方坪に付五十五俵)運送部とし  
ては濱松停車場構内東北側線に、連絡せ  
る延長六鎮七十節の會社専用鐵道を敷設  
し手押にて貨車を出入せしめ、倉庫内に  
て直ちに貨物の積卸をなす設備あり、當  
倉庫間線路上百餘坪の間に、亞鉛張上屋  
を架設せり、尙は輕便鐵道線の連絡に於  
ては、西遠北部集貨物の取扱上至便な  
る大日本軌道濱松支社線及同會社線との  
連絡に依る、濱松鐵道との連絡引込専用  
鐵道の敷設あり。

株式會社長濱米米取引所

所在地 濰州縣濰州郡長濱町大字西本  
設立 明治廿七年六月二十日  
資本金 十萬圓(全額拂込濟)  
代表者 理事長杉本吉士

當長濱町は縣下に於ける生絲、米穀の一  
大集散地にして、勢ひ此系の定期取引の  
必要を生じ、漸次經濟界の進歩に伴ひ益  
々其必要に迫られしより、當町の有力者  
宮川要助氏外二十七氏、之が設立を計畫  
し、種々奔走の結果遂に明治廿七年六月

二十日主務省の認可を受けたり、設立當  
時の資本金は總額四萬圓なりしが、追々  
市場旺盛に趨き、賣買の増加に伴ひ、取  
引所の責任益々大ならんとするに及びて  
當所は其責任を全せんが爲、資本を増加  
するの必要を認め、明治卅五年十二月廿  
三日現在の十萬圓に増資せり。本所は明  
治四十四五年頃より、仲買人漸次増加し  
大正二年の頃最も盛況を極め、益々順境  
の域に進みつゝありしが、大正四年取引  
所法の改正の影響を受けて、營業頓に衰  
微を來たし、其後漸次改善されたるも戰  
後財界の不振なるに伴ひ、目下は仲買人  
五名にして、稍衰微の狀態なるも、近く  
開業の徵あるもの一二あり、發展の日期  
して待つべし。  
創立當時の重役は、理事長下郷傳平、理  
事日比久太郎、杉本吉士、河路重平、監  
査役宇野文平、中村喜平、香水平次郎の  
諸氏なりしが、現在重役は、理事長杉本  
吉士、理事日比久太郎、中村喜平、宇野  
文平、河路重平、監査役樋口松藏、吉田  
治平、河路重平、笠原司馬太郎の諸氏に  
して、現在の資産は十二萬七千六百〇六  
圓餘なり。



四國水力電氣株式會社

所在地 香川縣仲多度郡多度津町大字多度津甲

設立 明治三十年十二月

資本金 五百萬圓(拂込金額三百五十一萬一千二百五十圓)

積立金 三十三萬六千八百六圓

代表者 取締役社長 景山甚右衛門

明治三十年十二月、資本金十二萬圓にて西讃電燈株式會社を仲多度郡金藏寺に創始し、三十三年讃岐電氣株式會社と改稱し、三十六年七月火力六十「キロワット」設備にて漸く營業を開始し、仲多度郡及丸龜市に供給したれども、當時設備に多くの費用を要し、收支償はさる状態なりき、爾來數多の曲折を経て減資一、増資二回にして、四十一年七月資本金二十萬圓となし、火力百五十「キロワット」設備となし、營業區域を綾歌郡に擴張し、漸く展開の曙光を得るに至りたるも、時代の要求は火力に安んずるを許さず徳島縣吉野川支流の水利に依り發電することとなり、四十三年資本金を増加して百二十萬圓となし、社名を四國水力電氣株式會社と改稱せり、大正元年十月に至りて水力二千「キロワット」工事竣功し、從來の

火力は豫備と爲し、營業區域を擴張して縣下二市四郡に延長し、同年十二月高松及觀音寺の二出張所を東西の兩所に設置し翌二年二月辻町水力電氣株式會社を金七萬圓にて買収し、此處に辻町出張所を設けたり、三年六月資本金を二百五十四萬圓に増額し、五年五月金十五萬餘圓を投下して炭化石灰製造を兼營し多大の利益を收めたり、斯くて次第に羽翼を延ばし、五年十月高松瓦斯株式會社を金十一萬圓にて買収し、同年十二月東讃電氣軌道株式會社を金二十萬圓にて合併し、資本金參百一萬五千圓となれり、五年五月に水力一千「キロワット」六年十二月に水力七百五十「キロワット」の増設をなし、香川徳島の二縣に於て二市四十一個町村に電燈電力を供給し、出力合計二千八百五十「キロワット」に毫も餘裕なきを以て多度津町外堀江に二千五百「キロワット」火力發電所の増設工事竣功、本年三月より送電を開始せり、近來電力需要家は日を追ふて簇出すれども其希望を充たすこと能はざるを遺憾とし、七年十月金五百萬圓に増資し、吉野川支流に第二水力六千「キロワット」増設工事を計畫し、既に

工事測量を了へ、目下工事着手準備中にして一日も早く竣功を遂げ、各方面の需用を充たさんことを斯待せり、而して營業成績は良好にして、大正六年下半年以來年一割六分の配當を續行せり。

現重役は、取締役社長 景山甚右衛門、取締役 福澤桃介、武田熊造、合田房太郎、鹽田岩五郎、大田黒重五郎、徳倉六兵衛、監査役 鎌田勝太郎、寒川俊貞、増田次郎、川崎友之介、支配人 小野麟吉の諸氏にして、重なる社員は、庶務課長 中尾泉、營業課長 横田鶴彦、用度課長 代理 太田憲政、會計課長 代理 堅田隆吉、工務課長 淵野幾平等なり。

尙本社の事業目的及營業方針は、電燈、電力の供給及電氣に關する諸般の事業をなす事、電氣軌道又は輕便鐵道により一般運輸の業を營み、併せて娛樂機關の經營及土地家屋の賃貸營業を爲す事、瓦斯を製造し、點燈火熱動力の供給販賣を爲す事、カーバイドの製造販賣をなす事、前各項附帶副産物製造并に機械器具の販賣貸貸をなす事、前各項の事業に關聯する他會社の株式を所有する事等なり。

日本電氣冶金株式會社

所在地 福岡縣遠賀郡折尾町

設立 大正五年十月

資本金 七十萬圓

代表者 取締役社長 大倉發身

我邦に於ける鐵合金類製造の必要なるは管に軍器の獨立上よりの觀察而已に止まらずして各種製造工業の盛大を致すと共に夙に有識者間に於て、論議喧傳せられたる所なりと雖も、其の製造方法たるや歐米先進諸國濟しく之を秘密に附し、以て容易に其一端に窺知するを得ざらむるの状態にありたり。

是れより先我國化學界の大家某氏は、或は其の歐米留學中に於て、或は公務の餘暇に於て、既に十數年來引續き、鐵合金類製造研究に没頭し、多大の研究費と少なからざる年月とを費し、慘憺苦闘の結果漸くにして、完全なる製法を發見し外國製品に比し、毫末も遜色なき精品を出すに至れり、於是乎一般の要望に應せんか爲當社の創立を見るに至れり、蓋し當社の創立は、單に一朝一夕の偶然事にあらずして如斯深刻なる根柢を有するものたるや明なり。

日本電氣冶金株式會社、博多灣築港株式會社

大正五年、大倉喜八郎、柳橋寅五郎、宮本桂仙、渡邊福三郎、渡邊三郎、渡邊龍次郎、北崎久之郎、其の他諸氏發起の下

に同年十月二十五日創立、大正六年七月一日、福岡縣遠賀郡折尾町に建築中の工場竣成、同年八月二十三日事業開始、引續き現在に至る。

同社は九州鐵道中の大驛折尾停車場は門司市より電車又は汽車の便あり、約一時間を要す、我社は該驛を去る東約八丁の距離にあり。

現在重役は、取締役社長 大倉發身、常務取締役 奥山良吉、取締役 棚橋寅五郎、取締役 渡邊龍次郎、同渡邊三郎、同北崎久之郎、監査役 渡邊渡三郎、同渡邊利二郎、同加瀬忠次郎の諸氏なり。

- 一、フェロタンングステン 六〇%以上八五%
- 一、フェロマンガニース 五〇%以上八〇%
- 一、フェロクロム 五〇%以上六八%
- 一、フェロシリコン 五〇%以上九〇%

一、シリコスピゲル 二三%以上二六%

其他各種鐵合金類

製品特長は、牧野式電氣爐に熟達せる技術者及多數の職工を有し、一定したる品位の製品を出し、而も有害不純物の少量なるを以て特長とす、常に品質上外國製品を凌駕しつゝあるは、各所の納品成績に依りて明かにして事實は最も有力なる證明者なり。販路は主として陸海軍の軍需品製造原料として、納入する外内國各地大工場に販賣す。

博多灣築港株式會社

所在地 福岡縣遠賀郡大字馬出濱松原

設立 大正五年八月七日

資本金 三百萬圓

代表者 社長 中村精七郎

由來博多灣築港の唱導せらるゝ久し、之に對し幾多の計劃は設計せられたり、雖時機未だ熟せず、空しく歲月を推移し來たりたるが、杉山茂九氏亦夙に博多灣が將來の對外的大貿易港として、最も適當なるを認め、多年の研究と其對外的地位に付、比較論評を試み、地方人士の賛同を得、博多灣築港後援會の組織を見るに

至り爾來本計劃の遂行を謀り、幾多の折衝を経て遂に大正四年三月十一日附を以て築港の許可命令書を交附せられ、中村精七郎、中村定三郎の兩氏、亦奮つて本計劃を翼賛し、大正五年八月七日創立總會を開き、重役を選任し、實施設計に關しは工學博士川上浩二郎氏を顧問とし、(現今専務取締役)同年九月七日を以て、施工方申請を爲し、翌六年五月二十一日其認可を得たり、同社は豫て起工上の準備として、淺瀬船其他附屬船舶の買入又は借入諸材料の配給整ひ居りたるを以て同年、六月一日直に起工式を行ひ、爾來工事進捗し、又本設計中第二期工事は第一期工事後一ケ年、以内に着手の豫定なりしも、工事施行上第一期工事と相俟つて同時に施工するの得策なるを認め之れが、設計變更を爲し、既に埋立地防波堤護岸の一部、航路及内港の淺瀬等若々其工程を進めたり、今や數年を出でずして博多灣頭巨船大船の出入貨物の吞吐九州の發展期して待つべきものあらん。

土佐製氷株式會社

所在地 高知市九反田四十四番地

設立 明治四十年六月  
資本金 三十萬圓(拂込金十八萬圓)

代表者 取締役社長松村寛三

當社の創立發起人は、創立當時東京大阪地方視察中、鮮魚冷蔵用として、氷の需用甚大なるを認め、殊に高知縣下は海に面せる處頗る廣く、隨つて漁獲物の量多額に上り、加ふるに比較的暖國なるを以て其の事業の有望なるを確信し、當時斯界に精通せる在京宮口竹雄氏の意見を叩き、其れが賛成を得て創立に着手せる者なり、當會社は氷及蒸餾水の製造販賣並に運送業湯屋營業等をなすを目的とするものにて、取引先は高知縣全部及び愛媛縣及徳島縣の南部并に宮崎縣等にて、明治四十一年三月二十九日營業開始以來引續き良好なる成績を挙げつゝあり。最初高知市金子橋に於て、六噸製氷機を以て製造に従事しつゝありしも、逐年販賣高の増加に伴ひ、製造の不足を告げ且つ土地稍々不便の嫌あるを以て四十四年三十噸製氷機を購入する事に決定し、地を現在の處にトし、同年八月起工し四十五年六月工事の竣成を告げ移轉せり、大正五年六月に至り、市外常盤町に在りし

一製氷會社を買収合併し、爾來運轉休止中の處這回之を本社に併置する事となり目下之が工事中に在り、近く其竣成を告げんとす、而して本機の製造能力は六噸なり。縣下西郡に於て其需用日に月に増加するを以て遂に幡多郡清水港に分工場を設置する事となり、大正四年度に於て十噸製氷機を購求し、五年度に入りて起工、同年末より營業を開始する事となり、然るに歐洲戰亂開始以來炭價の暴騰實に甚しく電力運轉の有利なるを認め、之れが増設を爲す事に定め、清水支店に於ては已に竣成を告げ、本店に於ては目下尙工事中に在り、近く其工を了せんす。

資本金は最初十萬圓なりしも、大正五年に於て會社の合併により一萬二千五百圓を増加し、更らに大正七年度に於て、十八萬七千五百圓を増加して、現今三十萬圓となれり、而して大正八年三月十日に於ける現在の固定財産額は、二十一萬八千餘圓に達し、此外大正七年度迄に償却したる額五萬圓に上れり。當社は各地に於ける需用者の便利を計らんが爲め、縣の内外に涉り出張所の數、

十五ヶ所を設置し、輸送用發動船三隻を以て各所に輸送をなす事とせり。會社創立當時に於ける發企人は、松村寛三、横山慶爾(先代)上田保外數氏にして當時の重役は、横山慶爾(社長)松村寛三上田保の三氏、取締役に濱口恒十郎井上作次郎の二氏監査役なりしが、現在に於ては取締役に松村寛三(社長)横山慶爾、上田保、濱口恒十郎、井上作次郎の五氏監査役に溝淵十太郎、宇田友四郎、川崎幾三郎の三氏なり。

宇和水電株式會社

所在地 愛媛縣北宇和郡宇和島町大字本町

設立 明治四十三年六月三十日

資本金 一百萬圓(拂込金七十萬圓)

代表者 取締役渡邊修

明治三十九年火力電氣にて、宇和島町のみで電燈電力の供給を企畫したるも、水力を利用し、供給區域を増加するの有利なるを感じ、縣下宇和川の水力を利用し東宇和郡野村に發電所を設け、同郡野村上宇和村、宇和町西宇和郡八幡濱町、神山村、川之石町、宮内村喜須來村、矢野崎村、北宇和郡宇和島町、吉田町、八幡村、丸穂村、三間村、成妙村、立間村、

宇和水電株式會社、株式會社明之町銀行

立間尻村を加へて、經營すること、なせるも、其間幾多の曲折を見て、其進行遲々たりしを以て、發起人中の太宰孫九氏起て専ら其局に當り、終に三ヶ年後の四十二年六月大倉組の援助を得て、會社の成立を告げ、工事に着手し翌々年即四十五年五月一日營業を開始せり、爾後大正三年には、北宇和郡來村に、四年には西宇和郡三瓶村、二木村、日土村、双岩村北宇和郡高光村を供給區域に加へ、順次發展し、創立當時の資本金四十萬圓にては不十分なるを以て、六年四月増資して一百萬圓となし、同時に南宇和郡綠僧都川及北宇和郡稻ヶ窪川の水力を利用して發電所二ヶ所を設置し、翌七年何れも其落成を告げたるを以て、南宇和郡綠僧都村、御莊村、城邊村、東外海村、北宇和郡岩松村、高近村、清満村に供給を開始し、此他尙需用の増加と供給區域擴張の準備として、東宇和郡模林村に大發電所設置の工事を進めつゝあり、大正七年末資産は一百四十四萬六千餘圓なり。

發起人は田村春三郎外二十三名なりしも會社創立の前後、死亡又は脱退したるもの多く、總會に於て選舉せられたる重役

は社長渡邊修、専務取締役土居辨次郎、常務取締役太宰孫九、取締役緒方陸朗、長瀧嘉三郎、淺井記博、監査役門野重九郎、清水静十郎、赤松新吉の諸氏なりしも淺井、土居、長瀧、清水の四氏は既に死没し、其後取締役に山村豊次郎、田村春三郎、浦中友次郎の三氏、監査役に宇都宮貞一氏當選して現に其職にあり。

株式種生會社

稱改株式會社明之町銀行

(商號ヲ株式會社明之町銀行ト改稱シ目下認可申請中)

所在地 愛媛縣東宇和郡宇和島町大字明之町

設立 明治十五年一月

資本金 六十萬圓(内四十八萬圓拂込)

代表者 取締役社長本多眞喜雄

明治維新前より、當宇和町有志者毎歲其元服親なる里正清水甚左衛門氏の邸に臻り、年賀の辭を述ぶるを例となせり、同氏之れを機とし、明治元年種生講なるものを設立し、貯蓄の目的を以て毎歲出資をなさしむ、これ當社創立の起源なり、當時の創立者は、前記清水氏の外清水静十郎、清水孫三、上甲庄三郎、門多丈太郎、清水住三郎、大塚平三郎、末光寅吉

藤堂信太郎外数氏にして、創立後八年にして資金僅に五百四十餘圓なりしが、明治二十六年法律改正に際し、一株の金額を一百圓とし、總資本高を十萬圓となし茲に初めて、株式種生會社の商號を冠するに至れり、之れより先き、明治十五年一月講を改めて會社の組織となせしを以て、爾後此の時を會社設立のこととなせり、講長又は社長には清水静十郎、末光三郎二氏之れが任に當り、業務に執掌す殊に清水氏は創立以來、大正四年に至る迄前後を通じて四十二年の長きに及べり大正四年一月より、現社長本多眞喜雄氏就職あり、以て今日に及ぶ、當社の起源此の如くなるを以て、其基礎頗る強固にして、社運次第に旺盛に赴き、明治二十九年増資五萬圓を、同三十三年 十萬圓を、同四十二年に五萬圓を、大正二年に二十萬圓を、同七年に二十萬圓を募集し現今六十萬圓となれり、營業の目的は貸附金諸預り金、爲替取引、其他一般の銀行業にして、其取引先は三府六縣に亘り本支店合計百二十ヶ所を數ふるに至れり、本郡内俵津村に支店を置き、多田村出張所を設け、本年又大分縣三重町及本郡

福島羽二重株式会社

所在地 福島市大字森合字下釜三番地  
設立 明治四十年三月  
資本金 六十萬圓也  
代表者 吉野周太郎

本邦重要輸出品たる輸出絹織物の製造及絹布整練業を目的とし、組織的に工場經營をなすつゝあるは、福島羽二重株式會社なり、同社は明治四十年三月の創立にして、資本金五十萬圓なりしが、漸次社業を擴張して、大正四年十一月同縣二本松町なる二本松機業株式會社を合併して

大連取引所 福島羽二重株式會社

所在地 大連市愛宕町十九號地  
設立 大正六年五月三十一日  
資本金 一百萬圓(拂込五十萬圓)  
積立金 八萬九千餘圓  
代表者 取締役神成季吉

當大連港は滿蒙貿易の中心市場として、近年急速なる發展を遂げつゝあるも、此

發展に伴ひ貿易上常に苦心を免れざるは流通貨幣の多種多様な點にあり、故に之が需給調節を按配し、爲替決済を容易ならしむる爲、完全なる補助機關の設置を急務とし、既に此種の機關として、大連鐵業々所ありしと雖も、組織未だ以て其の目的を達するに足らざるものあり、茲に於てか、關東都督府は大正六年五月大連に重要物產取引所に、錢鈔取引所を並置せらる、從て是が運用を完全ならしめんが爲め、其の專務機關として、擔保清算業務を取扱ふべく、大正六年五月三十一日日本會社を創立せり。

其の營業目的は、大連重要物產取引所に於て成立したる錢鈔先物取引の履行を擔保し、其の清算及び受渡の業務を爲すこと、並に大連重要物產取引所の錢鈔先物取引人に、資金の融通を爲すこと等なり而して同社の創立は、時代の趨勢に適したるもの故、營業成績は創立以來極めて順調なり、今毎期の配當卒を示せば、大正六年下半年期(一回)普通年一割二分特別年八分、七年上半年期(一回)同上、七年下半年期(一回)普通年一割二分特別年八割の良好なる結果を擧げ、尙前途益々有望な

現重役は專務取締役神成季吉、取締役相生由太郎、同神崎常一、同郭學純、同趙懷玉、同李子明、監査役河邊勝、同中村敏雄、劉任堂、同安承生の諸氏にして、神崎常一氏支配人を兼任せり。

株式會社熊本米穀取引所

所在地 熊本市鹽屋町二番町二十一番地  
設立 明治廿六年十二月九日  
資本金 十萬圓  
代表者 理事長原田十衛

明治二十四年七月十五日、發起人總代小笠原寛以下十二名の連署を以て、熊本米穀市場出願、同月十六日認可を得、創立事務所を熊本市鹽屋町裏二番町二十一番地に設置し、創立に係る事務を取扱へり是より滿二星霜を経、種々變遷あり、時維二十六年三月、法律第五號を以て取引所法公布せられたるにより、同年十一月二十四日株式會社熊本米穀取引所設置認可申請を爲し、同年十二月九日免許狀下附せらる、翌二十七年一月十五日開業す二十八日三月二十四日、株主總會に於て有價證券買開始の件を決議し、農商務大臣に認可申請をなし、同年六月二十四

日之が認可を受け、株式會社熊本米穀株式取引所と改稱せり、三十六年十二月八日營業期間満了に附同年三月十九日附を以て更に明治三十六年十二月九日より、滿十ヶ年間即ち大正二年十二月八日迄營業繼續の認可申請をなし同年九月八日之が認可を受け、同年十二月九日再び株式會社熊本米穀取引所と改稱し、尙ほ大正二年十二月九日より大正十二年十二月八日迄滿十ヶ年間營業繼續の認可を受け、今日に及べり。

營業の目的たるや、米賣買取引にて創立當時資本金五萬圓なりしも、二十七年二月一萬圓増資、三十五年七月更に四萬圓を増資し、都合十萬圓となれり、從來の家屋總建坪數二階共百四十四坪の處四十五年九月改築工事に着手し、四十四年五月竣工せり、其營業用家屋事務所外九棟二階共三百二十三坪八合なり、創立以來順調に發達し來りしも、三十二年熊本縣財界の動搖に伴ひ一大恐慌を惹起せる餘波を受けて、取引所も又衰運を來たせるの時、重役及び整理委員に於て縱橫奮闘若々整理を了し、其衰運を挽回せり、最近の營業概況は諸積立金九萬三千三百

八十四圓、仲買人二十八名にして最近(大正七下半年期)の賣買高は四百四十七萬七千六百石、此手數料七萬五千四百四十圓四錢なり、本期の配當は五割の見込なり、現在資産二十四萬二千八百五十四圓なり、創立當時の重役は、理事長財津志滿記、理事松尾鶴男、同藤井安俊、監査役河野政次郎、同上羽勝衛の諸氏にして、現今の重役は理事長原田十衛、常務理事生田軍太、理事古閑又五郎、監査役太田黒敏暢、同井島義雄の諸氏なり。

小倉鐵道株式會社

所在地 福岡縣金敷郡足立村富野  
設立 明治三十九年八月  
資本金 三百五十萬圓

代表者 専務取締役伊地知壯熊

抑も同社は明治三十九年八月の創立にして、資本金三百五十萬圓は全部拂込済なるが、元來小倉鐵道の線路は金邊鐵道株式會社以來多大の經營難と、幾多の曲折とを經、前後二十有餘年を費し、大正四年に及びて、漸く經營を開始するに至れるものにして、主として豊前炭田より採掘する石炭を國有鐵道の迂回線に依らず最短距離に依り、關門海峡に搬出せんと

するものなるが、其起點を小倉市の東端足立村、東小倉驛に發し、同驛構内にて九州本線に接続せしめ、金敷郡の中部を縦斷の田川郡との分水嶺たる金邊峠の峻嶮を掘鑿し、延長四千七百四十五呎の一大陸道を設け、田川郡の首邑上香春を過ぎ終點上添田驛に至る、總延長二十四哩五分を本線とするものにして、其間に十ヶ所の停車場を設けたり、海陸連絡設備としては、高濱海岸に約二萬四千坪の埋築を爲し、千六百五十呎餘の防波堤を築造し、延長千八百呎の鐵筋混凝土高架橋を設け、四百噸積大型帆船は、干潮にも出入荷役するを得、約一萬四千坪の貯炭場には、八萬噸以上の貯炭をなし得る設備を施せり、如上其他の諸設備並に機關車客貨車等合計二百四十七輛を要したる建設費總額は五百四十七萬四千餘圓にして、借入金三百二十八萬二千圓は、主として此等建設費の爲に使用せらる。

昨年下半期以來、更に石灰石積込側線一の竣工せるものあり、他に沿線炭坑採掘開始の向もありて、今後の營業成績は多々益々良好なるべく期待せらる、從つて其營業收支も自然良好となり、大正四年中には、營業收入は支出に對して十三割六分に該當したるもの、昨年度に於ては石炭、其他の重要營業費並に勞銀の騰貴著大なりしにも不拘、四割一分に止まりしが如き、如何に堅實なる發達をなしつゝあるかを立證すべく、同時に經營當局者の努力の大なるを認めざるを得ず、終りに本年一月を以て成立したる同社の延長線たる日田鐵道會社は、筑前朝倉郡寶珠山炭田に於ける豊富なる石炭及び豊後日田並に沿道各地の林産物を主要なる貨物とし、其他一般旅客貨物の運輸を目的とするものにして、上添田より豊後日田町に至る延長二十六哩八分を以て、本線となすものなり、因に同社の重役は左の如し、

専務取締役伊地知壯熊、取締役小野金六、同友枝梅次郎、同藏内保房、監査役橋本正彰、同崎山克治、相談役藏内治郎作、支配人泉元藏の諸氏なり。

株式會社 川崎鐵工所

所在地 大阪府北區古川町一番地  
設立 大正七年十月  
資本金 一百萬圓

代表者 常務取締役梶原九十九

本社の前身川崎鐵工所は、去る明治十七年の創業に係り、最も古き歴史ある工場にして、爾來三十六年間各種機械の製作に従事し、多年苦心研鑽の結果、其製品は多大の信認と稱讚を博し、逐年事業の盛運を招來し、今日にては各方面よりの註文輻輳し、工場の狹隘を告げ、茲に一段の發展策を講ずるの機に際會せり、依つて大正七年十月、同所の營業一切を繼承し、資本金一百萬圓の株式會社川崎鐵工所を組織し、本社を大阪に、出張所を神戸市、東京市、福岡縣若松市、門司市長崎市、吳市の六ヶ所に置き、資本の増加に伴ひ機械の増設、工場其他諸般の設備の擴張を執行し、以て一層精密堅牢なる機械を製出し、製品の整備を更に向上せしめむ事を期しつゝあり。

汽鐘、起重機、其他各種の機械器具及鑄鐵品等にして、其註文先は、秋田木材會社、古河鑛業會社、藤田組製材所、淺野造船所、横濱船渠會社、内田造船所、住友伸銅所、大阪電氣分銅會社、住友鑄鋼所、亘田造船所、大阪鐵工所、三菱造船會社、久原鑛業會社、三井物産會社、神戸製鐵所、日本鑛業肥料會社、大阪亞鉛鑛業會社、其他關東關西及九州の一流會社并に個人工場を網羅し居り、其註文先の顔振れを見て以て同所の信用程度を知るに足れり。

内外貿易株式會社

所在地 神戸市榮町三ノ二七

本社の起原は現常務取締役吉田榮藏氏が同市居留地に於て、輸出入業を個人にて經營せるに、其の端を發し、爾來徐々として基礎を固め、業務漸く進展の途に就きたる時、氏が平素の勇健なる活動振に感奮したる、友人某の紹介により、大阪の富豪平野氏と相識るに至り、其の後縁を得て更に努力したる結果、事業愈々發展し、遂に大正七年一月一日を以て從來の營業一切を提げて、現在の内外貿易株式會社を組織し、資本金を一百萬圓とし、本社を同市磯邊通りに設置したるが、逐日事業の擴張に伴ひ、現在地に移轉し其の跡には、雜貨輸出部を置き營業に當りつゝあり、而して機宜に適應する諸般の施設は誤りなく効果を奏し、益々隆盛に向へり。

同社の營業品目を記せば、輸出品中主なるものは、米穀植物製油、魚油、豆類、澱粉、木蠟、寒天、真田麻、木材、絹布類にして、又輸入品中主なるものは米

株式會社川崎鐵工所、内外貿易株式會社

穀、棒鐵、平鐵、銑鐵、軌條、釘、機械類、鐵條、護謨原料、コブラ、椰子油、澱粉類、藥品、染料、支那朝鮮雜穀、繭等なり。

同社は支店を横濱、小樽、青島、清津に出張所を西貢、新嘉坡、桑港の各地に設け、本支店相呼應して業務の隆盛を計れり。

其の營業成績は、創業第一期大正七年一月より同年五月三十一日迄の短期間に於て、既に年一割の配當をなし、同十二月の第二期に於ては年二割の配當を斷行せる等幾多の貿易會社中稀に見るの盛況なり、之經營主腦者の手腕家揃なるが爲めなり。

現重役は、取締役社長平野平兵衛、常務取締役吉田榮藏、取締役半野復男、監査役金澤仁作、林雄助の諸氏なり。

南滿洲鐵道株式會社

所在地 滿洲大連市東公園町  
設立 明治三十九年十一月  
資本金 二億圓

代表者 社長工學博士野村龍太郎

本邦第一の大會社として、資本金二億圓を以て滿洲の野に堂々大飛躍を試むるも

の之を南滿洲鐵道株式會社なりとす、同會社は日露講和條約第六條及日清戰後條約に基き、露國の東清鐵道會社に屬したる、長春旅順間の鐵道及其の支線並に之に屬する一切の權利、特權、財産及び炭坑を譲り受け、明治三十九年官民共同の計畫に依つて設立したるものなり、而して資本金二億圓の内一億圓は政府の出資に係り、既成の鐵道(安奉線輕便鐵道を除く)及び之に附屬せる一切の財産、並に撫順及び煙臺炭坑を以て之に充つ、殘額一億圓中差當り二千萬圓(分割の結果)二十萬株は之を日清兩國人間より募集せり、其の後資金の必要を生ずるに從ひ第二回第三回株を募集し、現在募集済のもの八十萬株(一株の金額百圓)に達せり。

同社は鐵道の改築及び諸般の設備の爲に要する資金は之を主として社債に仰ぐの方針を採り、其の元利支拂に付ては、政府の保證を得て、社債八百萬圓を三回に分ちて英國倫敦に募集せり、其の後會社は事業の進捗に伴ひ、資金の増額を要し是又第二回社債の返還に充てんが爲め、明治四十四年一月三日、政府の保證の下

に第四回社債八百萬圓を同じく倫敦に於て募集し、同時に第二回社債は之を償還せり、是に依つて現社外債總額は、一千二百萬圓に達するに至れり、尙同社は大正三年六月内債二千萬圓を募集すること認可せられ、前後三回に分ちて募集し大正七年五月募集を完了せり。

又同會社は明治四十一年、廣軌鐵道の完成と共に、十月下旬より専ら歐亞交通旅客の便宜を計らんため、優良なる輕便車及食堂車を連絡せる急行列車の運轉を開始するに至れり、而して是れは長春に於ける露國の帝國列車は、萬國經臺會社の列車に接続し、大連に於ける同會社直營の上海航路船舶に連絡するものなり、又旅客車及び手荷物運送を東清鐵道及び露國義勇艦隊汽船會社(浦羅敦航路)と協定し、明治四十四年三月より之を開始せり、又鐵道院線、大阪商船會社線、日本郵船會社との連絡輸送も明治四十四年一月より開始し、又安奉線の全通以後は長春より安東までの急行列車を運轉し、鐵道院及び朝鮮鐵道との連絡を完全にするに至れり。

宏大にして、鐵道海運の事業を始め其の他港灣、鑛業、鞍山工場、工業、電氣、瓦斯、旅順、地方經營、試驗場ありて各種の方面に涉り、盛に事業經營を發展しつつあり、即ち明治四十四年九月より大連外九十六驛に於ては、倉庫營業を開始し、又明治火災保險株式會社外十二會社と特約して、寄託貨物は貸主の委任の有無に拘らず、之に火災保險を付すこと、せり。

同社は又ダルニー時代よりの露國の設計を襲ひて、大連築港を企て、其の未成部の補修の工事に着手し、主要工事中既に竣功せるは、東防波堤築造工事、第二埠頭西部岸壁築造工事、工場用地埋築工事第一埠頭其他各所に於ける既成岸壁基礎改良工事、北大山通戎克埠頭修築及護岸工事、第一埠頭岸壁修築工事、濱町海面埋立工事、第二埠頭西部岸壁補強工事、西北防波堤築造工事、寺兒溝海面埋立工事等なり。

又會社の經營なる撫順炭礦は、其の炭量無限なること其の設備の完全なる事に於て將た又産出額の多量なる點に於ては世界有數の大炭山にして、奉天府の東約

六十浬の所にあり、其の炭田は渾河の南方に位し、東西延長五里に互り、炭層の厚は、最薄七十八尺より最厚二百八十尺以上に及び、平均約百三十尺にして狭雜物の厚さ又二十尺を超えず、含有炭量少くとも八億噸と稱せらる、而して同社が政府より該炭礦の引繼を受けたる當時は設備不完全にして、一日僅々三百六十噸内外の出炭高を見るに過ぎざりしが其後同社は斯道に精通せる専門家を以て慎重之が計畫實施に當らしめたる結果、今や千金寨、楊柏堡、老虎臺、大山坑、東郷坑、龍鳳坑、萬達屋坑、古城子坑等を合して日々優に八千噸以上の出炭力を有せり、此他煙臺驛附近に煙臺炭坑あり是又多大なる炭量を出す。

會社最初の一年間に於ける賣炭總額は其の高實に百二十萬英噸を超え、又同社創立の際に於ける電氣事業の如きも、單に一個の通信設備と大連に於ける、不完全なる發電所ありたるのみなりしが、その配電力の需用、漸次盛況を呈するに至りしかば、大連、奉天、安東、長春、撫順の五ヶ所に發電所を設置し、其の電力は電燈及び動力とも一キロワットを超過す

るの設備をなすに至れり、尙大連には電氣鐵道ありて、明治四十二年九月より市内の交通機關として十三哩餘を開通し、越て明治四十三年より、大連里浦間四哩餘又明治四十四年九月よりは、大連老虎灘間三哩餘を布設し、其の附屬事業として大連に電氣遊園の如き、娛樂的の設備を施して市民一般の遊樂に供せり。

右の外又瓦斯事業にありては、設備の完成して需要に應じて大連、奉天、長春等には夫々旅館の經營をなし、大連大和ホテルの如きは、その設備頗る完備せる大旅館なり。又鐵道沿線の各地方の經營としては、目的を單に目前の利にのみ拘泥せず、頗る遠大の希望を以て、多大なる資金を投じて土地開發に努め、市街の經營、水道の經營、土地建物の貸附、病院、中學校、醫學校、工業學校、實業補習學校、小學校教育等の社會一般の公共事業に至る迄同社の手によりて經營せられたるあり、殊に大連病院、奉天醫學堂附屬病院の如きは優に内地の大病院に比して、毫も遜色なき設備をなし居れり。尙會社は支那人子弟の教育に多大なる力を注ぎつゝ、あ

ることの特筆に値す。

次に中央試験所、農事試験場及び地質研究所に於ては、滿洲地方に於ける企業者の爲に殖産工業、衛生並鐵産の試験及び調査研究をなして其の便益參考の資に供し居れり。

以上同會社の事業の概況を見るに、その主眼とするは、専ら鐵道の經營にありて我が國海外發展上重要な政治的意味を包含し其の他社會的、公共的の事業を促して以て其の基礎を鞏固にし、漸次世界的大飛躍を試み、亞細亞大陸に我が國の勢力を扶殖せんとするものに外ならず、是れ官民共同一致に因る事業たる以所なり、而して其の株式所有者の如きも、單に之を日清兩國間に制限したるが如き、理由も一に此に基因せずんばあらざるなり。近時會社は朝鮮鐵道及吉長鐵道（支邦國有鐵道）の經營の委託を受け、非常なる好成绩を以て益交通界の利便に資しつゝあり。

同會社の事業中投資に對して、收益を擧げざる築港、地方經營、試験所等の事業あるに拘らず、鐵道、鑛山其他の收益に依り、最近大正六年度に於ける營業の純

南滿鐵業株式會社

所在地 本店大連市山縣通五四  
出張所 東港市豐町區有樂町一ノ一  
設立 大正七年四月  
資本金 三百萬圓(拂込七十五萬圓)  
代表者 社長荒井泰治

本社に南滿洲の地に於て、鐵物の採掘精煉及賣買、鐵物を原料とする製造工業及其の賣買並に仲介業、其他附帶事業一切を營む目的を以て設立せるものにて、之れが創立發起人は、荒井泰治、大橋新太郎、高木陸郎、中九一平氏外二十二氏にて、資本金三百萬圓四分の一拂込にて事業を開始せり、本店を大連に東京には出張所を置く、其他東京月島研究所、大連リグノイド工場、耐火煉瓦工場、大石橋工場、長春炭坑等の設備あり、而して同社は未だ創業日淺く、準備時代なるを以て營業成績に就ては、特記事項なきも其の計劃遠大にして、事業の將來次に記するが如く有望なるを以て、今後の發展期待するものあり、而して現重役は取締役社長荒井泰治、専務取締役高木陸郎、常務取締役加藤辰彌、取締役大橋新太郎、同飯田邦彦、同中九一平、

取締役林愛作、同相生由太郎、取締役兼支配人星野桂吾、監査役山田潤二、同八十島親徳、同藤崎三郎助、

の諸氏にて相生由太郎、星野桂吾、山田潤二の三氏は、滿洲の事業地に在りて事業經營の衝に當れり。

抑も本社之事業地たる滿洲の地たるや、面積廣大にして、其地下に埋藏せらるる、鐵物の數量極めて大なり。然れ共天然の並に人為的事情の鐵業發達を阻礙するものと多きを以て、此天賦の寶庫は晩近に至るまで空しく地下に封鎖せられ、吾人の文明に貢獻するところ無かりき。

今最近調査せる處に據れば、鐵、石炭は云ふに及ばず金、銀、銅、亞鉛、鉛、滑石、雲母、亞鉛、石綿、重晶石、螢石、硫黃、硝石、天然曹達、岫巖石、苦土礦、粘土類、長石、矽石、石灰石並に菱苦土等既に發見せられ、漸次稼行せられつゝ、あるもの又は新に發見せらるる、礦石の簇出するもの枚擧に遑あらず、而して鐵、石炭、菱苦土の如き其鐵量の豊富なるは稀に見る處にして、東洋否世界に冠たりと云ふも不可ならんとす。即ち石炭の如き彼の撫順、本溪湖、其他各大小炭坑の

量實に二億餘噸を産す。

滿洲菱苦土の性質

滿洲産菱苦土の品質は、英米兩國の鐵業試験所並に本邦試験所數ヶ所に於て、分析調査せし處に據れば、極めて良好にして最近米國加州ポーターウィル菱苦土會社分析所に於て分析の結果、同所長ロバート、エドワード氏の報告に依れば、本礦石は分析性分別表の如くなれども、其品質極めて良好にして、米國産菱苦土より遙かに優良なり、而して鐵量の大ならんか、非常に有望の事業たることを附記せり。

又千九百十六年我國に滞在中なりし、米國技師ライト氏は、其歸國に際し携帶したる滿洲菱苦土礦石を分析實驗したる結果も尙我農商務省、三井鑛山會社分析等に於て分析したる結果も、極めて良好なり、今之を原料とする主要用途の一なる耐火煉瓦は既に品川白煉瓦會社、尾張耐火煉瓦製造會社、大日本窯業會社等によりて製作せられ、其の品質舶來品に優れり、又滿鐵中央試験所に於て、鈴木技師が實驗せられたる菱苦土セメント即ちリグノイドセメント等の如きは、何れも舶

來品を凌駕し、實に建築界の一大革新なりとの聲あり、其他之により種々の副産物漸を追ふて發見せられんとす。

菱苦土の用途

菱苦土の用途は、科學の進歩と共に可驚發達をなし、各種副産物の如きは頻りに發見せられて停止する處を知らず、即ち最近までの發見によりて、既に商品として世上に販賣せらるゝに至れるものを舉ぐれば左の如し。

耐火煉瓦、菱苦土セメント、炭酸水の製造、スチームパッキング、輪形研磨器、バルブ製造、坩堝、軍用光弾、夜間寫真用閃光、化粧品、藥用鹽、ゴム製の製品、マグネシヤ、屋根瓦等なり。

上海運輸株式會社

所在地 支那上海漢口路第五號  
設立 大正六年十一月  
資本金 一百萬圓

代表者 取締役社長南郷三郎

英國が多年上海の經濟界を左右するの大勢力を把持し來れる裡面には、幾多の原因存せりと雖も、而も其海上の運輸機關が著しく他に優越したるの一點は、其最大最要の原因たらずんば非ず、即ち戰前

に於て、上海に入港する海洋船舶中の四割以上は常に英國船にして、當時之に匹敵すべき對手國なく、我國の如きも戰前たる千九百十三年度に於ては、僅かに英船の三分の一に該當するの實況にありたり、而も戰亂の發するや、西歐諸國の船腹不足は頻りに我國船舶の活躍を促し、上海入港船の如きも際立ちて増加し、昨一九一七年度に於ては、ヤ、英船と匹敵するの狀態となれり、而も此時に於て海洋船に伴ひて最も緊要なる艀船及び曳船事業は、未だ外人のみの經營に係り延いて我海運界の活動力を阻害する事一方ならず、之を以て此不便を補ふと共に一方海外事業の發展を企圖するの目的の下に、百萬圓の資本金を以て開業するに至れるもの即ち上海運輸株式會社にして、同社は開業をなすに當り、幾多の困難を排して、從來久く上海に在りて運輸艀船業を營み、其代表的の一に數へられたる英商殼件洋行 (Kochan Tr. nspiraton & Tow Boat Co. Ltd.) の全事業を買収し、遂に大正六年十一月一日より、其營業を開始せり。

吉林燐寸株式會社

所在地 滿洲吉林  
設立 大正三年四月  
資本金 十八萬圓(拂込八萬一千圓)

代表者 社長内垣實衛

同社は大正三年四月吉林貿易公司主土居節、現專務佐藤精一、四戸友太郎、池田清次郎氏等外二三の有志に依つて、設立せられ、資本金十八萬圓四分の一拂込にて一切の準備を整へ、同年九月一日開業せり、然るに一部の支那人側は之と對抗

的に燐寸會社を設立し、支那官憲は國產獎勵の目的を以て、蔭に陽に之れを補助しつゝありしを以て、同社は非常なる苦心をなし、支那側と競争の立場に在り、加ふるに歐亂の結果主要藥品の輸出禁止に遭遇し、此の外職工の養成等具に創業の苦心を嘗めたり。

而しも同社は、佐藤專務初め社員一同克く内外の健闘に堪へ、製品の聲價亦大に高まり、大正四年には早くも長春に分工場を設立するに至り、大に生産能力を増加し、現在は一ヶ月二百打入五萬箱に達し居るも常に品不足の盛況なりと。

製品の販路は、南は鐵嶺より北は哈爾濱に至る各都市全部に亘り、更に最近哈爾濱方面に分工場設置の準備中なりと、同社は斯く順次發展し、大正五年より吉林本店に於て、原動力の餘力を利用して製材事業を兼營し、吉林に於ける邦人製材業者の先驅たり、其の軸木原木を日本内地に輸入紹介したるは實に同社を以て嚆矢とす、現に軸木は滿洲の各工場及び日本に供給し、頗る好成績を挙げ、大正七年三月の第四期決算に於ては、實に年十割の配當をなし、同地方に於ける斯界の

開原取引所信託株式會社

霸王と稱せらる、本年度よりは一層業務の擴張をなすと云ふ。

現重役は社長内垣實衛、專務取締役佐藤精一、取締役兼長春支店長四戸友太郎、監査役堀井覺太郎の諸氏なり。大株主は以上重役の外内垣末吉、遠藤慎太郎等の諸氏なり。

開原取引所信託株式會社

所在地 南滿洲開原鐵道附屬地

同社は資本金五十萬圓(四分の一拂込)滿鐵會社を株主の筆頭としての日支合辦によりて組織され、大正四年十二月の成立に係る。

同社は關東都督府官營開原取引所の監督の下に、糧豆及錢鈔先物取引所に關する精算及擔保を目的とするものなり、世人は往々官營取引所と此の信託會社とを混同するも、官營取引所は先物取引の成立を保證する所にして、信託會社は其成立したる取引の履行を擔保し、精算事務を引受くる所なり、隨つて同會社は取引人より手数料を徴收し、此の二割を特許料として、取引所に上納することとなり居れり。

之を要するに滿洲の取引は、世人周知の

如く貨幣制度複雑なるを以て、買賣共に些の油斷を許さず、爲めに物品取引と錢鈔取引との兼營は危險防止上最も緊要の事件なりとす、同社が此關係を洞徹し兩事業を併有經營し得たるは、其經營の第一歩に於て成功したりと云ふべきなり。同取引所に於ける取引狀態は最も健實を極め、相互德義を重じ未だ曾つて受渡しに紛擾を來したることなしと云ふ、加ふるに同社の美點は、日支人間の了解遺憾なく徹底し、實に日支合辦事業の模範として知らる取引人は、目下五十八人として内日本八十三人にして餘は支那人なり。同社の營業成績は、創業以來株主配當一割二分乃至二割五分に達し、特に大正七年下半年に於て、約十一萬五千圓の純益を挙げたるにより、其内より七萬五千圓を株金の拂込に充當することなし、現在一株金二十圓の拂込となれり、而して同社は尙ほ左の諸積立金及び繰越金を有す、僅々二年有餘の營業としては驚くべき成績と謂ふを得べし。

- 法定積立金 一萬四千三百五十圓
- 命令積立金 二萬八千五百圓
- 特別積立金 六萬五千圓

後期繰越金 七千八百圓

今同社の重役を見るに左の如し、  
取締役社長王執中、専務取締役木村總助、取締役孔英臣、同緒廣廷、同川島定兵衛、同柳田宗三郎、監査役神保太仲、同朱玉齋の諸氏なり。

愛媛水力電氣株式會社

所在地 愛媛縣越智郡今治町大字今治村  
設立 明治四十四年十月十八日  
資本金 七十五萬圓(六十七萬五千圓拂込)  
代表者 取締役社長阿部光之助

本社は今治地方の水力電氣の需要如何を能く洞見して過小に失せず、過大に陥らず、確實安全なる經營の上より設立せられたるものにして、前途益々隆盛に赴くべきは火を賭るが如し、元來、今治地方は、絲ネール機業、其他種々なる工業の盛大なる土地なれば、世運の進歩するに伴ひて工業上の動力の需用と一般町村人民燈需用の必要を感じ、元の今治電氣株式會社經營の事業全部、及び、西條水力電氣株式會社の電氣事業經營許可出願中に在りしものとを譲受け、之を合併して茲に本會社を設立せり、而して創立發起人は阿部光之助、楠岡増平、秋山光五郎

文野昇二、岡本榮吉氏等外十九名の諸氏なり。

本會社の營業の目的は電燈電力の供給、電氣機械器具の賣買貸貸、電氣機械据付電燈裝置請負にして、明治四十四年十月十八日、愛媛縣新居郡西條町大字榮町に西條支社を設置せり。

營業成績は漸次良好に向ひ、最近は年一割一分強の配當をなせり。而して供給電燈取附數二萬三千四百八十七個にして、之れを十燭燈に換算せば二萬五千七百九十七個となる、又供給電力數は九百四十四馬力なり、尙本社は業務の發展に伴ひ加茂發電所(水力一千キロ)を増設し、大正三年三月十七日より事業を開始せり。蓋し當地方織物業其他諸工業の勃興に伴ひ、電燈電力の需用は既設の設備を以て之れに應ずるを得ず、更に餘裕なきに至りたるを以て、目下越智郡鈍川村に第三水力發電所(八百キロ)増築を計畫し専ら工事の進捗中本年末を以て、工事竣工事業を開始するの豫定なり。

取締役社長阿部光之助、同副社長文野昇二、取締役岡本榮吉、同秋山光五郎

日本生命保險株式會社

所在地 大阪市東區今橋四丁目七番地  
設立 明治二十二年七月  
資本金 百五十萬圓(總株數六萬株)  
代表者 社長片岡直溫

我が國に於ける生命保險會社は、明治十四年東京に開業せる明治生命保險會社を以て嚆矢とす、次で明治二十一年同じく東京に帝國生命保險會社創立せらる、然れども當時世間尙ほ生命保險の何たるを解するもの、極めて稀にして、明治生命の開業後八年の歳月を費して、僅かに二百五十餘萬圓の保險契約を得たるに過ぎざるが如き、今日より之を見れば、殆んど隔世の感なきを得ず、明治、帝國兩社の設立後、川上左七郎、土居通夫、山口吉郎兵衛、岡橋治助、田中市兵衛、弘世助三郎、西田永助、竹田忠作、井上保太郎、熊谷辰太郎、難波二郎三郎、草間貞太郎、甲谷權兵衛、泉清助等當時大阪一流の實業家諸氏は、我が國商工業の中心たる大阪の地に一大生命保險會社を設置

するの極めて好適にして、且つ頗る有望なるべきを看取し、一社創立の議を決し片岡直溫氏を迎へて、創立主任とし明治二十二年七月即ち明治生命に遅るゝこと八年帝國開業の翌年に於て、資本金二十萬圓を以て、有限責任日本生命保險會社を大阪の地に創立し、同年九月二十日鴻池善右衛門氏を社長とし、片岡直溫氏を副社長として、本社を今橋二丁目に置き直ちに其事業を開始せる者之を日本生命保險會社と爲す。

爾來全國傳染病大流行及び日清日露戰役並に歐洲大戰ありしに拘はらず、四回の大決算を遂げ、社業年と共に隆昌に赴き、以て今日無比の盛運を見るに至れり二十四年一月新定商法に従ひて、社名を日本生命保險株式會社と改稱し、同年五月を以て本社を北濱三丁目に移轉し、次で現在の今橋四丁目本社新築の議を決し、同二十九年起工、同三十五年落成其年三月三十日を以て、移轉式を擧げたり此際新築移轉を機とし、鴻池社長引退したるを以て片岡副社長代つて社長に就任し、爾後大正三年二月資本金三十萬圓を百五十萬圓に増加し、以て今日に至る。

の基礎とせるは、實に同社を以つて嚆矢とす。

日露戰役前までは、同社の新契約は年々五六百萬圓前後に過ぎざりしが、戰後一躍して忽ち約一千萬圓に上り、爾來毎年一千萬圓を降らざるの盛況を以て累進し明治四十四年度に於ては、愈々二千萬圓を超過したり、斯くて新契約の劇増に伴ひ解約死亡保險金額を控除せる現在保險契約高亦年々長足の進歩を爲し四十四年末に於て九千五百九萬圓の巨額に達し、踵いで四十五年五月には、一億圓を超過し、遂に大正七年十一月には、貳億圓を突破するの盛況を呈するに至れり、亦以て社業進展の徑路を窺ふに足らんか、又同社々長片岡直溫氏は、關西實業界の重鎮にして其の勢力の擴大なるもの關西のみにして止まらず、東京は勿論、全國に名聲を宣傳せらるゝに至り、今や氏の名と共に、日本生命保險株式會社の名は同胞七千萬の耳底に存するに至れり、蓋し同會社が今日我保險會社中の最高點を占むるに及びたるも、亦偶然にあらざるべし、實に快事を賞するに足るものなり。今後の發展停止する處なからん。



横濱火災海上運送

信用保險株式會社

所在地 横濱市本町五丁目  
設立 明治三十年八月

資本金 五百萬圓(拂込金額百二十五萬圓)

代表者 社長小野光景

本社創立の動機は、本邦輸出貨物の主位を占むる生絲に保險をなし得る、有力の保險會社なく、一般生絲業者の不便一方ならず、爲めに之れが缺陷を充すべく、茲に有力なる會社の必要を認め、資本金五百萬圓を以て、横濱一流の豪商團によつて設立されたものなり、發起の動機たるや以上の次第なれば、極めて堅實なる營業方針を採り、以て一般顧客の便利を計りたるにぞ、日一日と社運は隆盛に基礎牢固として創立以來、極めて順潮なる發展をなしたり。

是れより先き同社は業務の發展と時代の要求とに伴ふべく、三十二年十月運送保險を開始し、越えて三十八年三月更に信用保險なるものを開始せり、之れ實に同社の獨占事業にして、其の契約は次第に増加し、日ならずして隆盛を極め、更に三十九年に至り、業務を擴張して海

上保險をも開始し、茲に四種の保險を兼攝する事となり、爾來營業を繼續して今日に及べるが、其間一度として逆境に陥りし事なく、順風を得て走る帆船の如く益々順潮に年々良好なる成績を示し、今や基礎鞏固にして、世人の信用厚つく益々向上發展の域に進みつゝあるは、吾が實業界に於ても、實に喜ぶ可き現象なりとす。

本社現在資本金五百萬圓、諸準備金及繰越金四百萬圓、火災保險四億五千萬圓、信用保險二百五十萬圓、海上保險七億五千餘萬圓、運送保險三億五千萬圓に達し本邦保險界の重鎮となるに至れり。現在重役は社長小野光景、専務取締役井阪孝太郎、同濵澤義一、同若尾幾造、同原富太郎、同濵澤義一、同茂木惣兵衛、同錦戸右門、監査役石川徳右衛門、同渡邊文七の諸氏なり。

關西水力電氣株式會社

所在地 奈良縣奈良市高天町十二番屋敷  
設立 明治三十八年十一月廿九日

資本金 三百萬圓(拂込金額二百四十萬圓)

代表者 社長森久兵衛

本會社は先きに設立せられたりし、奈良

利根發電株式會社

所在地 群馬縣前橋市堀川町五六  
設立 明治四十二年五月

資本金 一千六百萬圓

代表者 取締役社長長栗利藏

め、事業を開始したると尙各地方の申込とに依りて、累月需要を増加し、電燈取付總馬力數七萬七千五百三十二燈、電動力据付總馬力數一千六百四馬力を示せり。目下出願中の供給區域は山邊郡波多野村針ヶ別所村、東里村、郡介野村等にして需要家一般より一日も早く、工事の竣成を告ぐべく申込著りなるも、未だ其筋より區域編入の許可あらざるを以て、當社は指令の速かならんことを待ちつゝある狀況なり。八木町に於ける三百「キロワット」火力豫備發電所工事は、大正二年五月工事完成し、尙大正七年春期工事に著手したる上粕村に於ける千五百「キロワット」火力發電所は、大正八年一月工事竣成したり、一期間の純益金十萬六千九百五十一圓三十七錢、配當は年一割の盛況を呈せり。

本會社創立當時の取締役社長は森久兵衛常務取締役は加納由兵衛、取締役は寺田元吉、田中善助、清水政太郎、監査役は寺田元之助、家壽多利兵衛の諸氏なりしが、現時は取締役社長森久兵衛、常務取締役加納由兵衛、取締役寺田元吉、浮田桂造の諸氏にして、監査役は橋本半兵衛

利根發電株式會社

貴船發電所(同上)

合計

一、八六二基

同社現在供給區域は群馬、埼玉、栃木、千葉、茨城、東京の一府五縣に涉り、八十餘町村を有する也、而して同社の營業所及出張所は、前橋營業所と隅田變電所(東京府下營業所)の外沼田、伊勢崎、太田、館林、桐生、足利、佐野、小山、羽生、幸手等に設け、大正七年十二月現在電燈電力供給數は左の如し、

- 白熱電燈取付口數 一二九、八七五燈
- 電動力馬力數 四、六五二馬力
- 電力裝置箇所供給電力數 七、三六二(キロワット)九六

以上の外副業として、前橋澁川間に電車を運轉し、又前橋市に於て瓦斯事業を經營し、第十九期の如きは、一割の株主配當を爲すに至れり、尙餘力を以て上久屋發電所の擴張に着手せり。

而して此の計畫たる上久屋發電所、擴張工事の大意は、現在水路を廢止して新に隧道及暗渠より成る永久的一水路を掘鑿し、三百五十個乃至四百個の水量を引用して平水時九、三五六基湯水時八、一八六基を發生すべき新發電所を建設し、別に

負荷動搖に基因する餘剰水量を蓄積して一日尖頭荷時五時間、従前發電所を運轉し、二、四〇〇基を發電せんとするものにして、工事は二ヶ年有餘を以て竣工し大正九年三月迄には、新發電所より東京へ送電せんとするものたり。

宇治川電氣株式會社

所在地 大阪市北區曾根崎上二丁目  
設立 明治三十九年十月

資本金 二千五百萬圓

代表者 取締役社長中川淺之助

同社は關西財界の有力者に依り、發起せられ、明治三十九年十月當局の認可を得琵琶湖より流る、瀬田川の水流を引用し茲に水力電氣を得るの目的を以て、資本金一千二百五十萬圓を投じ、大阪市、京都市を主なる供給區域として、設立せられたるものにて、水路取入口を近江國石山村宇南郷、洗墓の上流に設け、一秒時

に於ける水量、二千立方尺の割合を以て湖水の水を越く、山城國宇治川町に導き此處に二百餘尺の水面落差を得、彼の古刹として名高き平等院の對岸に、發電所を設置し、四萬馬力の電力を發生せしめ京阪の天地をして、不夜城と化し、東洋の「マンチエスター」に於ける「ベルト」の運轉をして、一秒時も休止せしめざるの策源地とはなりぬ、當初本會社は現在資本金一千二百五十萬圓を以て設計に著せるも、近時電力利用の方法急足の進歩を來し、從て需要激増し、將來電力の不足を懸すべきを慮る、社債五百五十萬圓を募集し、其設計を變更し、發電所の擴張をなし、大正二年六月工事完成せしを以て、愈々八日一日より送電を開始するに至れり、之より先き本會社は營業準備として、大正元年四月一日より、切りに京阪地方の電力需用者と、電力供給の契約を締結し、其供給電力三萬馬力中、四千キロワットは晝夜二十四時を通じて、京都電燈株式會社に送電し、同地の工業家に原動力を供給すると同時に、舊都の夜色をして光彩陸離たらしめ、殘餘の全部は夜間大阪電燈株式會社に送電して、浪

波津の花を照し、晝間は之れを大阪方面の電力需用者の用に供し、次で同地方に於ける各種工藝品作製の原動力たらしむる目的にて、己に契約を了せるもの實に一萬八千キロワットの巨額に達するの盛況を呈するに至れり、然るに工業界の發展は益々急調を呈し、其原動力の需用殆んど停止する所を知らず、爲めに上記の如き巨大なる電力にして尙不足を感ずるの有様なれば、茲に本會社は第二期事業として、淀川筋に於て四萬馬力得べき計畫を立て他方に於て岐阜縣飛騨川及び馬瀬川沿岸水路を開鑿し、同所に於ても六萬八千馬力を發電せしめんと企てつ、あり、此の如く、殆んど無盡藏なる發電力を有し、東洋一の工業地たる京阪地方を供給區域となすを以て、本會社は近く本邦水力電氣界に於て、最高位を占むるに至るべく從つて其事業の發展又利目に價すべし、加之本會社の工事は、發電、送電、共に最新の學理に基き、更に一層擴張すべく資本金を二千五百萬圓に増加せり。

社長中川淺之助、常務取締役林安繁、取締役淺見又藏、同野口遼、山岡順太郎

監査役大倉喜八郎、同福原有信、同松方五郎の諸氏なり。

株式大阪堂島米穀取引所

所在地 大阪市北區堂島濱通一丁目  
設立 明治九年十一月

資本金 三百五十萬圓(總株七萬株)

代表者 理事長高倉爲三

維新の際舊記散逸したるが爲め、今同所の沿革を詳にする能はずと雖も、元米會所及舊家の藏書等多少残存せるものに徴し、其要領を調査摘録し、且つ口碑古考の言を參酌して、聊か茲に其梗概を略述せんとす、されど限りある紙面を以て現代數千の銀行會社を叙述せんには、遺憾ながら充分なる能はざるを以て、讀者諸賢の御推讀を乞はざる可からざるなり。

に遭ひたる事あり、されど全く絶ゆるに至らず、是より先き元祿元年十一月今の堂島新地開發せられたる爲め、米商人申合せ此所に移りて、米穀の賣買を始むる現今堂島米市場の濫觴也、次で享保六年八月頃米價暴騰の爲め、奉行所より停止を命ぜられしが、翌七年八月に至り米千石までは賣買するも差支なしとの沙汰あり、因つて一時米會所を開始せしも暫時にして故障の爲め休止するに至る、又同十四年冬木善太郎なる者願主となり北濱米會所を建立す、然るに大阪米仲買人は之を悦ばず總代を選びて江戸表公儀へ對し、北濱米會所廢止の儀を出願したるが此等の總代一同は、滞在費に窮したるより同十五年中加州侯へ駕籠訴し候の取計らひに依りて、當時の町奉行大岡越前守評定所に於て取札の上其願意を聽許されたる事あり、同十六年十月米價年來下直の爲め仲買人中の加島屋久右衛門外四名の者を町奉行所へ召喚し、米價引立方及其他取締上に付、意見を徴せらるゝに及び仲買人相談の上「米仲買の人員を定め諸藏拂米の節入札を以て買受け候は諸事取締宜しからん」と答申せし處奉行

所より之を許され、五名の者へ米年寄申付られ、脇差佩用及社袴着用を許さる。後ち明和五年三月二十三日曾根崎新地より出火し、堂島仲買人の巢窟及立會場所等全焼したるを以て、一時相場の立會を休止するに至りしが、幕府年行司に諭し急に現場修理の上同二十七日より立會を開始せしむ、又天保十三年八月江戸表より下知を以て、堂島米市場の諸規則を改むると共に、諸株諸仲間組合を廢し鑑札取上げの事ありしも、堂島米仲買取締は以前同様に据置かれ、且在來の仲買に限らず、何人にも米方年行司に届けたる上市場に出で、諸家拂米其他の「ヂキ」賣買を爲す事を許されたり、然れども享保以降の掟を守り、市場の事は一々米方年行司をして其取締に當らしめたりき。

興の事に盡力し、更に營業規則を調製して明治三年十二月之を大藏省に出願せしに翌四年に至り、願の趣許可ありしを以て米會所を堂島に置き、同年四月一日より營業を開けり、明治六年三月開商社中の油庭會所を堂島米會所へ合併の儀大藏省より達せられ之を合併す、當時堂島米會所の事務は、全く官務の取扱と等しく頭取の任命及給料等總て大藏省より命ぜられし也、明治六年十二月堂島濱通一丁目に米會所を新築す、同八年十月當所の濱地東西卅八間の官地を借用し、官許を得石垣を築き鐵柵を設け、市場立會所を新築し、同九年二月落成す、同年八月米商會所修例を發布せられ、内務省第廿九號布達米商會所成規を頒布せらる、茲に於て鴻池善右衛門を始め外數名の發起を以て右條例の旨趣を遵奉し、米商會所を創立せんことを内務省に出願せり、此時始めて株式組織を以て米商會所を創設し往昔より維新前後迄行司及頭取等の取扱ひ來りし事務は、總て此米商會所に於て取扱を爲し、又仲買人も政府の認可を得て營業を爲すこととなりぬ。

後廿六年七月大阪堂島米穀取引所と改稱し、向十ヶ年間營業の許可を得たり、其資本金初めは七萬五千圓(一株百圓)なりしを後ち十五萬圓(一株五十圓改)に増資せり、次で十萬圓を増資して二十五萬圓と爲し、尙は次第に増資し、百二十萬圓にして現在の三百五十萬圓と爲すに至る。又同三十七年堂島濱通に、取引所新工事を起し、十一月竣功之に移轉す、同四十二年七月三十一日、回祿の災に逢ひたるより翌四十二年二月を以て、取引所再築工事に着手し十一月竣功すると共に之に移轉す、此間一日も立會を休止したることなし、夫れ斯の如く大阪堂島米市場は時勢の變遷に伴ひ、屢は幾多の波瀾曲折を経て盛衰消長少ならずと雖も、其創始より茲に二百七十有餘年間、連綿として克く其業務を經營しつゝありたるを知る可き也。蓋し現今數十ヶ所の取引所中同社の如きは其の起原最も古く、斯界代表的の會社にして、同所の沿革を知る時は我が邦に於ける米穀取引所の起原を知るも同様なるべし、然し大阪は由來商業地なるを以て同所の如きも、斯く隆盛の域に達せしものなるべし。

株式會社廣島米取引所

所在地 廣島市銀山町十一番地  
設立 明治二十六年十二月  
資本金 十一萬圓

代表者 理事長長沼登藏

昔時當廣島の地に於ては、藩主米相場會所を設け、差紙と稱して米券を發行し、米切手賣買をなさしめ、現米貯藏の法を行ひ、大に糧食の缺乏を防げり、其後寛延二年 奉行所の支配となり、綿と共に其買の發達を圖りたり、後明治五年廢藩置縣に際し、之れを民業に移し營業を繼續し來りしも、明治九年米商會所條例發布せられ止むなく之れを廢止せり、以來在米漸次減却し價格亦率に従はず、奸商之間に乘じ、私利を逞しうすること甚だしく、爲めに當地の經濟界は擾亂せらるゝの感ありき、其後師團鎮守府等の設置せらるゝに當り、常に數萬石の在米を有し、不時の變に備へ、又以て經濟上の恐慌を豫防するは極めて緊要の事なるを以て、當地の有志者相謀り、明治廿五年米穀市場を設立せしも、創業日尙淺く信用亦薄弱たるを免れざりき、後取引所法の發布に伴ひ、當市場の略歴と當時の

必要とを具陳して、現今の取引所を設立することを認可せられ、明治廿六年十二月十三日米細取引營業認可指令書を下附せられたり、次いで翌廿七年一月五日初めて營業を開始するを得たり、當初資本金五萬圓、營業種目米、綿の取引なりしも廿九年十二月株式の取引をも兼營することを認可せられたり、爾來營業次第に擴張し來り、卅五年八月勅令第百五十八號並に省令第十三號に依り、資本金を増加して金十一萬圓となせり、翌卅六年八月十四日綿、株式の取引を廢止し従來廣島米綿株式取引所の名稱を用ゐ來りしが此の時より現名廣島米取引所と改名せり爾來専ら米穀の定期取引、直取引を營み來り營業狀態極めて順潮を以て今日に及べり、當所重役は創業以來殆んど交迭なく、取引所と仲買人間至極圓滿なるは誠に悦ぶべし、而して現時の重役は長沼登藏、保田八十吉、高東康一、大町大作、海塚新八、谷口節の諸氏なりとす。

株式會社四日市米穀取引所

所在地 三重縣四日市新丁百五十番屋敷  
設立 明治二十六年十二月五日  
資本金 二十五萬圓(拂込額十七萬五千圓)

株式會社四日市米穀株式取引所、秋田木工株式會社

代表者 理事長吉田常吉

四日市市は我國隨一の米産地たる伊勢、伊賀、美濃、尾張の中軸に位し、天然の良港を控へ海陸の交通自在にして、其後方數縣に渉る産地より東京、横濱、大阪神戸、紀州沿岸其他の費消地に向つて輸出せらるゝ一大關門なれば、當時東海に於ける米穀の大集散地として、四日市相場なるものは、斯業者間に大なる權威を有したるものなりき、故に明治二十六年取引所法發布せらるゝや、直ちに同地の有志三輪猶作、九鬼紋七、安藤新兵衛、田中武兵衛、吉田常吉等の諸氏同志四十餘名と相計り、取引所設立の出願を政府に提出したりしに同年十二月五日認可を得、翌二十七年一月四日より愈々營業を開始するに至れり、當時は米の取引のみなりしも、同地方は米の外菜種油の産額多く現に伊勢水と稱せば、全國に於て有名なるものなりしより、油取引の追願をなせしに、二十七年七月五日認可を得、更に二十九年八月二十九日を以て、有價證券賣買認可を得、米油株式取引所となりしが、三十六年營業満期となりたるを以て繼續を出願したるに、油株式を削除

秋田木工株式會社

所在地 秋田縣湯澤町湯澤停車場前  
設立 明治四十四年九月三十日  
資本金 五十萬圓(拂込額二十三萬七千五百圓)

代表者 社長宇都宮金之丞

秋田木工株式會社は明治四十四年九月三十日の創立に係り、資本金五十萬圓、木材工藝に關する製作販賣業を營み、併せて林産物の利用に附帶する事業をなすを主要目的とす、其の細目を示せば曲木工

藝、洋家具製造、車輻細工、壓搾彫刻工業等の製作物の販賣にありて、取引先は國の内外各方面に亘り支那、印度、濠洲、露國へも輸出す。

是より先き秋田縣の有志者、同縣の豊富なる森林に藏する雜木林の利用する所なく空しく死蔵埋没するを慨し、且つは同縣企業界の不振に顧み、此の天然の富源を開發して地方經濟上に資せんと飯島張邦、齋藤宇一郎、藤木勇太郎氏等發企人となり其の設立を見るに至りたるものなり。

創立後の成績は頗る良好にして、販路は漸次展開し海外輸出の有望に伴ひ、將來益擴張發展の情勢にあり、戦後平和事業として曲木の如き、製材の如き最有利益望なるのみならず、木材饑饉の將來を慮り前年買収したる、岩手縣山林の如き其蓄積實に二百萬石以上にある美林にして之れが利用上製材工場二ヶ所を新設し、目下經營企畫中であり、されば當社の前途は大に刮目の價あるべし。社業に功勞ある人は現專務取締役たる飯島張邦氏を初め、重役諸氏の施設其の宜しきを得たるによる、現同社重役は、取締役社長宇

都宮金之丞、專務取締役飯島張邦、楠田傳助、相原貞吉、岡崎久次郎、監査役齋藤宇一郎、藤木勇太郎の諸氏なり。同社は各地方に特約店、代理店を置き東京市京橋區南金六町七番地に東京出張所を置き。

株式會社高木商店

所在地 大阪市西區阿波座中通一丁目  
設立 大正七年十一月  
資本金 三百萬圓(全部拂込済)  
代表者 取締役社長高木又次郎

同社は元高木兩替店と稱し、明治初年即ち今より五十有餘年前の創業にて、高木氏一人の經營せし處なりしが、其の間店運漸を逐ふて隆昌に赴き、營業益々擴大し、特に斯界最古の歴史を有する老舖にして社會の信用厚く、鞏固なる地盤を築けると共に、近時一般經濟界の發展膨脹を來し、有價證券市場も亦諸種の點に於て一新時期を劃するに臻れるを以て此の時代の趨勢に順應す可く、從來の組織を改め、資本金三百萬圓の株式會社高木商店となし、個人時代の業務一切を繼承し、更に一層營業範圍を擴張して、誠實勉勵今後の活動を期待せり、其の營業科

株式會社大阪三品取引所

所在地 大阪市東區久太郎町三丁目  
設立 明治二十六年十二月  
資本金 二百萬圓(拂込百廿五萬圓)  
代表者 理事長今西林三郎

同所は綿絲、棉花、木棉業者の有志相謀りて去る明治二十七年二月設立登記を了し、其の初め資本金十五萬圓を以て創業せるものなり、二十八年三月一時資本を半減せしが、戦時經濟界の膨脹に伴ひ、二十九年七月三十萬圓に増資し、四十二年二月には更に一躍して一百萬圓、大正七年十一月二百萬圓に増加せり、是より先二十九年十二月現營業所の新築に移轉

せり、從來は株式會社大阪綿絲取引所と稱せしが、三十四年十二月現稱に改めたり、抑々當取引所の特色は綿絲商が紡績會社より綿絲の先買約定を爲し、或は需用者に向つて同様の先買約定を爲すや、其間相場變動の危険に備へんが爲、當所に於て賣繋ぎ又買掛を爲し、又紡績會社が一方棉花を買入れて綿絲を賣り、木棉業者が綿絲を買入れて木棉を賣る等、何れも當所の利便舉げて言ふべからず、然るに最初は關係營業者其利を知らず、一方には戦役後の經濟界の擾亂に遭遇し、當時の困難尋常ならざりしが、當事者は其間に苦心經營して遂に其功を奏し、今や當所の検査を経たるものは三品牌の名稱を以て海外市場殊に上海、香港其他清國各地に輸出して盛んに取引せられつゝあり、又當所の定むる價格は内他は勿論東洋の標準位とせらるゝに至り、今や必要の商業機關たり、又對外貿易上貢獻する所頗る偉大なりとす、蓋し商業上の機略に富める當所現重役は、理事長今西林三郎、常務理事秋岡半三、理事岩田惣三郎、理事南楠太郎、理事渡邊修、監査役小林惣吉、監査役下郷寅太郎、監査役高

木次郎、支配人宗村九郎の諸氏なり。蓋し大阪は我が國第一の商業地にして、諸取引風に發達し、殊に中樞地點なるを以て近縣地方よりの産物、又海外輸出入品等の集散頗る殷盛を極めり、されば同取引所の如きも時勢の要求に迫られ設立せられたるものなるべし。

天滿織物株式會社

所在地 大阪市北區天滿橋橋西一丁目  
設立 明治二十年三月  
資本金 五百萬圓  
代表者 社長藤井善助

同社は明治二十年三月の創立に係り、専ら棉ネル、棉セル等を製織し、一般内地向の需用に供せしが、二十五年末に至り資本金を倍加し、製品の種類を擴張し、上海地方に輸出を開始せり、越へて二十八年更に資本金を倍加し工場を増設し、事業の面目を改め、内外向一般の製品を産出せり、三十一年陸軍被服用品の製織に從事し、納入を出願せしに軍用に適するの故を以て、三十二年度より其の許可を得たり、此に於て三十二年四月、資本金を五十萬圓となし、海陸軍の被服地及び内外向の製品を織ること、なしたり。

三十九年九月事業擴張の目的を以て、資本金を一百萬圓に増加し、織機及び紡績を増設し、從來の製品の外朝鮮、支那方面への輸出に努めたり、増設工事は既に落成を告げ全機械の運轉と共に、會社重役の奮勵を促し、愈々益々發展の域に進みつゝあり。同四十四年卒先して印度市場を開拓する等、努めて輸出の増進を謀りたり、次で大正三年十一月 大元帥陛下兵を近畿の野に閱せらるゝや、特に待從を差遣し、業務を視察せしめられ優渥なる聖旨を賜ひしは、實に無上の光榮として感銘措く能はざる處なり、時勢の進歩と國運の隆昌と共に伴ひ、需用倍々増進し規模の狭少を告ぐることを急なるものあるを以て、大正四年八月更に資本金を倍加して、二百萬圓となし大阪府下東成郡城北村大字毛馬に工場を新築し、第一期計畫として新に紡機七千七百餘機、織機五百臺の設備に着手し、大正六年六月完成運轉を開始せしか、此間大正五年一月社債五十萬圓を募集し、更に大正六年五月を以て、資本金を五百萬圓に増加し、一大擴張を斷行し、一新生面を開かんことを期し、今當に城北工場第二期計畫の

進行中に屬せり。現重役は社長藤井善助、取締役森本武之助、同西村和平、同戸田猶藏、同井田亦吉、監査役宮川彦一郎、同戸田榮藏、同野田廣三郎の諸氏にして、而して同社は創立の古きと技術の熟練は同社製品の聲價を内外に高からしめ、重役並に社員諸氏の熱心なる活動は愈々其の販路を擴大ならしめ、本邦此種會社中の白眉として推賞に値するものあり。

安治川土地株式會社

所在地 大阪市西區八幡屋町百四十三番地

設立 大正六年十二月

資本金 一千五百萬圓(拂込一千三百五十萬圓)

代表者 取締役社長藤田德次郎

同社は元近畿の富豪藤田、辰馬、外村、田中の諸富豪が所有せし大阪市西區八幡屋町、田中町、新池田町に亘る地所を包括して資本金一千五百萬圓を以て創立せるものにて、營業目的は土地建物の賃貸、土地建物を抵當とする金貸借及び之に附帶せる事項殊に土地の利用を増進す、設備を爲すを以て事業となし、他の土地會社と其成立の動機と經營の主義を異にし同社獨得の威權と實勢力とを具有せり

其經營地區は、大阪築港關門の衝に當り水陸の交通至便にして、總坪數五十三萬坪に亘る大地域あり、其の住宅地域二十萬六千坪、工場地帯十一萬坪、倉庫地帯十一萬坪、道路敷地七萬二千坪、水路敷地三萬六千坪を以て、土地計畫の大要とし尤大なる地區を十分に整理せる上は大發展をなすべし。現重役は取締役社長藤田德次郎、副社長田中市藏、常務取締役木間瀬策三、取締役辰馬吉左衛門、南郷三郎、辰馬勇治郎、外村與左衛門、外村鐵三郎、高木與太郎、監査役山田稔、西村久次郎、城周彦、岡部新太郎、主事關川重安の諸氏なり。

株式會社濱谷帽子會社

所在地 大阪市北區天滿橋第六丁目

設立 明治廿六年

資本金 十萬圓

代表者 濱谷末太郎、柿木德太郎

故初代濱谷末太郎氏は帽子専門業者として我國に於ける卒先者なり、氏は明治十年の頃より、歐米雜貨商を營み、當時帽子は雜貨の一部として取扱ひ居たるも、將來益々需要の増加し來るべきを見越し明治十九年歐米各國に於ける斯業の視察

をなし、英國に於ける有名なる帽子會社と特約を結び、直輸入業を開始し、専ら帽子の販路擴張に努めたり、而して明治二十三年東京に於て、日本帽子會社の創立せらるゝや、同氏は卒先して大株主となり、同社の製品全部を一手に引受けて之れが販賣をなせり、然るに同社も其後種々なる事情の爲め減資をなし、新株を募集し、改めて東京帽子會社と改稱するに際し、濱谷氏は同社と絶縁し獨立して製帽業を開始するに至れり、是明治二十六年のことにして、此年支配人柿木德太郎氏をして、歐米各國を漫遊せしめ同時に斯業の視察をなさしめ、歸朝後同氏をして製帽工場を擔當せしめたり、後明治三十一年濱谷氏死去し、當主演濱谷末太郎氏相續をなすに際し、同商店の組織を改めて株式會社となし、以て今日に及び、爾來業務年と共に繁榮に趣き其販路は内地は勿論、朝鮮、支那、印度、南洋、南米等に擴張せらるゝに至れり、同社は自製品の直販賣をなすを以て一般需要者に低廉なる價額を以て優良品を供給するを得、其輸出高年一年に増加し來りしかば、在來の設備を以てしては、到底

多數の需要者に満足を得せしむるを得ず爲めに前年以來切りに工場の擴張をなし新機械を輸入し、大に製造高を増加するに勉め居れり、されば同社は目下資産五十五萬餘圓を有し、市内東區北久太郎町に支店を設け、本店と相應じ大に業務の發展に努めつゝあり、當社創立發起人は前記濱谷氏外俣野音次郎、柿木德太郎氏等にして、當時の重役としては如上の三氏の外飯田義一、吉田和助の二氏なりしが、現重役は代表社員二代目濱谷末太郎同柿木德太郎、監査役濱田鐵次、同廣海二郎の諸氏にして、専ら社務に盡瘁せり。

近江帆布株式會社

所在地 滋賀縣蒲生郡八幡町

設立 明治三十年四月十二日

資本金 一百萬圓(拂込六十萬圓)

代表者 取締役社長森專三郎

國運の進展に伴ひ西洋形船舶は年々増加し、日本形船裝帆の改良は日に月に盛にして、其他陸上に於ても帆布の需用少からず、十分なる耐力ある綿帆布の要求は極めて多きにも拘はらず其供給は一にこれを外國に仰ぎ、逐年輸入の増加を來せり。

近江帆布株式會社、大阪窯業株式會社

り、這般の趨勢は國を憂ふるもの、捨て置くべきことにあらずとなし、故貴族院議員井狩彌左衛門氏主唱者となり、西川重威、小澤七兵衛、北川彌平、西川仁左衛門、森專三郎、高谷光雄、山中利右衛門、西川庄吉、阿部市太郎、小泉新助、辻井四郎の諸氏發企人となり、當會社の創立をなせり、之れ明治三十年四月十二日なりき、當時の資本金は十萬圓なりしが、明治四十三年六月十六日二十萬圓に増資せり、同年同月、兵庫縣下明石郡明石町に設立の日本帆布株式會社を買收して同社工場とせり。

現重役は社長森專三郎、取締役小澤七兵衛、森五郎兵衛、西川仁右衛門、西川甚五郎、阿部市太郎、同兼支配人辻井四郎、監査役中西五郎兵衛、水野貞吉、副支配人松永勤三の諸氏にて益々社業の發展を期せり。

大阪窯業株式會社

本社所在地 大阪市北區堂島濱邊三丁目

東京出張所 東京市神田區美濃町三三

名古屋出張所 名古屋市中區西川崎町五丁目

設立 明治十五年一月

資本金 七百萬圓

代表者 取締役社長廣野真吉

本社は斯界最古の歴史を有する、我邦窯業界の嚆矢にして初めは個人にて明治初年より硫酸壘の製造をなし、後明治十五年株式會社に組織し爾來煉瓦の製造をなし、其後、堺煉瓦、貝塚煉瓦、岸和田煉瓦等の各社を合併し、資本金を一百萬となす、次で明治四十年八王子煉瓦、近江煉瓦、平阪煉瓦、京都埜場會社等の各社を合併して本社の工場となせり、越て大正三年資本金を三百萬圓となし、同時にセメント製造業を計畫し、同五年工場を建設七年四月より製造販賣せり、然る

品質極めて優良にて需要益々盛にして一ヶ月の生産三萬樽以上にて尙供給意の如くならざるの好況なりと云ふ、又大正六年秋更に資本金を七百萬となし、同時に時勢の趨向に従ひ、造船業を兼營し爾來二千五百噸乃至三千噸以上のもの五隻を建造し、多大の利益を得て、他に販賣し目下三千五百噸のもの建造中なりと。而して本社の營業目的は、主として煉瓦の製造にて一ヶ年の生産一億以上に達す即ち種目は各種煉瓦、張附煉瓦、耐火煉瓦、赤色屋根瓦、黒鉛坩堝、セメント等の製造販賣及び其他附帶事業一切をなす其工場所在地左の如し、

- 堺煉瓦工場 堺市南洲新田
- 貝塚煉瓦工場 大阪府泉南郡貝塚町
- 岸和田煉瓦工場 同 岸和田町
- 八王子煉瓦工場 東京府八王子在長沼
- 近江煉瓦工場 滋賀縣栗田郡山田村
- 東京煉瓦工場 埼玉縣草加町
- 平阪煉瓦工場 愛知縣幡豆郡平阪村
- 京都坩堝工場 京都市東川端七條上
- 向日町坩堝工場 京都市乙訓郡向日町
- セメント工場 大阪西區南恩加島町
- 造船工場 大阪府東成郡敷津村

株式會社邊鐵工所

所在地 福岡市外千代町二丁目  
設立 大正八年四月  
資本金 一百五十萬圓  
代表者 取締役社長邊藤吉  
同社は、大正五年十一月創立せる舊合名會社邊鐵工所(資本金十五萬圓)の組織變更せるものにて、創業以來業務遂次隆盛に赴き、益々擴張發展せし爲め、今同時運の趨勢に鑑み、且つ一層擴張を圖り、資本金を一百五十萬圓とし、從來の業務一切を繼承して設立せり、其の營業科目は、陸船用汽機、同汽機、各種唧筒、同起重機、鐵橋鐵桁、鐵骨建築、其他鐵工業に關する設計製作附工事等にして、現重役は取締役社長邊藤吉、專務取締役

株式會社神戶製鋼所

所在地 神戶市福澤町一丁目  
設立 明治四十四年六月  
資本金 五百萬圓(拂込済)  
代表者 取締役社長鈴木若治郎  
本邦製鋼事業界の重鎮として、偉大の進展をなしつゝある株式會社神戶製鋼所は大正六年三月資本金を五百萬圓に増資すると共に福岡縣大里町小森江に門司工場を新設し伸銅事業を開始すべく、工事中の所這般新築完成を見るに至れり、此新工場は敷地一萬餘坪、職員職工一千餘名を使用し、最新式設備を以て主として銅管、眞鍮管、コンデンサーチューブ、銅眞鍮板、銅眞鍮棒等の製作に従事せり目下一ヶ月の製産額は銅眞鍮管一百五十噸、コンデンサーチューブ五十噸、銅眞鍮管一百五十噸、銅眞鍮棒二百噸、銅眞鍮棒一百五十噸にして規模の宏大、製産能率の偉大なる

寔に斯界注目焦點たり、現今市場にある同所製品に就て見るに其優秀なる品質は未だ嘗て製作されなかつた、優秀卓越なるものにして、到底他の企及し能はざる特色を有し居れりと、如上の如く卓越せる技能と豊富なる能率を十分發揮すると同時に、一層製産力の増大を期し供給價格の低廉を以て、斯界の需要充實に努力せんとしてあり。

而して同工場製品の一販賣は、多年斯界の巨商として有名なる大阪市西區西長堀北通五丁目湯淺讓商店にして、同店の古き歴史と取引の敏速と堅實可憐を旨とせる主義一貫の營業方針に依り、内地は固より遠く海外に發展し、斯界に重き信望を擔へる又故なきにあらざるべし、爾來同店の進展興隆實に目覺しきものあり殊に近時同店の内外取引巨大なるは、何人も心竊に畏敬する所なり。  
尙東京市日本橋區小傳馬町三丁目、東京支店も年次關東方面に於て信用を博し、東京横濱方面の有數の大會社工場にては同所と、取引關係を有せざるはなく、本支店相呼應して今や斯界に一大勢力を扶植するに至れり、されば湯淺讓商店に對

する斯界の堅固なる信用は、到底他の乘すべからざる所にて、逐日隆盛の機運に進出しつゝあり。  
今回神戶製鋼所が門司工場の銅、眞鍮製品を販賣するに際し、湯淺讓商店を一手好箇の對照と稱すべく、品質の優秀にして製産力絶大なる製品に對し、斯界の覇者たる湯淺讓商店が全力を傾注して販賣の衝に當るに想到せば、其雄飛活躍は頗る盛なるものあるべく、近來斯界の異彩とすべき所なり。

内田商事株式會社

所在地 神戶市京町八十二番地  
設立 大正六年四月  
資本金 五百萬圓  
代表者 取締役社長内田信也  
現代の代表的實業家將又新進活動家として、名聲内外に周き内田信也氏の經營に係る三大事業の一たる内田商事株式會社は、資本金五百萬圓、本店を神戶市京町八十二番地に置き、支店を東京、大阪、紐育の三箇所に出張所を名古屋、臺北、大連、奉天、上海、甲谷院、桑港、沙港、南米グエノスアイレス等、十數箇所の外

に近くは倫敦、佛國マルセルにも設くる事となり、現に富士製紙會社、王子製紙會社、三菱造船所、三菱商會社、三菱菱山會社、三井物産會社、芝浦製作所、日本石油會社、寶田石油會社、大阪電燈會社、久原鑛業會社、古河鑛業會社、住友鑛業會社、具島鑛業會社、横濱船渠會社、淺野物産會社等内地有數の大會社を取引先とせるは、勿論各支店出張所の所在地、就中英米兩國の有名なる大會社の機械、藥品等の總代理店として、全世界に亘りて廣く輸出入貿易其他の事業に、勵精せるのみならず、例へば帝國鑛業株式會社及大阪珪瑯鐵器株式會社の大株主たるが如き、或は又岩崎家と共に東京毛布株式會社の大株主たるが如き、更に又帝國發條會社並に村岡塗料會社の最有力なる保護援助者たるが如く、各種事業界に於ても拔くべからざる勢力を扶植しつゝある大會社にして、戰時中に於ける本邦經濟界の急速なる發展が、同社並にその姉妹事業たる内田汽船、内田造船等諸會社の活躍に負ふ所甚だ尠からず、内田商事會社は、今や内田氏關係諸事業の中心勢力として、其基礎の堅實にして信用

の鞏固なる斯界稀に見る所なりと雖も、同會社の眞價を窺はんと欲せば、當然の結果として其姉妹事業たる内田造船並に内田汽船兩會社の現狀に一瞥を拂ふの要あるべし。内田造船所は機械工場を横濱市山下町に造船工場を、神奈川県東神奈川に置き、現に職工三千五百有餘人を使備せる資本金二百萬圓の株式會社にして最初工學博士進經太氏の經營せし所なりしを内田氏が繼承し、現組織に更めたるなり而して其の營業方針は堅實一方にて其姉妹會社たる内田汽船會社の營業振に於ても、全然同一にして例せば同社の所有に係る十七隻約八萬噸の汽船は、全部有力なる備船者との間に、長期契約済にして、而も其契約相手方は久原、増田、三井佛國政府、米國政府、日本郵船、南滿鐵道、山下、三菱、神戸機務等何れも信用確實なる者のみにして、以て其申分なきを察するに足るべし。抑も内外有數の大會社を擧げて、其取引先とし廣く全世界に亘りて、日夜に積極的活動を繼續しつゝある内田商事會社の狀況を仔細に掲げんとするは、限りある紙面の能くし難き處なるを以て、輸出入

貿易方面に於て、特殊の地歩を占め居れる東京支店の概況を摘記せん。同社東京支店は、大正六年二月十一日の創業に係り現所在地は麴町區八重洲町一丁目一番地にして、開業以來常に有力なる大會社大工場と相接觸し機械、金屬類は勿論各種雜貨類に至る迄普く顧客の便宜を主として物品の賣買仲介又は事業の援助等に不斷の活躍を繼續せる結果、各方面の信用益々加はり、今や其取引年額優に七百萬圓に上るの盛況を呈し、大阪電燈會社の如き同支店を以て關東地方に於ける一手販賣店たらしむるに至れり、同支店の取扱へる商品科目を見るに、重要品目のみにして其數實に百數十種の多きに達せり

一、各種銅類、眞鍮板、亞鉛板、亞鉛引板、鋇力板、ホイラーシジグ、アルミニウム、アンチモニー、滅磨合金、高速鋼其他特殊鋼類、針金、瓦斯管、銅管、眞鍮管、鉛管、引拔鋼管、釘其他金物類一式。(二)雜貨掛要目 石炭各種、燧石、硫黃、滿俺鐵、重石鐵、水鉛鐵、黑鉛鐵、其他各種鑛石、セメント、煉瓦、アスファルト、アスベスト、ビチューメン、各種塗料、ペイント、北海道産豆類、滿洲産大豆類、小麥、上海穀、小麥粉、澱粉、砂糖、南米産羊毛、製紙用フェルト、麻布、バルブ、紙類、調帶類、罐詰類、セロロイド製品、護謨製品、絹靴下類、絹製肌衣、莫大小類、織布類、工業用藥品、各種植物油、各種硬化油、各種機械油、グリース類、米利堅松、北海道松、チーク材、枕木、内地各地木材等。以上は其取扱商品中の一部に過ぎずと雖も又以て取引範圍の如何に廣汎にして、其活躍地域の如何に廣大なるかを窺ふに足るべし、主腦者は同社重役にして支店長を兼ねる川添種一郎氏其人なり、同氏は明治四十年神戸高商の第一回卒業生として、年齢尙三十四の少壯實業家なり、

卒業後直に三井物産船部(神戸)に入り後一年にして、東京本社に轉じ更に倫敦支店の石炭船部擔任として、英京に活躍する事二年、大正五年物産會社を辭し窪田四郎、内田信也氏等と共に合資會社三友商會を起し雖いで、組織を變更し内田氏の資力を中心とせる現在の内田商事會社起るに及び、其取締役として就任謂は、同社創立者の一人たり、今や其直接經營者の一員として信用の確立、事業の擴張に日夜専念刻苦して休まざるの側ら内田汽船會社及造船所の取締役並に東京毛布株式會社の監査役をも兼ね、斯界有數の活動家として、少壯實業實の眞價を發揮しつゝあり。

桑港出張所長阪齊取締役、沙港出張所長阪齊取締役、南米出張所長中西信清、倫敦出張所長北村政太郎、佛國出張所長内海三八郎等の諸氏なり。

石崎合資會社

所在地 大阪市東區平野町二ノ十八  
設立 明治三十一年四月  
資本金 二百五十萬圓  
代表者 石崎喜兵衛

清酒×澤之鶴醸造の起原に就ては、遠く今を距ること凡そ二百年前即ち享保二年の頃、石崎喜兵衛氏一個人の創始に係り爾來連綿として繼承し來りしが、規模擴張業務發展の上に於て、獨力經營よりは會社組織にするの利便多きを察し、茲に於て明治卅一年四月組織を改め、合資會社となし以て今日に至れり、創立發企人は石崎喜兵衛、殿村平右衛門、佐野幸助、故松本重太郎の四氏なり。

傾加整院、香港、關領印度、支那及滿洲の各地に亘り、其の發展力の急速偉大なる眞に驚くべきものあり、資本金は當初三十萬圓なりしが、漸次業務の擴張に伴隨し、増資の必要を認め、明治四十五年二月十日以來數回に七十萬圓を増加して目下一百萬圓となれり、然れとも尙不足を感するを以て、更に一百五十萬圓を増資し、二百五十萬圓となすの計畫中なり。

當會社の現在重役及び幹部は、取締役社長内田信也、取締役倉澤弘信、同川添種一郎、同村上武輔、同阪齊匡、同中村弟三、監査役石野卓爾、同内田誠太郎、相談役窪田四郎、東京支店長川添取締役、大阪支店長角野久造、紐育支店長中村取締役、名古屋出張所長角野久吉、臺北出張所長忠田兵造、大連出張所長稻次隆、奉天出張所長小網仁三郎、上海出張所長安藤敬三、甲谷陀出張所長溝井千枝男、

同社の營業目的は清酒醸造販賣を主とし醬油、味噌、味淋、白酒、麥酒及洋酒、清涼飲料水及米、麥の販賣をも營み、取引先は日本全國及關領地、又は米國、英

目下同社の自釀高は、一萬七千石餘なりと雖も常に不足を來すを以て一萬五千石餘を買入れて需用に應じつゝあり、毎年海外に輸出する高は一萬石以上に達し、内地の販賣高は年一年増加し居れり。同社は營業の隆盛に連れて、左記支店を設置して以てこれに應ずることとなした

石崎合資會社酒造部 兵庫縣武庫郡灘新在家

設立年月 明治卅一年四月

同	南支店	大阪市西區北堀江一丁目五番邸	同
同	京都支店	京都市下京區水銀屋町二十五番戶	同
同	東京第一支店	東京市日本橋區元大阪町二番地	同
同	東京第二支店	東京市麴町區三番町六十四番地	同
同	東京第三支店	東京市神田區五軒町四番地	同
同	東京第四支店	東京市芝區宇田川横町三番地	同
同	東京第五支店	東京市京橋區三ノ間堀二丁目九番地	同
同	島之内支店	大阪府南區竹屋町二十七番地ノ乙	明治卅三年三月
同	西支店	大阪府西區京町堀通五ノ五三番邸	同四十年八月
同	東京第六支店	東京市淺草區南元町五番地	同三十九年三月
同	東京第七支店	東京市牛込區天神町八、九番地	同四十年四月
同	東京第八支店	東京市深川區西森下町五番地	大正三年四月
同	東京第九支店	東京市本郷區駒込淺嘉町四一ノ一號	同四年五月
同	東京青山支店	東京市赤坂區青山南町四丁目一番地	同六年十一月
同	東京大森支店	東京府荏原郡入新井村不入斗九三八	同
同	東京支店精米部	東京市深川區常盤町二丁目七番地	同七年八月
右の内	酒造部、島之内、京都、東京	郎、石崎ムツの諸氏にして、同社創立以	
第一、第二、第三、第四及第六支店は業		務擴張の爲め店舎狹隘を感じ、去る明治	
四十三年以降改築せり。同社現在資産は		四百四十三萬圓にして、當初の重役は石崎	
喜兵衛、小倉左文の二氏、現今は石崎喜		兵衛、佐野幸助、又重なる社員は殿村平	
右衛門、河中原造、浮田忠次郎、福本元		之助、黒川幸七、小網與八郎、石崎善四	

日本窒素肥料株式会社

三十九年一月資本金二十萬圓を以て薩摩國伊佐郡に設立せられ、専ら牛尾、大口兩金山に電力を供給し、併せて大口に電燈を供給し來りしが、同社所有の水利は川内川の中流に於ける曾木瀧を使用するを以て、若し同瀧の全水量を使用するときは、僅に二萬五千馬力の水力を發生し得るが故に、翌四十年四月日本カーバイト商會と協定し「アセチレン」瓦斯の原料たる炭化石灰の製造を目論み、資本金を四十萬圓に増加し、既設發電所の下流に約一萬馬力の水力電氣工事を完成し、同商會は二十萬圓の資本金を以て「カーバイト」工場を建設し、木曾電氣會社は無料にて電力を供給し、日本カーバイト商會は専ら「カーバイト」の製造販賣に従事し、其利益を相互に折半分配することとなせり。然るに明治三十九年の末に當り十數年來歐米化學界に於て、唱導研究を怠らざりし空中の窒素を探りて窒素化合物殊に窒素肥料を製造する方法獨逸化學界の泰斗「アドルフ、フランク」氏に依て世界に發表せられてより以來歐米各國競ふて同氏の專賣權を買得し、各數萬馬力の電力を使用して、今日石灰窒

素の名を以て販賣せらるゝ窒素肥料の製造を開始したり、時に於て曾木電氣會社も亦充分調査研究の末、日本カーバイト商會を買取し、明治四十一年四月右專賣權日本一手使用權を獲得し、同年十一月十日資本金を一百萬圓に増加し、社名を日本窒素肥料株式會社と改め、翌四十二年五月を以て、工事の大半を終り四十二年に至り、石灰窒素肥料を市場に供給するに至れり、爾來農家に於て漸次其使用に慣るゝに従ひ、需要増進するに至りしを以て同年十月資本金を二百萬圓となし新潟縣西頸城郡小瀧村に、一萬五千馬力の姫川發電所並に同郡青海村に、青海工場建設に着手し、更に四十五年三月又復二百萬圓を増加して四百萬圓となし、熊本縣阿蘇郡錦野村に一萬馬力の白川發電所、同縣八代郡鏡町に鏡工場の建設に着手せり、而して曾木發電所水俣工場は四十五年七月鐵道院に賣却し、當分之を賃借して營業を繼續せり。爾て此の窒素肥料の特長を見るに、効力大なる以て將來農家に於て、其使用益々増加し、到底現在の工場を以てしては、之れが需要を満足せしむるを得ざるを以て、本社は發

仁科ベルト株式會社

電所を増加し、次に業務の擴張を計畫し年額十萬噸以上を産出せんと努め居れり而して大正五年九月資本金六百萬圓を増加し、現在一千萬圓となす、現重役は專務取締役野口遵、常務取締役市川誠次、同渡邊義郎、同豊川良平、取締役兼支配人榎直三郎、監査役各務幸一郎、堀啓次郎の諸氏、何れも現在第一流の實業家を以て網羅せり。

阪工場はベルト製作場にて、大正六年十一月操業を開始せるが、業務發展の結果工場増築と共に各時の織機を増設し、一ヶ年の製産能力約五百萬圓に達せしむへく、而も製品は同社精選のベルト用原絲より製織して、ニシナ特許液にて仕上げ等蓋し、現今幾多木綿調帯中確かに優秀のものたるは、陸海軍各工廠の御用品たる殊に木綿調帯が紡織界に於て、從來絶対に使用不可能と稱へられたるも、同社製品に限り明治、東洋、大日本、長崎佐賀等の各紡績會社にて、旺んに使せらるゝに徴して、明かなりといふべし。最近の營業成績は極めて良好にして、毎期一割以上の配當をなし、尙多額の積立金後期操越金をなす等將來益々發展するや期待するに足る、現在重役は取締役社長松岡修造、常務取締役仁科遠平、常務取締役高木靜太、監査役馬場三左衛門、支配人城吉三郎、技師長野田忠藏の諸氏なり。



織成し專賣特許藥液處理を施し、且獨特の工夫考案に成る伸縮調節仕上法を施したるものなれば、最も合理的に製造せられたる木綿調帯なり。

特性 耐酸、耐アルカリ、耐油脂、耐水、電氣絶縁性、を有し兩耳堅牢なり、伸縮極めて少なくスリツプ少なく、寒氣暑熱の爲變質することなく、且つ凍折等の憂なし。

ニシナ保溫劑 は學理と實驗とに照し、研究を重ねて製造したる者なれば、保溫力絶大にして附着力の強固なる他に比類なく完全に錆止の効を奏し、燃料の節約偉大なり。

輕量 保溫劑の種類により重量を異にすと雖も、塗装乾燥後一平方呎一時の厚さ僅に二封度乃至三封度の輕量なり。

ニシナ錆止塗料 は弾力性に富み電氣を導かず鐵及木材の表面に特殊の被覆を與へ、大氣或は水との觸接を絶対に妨止するを以て錆止として無比の効力を有す。

特性 本品は耐酸、及耐アルカリの力普通のアスファルト又はビッチ塗料より遙かに卓越せるのみならず其耐

熱度非常に高し。

本品は永久的色澤を有し、塗布作業容易にして價格低廉なり。

大阪府東成郡墨江村大字濱口

仁科ベルト株式會社

大阪府東成郡墨江村大字濱口

大 阪 工 場

東京府荏原郡大井町二五二〇番地

東 京 工 場

東京市芝區芝口二丁目十二番地

東 京 工 場

大阪府南區松屋町末吉橋東詰

大 阪 販 賣 所

福岡市博多下吳服町一番地

博 多 販 賣 所

株式會社津清商店

所在地 大阪市東區本町三丁目

設立 大正八年三月十五日

資本金 一百萬圓(拂込半額)

代表者 取締役社長根津捨藏

同社は元根津ツネ氏個人經營の一商店なりしが、今何時運の趨勢に鑑み、組織を改めて株式會社となし、從來の業務一切を繼承し、尙一層業務の擴張を圖り、資本金一百萬圓を以て、設立せるものにて

其の營業科目は内外向綿布一式を取扱へり、然して同社は前個人時代に於ける信用厚く斯界に於ても古き歴史を有する老舗たり、現重役は先きに支配人たる根津捨藏氏、取締役社長に就任し、其の他取締役には、根津松之助、根津清三、根津卯三郎、監査役根津ツネ、根津増次の諸氏にして根津一系を以て組織せる者なり。

株式會社祭原商店

所在地 大阪市東區安土町四ノ四七

設立 大正八年四月

資本金 一百萬圓

代表者 取締役社長祭原伊太郎

同社は元、祭原伊太郎氏個人經營の和洋酒食料品雜詰商と、祭原源治郎氏經營の貿易商とを合併し、株式會社祭原商店を組織し從來兩者の業務一切を繼承して、設立せる者にて、即ち事業益々發展し且つ時運の趨勢に伴ふ可き必然の結果の大擴張にして、其の營業種目は和洋酒、飲料水販賣、罐詰食料品製造販賣、雜貨の貿易、其他前項に屬する信託及附帶事業等にて、現在重役は取締役社長祭原伊太郎、取締役祭原邦太郎、同祭原源治郎、同祭原彌三郎、同八木種藏、監査役祭原

安和、同祭原達三の諸氏なり。

株式會社萬成社

所在地 大阪市東區今橋五ノ三

設立 大正七年十二月

資本金 壹百萬圓

代表者 專務取締役小久保信太郎

同社は小久保信太郎氏個人にて經營せる萬成舎の後身にて、創業以來二十有餘年間奮闘の結果、業務盛々發展せるを以て今回世運の趨勢に隨ひ、且つは氏豫ての素志に基き、二三の知己と共に株式會社萬成社を設立して、從來の業務一切を繼承し、尙發展擴張を期して更に奮闘の基礎を確立せるものなり、營業科目は土地建物の賣買及其仲介、土地建物の管理、土地建物に關する一般信託業務にして、現在重役は專務取締役小久保信太郎、取締役安藤雄、中村萬治郎、中尾金松、監査役羽田治三郎、勝田永吉の諸氏なり。

發動機製造株式會社

所在地 大阪府西成郡洲町大仁

設立 明治四十年三月

資本金 一百萬圓

代表者 社長工學博士黒川勇熊

本社は初め資本金二十萬圓を以て創立し

株式會社萬成社、發動機製造株式會社、富山鐵道株式會社、中外護謨株式會社

富山鐵道株式會社

所在地 富山市櫻町

設立 大正二年十一月

資本金 五十萬圓(全額拂込済)積立金二萬四千圓

代表者 社長佐藤助九郎

飛越物資の輸出入増加せらるゝに當り、運輸機關設備なきを遺憾とし、佐藤助九郎主君となり、院線富山驛を起點とし上新川郡大澤野村笹神に至る、延長拾哩八分の鐵道敷設を計畫し、株式會社組織の許に大正元年十月廿日出版、同二年三月六日免許を得、同三年三月二十日工事に

中外護謨株式會社

所在地 大阪府西成郡豊崎町

設立 大正七年五月六日

資本金 五十萬圓(十五萬圓拂込)

代表者 社長平野復男

若手し、六年十一月二十四日設成せしを以て、翌十二月六日より營業を開始せり營業成績は漸次發展し、最近配當は毎期六分五厘以上七分を行へり、現重役は取締役佐藤助九郎、松浦勝太郎、安井文雄、黒田銀次郎、監査役關野善次郎、津野政太郎、今井繁、技師見田勇吉の諸氏なり。

合名會社藤田組

所在地 大阪市北區堂島北町二番地  
設立 明治二十六年十二月十一日  
資本金 六百萬圓

代表者 社長男爵藤田平太郎

合名資社藤田組の起原は、實に明治二年財界の巨人藤田傳三郎氏、郷里山口縣萩町より大阪に出て、徒手空拳創めて此の地に店舗を開きたるに基因す、是れ今日本邦實業界の霸王たる藤田組の前身にして爾來故傳三郎氏は苦心經營幾星霜を経て、各種の有利事業に着目し、身自ら苦戰奮闘の結果、漸次資産を造り、明治十四年一月に至り其組織を改めて組合となし、更に明治廿六年十二月に至り、合名會社藤田組と改め、愈々實業界に飛躍するの基礎を固むるに至りぬ、茲に於て大正六年九月、藤田鑛業株式會社を創立して合名會社の事業の一部を分離せり、現重役は、社長男爵藤田平太郎、副社長藤田徳次郎、常務理事藤田彦三郎、支配人本山彦一、同木村陽の諸氏なり。

藤田鑛業株式會社

所在地 大阪市北區堂島北町二〇  
設立 大正六年九月

資本金 三千萬圓(拂込一千五百萬圓)  
代表者 取締役社長藤田徳次郎

本社は當主平太郎男が、先考の遺業を享け継ぎ、益々事業の盛大をなし、坂仲輔を始め、其の他秀英なる新人物の手腕に依り擴張發展せるものにて、即ち合名會社藤田組の發達せしものなり。現在の藤田組の事業は、之を大別すれば鑛業、農業、林業、銀行業に別れ、今之を少しく詳細に記述すれば、  
●藤田組が鑛業に着手せしは、實に明治十三年で、當時我が國の鑛業は極めて微々たるものたり、其時分に藤田組は率先して歐米の新式探掘法を研究して、設備の改良を計り、幾多の辛勞を経て、明治三十九年六百萬圓の資本を注ぎ、五千萬圓の運轉資金を有するに至れり、現在に同社の所有に繋る鑛區の數は、内地に百三十一、朝鮮、臺灣に五十四を有せり、就中小坂鑛山は、同社鑛業の中心にて、今日の盛大を來したのは、彼の黒鑛製煉法を完成せし爲めに、加ふるに同鑛山では最新式の方法機械を應用するに力め六千三百馬力の水力發電所を設け、特別高壓送電法を採用し、六十尺の大熔鑛爐

を建造し、又は開掘法を實施するなど、極力能率の増進に力め、大正六年九月三萬圓の株式會社を組織し、藤田組の鑛山事業は益々發展を來して、昨年度の如きは、其の總産額、無量九百七十萬圓、之れを日本全國の鑛物製産總額に對比して銀は其の三分一分、銅は一割九分、金は一割三分の高率を示せり、之を以て見ても其盛況の一斑が窺知せられるべし、殊に今回の時局に依つて一時金及鐵の輸入が杜絶せし爲め設意之むが研究に從つて良好なる結果を得て、福島縣廣田に電力を利用して大製鋼所を設け、珪素鐵、滿俺鐵、クロム鐵、タンダグステン鐵、チタニウム鐵、チタニアウズ鐵、シリコーンパイナル、キユウブロンソス高速廣銅等の製造に成功せり、此外岡山縣柳原鑛山(銅及硫化鐵)栃木縣小百鑛山(銅)福岡縣美奈木鑛山(銅)同縣瀬戸鑛山(銅)等所に有望なる鑛山を買収して其の改善を計り、大規模の探掘を企圖しつゝあり  
●農業、備前の兒島灣開墾は、海面の干拓であつて、海底に堤防を築いて之れを乾燥せしめて耕地となし、其の總面積は五千二百町歩之を數區に區劃して、第一

期第二期に分ち明治廿二年の五月開墾の許可を受け、其第一期の工事は同卅二年五月に起工して、第一區四百六十四町餘は三十八年の九月に其の工を終へ、東高崎及び西高崎と稱せり、而して第二區一千九十七町餘は、四十五年の三月成工したので、一村を設けて、之を藤田村と稱せり、之れより先に工事の進行するに従つて局部の開発區域を擴張して、明治四十年から小作農法と、直轄經營の方法とを講じ、順次に第一區から第二區に及ぼし、大正二年に改善を加へて現在に至れり、直營農は、大農と小農の長所を折衷して機械力を利用し、農夫は一戸男二人分以上の勞力を常備せしめ、四町歩乃至五町歩を擔當して耕作せしむる事となし而し其の報酬は收穫の多少を標準とし、小作は一戸に對して、凡そ一町歩乃至一町五反歩を貸付ける事とし、表裏二毛作を爲さしめる、其の經營面積は、

直營地	五百十六町餘
小作地	二百六十三町餘
貯水地	三百三十二町餘
兩區合計	一千三百九十町餘
大正三年度	米 二八、〇〇〇石
	小麥 三、四〇〇石
	蠶豆 六、三〇石
大正四年度	米 二五、〇〇〇石
	小麥 二、三〇〇石
	蠶豆 七、七〇石
大正五年度	米 三〇、〇〇〇石
	小麥 四、一〇〇石
	蠶豆 一、二〇〇石

第二期の起工に係る第三區以下三千六百餘町歩の區域は、拘泥堤と稱へる基礎工事を施設しつゝあるが、低地の埋堆が適度に達するを俟つて、本堤防の製造にかゝる豫定なりと。  
●林業 又藤田組は長木澤、八幡屋の二大製材部を經營し、長木澤は小坂鑛山より八哩を隔つる、二つ屋と云ふ所にあり明治四十三年の一月に營業を開始したも

置し、原料は日本三大森林の一たる長木澤の國有林から、其の供給を受け、製材能力は一ヶ年二十萬八千石あり、八幡屋製材所は、大阪市西區八幡屋町に在り主として北海道産檜材を以て、製板及び床板の製造に従事し、最近に至つて新工場を擴張して北海松による製函を爲し旺に海外に輸出せり、總ての製材能力は一日四萬五千石あり故に、大規模の需要を充すことを得る。  
●藤田銀行は、(銀行の部参照の事)  
●其他、藤田組は明治四十四年七月に、南洋馬來半島、柔佛洲新南興に護謨栽培地を租借して、同年十月から着々と其の開墾をなし、其の面積は二千八百四十四町歩、既に六千五百エーカーの植付を了し、全護謨林を擧げて、一年に二百萬封度を生産するに至れり、又同社は支那、滿洲、朝鮮、南洋方面にも鑛業、林業に就て、各方面に視察を試みつゝあるを以て、近き將來には一層目覺ましき活躍をなすに至るべし。  
現重役は取締役社長藤田徳次郎、坂仲輔、齋藤精一、藤田平太郎、高木與太郎、藤田彦三郎、鈴木庫太郎、監査役篠野乙次郎、辻元謙之助の諸氏なり。

株式會社守谷商會

所在地 東京市京橋區三十四番地二丁目  
設立 大正七年一月  
資本金 一百萬圓(拂込六十五萬圓)  
代表者 取締役社長守谷吾平

同社は其の初守谷吾平氏個人經營として  
呱呱の聲を擧げ、其の創立や今を去るこ  
と十有九年前即ち明治三十四年九月十一  
日にして、爾來氏は間斷なき活動と激測  
たる手腕を振つて奮闘努力の結果、遂に  
今日の大なる基礎を築き上げり、然るに  
其の間業務は順調に漸次年と共に、隆盛  
に赴き、發展に發展を重ね事務益々擴張  
遂に個人經營を許さるに至る、茲に於  
て大正七年一月時運の趨勢に鑑み、組織  
を改めて資本金一百萬圓の株式會社とな  
せり。

次に其の營業種目を窺ふに、ワイヤロー  
プ、コントンロープ、マニラロープ、ゴ  
ムベルト、ホース、バルブ各種、電力電  
燈用諸機械、鳳凰印調革等にて、東京製  
鋼株式會社、東洋護謄株式會社、株式會  
社明電舎、日本皮革株式會社等其の他幾  
多の各代理店をなす。

大阪 支店 大阪市西區立賣堀北通  
九州 支店 小倉市砂津  
直方出張所 福岡縣鞍手郡直方町  
盤城出張所 磐城國石城郡平町  
北陸出張所 金澤市安江町九九  
上海出張所 上海南京路二四  
東北出張所 福島市榮町一九番地  
北海道出張所 札幌區南三條四丁目  
臺灣出張所 臺北城内撫臺街二丁目  
名古屋出張所 名古屋西區玉屋町  
抑も同社今日の發展は、創業者守谷氏の  
非凡なる手腕に依ること、多言を要せ  
ざる處なるも、又各部擔當者が各々特徴  
ある秀才揃にて、常に事業に對して熱心  
に且つ奮闘せるが爲にて、殊に守谷商會  
の今日を成せる経路を語る時に見通す能  
はざるは、即現取締役兼支配人井上與三  
郎氏なり、氏は守谷氏と同時に同郷の  
師範學校出身の秀才にして、數年前同氏  
の懇望に依つて入店し、爾來今日迄同氏  
を援け守谷商會をして今日の盛大に至ら  
しめたる同商會の中心人物なり、至誠温  
厚、人格高潔頭腦甚だ明晰にして、實に  
近時稀に見るの事業家なり、而して同商  
會現重役及び重なる社員は左の如し。

久米合名會社

所在地 東京市京橋區三十四番地三丁目  
設立 明治三十五年六月  
資本金 五十萬圓  
代表者 牧野藤一郎、久米民之助

同社は現代土木建築界に於ける技術家の  
先輩久米民之助氏の經營する所にして、  
最も鐵道施設及び橋梁コルベルト工事に  
經驗を有す、久米氏は明治十七年東京工

部大學を出、皇宮御營造金事務に従事す、  
彼の二重橋は氏の設計に係る不朽の榮譽  
なり、又東京工科大学教授に任じ、幾許  
もなくして大倉組に入り、佐世保鎮守府  
の工事を監理して非凡の手腕を發揮した  
り、後ち支那に赴き季鴻章に勤めて大に  
支那鐵道の敷設を説く、季氏其説を悦べ  
るも未だ之を實行するの機運に至らずし  
て日清兩國の反目を生ず、乃ち志を棄て  
歐米に遊び、列國の鐵道事業を視察し、歸  
來鐵道工事に従事し、斯界のオーソリ  
チイを以て稱せらる、茲に於て會社を組  
織して資本金最初廿五萬圓を投し、土木  
建築請負及石炭の販賣を經營せし處、業  
務漸次發展せし爲め更に資本金を五十萬  
圓となせり、また始めてマニラより技師  
職工を備聘し葉卷烟草の製造を開始す、  
之れ實に本邦斯業の濫觴たり。

株式會社興業舎

所在地 愛媛縣越智郡今治町大字今治村甲  
設立 明治四十年九月  
資本金 二十五萬圓(全額拂込済)  
代表者 社長柳瀬義之

現今伊豫ネールの名稱江湖に普及し、其  
地質の優秀なるに比して價の頗る廉なる

株式會社興業舎、南海鐵道株式會社

爲め、市場の賣行き特に著しきものあり  
然るに此の伊豫ネールの元祖とも稱すべ  
きは、本興業舎舎長たりし故矢野七三郎  
氏が、明治十九年本舎を創立し、未だ製  
ネール事業發達せざりし際苦心慘澹、各  
種の技術を考へ幾多の經驗を積みたる結  
果案出せるもの即ち今日の伊豫ネールの  
濫觴とす、同氏は引續き舎長の職にあり  
て、或は製造方法に或は販賣法等に自ら  
含務を執り來りしが、不幸明治二十二年  
十二月病魔の襲ふ所となり、遂に不歸の  
客となりしかば、柳瀬義明氏入りて舎長  
となり大に業務の發展を計畫し、漸次販  
路の擴張をなし、降て四十年九月組織を  
改めて株式會社興業舎の名を冠せしむる  
に至れり、爾來益々事業の擴張、製品の  
増加に力を盡し、今や同舎の販賣先きは  
内地に於ては、九州、畿内、中國を最大  
なるものとし、殖民地に於ては、臺灣、  
朝鮮に及び、近時南清、中清、上海、漢  
口等に海外輸出の途開け、社連年毎に隆  
盛に趣くの有様也、吾人は本舎の如く小  
資本ながら、廣く海外輸出をなし、我國  
の積年の輸入踏過を防退するの一助をな  
し居るを見るは誠に痛快に堪へざるなり

南海鐵道株式會社

所在地 大阪府南區難波新地六  
設立 明治二十八年八月  
資本金 二千二百萬圓  
代表者 取締役社長片岡直輝

南海鐵道の起源は其當時大阪堺間を營業  
中なる阪堺鐵道停車場を起點とし、紀州  
和歌山市と大阪市間の運輸連絡を計るの  
目的を以て、最初紀泉鐵道なるものを起  
し明治二十六年十一月四日、發起人會を  
開き、創立委員を設定せり、之に先ち阪  
堺鐵道と合併の契約を結びしが、當時偶  
々商法中會社法の實施せらるるに際し、契  
約を改訂せり、其後紀阪鐵道を合併し其  
の名を紀攝鐵道と改め、再び南陽鐵道と  
改稱し、同二十八年八月二十五日創業總  
會を開き、南海鐵道と改稱し取締役以下  
の役員を選定せり、即ち今の南海鐵道是  
なり、仍て同年九月五日堺停車場より起  
りて和歌山市に達する三十六哩餘の敷設  
認可を得起工せり。  
明治二十九年九月三十日、金壹百萬圓を

以て阪堺鐵道の買収を決定し、同三十一年十月一日同鐵道軌道の改築を完成し、大阪和歌山間漸次に開業して以て最初の目的を達したり、其後天下茶屋より天王寺に連絡する支線布設認可を得たり、又和歌山に於て紀和鐵道に連絡し、漸次交通運輸機關を完備せり。

爾來世運の進歩に伴ひ、明治三十八年六月二十四日難波、濱寺公園間及天下茶屋天王寺間に電車併用を企畫し、住ノ江に發電所を設置し、尋て同三十九年十月廿七日濱寺、貝塚間電車併用並電燈兼營の議を決し、四十年三月九日貝塚、和歌山市間を延長して貝塚、深日二ヶ所に變電所を設け、全線電車併用を遂行せり。

明治四十二年七月二十一日、金三十四萬圓を以て浪速電車軌道を買収して兼營となし、之を上野連絡線と稱せり、而して浪速電車軌道會社にて、大阪市と締結せし軌道共用電車契約を承継し、更に大阪市に金百三十萬圓を納付し、未設工事を完成し、四十三年十月一日より天王寺西門、住吉神社前間の營業開始と同時に上町乗入線中天王寺西門、谷町六丁目間の乗入を實行し、次で天滿橋に延長せ

しが、大阪市營電車賃金均一制實施の爲め四十四年一月十二日、軌道乗入契約を解除し、別途の方法により賃金を收入するの契約を爲せり、大正五年八月十九日滿期解除。

大正四年六月二十二日、金三百六十萬圓を以て、阪堺電氣軌道株式會社と合併し兼業として惠美須町濱寺公園間、今池平野間、宿院大濱公園間軌道を上町連絡線とを併せて軌道運輸營業を爲す、住ノ江發電所は最初六百ワット五百基ワット直流發電機二臺なりしが、全線電車實行に及び特別高壓二萬二千ワット一千基ワット交流發電機二臺を増設せり、其後阪堺軌道と合併の結果堺發電所一千五百基ワット交流發電機二臺と玉出變電所とを増加し、住ノ江發電所一千基ワット交流發電機二臺を堺發電所に移轉せり。

大正四年六月阪堺電氣軌道會社と合併し同七年二月更に和泉水力電氣會社を合併せり、而して當會社の最初資本金は二百八十萬圓なりしが、明治三十一年三月住吉堺間複線布設の爲め、四百萬圓となし同三十二年六月金一百萬圓を増加し、總資本金五百萬圓となり、同三十八年六月二十四日難波、濱寺公園間並天下茶屋、天王寺間電車併用の爲め、金七十萬圓を増資して總資本金五百七十萬圓となり同三十九年十月二十七日濱寺公園、貝塚間電車併用として、金百六十萬圓を増資して總資本金七百三十萬圓となり、尋て同四十年三月九日全線電車併用の爲め、金九十萬圓を増資して、總資本金八百二十萬圓となり、同四十二年七月二十一日浪速電車軌道買収の爲め、金三十四萬圓を増資して、總資本金八百五十四萬圓となり、同時に軌道共用契約に基き、大阪市へ納付金其他の爲め、社債金二百萬圓を募集せり、同四十四年四月二十八日電燈電力供給土地家屋兼營並既成線改良費として金百四十六萬圓を増資して、總資本金一千萬圓となり、大正四年四月十日阪堺軌道と合併の爲め、金三百六十萬圓を増資し、總資本金一千三百六十萬圓とし別に阪堺軌道起債に係る社債、金百五十

萬圓を繼承して、社債合計金三百五十萬圓となる。

本正六年十月社債二百萬圓償還、同六年十一月和泉水力合併の爲め、八十四萬圓増資決議、更に七年四月七百五十六萬圓を増加し、總額二千二百萬圓の大會社となれり。

現在重役は取締役社長片岡直輝、専務取締役大塚惟明、取締役肥塚源次郎、取締役本山彦一、取締役田中新七、取締役寺田甚與茂、取締役永田仁助、取締役渡邊千代三郎、取締役垂井清右衛門、監査役宮本吉右衛門、監査役宅徳平、監査役寺田元吉の諸氏なり。

金港堂書籍株式會社

所在地 東京市日本橋區本町三ノ一七  
設立 明治二十五年一月(創業明治八年)  
資本金 十五萬圓(全額拂込済)  
代表者 社長原亮一郎

明治五年政府始めて小學の制を發布するや、未だ適當の教科書あらざりし事は世人の知る所にして、當時原亮三郎氏其不備を憂ひて一書肆を横濱に開き之を金港堂と稱し、専ら教科用圖書を印刷して各地の急に應じたり、時實に明治八年なり

金港堂書籍株式會社

翌九年現在地の本町に移轉せしが、此項刊行せる修身書大に世に行はれ、教科書肆として既に頭角を顯はせり。

明治十七八年の交教科書革新の聲起るや原氏之を諸名士に語り、時の文部省御用掛森有禮氏の説に由り、金港堂編輯所を設立し、學者、教育家を聘請せり、是れ實に我國に於て書肆が編輯所を設立せる嚆矢なりとす、翌十九年編輯所長三宅米吉氏を歐米に派して教育制度、出版事業及び教科書供給等の實況を視察せしめたり、是れ亦我國斯業界に於て先例なき事なりき。

此の如く金港堂は率先して、教科書の改善を圖りしが、當時文部省にも編輯局ありて教育に關する圖書を編纂出版せり。時の文部大臣森氏金港堂を獎勵して、競争は進歩の母なるが故に、政府に負けざる様奮闘すべしと語り、常に胸襟を開きて扶助する所あり、外國より購求せし書籍の如き、一部は本省編輯局の一部は金港堂編輯局に交付したりと云ふ、其他に又文部省出版教科書の發賣頒布の方法等に就きて、特に之を金港堂に諮問せしことありき、兎に角當時金港堂は文部省

と相對して盛んに新式の教科書を供給せしものなりき。

明治二十五年に至り、組織を變更して株式會社と爲し、資本金五十萬圓を以て現稱の金港堂書籍株式會社を設立せり、而して株主は原氏一門及び從來金港堂に功勞ありし者を以て之を組織し、業務其他一切の内容に於ては、敢へて變更あらざりき、此の如く從來の業務は教科書を主となし、爾餘の出版物は餘業に過ぎざりしが、教科書も漸く進歩して、復た多くの力を用ふべき餘地なきのみならず、競争も次第に甚だしく、永久確固たる事業にあらざるを思ひ、三十四年大に社務を改革し學者を増聘して少年書類、専門書類、軍事書類、教育參考書及び各種の雜誌等に主力を注ぎ、小學教科書事業は之を新設の帝國書籍株式會社に引渡せり、三十三年原亮三郎翁社長を辭し、原亮一郎氏之に代れり。

是より先き同社は清國に於て使用すべき教育書出版に着目し、明治卅二年先づ其事業の端緒として、清國用小學讀本を編纂したることありしが、會々同社の業務多忙に赴きし爲め、同三十六年に及び清

國用出版物に着手すべく、彼地に赴き種々調査をなし、遂に合同して新に商務印書館を設立するに至り、爾來大いに擴張し、日本より各専門家を聘し、以て營業上益々好成績を挙げたりと云ふ、今や博文館、富山房、大日本圖書株式會社等と並馳して我が出版界に一大勢力を占め、文運の發達と共に會社は嶄新にして世人の嗜好に適する物を選定して出版せる故何れのものも數十版を重ねざるはなしと云ふ。

現重役は社長原亮一郎、専務取締役原安三郎、外に取締役三名、監査役三名あり由來出版事業は國家的又は公共的性質を帯ぶるものにて、世道人心の開發を謀る上に於て一日も缺く可からざるものなり然りと雖ども、其の善美なる目的善美なる事業は他の有目的事業に比し、經營困難にして帝都に於ける累代の老舗の破綻或は縮少を見るあり、同社は此の善美なる事業を發達せしめん爲め、社會公衆に讀書の良習を勸請して、やまざる所以なり。

### 日本電池株式會社

所在地 京都市上京區新町通り今出川北

をなし、尙各種徽章は又好みに應じて製造販賣せり。

餘興 音樂隊、能狂言、演藝、落語、講談、活動寫真、花火。

#### 信託部

元來信託業は英國に起りて、米國に發達し近時其著しき大發達をなし居るの、獨逸なり、經濟學者は信託業は社會に最も必要にして且最も進歩したる信用機關なることを論ず。

當世は貸すも商賣借るも商賣、地所建物も商品に異らず利廻り次第で、時と場合によりては家屋敷も、金や株券に乗換へ百萬長者も他に融通を求む、かくて流通資本も固定財産も二重三重に働か人も富み國も富み行く譯なれど開け行く世の様は益々複雑となり賣るに難く買ふに易からず、殊に對人信用は行はれ難く對物信用とても安心はなり難く、法律は愈密にして之を潜るもの益巧妙なり、茲に便利なる信託業の必要が生じ來る以所にして本社の營む其の種類は、

○金錢貸附 資金の受託、土地家屋の賣買及仲介、有價證券の賣買及仲介、貸金利子家賃の取立、人事の紹介、電話

京都工商株式會社

### 株式會社錢屋商會

所在地 京都市下京區三條大橋東入

設立 大正五年五月

資本金 二十萬圓(拂込五萬圓)

代表者 専務取締役小松美一郎

同社は元個人經營の商店なりしが、漸次業務發展せし爲め、時運の趨勢に鑑み會社組織に變更せるもにて、抑も其の創業は文化年間の頃にして、百數十年の歴史を有する兩替店たり、又京都に於ける貨物裝飾業の開祖にして、宮内省を始めとし陸海軍、帝國大學諸官衙、各宗本山公學校等及び婚禮、園遊會、葬祭に至る各種の貨物裝飾の御用達をなし、其の營業科目は三部に別れ、大要左の如し、

#### 貨物部

貨物品 天幕、幔幕、敷物、毛氈、火鉢、蓑盆、燭臺、球燈、衣裳、椅子、卓子、夜具、蚊帳、土瓶、茶碗、盆、萬國旗、座蒲團、金銀屏風等其他一時的の用品、何でも即時需要に應ず。

裝飾 公會式場、園遊會、綠門、模擬店街道の裝飾、御葬儀式場、休憩室、夜會、餘興場、圖案會天井模造庭園、生花、盆栽等總て持參、又は設備の引受

賣買及立替金、生命及火災保險代理等一般信託業。

#### 代理部

○商品を直接製造元より委託を受け極めて僅少の手数料にて販賣の取次をなす故に當代理部より買入する時は非常に割安にて且つ敏速に手に入る、便宜あり、尙取扱商品及營業の明細書は別に申込次第直ちに送附せりと。

而して本社の特色とする處は専門の智識と多大の經驗とを有し、遠近に拘らず種類を問はず、總て立所に御用命を應じ、着實親切而も敏活なる營業振なり、且つ最も信用と德義を重んじ委託者の事柄は一切秘密を嚴守し、手数料底廉にて至極便利なる組織に成れり。

現在重役は左の諸氏なり。  
専務取締役小松美一郎、取締役小林吉明、同津田八郎兵衛、同宮本邦之助、同宮本儀助、監査役金原與吉、同津田常七、同西川吉兵衛、相設役稻畑勝太郎、同河崎助太郎、同塚本惣助、支配人法學士小川義雄の諸氏なり。

### 京都工商株式會社

本店所在地 京都市下京區東洞院通錦小路下ル

工場所在地 大阪府西成區豐洲町海老江

設立 明治三十九年二月

資本金 百萬圓(拂込金額四十七萬五千圓)

代表者 社長田中一馬

京都工商株式會社の起原たるや、明治二十九年元關西貿易合資會社が、附屬事業として、大阪市外浦江に刷子工場を起したるを始めとす、其れより以後同社は都合上明治三十四年解散したるが、刷子工場のみは、某氏個人の手にて經營せられ同三十九年に至り、組織を株式會社として此事業を繼承するに至れり、當會社は即ち是れなり、創立發起人は當地方に於て資産名望ある士にして、田中源太郎、西村治兵衛、内貴甚三郎、市田理八、大原直次郎、山添直次郎、井上利助、渡邊伊之助、松居庄七、久保田庄左衛門、大澤善助、松居久右衛門の諸氏にして創立當時の重役は取締役社長大澤善助、取締役西村治兵衛、市田理八、渡邊伊之助、松居庄七、監査役田中源太郎、久保田庄左衛門、佐野正道氏にして、現今の重役は取締役社長田中一馬、取締役河西寛一郎、濱岡光哲、井上利助、井上熊三郎、監査役田中源太郎、久保田庄左衛門、松居庄

七の諸氏なり、社長大澤善助氏は創立當初より社長にして、會社事業の向上發展に盡瘁されしこと甚大なるも、惜哉大正元年末病氣の爲め退職さるゝの已むを得ざるに至れり。

東京製線株式會社

所在地 横濱市神奈川町一四四

當會社が營業目的とする處は、輸出向化粧用刷子(ブラッシュ)の製造及び賣買にして製出品は、主として米國に輸出し紐育に出張せる販賣員の手により、合衆國並に英領加奈太に於ける商人に卸賣をなすものにして、雜貨品の輸出入をも兼營せり、營業の盛衰と是れに伴ふ資本の増減は千變萬化極まりなき、現今の社會に於て當然免がれざることにして、又勢の已むを得ざる場合あり、當會社の如きは最初の資本金二十萬圓なりしが、明治四十四年六月不幸にして、大阪工場祝融子の災禍に遭遇し、工場全部焼失して多大なる損害を蒙れり、其れが爲め資本金減額の必要を生じ、十四萬圓を切下げて六萬圓と爲せり、されど此は一時的減資にして更に十萬圓を増加して、十六萬圓となし、更に大正五年三十萬圓に大正七年百萬圓に増資し、現在拂込金額四十七萬五千圓なり、營業狀態は時に盛衰あれど

も普通年八朱の配當を繼續せしが、歐州戰亂後は業況頓に昇り最近の配當は年一割四分とせり。

同社は明治四十四年七月東京府下澁谷町に合資組織を以て創立され、金屬細線の伸延を營みしが、同四十五年一月よりエナメル線の製造を開始するに及び、更に規模を擴大するの必要に迫られ、同年七月組織を變更して資本金十萬圓の株式會社となし、爾來社運隆々たるものあり、大正二年十一月遂に横濱市神奈川町に移轉し一層業務を擴張して、各種電線の製造を開始せり、斯くの如くにして、事業は益々盛大に赴き、大正六年二月には更に資本金を増加して五十萬圓となし、今や製線界に於ける一大勢力を示すに至れり。

成績は極めて良好にして、最近五六期は毎期二割乃至三割の配當を繼續し、猶多額の積立金をなせり。

同社は今や原料線自給の計畫を立て、同社の株主に更に有力者を加へ、姉妹會社として別に資本金五十萬圓の東京鋼鐵工業株式會社を創立し、今や神奈川縣川崎町に起工しつゝあり、以て同社將來の發展や期して待つべし、同社の重役左の如し。

寶田石油株式會社

所在地 新潟縣長岡市城内町一丁目

設立 明治二十六年三月  
資本金 二千萬圓(拂込一千六百二十五萬圓)  
積立金 二百十萬圓  
所有鐵區 一億五千萬坪

代表者 取締役社長橋本圭三郎  
取締役社長橋本圭三郎

本社は明治二十六年二月、資本金一萬五千圓にて長岡に創立せり、當時石油事業が稍や曙光を認められしを以て、會社組合等續々成立したるも、何れも一時の僥

寶田石油株式會社

倖を視ふ者のみにて、其の弊害たる舉げて數ふ可らず、本社は之が矯正と斯業擁護の目的を以て明治三十二年迄に十三の會社及組合を買收し、更に二百二十餘を買收又は合同し、資本金一千五百萬圓となりて、大正四年に至り大改革を行ひ、採油方面の擴張を企圖すると共に、時恰も財界の好機運に乗じ、同五年に五百萬圓を増加し、總資本金二千萬圓の大會社となれり、而して本社は我が石油界の重鎮にして、彼の日本石油と共に本邦斯界の双壁として、其の名聲天下に治ねく、又事業界に於ても重要な地位を占め、常に世人の注意を喚起せり、いざ之より事業及設備の主要を述べん。

鑿井採油は本社之首腦部にして常に之れが擴張を計り、今回新に最も有望と目されたる新潟縣南蒲原郡庄川村に庄川鑛場を置き、同縣東頸城郡菱里村大字須川に須川鑛場を置き、同縣三島郡宮本村に宮本鑛場を置き、同郡日吉村大字鳥越に鳥越鑛場を置くに至れり、斯くして鑿井採油方面に全力を注ぐに至りたれば、前途産油の増加は期して待つべし、而して本社一般鑿井方法は日に月に改良を怠らず

手堀、上總堀、網堀及び新式のロータリ掘式は勿論、尙ほ一步最新式の水壓循環網採收したる原油は各鑛場に其の附近の各製油所へ豫て地中へ埋設しつゝある鐵管を以て流送す、其の鐵管は二吋乃至五吋にて、延長實に百二十一哩に達しつゝあり。又各油田地には本社直轄の外、左の五個の出張所を置き、其の下に二十三の鑛場を設け、日々二百餘臺の汽鑽と七百五十餘臺の流機と、百四十餘臺の唧筒を活動し、三千餘名の鑛夫をして晝夜間斷なく使役しつゝあり。

- 東山出張所 浦瀬、桂澤の二鑛場
- 西山出張所 長嶺、鎌田、後谷、尼瀬、中永、宮本、鳥越の七鑛場
- 新津出張所 小口、瀧谷、金津、朝日の四鑛場
- 相良出張所 菅山鑛場
- 臺灣出張所 造橋、出礦坑の二鑛場
- 本社直轄 牧、小千谷、庄川、須川、平澤、石狩、山形、小友の八鑛場

而して「ガソリン・プラント」は、天然瓦斯より揮發油を製造するものにて、近年米

國にて發明せられたるもの也、本社は直に之を採用し、最初之を天然瓦斯の豊富なる西山長嶺鑛場に掘付けて、試験せしに其の結果頗る良好なりしを以て、引續き後谷及鎌田尼瀨の各鑛場に建設せり、從來一年約三十萬噸の輸入を仰ぎし揮發油も本社及日石會社の本機械製造により折柄飛行機、自動車其の他の需要激増に拘らず、優に外國品を防ぎ、尙餘裕を生ずるに至りたるは、國産發展上實に國家の爲め慶すべき事なり、製油方法は今や非常の發達にて、又需要も大いに増加し、軍艦、鐵道、飛行機、自動車を初其の各種事業に殆ど牧擧に違あらず、故に本社は常に製油法に、研究改善を加へ現に新津及柏崎の兩製油所には、大擴張を施設せり、即ち製油所は左の七ヶ所に置き各附近鑛場より流送し來る原油は五萬石入のタンクを始め大小五百餘個のタンクに貯藏し其の製油力は一晝夜僅に五千石の石油を精製する事を得、而して尙最新式の機械と獨特の製造法により日々五百有餘人の工夫を役し、製造に従事せり。

長岡製油所 新潟縣長岡市  
新津製油所 同 新津町  
沼垂製油所 新潟市沼垂町  
新潟製油所 新潟縣關屋  
柏崎製油所 同 柏崎町  
相良製油所 靜岡縣相良町  
臺灣製油所 臺灣苗栗  
尙製鐵所即ち石油容器的のブリキ罐製造は勿論本社の一事業にして、既に長岡柏崎の兩製油所内に一箇月各三十萬噸を製作し得る最新機械を据付けて、三百名の男女職工を役せり、其他新津及各製油所にも目下建設中に近く製作の運びに至るべし。  
又本社の販賣方法は、東京其の他に出張店及出張所を置き、其の下に二百五十餘の專屬特約販賣店を有し、品質荷造り等に不斷の注意を加へ、孜孜として販路の擴張に努むる結果、今や本社の製品は全國に普及して益々聲價を高め、而して陸海軍、鐵道院各種の工業會社は、勿論其の他近來輕油機械油の販路著るしく増加し、尙支那輸出も頗る好況を呈し、日に發展せり、本社は之等商品輸送に關しては敏活と運賃の低廉を期し、本社所

有の油槽車又は汽船を以てし、些の遺漏なく總て完備せり、前途の發展停止する處を知らず。  
而して本社現重役及重なる社員左の如し  
取締役社長橋本圭三郎、專務取締役福島甲子三、取締役渡邊藤吉、同中野貫一、同川上佐太郎、同鍵富徳次郎、同大橋新太郎、監査役子爵牧野忠篤、同村井吉兵衛、同澁谷善作、法律顧問法學博士原嘉道、技術顧問理學博士巨智部忠承、總務部長支配役永松爲次郎、販賣部長支配役津下紋太郎、會計部長支配役渡邊介、鑿井部長技師長松田繁、製油部長技師長水田政吉、製油部次長技師吉山虎市、鑿井部次長技師山田文慈の諸氏なり。

### 成田鐵道株式會社

所在地 千葉縣印旛郡成田町  
設立 明治二十八年十一月  
資本金 二百四十二萬五千圓  
代表者 專務取締役齋藤和太郎  
成田鐵道株式會社は、明治二十八年十一月の創立に係はり、聖地名跡の巡遊鐵道たるの外、地方産業の開發に資する事偉大なり、同社は創立以來、漸次改善を加

へ、現在資本金二百四十二萬五千圓（拂込済）、諸積立金無慮三十八萬圓に達す、斯くて千葉縣印旛郡成田町を基點とし、院線我孫子驛、同佐倉驛及び佐原驛に至る四十五哩五鎮間の運輸に従事し、猶ほ常總運輸株式會社の大株主として、大利根沿岸の水運に與かり居れるが、大正七年四月の株主總會に於て、佐倉驛より船橋町に至る、線路延長を可決せり。同社の重役は取締役會長山田英太郎、專務取締役齋藤和太郎、取締役男爵大倉喜八郎、同鈴木寅彦、同堀内計策、監査役渡邊福三郎等の諸氏なり、而して堀内取締役は營業課長を兼ね、庶務課長永田銀太郎、保線掛長技師中野茂一郎、會計掛長白井常利、運輸掛長青樹重康、車輛長井口俊夫諸氏にて一致協力經營の任に當れり。

### 株式會社青森倉庫

所在地 青森市安方町二百八番地  
設立 明治二十九年八月十五日  
資本金 五萬圓  
代表者 社長大坂金助  
青森港は本州北部の良港にして、北海道との連絡要港なれば貨物の集中すること頗る大なり、倉庫の設備は運輸機關の設

株式會社青森倉庫、青森電燈株式會社

備につれて重要缺くべからざるは茲に論ずるまでもなし。  
同倉庫は一般倉庫業を營むを以て創立されたるもの當時の資本金は十萬圓にして營業成績も不可なりしが青森市の大火に際し同倉庫も亦其過半を焼失し、爲めに五萬圓の減資をなして事業縮少の止むなきに遭はせるは同社の爲め誠に同情に堪へず、而して一般に營業も衰退せりと返すべくも遺憾の極み、吾人は同社經營當事者が此際發奮して舊面目に復し更に大に發展の方策を講せんことを切望せざるを得ず。

惟ふに同社重役諸氏の胸中既に畫策の成るあらむか、北門の要港、縣廳所在の地たる面目にかけて早晩吾人の望みを満足するの施設あるは吾人の疑はざる所なり同社重役は、社長大坂金助、取締役樋口喜輔、小林長兵衛、同澁谷忠藏、監査役鎌田重吉、同渡邊佐助の諸氏にして、青森市に於ける一流の實業家なり。もし夫れ吾人の聞くが如んば青森港は近き將來に於て政府事業として築港着手の計畫ありとか、同港の將來は益々望み多く北海の諸港、カバント島との航路開始を見

### 青森電燈株式會社

所在地 青森市大字道字浪打一番地第二號  
設立 明治二十九年三月二十六日  
資本金 百七十五萬圓  
代表者 專務取締役社長大坂金助  
明治二十二年秋の頃より電燈會社設立を唱道する有志ありたるが、議事堂失火の爲め一時立消となり、同二十六年商業會議所、米穀取引所等創立の計畫あり、其同志の會合に於て電燈會社設立の議纏り會社設立認可出願することとなり、十一月二十七日を以て願書提出、爾來數度の訂正其他の手續を経て二十八年四月十五日青森縣知事の許可を得續て同年八月八日附を以て農商務、逓信の兩大臣より發

起の認可を得たり茲に於て柿崎忠兵衛、大坂金助、伊東善五郎、早瀬由右衛門、長谷川茂吉、小林長兵衛、淡谷清藏、木村圓吉、渡邊佐助の諸氏發起人となり、創業總會開催、二十九年四月二十三日設立登記を了はり、三十年三月五日開業、資本金は當初三萬圓、三十年九月十七日五萬二千五百圓に増資、三十二年一月二十日六萬圓となし、三十五年十月七日一躍して二十萬圓となし更に三十九年十一月二十九日三十萬圓に増資せり、而して大正二年七月三日更に五十五萬圓を増資總資本金を八十五萬圓となす、次で大正八年一月二十七日九十萬圓増資總資本金百七十五萬圓とする決議を爲す其四分の一拂込金は去る三月一日を以て完了せり同社營業は開業以來着々増進し、明治四十三年全市焼失の大火ありたる時同社も類焼の災厄に遭ひしも社員の方力により其恢復を速かならしめ六萬餘圓の大損害も格別のことなく四十四年上半年に於ては一割の配當を爲し、爾來引續き一割の配當を持續し、多額の積立金を有し、近かく電氣鐵道兼營の出願をなすに至れり。同社が上述の如く短年月の間に長足

會津電力株式會社

所在地 福島縣若松市榮町二丁目五十九番地  
設立 明治三十三年十二月  
資本金 一百五萬圓(株數、二〇〇〇株)  
代表者 取締役大島要三

の進歩をなし隆々たる社運を拓きたるは前社長故渡邊佐助並に現社長大坂金助、取締役兼支配人柿崎善祐氏等の献身的奮闘による處多く其功長く没すべからざるものあり。同社創立當時の重役は専務取締役社長渡邊佐助、取締役淡谷清藏、同大坂金助、同木村圓吉、同長谷川茂吉、監査役小林長兵衛、同外野傳右衛門、同伊東善五郎、支配人柿崎善治、主任技師櫛引淳太郎の諸氏也。

株式會社仙臺米穀取引所

所在地 仙臺市東四番町三十三番地  
資本金 十萬圓(全額拂込済)  
代表者 理事長木村一是  
設立 明治二十六年十二月  
仙臺地方は、往時より米穀の産出盛にし

て、東北地方に於て最上位を占め、其品位も又極めて良好なりしかば舊來本石米と稱して、夙に大阪及び東京地方に輸出し、實に當地重要産物の一つに數へられたり。

大和索道株式會社

所在地 奈良縣宇智郡五條町大字二見  
設立 明治四十四年一月二十八日  
資本金 二十三萬圓  
代表者 取締役社長林平造

然るに米穀の如きは其の價格常に高低頻繁にして、其取引額又巨額に達するを以て個人商店の手を以て好く賣買仲立を爲し得るものに非ず、されば之れが賣買取引の機關を設くるは極めて緊切の事業なるを認め故金須松三郎、故佐藤助五郎、故遠藤温、福島與惣五郎、松岡虎之允、故青沼升治、熱海孫十郎、故高橋徳右衛門、故遠藤敬止、故佐藤三之助、八木久兵衛、故本野小平、故増澤朋重、吉岡豊治、故針生源兵衛、渡邊武七郎、故島山文十郎、故手島雄八郎、故加藤彦七郎、木村一是の諸氏發起人となり、明治二十六年十二月農商務大臣の認可を得、爰に株式會社仙臺米穀取引所を設立し、當初資本金を四萬八千圓と定めしが後五萬圓に増資し爾來大に業務の發展を圖り、早川智寛氏を擧げて理事長となし、金須、木村、加藤の諸氏理事に就任し、一時株式の取引生絲の賣買をも開始したりしが

平山農業株式會社

所在地 奈良縣高市郡船倉村大字藤井  
設立 明治四十年五月五日  
資本金 十五萬圓(拂込金額七萬五千圓)  
代表者 平山大吉、平山太次郎

と後年之を廢し専ら米穀の取引のみを業するに至れり、近年業務益々發展し來りしを以て、資本金十萬圓に増加するに至れり。

今茲に營業概況を叙述せんに、明治四十五年六月營業開始茲に業務次第に發展し大正二年最初五朱の利益配當に過ぎざりしが漸次六朱七朱八朱と遞増し最近は優に二割以上の配當を爲し得るも會社の内容を充實し基礎を鞏固ならしむる爲め之を八朱に止め建設の銷却を多くする等専ら會社の健實を計り社運益々隆盛に趣けり當索道は院線川端驛に於て鐵道に連絡し運送至便なる上に更に出張所を關西線五條驛前に設置し斯くして益々運輸上の便宜を計り事業の擴張を企圖せり。重役は創立以來變遷なく取締役社長林平造、取締役森田徳兵衛、奥山寛平、江森祿郎名迫行輝、監査役今村勤三、横島直彌、相談役栗山藤作、支配人淺川辰次郎の諸氏なり。



近時地方青年の氣風頹敗し、徒らに浮華  
虚榮に流れ、着實なる勞働を厭ひ、競ふ  
て都市に趨り、年々耕地の荒廢を來し、  
穀類の收穫歲々低減するの様に於て、  
良田は畑となり、畑は原野に化するの地  
不勢、殊に當地方の如きは其勢益々甚だ  
しく、地方の資力委微して都市に吸収せ  
られんとす、本會社は茲に鑑みる處あり  
平山一族を以て如上の會社を設立し、永  
く農業をなし此の地方の頹勢を挽回せん  
ことを企てたり其營業とする所は、創立  
主旨の示す如く、耕地を整理し、土地を  
所有し、山林を栽植又は伐採し、田畑の  
耕作をなして一般農産物の産出改良をな  
すにあり、當初資金僅かに一萬圓なりし  
が、社運の隆昌を來すに至り、四十一年  
九月五萬圓に増資をなし、尙事業頗る有  
望なるを以て四十四年十二月重役會に於  
て資本金十五萬圓に増加せり、本社創立  
以來平山太吉氏社長として社務に執筆し  
劃策穩健にして尤も宜しきを得しかば、  
現時本社は田地八町七反一畝餘、山林二  
十三町五反八畝餘、畑地八反八畝、有價  
證券四萬九百餘圓、別に朝鮮に於て多少  
の山林田畑を所有するの盛況を見るに至

横濱屠場株式會社

所在地 横濱市保土ヶ谷町三百九番地  
設立 明治四十二年六月  
資本金 二十萬圓(拂込金額六萬二千圓)  
代表者 取締役社長中川喜三郎  
獸類の屠殺は風紀衛生の上に於て是れを  
取締る可き必要を感じ屠場法を制定さる  
るに至れり、當會社は屠場法により從來  
使用し來りし屠場に改善を加へて完全な  
る者となし獸畜屠殺解體の勞務請負及び  
之に附帶する業務をなさん爲め創立せる  
者なり、當會社は營業の主なる者として  
横須賀海軍に供給する生肉を屠り來たる  
も明治四十五年一月横須賀に市營の屠場  
設置されし爲め大に其頭數を減じ一大打  
撃を蒙りしも爾來衛生思想の向上に伴ひ  
肉食するもの日に増加し隨屠畜頭  
數漸々多きを加へ來りしに歐洲大戰の  
結果外國船の横濱に入港するもの殆んど

濱田營造株式會社

所在地 島根縣石見國濱田町大字新町一一九  
設立 明治三十二年五月二十五日  
資本金 七萬圓(全額拂込済)  
代表者 社長佐三九郎、石田彌太郎、田代治

當會社の創立起原たるや、我帝國は清國  
との國交斷絶して戰爭を開始し連戦連勝  
の結果軍備の後援なき外交は薄弱にして  
外國の暴横を阻止するを得ずとの諸論起  
り其れが爲め國防充實の必要上軍備の擴  
張となり第五師團歩兵第二十一聯隊を濱  
田に設置さるゝに至る此聯隊所屬の將校  
舍宅に充つべき家屋なきを以て株式會社  
を組織して新家を建築し其れが需要に  
應ずると同時に餘力を以て一般土地建物  
に對する金融機關たらしめん爲め生じた  
るものなり、創立當時の取締役は佐三九  
郎、右田古文、卷金次、小林藤一郎、佐  
々田寛治、伊藤豊次郎、水澤彌七の七氏  
なりしが爾來數年間社長支配人の外悉く  
更迭し大正元年十一月社長佐三九郎氏不  
幸にして白玉樓中の人となられし爲め大  
達新作氏社長に就任す、大正五年五月大  
達新作氏死亡に付前社長嗣子俵三九郎氏  
社長に就任す。

當會社が取扱ふ營業科目は第一土地建物  
の賃貸第二全額償還又は年月賦償還方法  
に依る建物築造第三土地建物購入及賣却  
第四土地建物抵當貸附金第五土地建物賣  
買の仲介第六土地建物貸付料取立第

福壽生命保險株式會社

絶無なりしのみならず肉類を以て常食と  
する所の西洋人亦多く歸國し爲めに多少  
の打撃を蒙りしと雖も靴近豚肉の嗜好著  
しく増加せしを以て大正七年六月より十  
一月に至る後半期營業の概況を見るに其  
の屠畜頭數は二萬二千二百二十六頭に於  
て之を前期に對比するに四千八十六頭を増  
加せり。

今前記の期間に於ける計算を見るに純益  
金八千九百八十八圓十三錢、前期繰越金九  
千九百九十二圓十三錢五厘合計金一萬八  
千九百九十圓六錢五厘なり之れが分配は法  
定積立金九百八十五圓、役員賞與金九百  
八十五圓、株主配當金六千二百圓即ち年  
二割後期繰越金一萬二千圓二十六錢五厘  
なり而して現重役は社長中川喜三郎氏、  
取締役副社長鈴木長助、取締役竹内金三  
郎、飯田久松、竹内慶太郎、支配人山田  
重篤、監査役田川寅之助、同竹内健太郎  
の諸氏なり。

七他店の代理店等なり創立當時は會社が  
主要なる目的として前陳の如き聯隊將校  
舍宅の供給をなし其の餘力を以て營利的  
事業をなさんとする計畫なりしを以て株  
式の募集に着手せしも應募者容易に豫定  
數に達せず既に解散するの已むなき場合  
に遭遇せしが當時俵三九郎氏社長となり  
原市太郎氏支配人となり相共に協心戮力  
不屈不撓の精神を以て極力社運の旺盛な  
らんことに盡瘁せし結果遂に今日あるを  
見るに至れり大正七年下半年の營業概況  
を見るに當期總益金五千二百五十三圓四  
十七錢一厘前期繰越金八百八十五圓五十七  
錢五厘にして合計金額五千四百三十九圓  
四錢六厘なり、內當期總損金二千五百九  
圓五十三錢三厘を差引して總純益金二千  
九百二十九圓五十一錢三厘なり、此配當  
計算は法定積立金二百五十圓所有物償却  
準備金三百五十圓、賞與金二百圓、配當  
金一株に附四十錢の割合にて千四百圓後  
期繰越金七百二十九圓五十一錢三厘なり

福壽生命保險株式會社

所在地 名古屋市中區南大津町二丁目四番地  
設立 明治四十一年八月十六日  
資本金 一百萬圓(拂込金額二十五萬圓)

代表者 社長野野金之助  
生命保險事業は幾多の被保險者より零碎  
の資金を吸収し、此等の資金を綜合して  
一大資本となし、更に之を各種の生産業  
に投じて、金融疏通の便を計ると共に被  
保險者には安心立命の地位を與ふる社會  
的公共事業として必須の事業なり經濟的  
調和機關として、完全なる組織の會社の  
存在は名古屋市の如き大都市には必要なる  
は識者の夙に認むる所なりしも未だ一個  
の會社の設立なきを遺憾とし、同市の有  
力者神野金之助、富田重助、伊藤傳七、  
渡邊喜兵衛、近藤友右衛門、平子徳右衛  
門、鈴木治左衛門の諸氏發企人となり當  
社の創立を見るに至りたるなり。資本金  
は五十萬圓内拂込済十二萬五千圓なり當  
會社の契約する保險の種類は利益分配附  
終身保險、利益分配附養老保險、利益分  
配附増額養老保險の三種あり。  
組織は株式會社なれども相互會社の長所  
を採り株式會社の短を去り契約者の利益  
を本位とし、會社の繁榮と共に契約者を  
利する組織なれば被保險者にとりては誠  
に便益多き會社といふを憚らず。  
其他保險會社としての長所は悉く採用し

無用の費を省き諸準備金の積立を十分に  
し會社の基礎を安固ならしめ、被保險者  
をして掛念なからしむるに意を注ぐ、經  
營施設一として此の方針の外に出づるな  
し、故を以て明治四十一年十月創業以來  
極めて順潮に秩序正しく發展し、大正七  
年末現在契約件數二萬三千五百件、金  
額一千四百九萬三千餘圓を算し、收入し  
たる保險料七十八萬二千八百二十六圓、  
支拂ひたる保險金額十五萬八千二百四十  
五圓保險會社の選擇をなすに當り、創立  
新古契約金額の多寡を論ずるは未だ以て  
選擇方法の他社標準となすべきにあらす  
要は營業狀態發展の方法資産の内容責任  
に對する準備金の如何經營者の信用技術  
等を査察して鑑別をなさざる可らず、當  
會社の如きは此の點に於て被保險者の安  
心して契約すべきものたるは吾人の特に  
推薦するに憚らざる所なり。

當會社は中京を本據地とし漸次に全國に  
手を擴げ今や全國に亘り左の支部を設け  
り。  
東京支部 東京市京橋區銀座一ノ一五  
北陸支部 金澤市片町十八番地  
九州支部 福岡市上山町七、八番地

名古屋木材株式會社

所在地 名古屋市熱田區屋橋四詰

設立 明治四十年五月十二日

資本金 一百萬圓(全額拂込済)

代表者 取締役社長長谷川糾七

當會社は最初材木倉庫たる貯水池を設け  
材木保管營業の目的を以て明治三十九年  
下半年の時株式會社名古屋貯木所の名稱  
にて是れが設立を發起せしも其創立事業  
の進捗に伴ひ、以前鼎立せる尾州材木株  
式會社、名古屋材木株式會社、東海材木  
株式會社を合併して、三十年一月より改  
稱し、爾來十年間堅實に營業し來れる愛

岡崎電燈株式會社

所在地 愛知縣岡崎市龍田町

設立 明治四十年

資本金 二百十萬圓

代表者 取締役社長長杉浦銀藏

木以外の貨物の吐吞多大となり、從て船  
舶の出入頻繁を加へ來りし爲め、堀川は  
最早材木業者の濫用に委せざるに至り、  
其が收用の場所に困難せる折柄、其供給  
に應せん目的を以て、開設したる當會社  
の貯木場は、當所豫期せし以上の盛況を  
呈し、漸次擴張をなしつつあるも未だ充  
分需用を満足する能はざるの現況にあり  
其他金融の關係にありては、當會社倉庫  
創設以前に於ては、材木に對する金融の  
聯絡機關なく單に對人信用のみに依り行  
はれ勢ひ高歩の資金を運用せざる可から  
ず而かも其融通不如意にして爲めに、同  
業者の發展向上を阻害すると甚しかりし  
が、當會社倉庫證券を以て、隨時低利資  
金の融通を得るに至り、近年當市材木業  
者の取引状態に一大變轉を來たし、其の  
進歩刮目に價する者あり、又當會社倉庫  
開設以前に於て其片影だも認めざりし遠  
隔汽船積取引は開設後、大に之を利用し  
て發奮をなす者續々顯はれ、東北青森、  
北海道及樺太材の輸入は四十一年を初め  
とし以後年一年著しく増加し、隨て兼營  
事業たる保管買入金錢貸附の各營業も日  
に月に發展し、取引高漸次増嵩を示しつ

あるが、尙近年は大阪、東京其他極要  
なる市場に雄飛し、取引高更に幾段の激  
増を見る等發展の跡目覺しきものあり。  
今茲に創立以來の配當率を擧げんに、第  
一回無、第二回無、第三回六分、第四回  
五分一厘強、第五回六分四厘、第六回七  
分二厘、第七回七分五厘強、第八回八分  
第九回八分五厘弱、第十回九分一厘強、  
第十一回九分三厘強、第十二回九分、第  
十三回八分五厘、第十四回八分五厘、第  
十五回八分五厘、第十六回八分五厘、第  
十七回七分、第十八回一割五分、第十九  
回一割五分、第二十回二割、第二十一回  
一割五分、第二十二回一割五分強、第二  
十三回一割五分強なり、當會社に於て最  
も關係深き役員は現今專務取締役たる鈴  
木虎之助氏にして、當會社の前々身たる  
東海材木株式會社時代即ち明治二十七年  
より現今に至る、前後二十五年度の長日  
月終始一貫して社務に執掌し、拮据勉勵  
一社の興廢を双肩に荷ひ、専心從事しつ  
ゝあり。  
現今當會社の重役は、社長長谷川糾七、  
專務取締役鈴木虎之助、同竹内兼吉、同  
吉村喜兵衛、監査役同上遠野富之助、同

知材木株式會社を買收して一九となし其  
の營業權を繼承し、材木の委託販賣、買  
買、金錢貸附の業務を兼營するの優れる  
を察し、交渉の未談成り社名を現在の通  
り改稱して直に工を起し、貯水池を鑿ち  
前記諸業の發達に伴ひ、徐々貯水池を擴  
張しつつあり、創業以來茲に十有二年霜  
を重ね既に第三期の擴張をなし、現在倉  
庫面積水陸合計三萬二千坪を有するに至  
れり、當會社の特長たるや前述の如く連  
綿數十年の歴史ある老舗なれば、此種事  
業家中尤も經驗に富める者なり、而して  
設備完全し宏大なる水面倉庫を備ひ、取  
引の新舊なると額の多少を論せず、誠實  
勉勵尤も懇切に取扱ひ、貯木場の如きは  
常に當市在荷の約半數たる平均約尺二  
十萬本を貯藏す、一會社にして構内に前  
記の如き多額の材木を貯藏せるは恐らく  
全國中未だ其の比を見ざるなり。  
由來名古屋市は有數の材木集散地なるも  
水運の便乏しく僅かに堀川の一水路ある  
のみ、而して從來此堀川に依りて運搬す  
るの外、其兩岸に繫留放置して殆んど堀  
川を以て貯木場の代用に供し居たる感あ  
りしが、近年市の膨脹に隨伴して逐次材

起人即需要家なるを以て、此の如き不都合を生ぜず極めて廉價なる電力を供給するを得たるは一般需要家の爲め誠に悦ぶ可き現象なりと云ふべし、されば開業以來需要家激増し、目下第四發電所の設置をなし、晝間電力の供給は岡崎電氣軌道及平坂電燈株式會社へ動力の販賣を開始するに至れり、最近に於て當社は一割二分の高配當をなすを得たり、現重役諸氏は取締役杉浦銀藏、同太田善四郎、同手島鐵司、同板倉九藏、同近藤重三郎諸氏以下二名とす。

半田倉庫株式會社

所在地 愛知縣知多郡半田町山方新町十番地  
設立 明治四十一年十一月七日  
資本金 二十萬圓(拂込額六萬圓)  
代表者 取締役會長中笠半左衛門  
半田町の發展は、到底合資組織の一倉庫會社の存在にては、當該事業に對し十分なる施設を望むべくもあらずとなし、現會社重役諸氏發起人となり、合資組織の半田倉庫を株式組織に改造し、資本金を十倍にし、同時に三角支倉庫、半田驛倉庫を新築し、以て龜崎町に派出所を設け地方の要求に應ぜり。

營業の目的は倉庫業を營み、私設保税倉庫業を兼設す、大正七年十月定款を變更し土地建物の賃貸を兼營すること、なる同倉庫は日本銀行の指定倉庫にして、同社の倉庫證券は日本銀行名古屋支店始め其他流通極めて圓滑なり。

西尾鐵道株式會社

半田倉庫合資會社は、明治二十四年半田町に米穀取引所を設置したるとき、之れに伴ふて起りたるものにして、爾來商業機關として、時に盛衰ありしも一割の配當を持し得るに至り、一段の發展を來すべく、株式組織に變更するに至りたるものなり、資本金に對し四分の一の拂込を以て營業を開始したるが、大正元年十一月を以て一株につき更に二圓五十錢の拂込を徴し、本年一月又一株に附十圓を拂込みたり、營業は漸次隆盛の域に進み大豆、外米、小麦等常に在庫して盛況を呈しつゝあり。

同社現重役は、取締役會長中笠半左衛門、專務取締役中笠半助、取締役中笠良吉、同小栗三郎、監査役中笠又左衛門、小栗清、倉庫營業主任二宮惣平の諸氏にして何れも創立當初より重任しつゝあり。

所在地 愛知縣幡豆郡西尾町大字鶴城子永吉  
設立 明治四十二年二月十八日  
資本金 五十萬圓  
代表者 社長岩瀬彌助

本社は同地方に交通機關の設備なく、爲めに不便を感ずること切にして、郡内の發展策としては、是非公共交通機關の設備なかる可からずと、遂に地方の有志岩瀬誠助氏之れが發起創立委員長となり、有志の士四十餘名と謀り旅客、貨物の一般送輸に資せんが爲め、資本金五十萬圓を投じて設立經營せるもの也。

同社の設立と共に、幡豆郡一圓は貨物の運送、旅客の便を助け、從來此種機關の設備なく非常なる不便を感じ、商工業者の取引上甚だ困難なりしに反し、取引迅速となり、商工業者の利便は勿論其の他各方面に亘りて、至大なる便利を與へ本社の設置以來頗る繁昌し、今や鐵道線延長の必要を認むるに至り、諸般の事業益々發展向上し、同地方に於ける本社は實に唯一機關にして幡豆郡一圓をして、今日の發展をなさしめたるは、同鐵道の賜たるは、言を俟ざれ共其の功勞預つて力

あるは本社の發起者諸氏にして、中にも岩瀬誠助氏の功績實に偉大なりと云はずんばあるべからず、聞くが如くんば岩瀬家は累代の富豪にして、地方に於て神とまで崇められ、其信用著しきもの也、此世評を以てしても氏の人格を察知するに足るべく實に現代人士の鑑たる也、現今重役は社長岩瀬彌助、取締役外山勘一、取締役島山武平、千賀千太郎、鳥居清吉、監査役島山傳兵衛、年島鐵司、柳原豊三郎の諸氏なり。

岡崎瓦斯株式會社

所在地 愛知縣額田郡岡崎市大字康生  
設立 明治四十三年二月  
資本金 二十萬圓(内拂込額八萬圓)  
代表者 取締役社長千賀千太郎  
當愛知縣下に於て始めて、瓦斯會社の創立せられたるは、明治四十年名古屋瓦斯會社を以て嚆矢となす。其れと相前後して岡崎電燈株式會社起り、爾來兩者相競いて之れが供給に務めたりと雖も、瓦斯電燈の需用は年と共に増加し、爲めに不足を感ずること切にして、將來益々發展需用の途著しきものあるを察知し、茲に以上の兩社と相並行して立つべく土地の

有力家千賀千太郎、深田三太夫、須藤庄吉、新實新十郎、小島正太郎、外二十一名團結して立ち、四十三年二月同社を創立以來、工事を急ぎ四十四年二月より營業を開始せり。此の時既に燈火としては明治四十年四月に創立せられたる岡崎電燈株式會社ありて、電燈を供給し居りしが、世の進運と共に需用益々増加し來り、斯業の前途は、大いに有望となれり。

本社の營業目的は石炭瓦斯の製造販賣及び瓦斯器具及副製物たるコークス、コールタルの販賣等にして、資本金は二十萬圓にして、其の拂込額十萬圓にて熱心努力の結果は、著しく其の成績を良好ならしめ、曩に設立せられたる二社と其の勢力普及し、本社創立の當時に在りては兩社何れも發展し、到底之れに及ぶべくもあらざりしに、現今に於ける本社の事業狀態は寧ろ兩社を凌駕せん計りの勢を示しつゝあり、之れ時代の要求に依る處少なからずとせんも、本社が現在の基礎を見るに至りたるは、之れ左記重役諸氏の努力奮勵の賜なり。

役深田三太夫、岡千賀右次郎、監査役中根與七、同清水勝次郎、同牧野廣吉郎の諸氏にして、重なる社員は營業倉庫係長稻垣安郎、會計庶務係長西口輝三郎、技術主任は名古屋瓦斯の工學士竹島瑞夫氏を顧問とし、此代務者を稻垣安郎氏とす創立當時より今日迄重役は一致協力以て事業の發展に務めつゝあり。

而して本社創立以來、今日に至る十七回の營業期中一二回は、償却等の爲め無配當、三四回は五朱五厘、五六回は六朱五厘七回より十一回は七朱五厘、十二回より十四回は七朱五厘、十五回は六朱、十六回に十七回は五朱と下りたり、此原因たるや、最初は一般に瓦斯の輕便なることを周知せられず、漸く大正三年即ち歐州大戰亂起りし頃より、同五年頃迄は可なり、需用も増加し來り比較的物價も安價なりし爲め好況なりしが、同六年下半年頃より俄然物價暴騰を來し、石炭其の他材料に至る迄昂騰し爲めに、新規の工事を一時見送り、一方瓦斯代値上をなす等種々な故障の爲め、不況時代となれり之れ同社に限らず、斯業會社は一般此の渦中に陥れり、本社大正七年末營業、概

況は、現在瓦斯管總延長十萬四千八百三十六尺餘(本管三千一百三十三間餘)にて計  
十六尺餘(本管三千一百三十三間餘)にて計  
量器の据附累計九百二十六個、百八十三  
日間に瓦斯製造高三百五十一萬四千二百  
立方呎、之に要せし原料、石炭は四十七  
萬三千八百七十斤、現在孔口數燈用二千  
五百八十七口、熱用一千〇七十六口、瓦  
斯機關四基七馬力なり、石炭及諸材料は  
前期より引續き暴騰し、殊に本期は一層  
の昂騰をなしたるにより止むを得十月  
十五日より、瓦斯代及副産物の價格の改  
定をなし、一方製産費の節減を計り、相  
應の手段をとりたるも、漸く年五朱の配  
當なり。

株式會社下關米取引所

所在地 下關市大字東南部町  
設立 明治九年十一月  
資本金 十萬圓(全額拂込済)積立金萬圓(千五百圓)  
代表者 理事長内田吉三郎  
當取引所は其沿革最も古くして、下關に於ける米穀の定期相場雜賣買の方法は遠く、幾百年の以前に創まりしや、今文獻の徵するものなきを以て、其起原の詳細を知るに由なしと雖ども、既に享保年中に於て、同市神宮司所を設立せし、米會

眞庭電氣株式會社

石以上に達す、且つ其位置も亦日本最良の産地たる中國及九州の中央に位する市港に在る取引所なるを以て、全國に於ける屈指の取引所中最も古く、最も盛なるものなり、現在の役員は左の如し。  
理事長林平四郎、理事松尾琢三、理事淺海壽之吉、監查役原田岩吉、監查役關谷福太郎の諸氏なり。  
所在地 岡山縣眞庭郡久世町  
設立 明治四十四年三月二十四日  
資本金 十五萬圓(總込金額拾萬二千五百圓)  
代表者 取締役社長河本直一郎  
明治四十三年一月、在神戸の設樂時次郎氏歸郷して、電氣事業の計畫を勸誘するありて、同氏並に大島雲藏、太田末吉、福井要助、杉山鐵太郎、三村信胤、福島雄の諸氏等發企人となり、其筋に出願し種々の困難を経て、遂に當社の創立を見るに至れり、當初は火力發電の計畫にて資本金三萬五千圓なりしが、水力發電に改むるに及び資本を七萬圓に増加し、更に十萬圓に増加したり、尙大正八年五月一日十五萬圓に増加したり。  
同社は基本工事に半年を費し、未だ開業

山岡金穀貸付合資會社

資本金 五十萬圓  
代表者 專務取締役數森淺造  
同社は山岡製紙株式會社廣島分工場を買收して、大正六年十月より營業を開始せるものにて、本店及工場を廣島市に置き白ボール判、綠色打紙、襖紙、藍燐寸紙、ローパ掛、焦茶パトロン、七番紙等を製造販賣せり、工場敷地六千坪餘、其設備の完全稀に見る所にして二百餘名の職工を使用し一箇年に八百萬封度、其の金額百八十萬圓位を製産する能力あり、位置は元保川沿岸に在り、舟楫の便に富み理想的の工業地なり、其販路は東京、大阪を主として、沿く全國に涉り且つ旺んに支那、印度、南洋方面に輸出せり、營業成績は極めて良好にて創業時代より二割乃至三割の配當をなし來り、尙多額の積立金及び後期繰越金等をなし、今後の準備基礎の鞏固を計れり。  
現重役は專務取締役數森淺造、取締役時岡鶴吉、島村久愛、岩崎喜三郎、稻葉權藏、監查役田中福藏、大森佐吉、大原通一、相談役前田奈良三郎の諸氏なり。

中國製紙株式會社

所在地 廣島縣廣島市吉島町  
設立 大正六年九月  
中國製紙株式會社、山岡金穀貸付合資會社

山岡製紙株式會社

資本金 五十萬圓  
代表者 專務取締役數森淺造  
同社は、金穀の貸付業を營む目的を以て設立せらる、當時の資本金は三萬圓なりしも同年十月二十八日三萬八千圓に、四月廿七日、十萬圓に増資せり、蓋し金穀の貸付は、地方農家を主なる顧客とし面倒なる手数を省き便利なる方法規定の下に取扱ふこと、當該地方の人氣に投じ、業務益々盛なり。  
同社の營業振は着實穩健力めて取引先の便益を旨とし、十萬圓の資本を動かすに使用人員の如き、僅かに二人にして無用の經費を省き、簡易を尙ぶの樣想見するに難からざるものなり。積立金の如き既に三千圓を有し、營業資金の必要上二萬六千四百圓の借入金ありと雖も、前期に於ては、純益金四千二百九十八圓九十一錢を收め、年三分五厘の配當をなせり。  
本邦に於ける營利會社は其數多くして枚舉に遑あらず、而して其の目的とする處の内容は千差萬別なるも、是れ珍らしき嶄新なる方法の會社として世人の注目す